

第18図 拡張区縄文土器接合図

2 遺物出土状況

遺物は特に自然の開析した溝の落ち込み部分に集中する傾向がある。廃棄帯の最深部は表土層から3mにもおよび、また廃棄帯部分以外にも遺物は広がりを見せている。土器捨て場本体からの遺物は縄文時代前期から後期前半の土器、石器に限定される。前期の遺物については完形品に近い土器は出土しておらず、周辺域からの流れ込みの可能性が強く、廃棄行為の開始は縄文時代後期前半の宿毛式の段階からと考えられる。

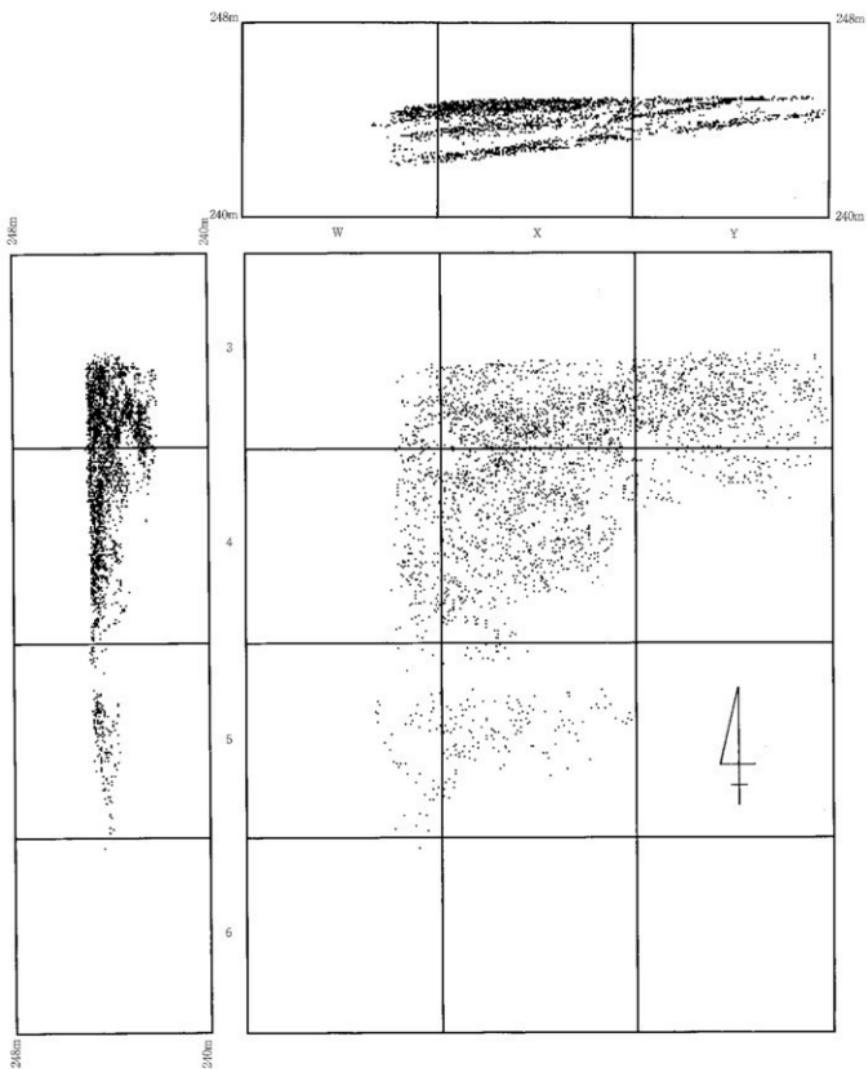
遺物の出土状況を平面的分布、垂直的分布、土器接合関係、廃棄方法・遺物の移動等の観点から取り上げてみたい。

平面的分布

土器捨て場から縄文土器、石器、礫が重なるように多量に出土している。東側部分のY3グリッド周辺の土器捨て場の幅が狭く、西側方向に向かって土器捨て場は徐々に開放する。遺物の平面的出土状況(第20図)を眺めてみると、廃棄帯の地形に沿って中心部分に遺物の密集が認められ、西側部分では扇状に遺物が広がって出土する。南側の落ち込みの肩部分では遺物が徐々に希薄となる。

土器捨て場外のW・X5グリッドには帯状にやや遺物が纏まって出土している。Y5グリッド周辺には遺物は全く認められていないのは、後世に崖線のカットが行われたために、縄文時代の遺物包含層も削平された結果と考えられる。現水田耕作土下は黄褐色シルト質層となり、無遺物層となる。南側部分のX・Y6グリッドでは中世墓のためにやはり縄文時代の包含層は擾乱を受けていた。

時期的な遺物の平面的な集中は明確に認められず、松ノ木式より新しい土器群が周辺域から出土する傾向が若干認められる程度である。W・X5グリッドの帯状の遺物集中地点からは3231、3238の松ノ木式に後続する土器が出土しており、また土器捨て場本体の東側Y3グリッド周辺に同様の土器群が



第19図 土器捨て場遺物全体ドット図

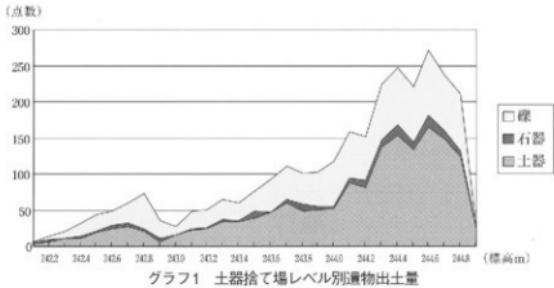
上層から出土する傾向にあった。宿毛式、松ノ木式は特に集中する傾向は認められず、土器捨て場全体から普遍なく出土している。完形品に近い上器は3442の鉢、3631の小壺、2つの大形破片で出土した3227の深鉢である。微細遺物の石器・炭化種

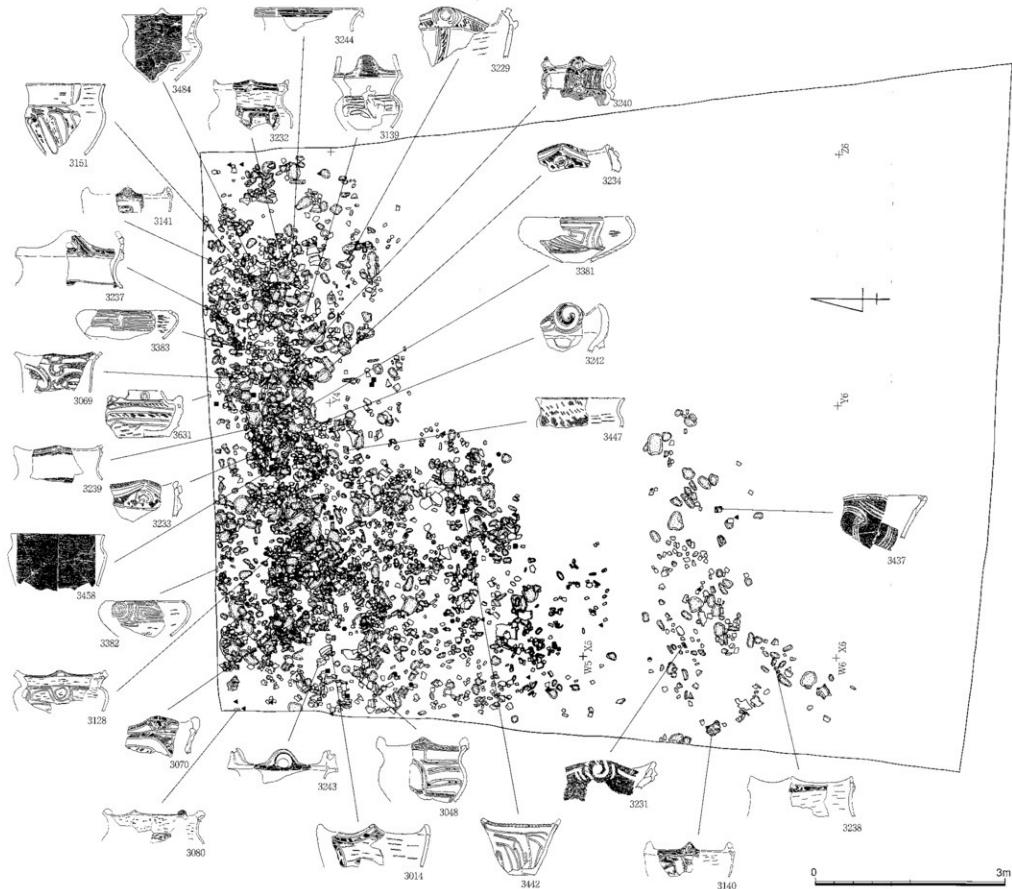
子は篠かけにより大部分を採集したため、特に集中の度合いは把握できていない。石器では香川県金山産と考えられるサヌカイト製石器、剥片類が多く出土している。

礫も多く出土しており、これらは吉野川、汗見川で採集できる河原石である。配列等は認め難く、相当量の礫が廃棄された状況で出土している。礫の観察を行ったものの、被熱痕のあるもの、タール状の物質の付着したもの、特に破損した礫は出土しておらず、自然礫で占められている。こうした礫は何等かの遺跡内の他の場所で利用されたものを土器、石器と共に廃棄されたものと考えられる。今までの調査で第2次調査での土坑内の粗石、第3次調査での集石状の遺構(SX6)が検出されている程度で、そうした礫の使用程度以上に土器捨て場の礫の出土量は多く、大規模な礫を利用した遺構、行為を想定させる。縄文時代後期の時期には四国西部において配石遺構が集中する傾向にあり、愛媛県広見町岩谷遺跡(犬飼1978)、高知県西土佐村大宮山崎遺跡(木村1999)で確認されており、当該期に配石遺構が盛行する。しかし両遺跡でも礫の集中的な廃棄行為は認められていない。多量の礫を使用した遺構は当該期では配石遺構が最も多く、配石遺構と何等かの関係があるものと見做すことが最も自然である。しかし松ノ木遺跡の多量の礫が配石遺構の廃絶、または除去に伴い廃棄された行為かどうかは類例もなく、検証もできない状況である。

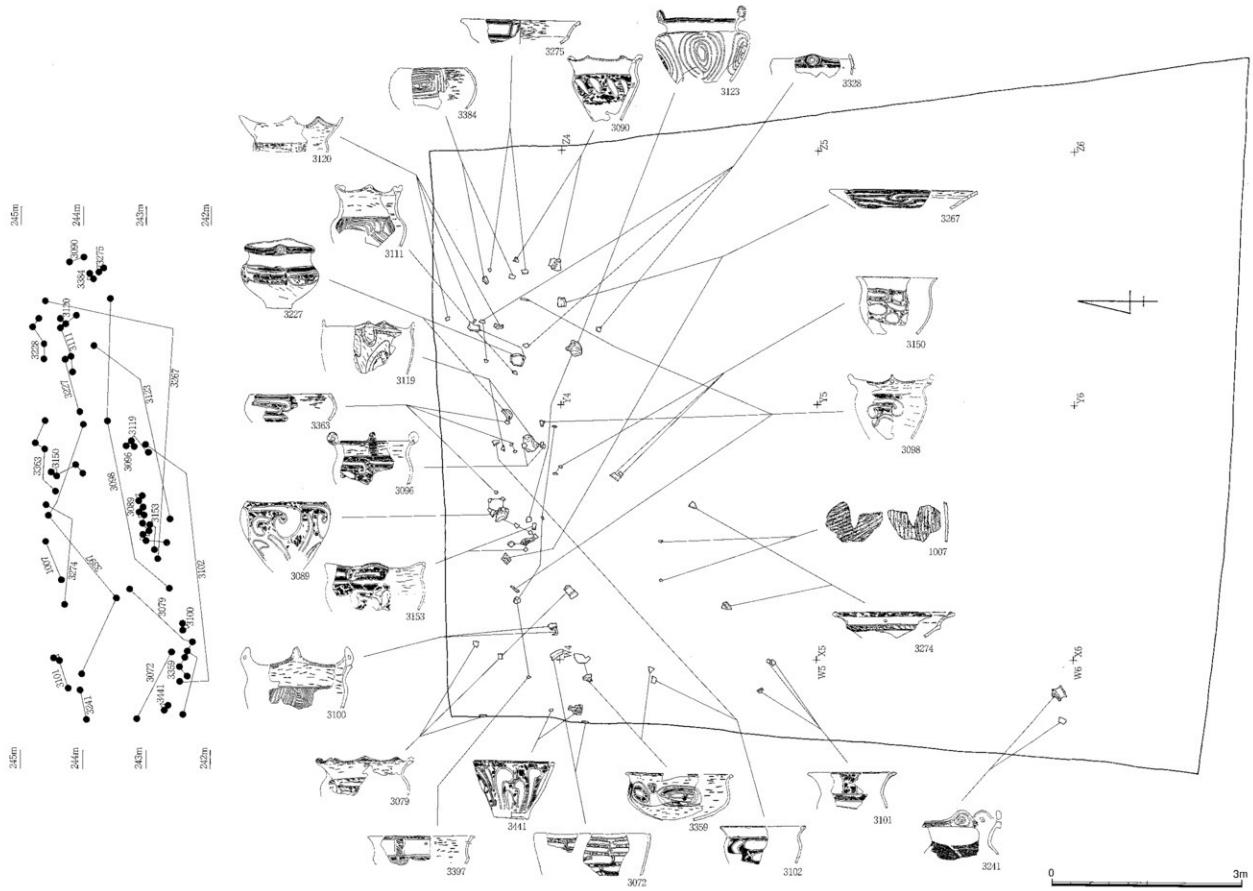
垂直的分布

土器捨て場出土遺物のレベルは最高で244.919m、最低で242.063mでその比高差は約3mを測る。調査区の西側部分が深く、東側部分が浅くなっている。全ての遺物を北面に単純に投影したものが第19図である。一見大きく分けて3枚の垂直分布集中が認められるものの、それは有意な分布を示しているものではない。接合関係図では3枚の垂直分布集中部分間で接合関係にあることから、傾斜地での遺物は水平堆積を示していない。第22図ではW・X・Y-3グリッドのみの土器を抽出し、型式別の平面ドット図及び垂直分布図を作成した。その結果全体の垂直分布と同様の3枚の集中部が認められ、特に中間の集中部は帯状に密集し、上下部の集中部は散漫な分布を示している。宿毛式・松ノ木式は全ての集中部に認められる。中間の集中部は1次的な位置の可能性が強く、上部集中部は2次的な移動の結果の可能性が考えられる。宿毛式・松ノ木式よりも後続型式と考えられる「なつめの木式」については上部集中部に分布する傾向が強く、埋没後にある一定の期間においてから廃棄された可能性を示唆しているものと考えられる。W3グリッドのなつめの木式としたものは中間部から出土しており、これについてではなつめの木式以外の型式の可能性が考えられるものである。





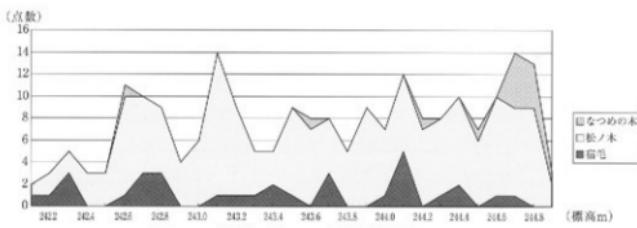
第20図 土器捨て場縄文土器出土状況図



第21図 縄文土器接合関係図

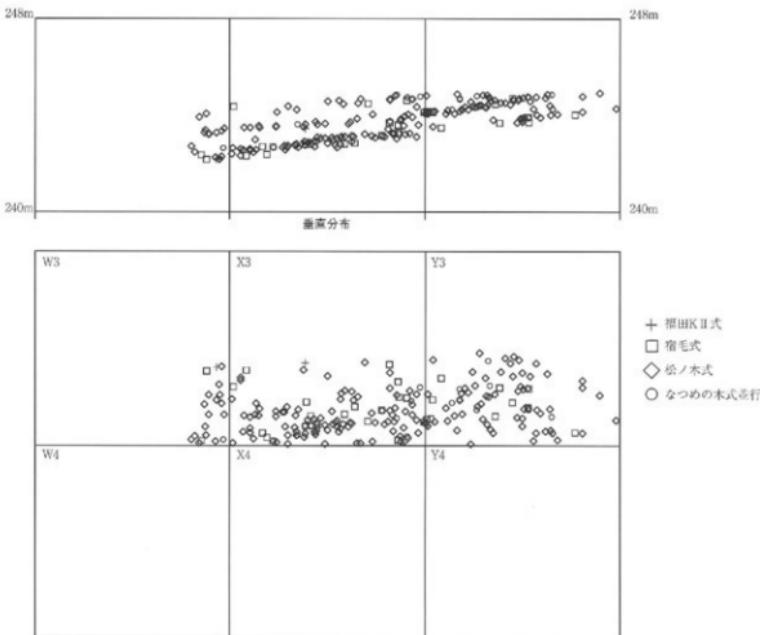
土器接合関係

土器接合は地点測量を行ったものの中で83例219点が接合関係にあった。その中で遺物実測



グラフ2 土器捨て場レベル別型式出土量

を行い、なおかつ型式の分かるもの等の27例のピックアップを行ったものが第21図である。隣接するもの同士で接合関係にあるものが多く、各パーツが僅かな移動しかしていないことを示している。3384、3275、3100、3441、3101、3241等である。1m程やや離れて接合関係にあるものは3227、3079、3359等を上げることができる。大きく離れるものとして、3397、3098、3267、3102である。隣同士で接合関係になるものはレベル差は少ない。やや離れて接合関係にあるものはレベル差が顕著なものとして3079、余り比高差のないものは3227、3359である。大きく離れて接合関係にあるものは、レベル差も顕著である。3267は2m程のレベル差を有する。

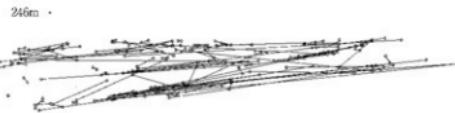


第22図 土器捨て場型式別出土状況図

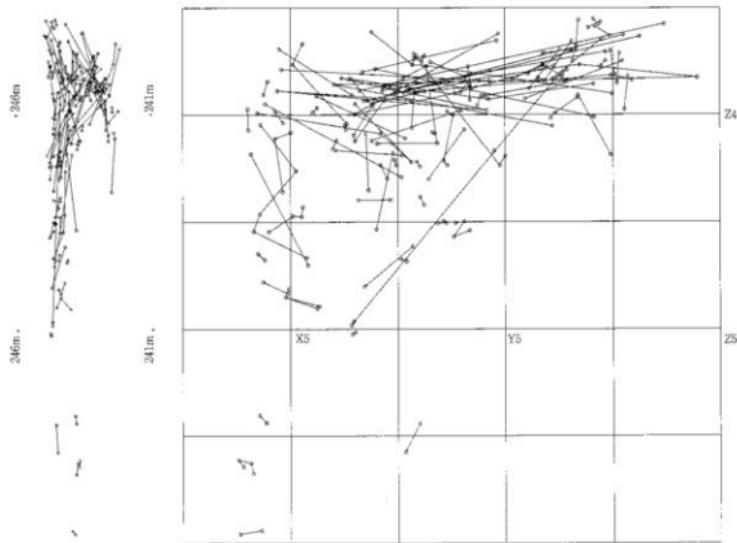
廃棄方法・遺物の移動

土器捨て場は傾斜地が激しいことから、遺物の移動も顕著であったと考えられる。遺物の廃棄・移動のモデルを構築してみた。遺物の廃棄・移動の事象は多くの要因が絡まった結果だと考えられる。ここでは幾つかの土器廃棄のモデルを提起しておきたい(第24図)。これ以外のモデルも多くあることは想定されるものの、主だったものを取り上げる。廃棄のパターンとして、一括で投棄する、複数回に亘り投棄することが想定される。複数回に亘るものは、一個体の土器を複数回に亘り分散して投棄する行為である。これらの投棄の平面的な広がりはI A型が大形破片を中心として近接して小形破片が回りに散らばるもの、I B型は小形破片が密集して散らばるもの、I C型は遺物が遠くに離れて飛散するものである。分散投棄はII A型がI A型の複数回、II B型はI B型の小形破片の複数回のもの、II C型は飛散型の複数回のものである。分散投棄のものは他に3通り以上の組み合せが想定される。

垂直的な遺物の移動は傾斜地であることから、遺物の転落、滑り落ちが考えられる。転落のパターンは1次転落として、傾斜地上に残ったものと下に転げ落ちていた遺物に分かれて出土するパターンでIII A型が想定される。この場合には大形破片が上に残り、小形のものが下に転落するパターン、小形



241m



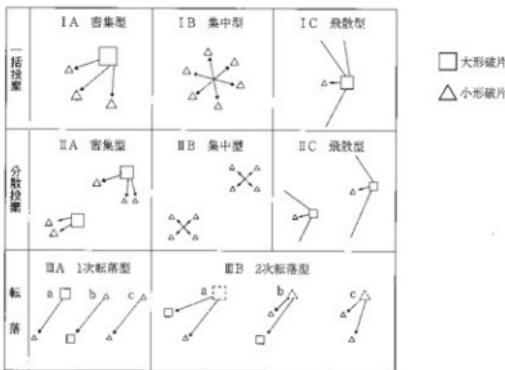
破片が残り大形破片が転落して行ったパターン、同じ大きさのものが上下に分かれるパターンが想定される。2次転落は上に残っていたものが後で移動したと想定されるパターンである。廃棄帯での遺物の移動の見極めは極めて困難で、特に遺物が移動している場合には投棄された時点での原位置であるか、または転落したものであるかの現象の見極めは容易ではない。また遺物の移動、滑り落ちには自然現象だけでなく、人為的な行為、動植物の活動により遺物の移動も考えられるがこれらについては除外した。

そこで手掛りを探る方法として、土器接合関係を観察するだけでなく、接合した土器破片の大きさに注目し、物理的に大形の破片がより原位置に近く、小形の破片は移動、飛散した可能性が強いと想定し、第25図を作成した。

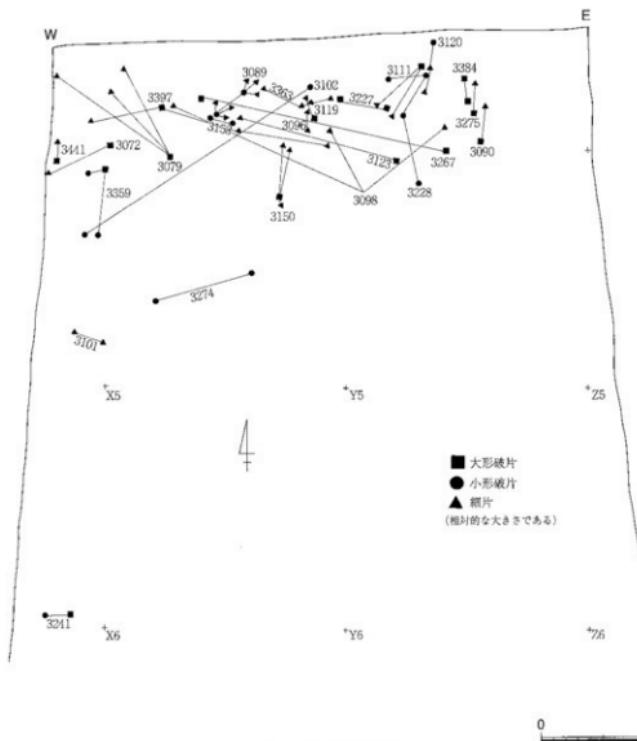
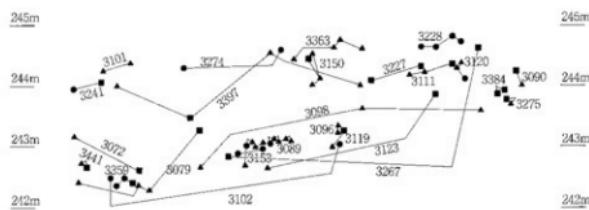
単純に大形破片が原位置を留め、小形破片が下に転げた可能性のあるものは3092、3275、3111、3150、3079、3241である。一括投棄 I A型で転落は1次転落 III A型と考えられるものである。3227は大形破片同士で片方か両方とも転落してやや離れて接合しており、基本的には先のものと同じ類型である。4089は二つの縁まりになって出土しており、分散投棄の可能性があるものの、レベル的には同一面であることから I C型の飛散と考えられる。

遠くに離れたもの同士での接合関係にあるものは3098、3267、3102である。3098は小形破片が距離を置いて3点が接合関係にあり、I C型の飛散型、III Bc型の両方が想定される。3267は大形破片同士が接合関係にあり、レベル差が1m以上もありIII A型またはIII B型とも取れる。III A型とした場合には投棄と共に一挙に転落していった可能性が考えられる。3102については中形破片同士の接合でIII Bの2次転落の可能性が考えられる。

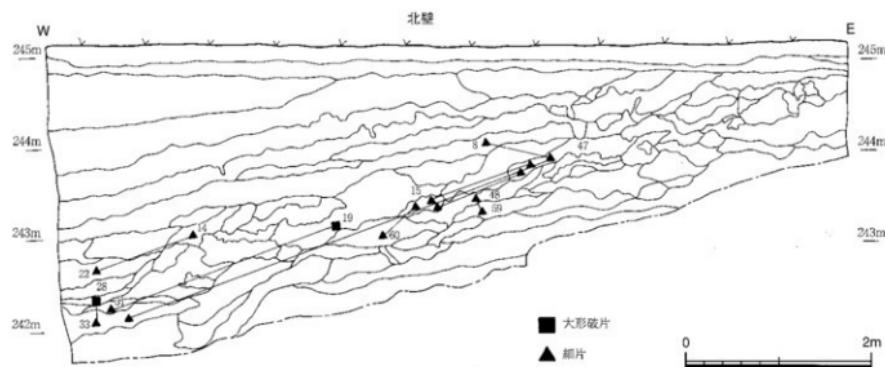
転落の現象は第26図の北壁セクションの出土の遺物接合でも同様の図面を作製した。19層出土の大形破片と31層の小形破片の接合関係、また同様に28層と33層の関係、小形破片同士の接合関係6例が認められている。遠くに離れたもの同士で接合関係にあり、転落の現象を認めることができる。土器型式からも言えることであり、層位的に土器型式が明確に分かれるものではない。遺物の移動を細かく把握することは困難であることは事実であり、況して傾斜地、貝塚等の土器型式論で単純に層位から編年を導き出す方法論は注意を十分要する。遺物の移動を十分検証した上でなければ、過誤を犯す危険性がある。



第24図 土器廃棄モデル図



第25図 土器窯裏状況図



第26図 拡張区土器廃棄状況図

第2節 繩文土器

1 分類基準

『松ノ木遺跡Ⅲ』(前田1993)で繩文土器の分類を行っており、それを今回も踏襲したものの、若干の変更を行った。前期、中期、後期と考えられる土器群が出土しており、基本的には時期を目安としてZ、C、Kのアルファベットにより大きく分類を行い、更に型式を基本としてI、II、IIIとローマ数字で細分を行い、更にアラビア数字により小細分し類を設けた。深鉢以外の浅鉢、粗製深鉢、無文浅鉢等の時期の分かるものについてはZ、C、K群に大分類したもの、型式細分が判然としないものについては別途に分類基準を設けた。

また、晩期土器については、2区では出土しているものの、1区土器捨て場から出土しておらず、特に分類は設けなかった。

以下に時期別に大きく分類した。

Z群 前期土器

- Z I群 前期初頭(1001～1010)
- Z II群 前期前半(1011～1014)
- Z III群 前期前半(1015～1065)
- Z IV群 前期後半(1066～1086)
- Z V群 前期後半(1087～1099)
- Z VI群 前期後半から終末(1100～1121)
- その他 繩文地胴部破片(1122～1149)
底部(1150～1153)

C群 中期土器(2001～2011)

K群 後期土器(3001～3775)

- K I群 後期初頭中津式
- K II群 後期前半宿毛式
- K III群 後期前半福田K II式
- K IV群 後期前半松ノ木式
- K V群 後期前半なつめの木式並行

2 前期土器群 (第27～31図1001～1153)

Z I群(第27図1001～1010)

羽島下層式と並行と考えられる前期初頭の土器群である。1001から1010の10点である。表裏面に条痕を施すものが主で、中には条痕整形の後にナデ消すものも若干存在している。

Z I群1類

1001と1002は条痕文系統の土器であるものの、羽島下層式に含まれない可能性がある。器肉が厚く、口唇のキザミも口唇外面に施されている。色調もやや赤味を帯びる。早期の可能性も考えられる。

Z I群2類

1003は口唇上面にキザミを施し、外面は条痕、内面はナデである。器形は僅かに外反氣味である。1004は刺突文を連續的に施すもので、裏面にまで刺突の痕跡が認められる。表面は条痕、内面はナデである。1003と同一個体の可能性がある。1005、1006は刺突文が曲線的に施されるものである。裏面は条痕である。1007から1010は表裏条痕文の胴部破片である。1010はやや器肉が厚く、色調も黄褐色を呈する。他のものは器肉が薄く、また色調も黒褐色を呈するものである。

Z II群(第27図1011～1014)

Z II群1類

1011は胴部破片で「C」字状の連続爪形文と繩文を施したものである。繩文原体はRLである。連続爪形文原体幅は9mm、間隔は5mmである。器面に僅かに条痕を残す。器肉は4mm、色調は黒褐色である。

Z II群2類

1012から1014は「C」字状の半截竹管による連続爪形文の押引きである。瀬戸内の磯ノ森式に相当する。1012は1段の横位の連続爪形文が上半部に施される。原体幅9mm、押引きの間隔は2、3mmで密である。口唇は僅かに内面に突出し、体部は直線的に立ち上がる。整形は内面が指頭、色調は黒褐色を呈する。器肉は2、3mmで極めて薄い。1013は「C」字状の連続爪形文は押引きで2段に横位に施される。口唇下には径2mmの小円形刺突が連続的に施される。また繩文原体RLが竹管文間に施される。「C」字状の連続爪形文の原体幅は8mmで間隔は4、5mmで1012よりもやや広い。口唇は丸味を持ち、体部は僅かに内湾氣味である。器肉は3、4mmで色調は黒褐色を呈する。1014は竹管文原体幅7mm、間隔は7、8mmである。器肉は4mm、色調は褐色を呈する。

Z III群(第27、28図1015～1065)

前期前半に含まれる一群で、大部分が彦崎Z I式に含まれるか、または並行の土器群である。1015から1065の51点である。1から7類まで設けた。最も多いものは4類である。

竹管文を主体とするもので、器肉が薄く、裏面に竹管押引き、刺突の痕跡が顯われるものが多い。また条痕はなく、繩文も極めて少ない。

Z III群1類

1015から1018で口唇に刺突が認められ、胴部には横位の繩文の押捺？が2段認められる。原体は貝殻の可能性もある。全てが同一個体と考えられる。器肉はやや厚く、器面調整は表裏面共に、ナデである。色調は黒褐色を呈する。彦崎Z I式には類例は認められないようである。

Z III群2類

1019から1021は口唇にキザミの認められるもので、キザミは不規則である。胴部は横位に竹管押引き文である。色調は褐色を呈する。

Z III群3類

1022、1023は口唇にキザミを有するものの、胴部上半に竹管文の認められないものである。色調は暗褐色を呈する。

Z III群4類

1024から1060の37点とZ III群の大部分を占める。口唇にキザミを持たない一群で、口唇は丸味を持

つものが大部分である。また脇部上半に多段の横位の竹管押引き文を有するものが大半である。

その中で1046は口唇が平坦なもの、1047から1050は口唇をやや肥厚させたものである。1051は竹管文を縦に口縁部に施したもの、1052、1053は口唇の直ぐ下に不明瞭な竹管文を1段施したものである。1054は脇部破片で小さな補修孔が1ヶ所認められる。

横位の竹管文の多い中で、曲線的に竹管文を施すものは1025、1041、1058～1060である。

器形は碎片が多いために判然としないものの、直立するものが多いようである。1058は脇部破片でやや屈曲する。

施文は左方向から右に半截竹管により連続的に押引きするもので、原体は四角を呈するものが多く、1039、1047のように原体の両端が尖るものも存在している。原体の幅は3～5mmに納まり、押引きの間隔はほぼ5mm程度で、長いもので1035の7mmである。

胎土はきめ細かく、石英を微量含むものが多く、器肉は3～4mmと極薄い。色調は暗褐色から黒褐色を呈するものが多く、内面は外面に比べ明るい色調を呈し、褐色系統のものである。1051、1053は外表面は黄褐色を呈する。

Z III群5類

1061、1062は「D」字状の竹管文連続押引き文の脇部破片である。1061は横位の竹管文が3段施されている。竹管文原体幅は4mm、間隔は6mmである。器肉は3mmで色調は褐色を呈する。1062は「C」字状に近いもので、押引きでも刺突後引いたもので施文方法はやや他のものと相違する。竹管文原体幅5mm、間隔6mmである。器肉は4、5mm、色調は暗褐色を呈する。

Z III群6類

1063、1064は連続押引きとはならず、半截竹管の連続刺突のものである。刺突は深く、1063は曲線的に施されている。原体は四角で幅5mmで裏面に刺突の痕跡が現われる。器肉も5mmとZ III群4類に比べ厚い。胎土、色調はZ III群4類と同様である。1064は原体幅は4mm、器肉4mmと1063よりやや薄い。

Z III群7類

1065は沈線文のものである。口唇は丸味を持ち、体部は直線的に立ち上がる。沈線の幅は1、2mmで狭い。器肉は4mmで、色調は褐色を呈する。該期に含まれるもので沈線文のものはこの1点のみである。

Z IV群(第28、29図1066～1086)

浮線文の付くものをこの群に含めた。浮線は大きく分けて、浮線上に何も付かない素文のもの、浮線上にキザミ等を施す結節浮線に分けることができる。素文のものは更に地紋に繩文を持たないものZ IV群1類、繩文地のものをZ IV群2類とした。結節浮線のものは次のZ VI群として別群に分けてある。本群は瀬戸内編年の彦崎Z II式並行期の一群である。

Z IV群1類

1066から1073は素文の浮線で、1067から1069の3点には2条の浮線、1066、1070、1071は1条だけが認められる。1072、1073は「ハ」字状の様な浮線が貼付されたものである。

浮線の貼付方法はミミズ屋れ状の細い粘土紐を貼付後、丸味のある半截竹管でなぞるように押引き、浮線両脇は粘土がはみ出でやや浅い沈線状となる。こうした手法の浮線は断面に丸味を持つ。1070は

半截竹管でなぞらずに、指で摘みなぞったようで断面が三角形となっている。浮線の幅は2、3mm、高さは2mm程度である。

器形は細片が多いために判然としない。1066の頸部が屈曲するもの、1072が胴部部分でやや屈曲するものが認められている。整形は外面はナデのもので占められ、内面はナデ及び指頭のものに分かれる。器肉は3、4mmと薄い。胎土はきめ細かく、微石英粒を少量含むものが多く、堅致である。色調は1068が赤褐色、1071が褐色の他は暗褐色のものが多い。

Z IV群2類

1074から1086は素文の浮線文のものである。浮線文についてはZ IV群1類と同様であるものの、地紋に繩文を有するものである。1074から1079は口縁部破片で、口縁部に粘土帯を貼付し肥厚させ、口縁内面も肥厚させる。内面の肥厚帯には繩文を施文する。1074から1076の3点は口縁部に素文の浮線文を綴に貼付したものである。1077から1079は口縁下に横位の素文浮線文を貼付する。1078は更に頸部の浮線文との間に波状の浮線文を付加する。1080から1086は肩部破片である。多条の浮線文のものは1080、1084で横位に浮線文が貼付される。

地紋は繩文で原体R L、L R共に認められ、1078は口縁内面と外面の繩文原体を違えた例も認められる。繩文の節は総じて太く粗いものが多い。1083だけは無節Iのものである。

器形は口縁部は内湾気味で、頸部で屈曲するものと考えられる。胎土は石英粒を含み、器肉は3~5mmでZ IV群1類より若干厚い。焼成は良好で、色調は茶褐色、褐色を呈する。内面の整形は指頭、ナデのものが多く、中には1074、1082のように爪形が残るものが認められる。

Z V群(第29図1087~1099)

口縁内外面に繩文を施文するもので、1087から1091は口縁を折り返し、繩文を施し、口唇にはキザミを施すものである。1092から1097は口唇にキザミを持たないものである。1097は口縁を折り返さず、繩文を施したものである。口縁内面を折り返し繩文を施すものが本群の特徴である。また胴部破片については漬れた穴带上に繩文を施すものは1098、1099が該当する。本群は瀬戸内編年の前期後半の田井式に相当するものである。

口縁内折り返しは、1087から1094が斜めにそぎ落としたように、粘土帯が貼付され、口縁内肥厚帯を作り出し繩文を施文するものである。折り返し部分の幅は、口唇にキザミを持つものがやや広く1.2cmから1.5cmで、キザミのない1092から1094は1cm内である。1095及び1096は1.5cmを超えるもので、1095は口唇部にも繩文を施文する。外面にも同様の繩文となるものの、1091だけは外面は無文である。

器形は1087のように頸部でややくびれ、口縁部は内湾気味となるものと考えられる。

繩文原体については、節が太く、RLは少なく1087、1098、RLRの複節が1095で他はLRである。器肉は口縁の肥厚に比べ、胴部は薄く2、3mmである。胎土には石英粒を含むものが多く、堅致である。また色調は暗褐色のものが多く、1038、1089、1091、1093は明るい黄褐色である。

Z VI群(第30図1100~1121)

本群は浮線上に結節を施すもので、結節は「エ」状になる。口縁は波状山形口縁で、口縁内面を折り返し、繩文を施文する。口唇部にも結節浮線文を貼付するものが多い。本群は近畿の大歳山式に並行

するものと、一部それ以前の可能性のものも含まれている。前期後半から終末にかけてのものである。

1100から1108は口縁部破片である。1100から1103は波状の山形口縁で口唇部にも結節浮線文を貼付する。口縁内は肥厚し、繩文を施す。口縁部は山形となり、口唇部にも結節浮線文を付加する。1102、1103は口縁上部に結節浮線文2条が間隔を置かずにつながっている。1100から1103の口縁内文様帶の幅は広く、波頂部から計測して1cmを超える。1104は口縁外面に波頂部から短い浮線文を垂下させ、口縁部の山形の結節浮線文と連続させる。口縁内文様帶は狭く、7mm程度である。1105も同様で口縁外面に短い浮線文を垂下させ下部の結節浮線文と連繋させている。口唇部内面には結節浮線文を貼付し、口縁内文様帶は2cm余りを測り幅広である。

1106から1108は口縁内を粘土帶で肥厚させないで、口縁内文様帶が幅が狭いか、あるいは持たないものである。1106は口唇に浮線文を貼付し、口縁内に僅かに繩文を施すものである。1107、1108は口縁内文様帶を持たないもので、1107は口唇外端に結節浮線文を貼付するのみである。

1109から1121は結節浮線文の胴部破片である。結節は浮線上を連続的に押引き「エ」状になるものと、浮線にキザミを加えて結節状にするものとに大きく分かれる。1119及び1120はキザミのもので、1121は浮線上に小刺突をえたものである。繩文地に結節浮線文を貼付したものが多く、1118は小破片のため繩文は不明である。1117は胴部下半に繩文が認められる。

繩文原体は総じて節が太く、LRが主体を占めるものの、RLも認められている。中には1120の無節のもの、また1119は反燃RRの可能性がある。

浮線の幅は1100と1109が5mm程で幅広である。他のものについては3mm程度が主体を占めている。結節の方向は左から、右方向に押し引く。結節の間隔は緻密で、1117は浮線が細く結節の間隔は4、5mmで広い。内面の整形はナデのものが多いものの、1108、1109、1112、1118、1121は指頭痕を残すもので、1114は爪形が残されたものである。胎土は石英粒を少量含み堅致である。器肉は1100の口縁部は1cmと大きく肥厚させるものの、他の口縁部破片は肥厚させても5mmである。胴部部分の器肉は3、4mmで、1117は5mmとやや厚い。色調は1100から1103、1111、1116、1121が黄褐色で他のものは暗褐色、または茶褐色である。1117には内外面に焦げ、1119の内面には炭化物が付着する。

所属時期は1100から1103は前期終末の大歳山式に相当する。1106も大歳山式の範疇で捉えられる可能性がある。他のものについては、里木I式または田井式に含まれる可能性がある。これについては、別項目で取り上げたい。

その他

胴部破片(第30、31図1122~1149)

1122から1149の28点は胴部破片である。前期に伴うものと考えられるものである。器肉は薄く、内面の整形に指頭を残すもの、繩文原体の節が太いことが特徴である。また貝殻背压痕文も存在している。以下の胴部破片1類から5類に分類した。

1類

繩文地のものは、原体がRLのものは1122~1129、1132~1134である。1130はRLRの可能性があるものの、判然としない。

2類

L R のものは1135～1143で1142は僅かに回転方向を変える。

3類

羽状繩文になるものは、3点で1144～1146である。3点共に繩文原体RLとLRによる羽状繩文である。

4類

1147～1149は同一個体で、細い原体で然りはRLである。色調は黒褐色を呈し、内面の整形はナデである。繩文後期に含まれる可能性も残されている。

底 部(第31図1150～1153)

1150～1153は底部破片である。1150、1151は多角形の底部で、1150はRLの繩文地に浮線を垂下させる。1151はLRの繩文地である。共に堅致である。1152は平底で底部の器内も薄い。1153は平底で底部の器内は厚く、胴部は薄いものである。

前期土器群の編年的位置付け

前期の土器群はZ I群からZ VI群まで分類を行った。基本的にこれらの前期の土器群は瀬戸内の既成の編年に当たるものの、所属型式が不明なものもあり、どの型式と共伴するか、または含まれる可能性があるか若干触れてみたい。南四国において前期の出土例は少なく、また層位的な出土例も皆無である。瀬戸内編年とその周辺域の編年を援用せざるを得ないのが実状である。しかしながら、それでもなおかつ、該当しないもののが存在しており、未命名型式の一群が存在し、編年の空隙を埋めるものか、または既存の型式内のバリエーションにも関わらず、類例が少ないとから型式比定が困難なことが予想される。また、報告者のただ単に研究不足のため、類例を探し出すことができないかの、3つの理由が考えられる。

松ノ木遺跡における前期土器の様相は、条痕文系→爪形文→竹管文→素文浮線文→素文浮線文+繩文地→結節浮線文の基本的な流れが考えられる。

前期Ⅰ期

条痕文系は1001から1010が該当し、羽鳥下層式に相当するものは、1004から1010で表裏に貝殻条痕を施したものである。また半截竹管状工具による連続刺突文が認められる。

前期Ⅱ期

Z II群の「連続爪形文」は磯ノ森式に比定されるもので、前段階の条痕文は少なくなり、替わって繩文を施すものが認められる。羽鳥下層式に見られた竹管連続刺突は、「C」字状の押引き爪形文へと変化する。胴部破片の結束を持たない羽状繩文1144から1146はこれに伴う可能性が高い。Z II群1類1011のように内面に条痕を施した後に、ナデ消し、「C」字状の押引きとはならず、密に「C」字状の爪形文を施すものが古相を呈するものと考えられる。「C」字状爪形文は羽鳥下層式にも認められるが、それらについては条痕文で繩文を持たないものが主としているところから、区別される。本遺跡では出土しておらず、僅かに断絶が認められる。該期の編年的細分・流れはZ I群2類→+(未検出)→Z II群1類→Z II群2類と考えられる。Z I群の条痕文系土器は瀬戸内では前期初頭に組み込まれており、ここではそれに従う。

前期Ⅲ期

「竹管文」としたZⅢ群は半截竹管により連続押引き文で、「C」状の連続爪形文とは区別される。整形、器肉等についてはZⅡ群を踏襲する。相違点は施文工具の違い、また縄文を持たないところにある。また条痕文は全く姿を消す。ZⅢ群1類の1015から1018は偶然としないものの、焼成・胎土の感じからこの時期に伴う可能性があるものである。また、ZⅡ群7類1065の沈線文は類例は認められないものの本群の一バリエーションと考えられる。ZⅢ群は一時期と考えられる。瀬戸内編年では彦崎ZⅠ式に相当する。

前期Ⅳ期

竹管文から素文浮線文と変化する。ZⅣ群1類は前期Ⅲ期と共伴の可能性もあるものの、施文、整形等の違いから区分した。ZⅢ群は裏面に凸凹状に指頭が見られ、また器肉が薄いものの、ZⅣ群1類には裏面の凸凹は認められず、裏面整形は平滑でナデ整形である。大きな違いは素文の浮線文を貼付するところにある。ZⅢ群とZⅣ群のその漸移的な様相のものは出土していない。瀬戸内編年では彦崎ZⅡ式の範疇で捉えられるものである。

また素文浮線文に縄文地の一群が存在している。ZⅣ群1類と2類の文様構成、裏面の調整は比較的似る。1類と2類との相違は、口縁形態に違いが認められる。2類は口縁内面を折り返し状に肥厚させ、更に縄文を施文する。しかし、1類は素口縁のものが少ない資料ながら占められているようである。1、2類は共伴関係の可能性も残されているものの、羽島貝塚(開壁1975)では2類のみの出土で、1類は認められていないところからも、型式学的には1類から2類に変遷するものと考えられる。また羽島貝塚での2類は裏面の調整が違っているようで、内面が凸凹になるものが多く、本遺跡のものと若干の地域差が認められている。前期Ⅳ期はZⅣ群1類→ZⅣ群2類との流れの可能性が強い。これは從来言われてきた彦崎ZⅡ式内の細分となる。

前期Ⅴ期

V期とV期の違いは浮線文の相違にある。V期の浮線文は「Σ」字状の結節浮線文となるもので、ZⅥ群としたものである。また口縁部形態は口縁内文様の拡張が一段と進む。口唇部にも「Σ」字状の結節浮線文で加飾する。この一群は前期終末の大歳山式に相当するものである。ZⅣ群2類が大歳山式に繋がるものと考えられる。

またこの一群と違った「Σ」字状の結節浮線文を持たないもので、浮線とならず、押し潰れた粘土帶に縄文を施した田井式に含まれるZⅤ群もこの時期に組み入れた。編年的には同時期であると考えられるものの、田井式と前の彦崎ZⅡ式のZⅣ群2類とは系譜的には繋がらないものである。大歳山式と田井式は時期差も考えられるものの、しかしながら田井式の口縁部形態は浮線を除いた点以外は大歳山式同様である。後続の船元I式には大歳山式、田井式の両者から繋がるもののが存在しており、系譜上の相違と考えられる。里木貝塚(開壁1971)では里木I式とされたものの中に、田井式が多く含まれ、また前期末とされたものに大歳山式が少量出土している。

以上のように本遺跡の前期の編年的位置付けは前期初頭から前期終末までの土器群が序列をもって出土している。今回、南四国独自の新たな型式設定に至るまでの土器群は検出されていないものの、瀬戸内編年の中で理解でき、素文浮線文のZⅣ群1類、ZⅣ群2類を新たに型式学的に分離可能なもの

のとした。他の遺跡での今後の検証に期したい。

3 中期土器群（第32図2001～2011）

中期に含まれるのは、今回の調査では11点に留まる。その為、特に分類は設けず、一括して記述する。型式名は瀬戸内縄年を援用する。

2001は口縁部を内外面共に肥厚させ、縄文rを内外面に施文する。口唇部は平坦で斜行のキザミを施す。船元I式に相当する。

2002、2003は口縁部外面に沈線内に円形小刺突を施すことにより、ジグザグ状の微隆起帯の効果を抽出する。2002は胴部に細密な条線を施す。里木II式に相当する。

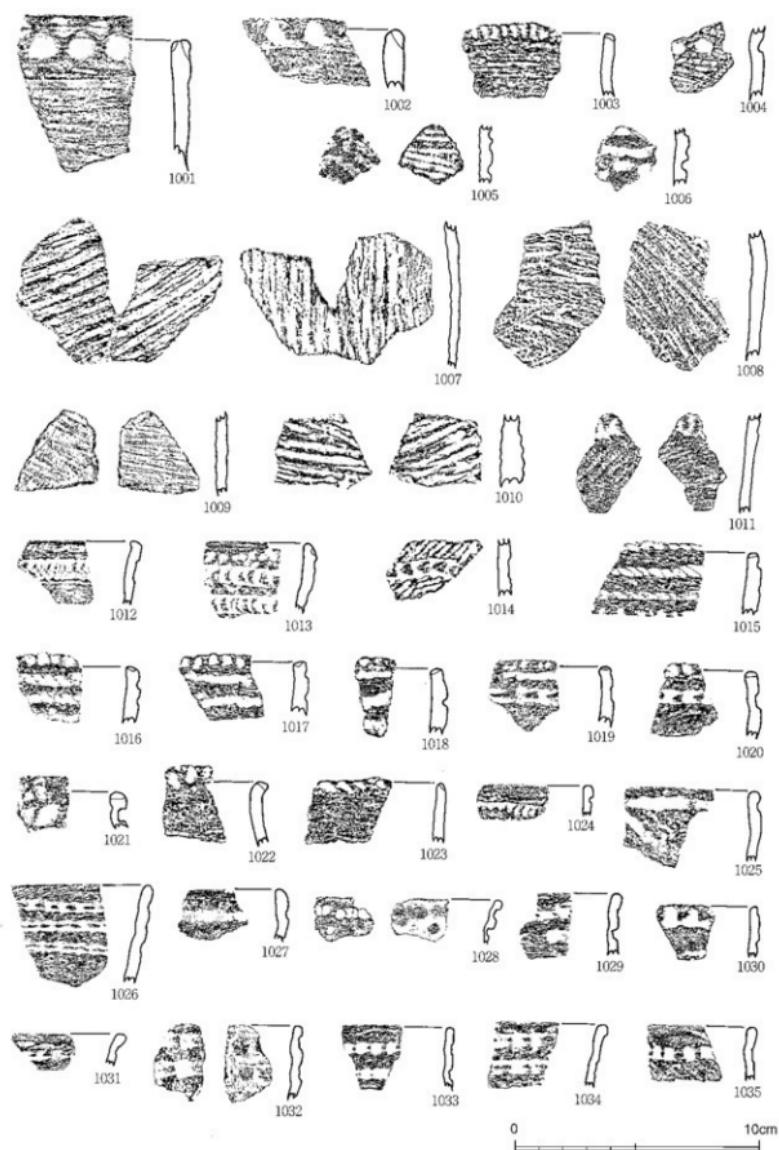
2004は細密条線と緩やかな波状沈線を施す。里木III式または里木II式に相当する。

2005は指頭の付く隆帯を継に垂下させた沈線文である。口唇部は平坦で口唇部外端の角にキザミを施す。内面は条痕の後、ナデ整形である。型式名は判然としないものの、里木III式の可能性がある。

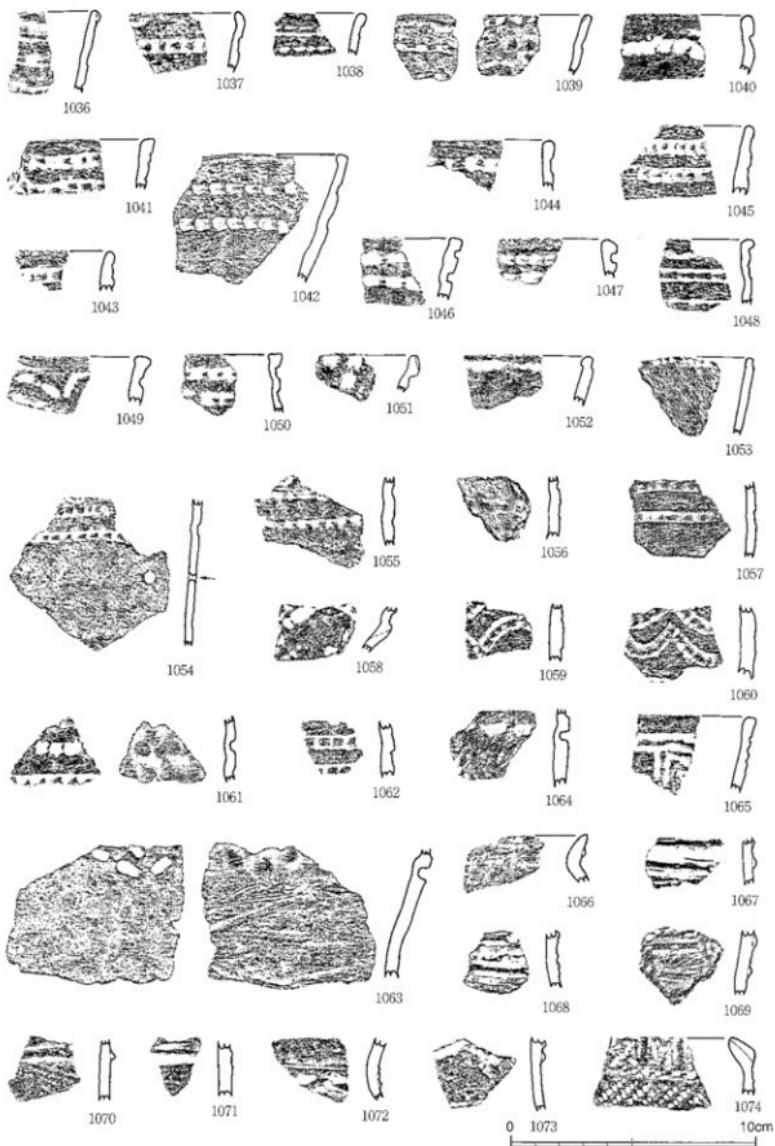
2006は口縁部下に幅広の波状の沈線を施し、口縁部は外反する。里木III式か後期初頭の中津式の可能性が考えられる。

2007から2011は胴部破片で、2007は貝殻殻頂部の圧痕が見られ、船元I式に相当する。2008から2011は無節の縄文原体で2011だけがIである。船元I式からIII式に含まれる。

中期土器群については、南四国全般に言えることではあるが、基本的には瀬戸内縄年の範疇に含まれ、出土量も極めて少ないので、南四国独自のものは今のところ未検出である。中期の特徴としては、前期に比べ、器肉が厚くなり、石英粒を多く含む。また色調も黄褐色系統のものが多いようである。



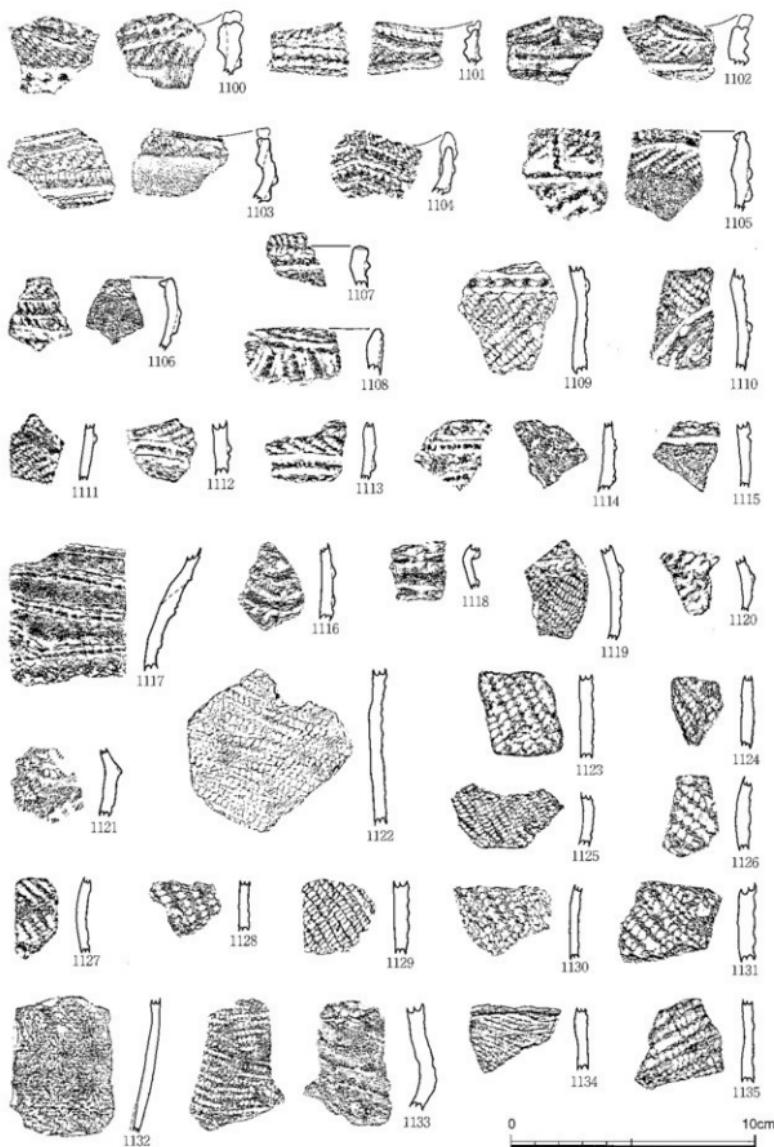
第27図 繩文前期土器(1) Z I 群1000~1010、Z II 群1011~1014、Z III 群1015~1035



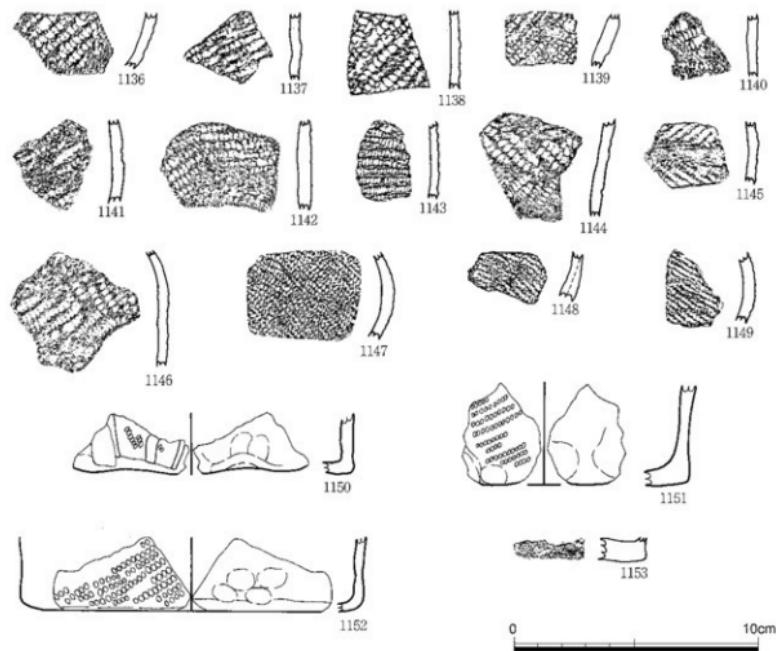
第28図 繩文前期土器(2) ZⅢ群1036~1065、ZⅣ群1066~1074



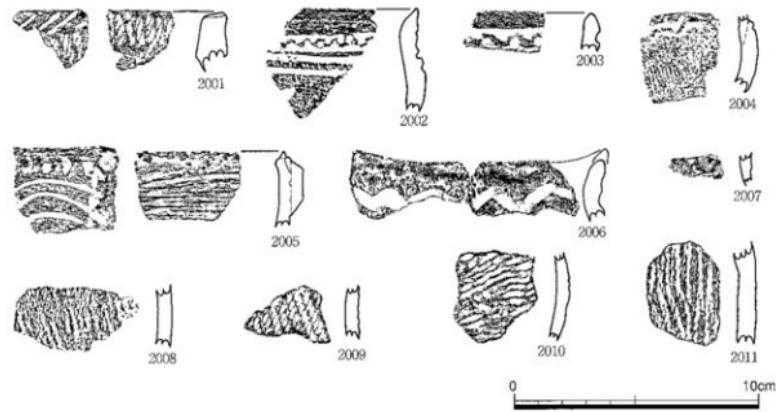
第29図 繩文前期土器(3) Z IV群1075~1086、Z V群1087~1099



第30図 繩文前期土器(4) ZVI群1100~1121、胴部1122~1135



第31図 縄文前期土器(5) 朋部1136～1149、底部1150～1153



第32図 縄文中期土器

表4 前期・中期縄文土器観察表

遺物番号	器種・部位	取上番号	型式	分類	特徴	縄文原体	表面調整	胎土	接合	備考
1001	深鉢・口縁	X3VI下唇	羽鳥下唇	ZII	表裏条底、口唇外周連続大形キザミ。	内外面条底→ナデ	微石多量	1002同 個体		
1002	深鉢・口縁	Y2背面	羽鳥下唇	ZII	表裏条底、口唇外周連続大形キザミ。	外側朱板、内面ナゲ	微石多量	1001と 同一個 体か		
1003	深鉢・口縁	Y3背面	羽鳥下唇	ZII	表裏条底。口唇外周連続キザミ。器肉薄い。	外側朱板、内面全 底→ナデ	石英少 量、砂粒 微量	1004同 個体		
1004	深鉢・胴部	X3VII面	羽鳥下唇	ZII	表裏条底。刻文突。器肉薄い。	内外面条底	石英、砂 粒少量	1003同 個体		
1005	深鉢・胴部	Y1面	羽鳥下唇	ZII	表裏条底。	内面全底	石英微量			
1006	深鉢・胴部	Y1面	羽鳥下唇	ZII	表裏条底。	内面条底	微石少 量			
1007	深鉢・胴部	1806-1817	羽鳥下唇	ZII	表裏条底。器肉薄い。	内外面条底	砂粒少量	○1008 同一個 体か		
1008	深鉢・胴部	Y1面	羽鳥下唇	ZII	表裏条底。器肉薄い。	外裏条底→ナデ、 内裏条底	砂粒少量	1007同 個体	内面化 物付着	
1009	深鉢・胴部	Y3VII面	羽鳥下唇	ZII	表裏条底。器肉薄い。	内外面条底	微石少 量			
1010	深鉢・胴部	W5VI面	羽鳥下唇	ZII	表裏条底。	内外面条底	石英、砂 粒少量			
1011	深鉢・胴部	X4V面	織ノ森	ZII	「C」字形爪形文。縄文。	LR	内裏条底→ナデ			
1012	深鉢・口縁	弦張25唇	織ノ森	ZII	「C」字形爪形文。竹管連結押引き。 き。	外裏条底、内面全 底→ナデ	微石少 量		内外面保 付着	
1013	深鉢・口縲	弦張60唇	織ノ森	ZII	「C」字形爪形文。竹管連結押引き	RL	内面指標→ナデ	石英微量		
1014	深鉢・胴部	Y3VI面	織ノ森	ZII	「C」字形爪形文。竹管連結押引き	LR	内外面指標→ナデ	石英多量		
1015	深鉢・口縲	X3V背面	彦崎ZI	ZII	口唇押引き。大・中・横文押抜？	RL	内面全底	石英少 量		
1016	深鉢・口縲	弦張10唇	彦崎ZI	ZII	口唇押抜痕。	RL	内面全底	石英少 量		
1017	深鉢・口縲	Y3VI面	彦崎ZI	ZII	口唇押抜痕。大・中・横文押抜？	RL	内面全底	石英少 量		
1018	深鉢・口縲	弦張2唇	彦崎ZI	ZII	口唇押抜痕。大・中・横文押抜？	RL	内面全底	石英少 量		
1019	深鉢・口縲	X3II面	彦崎ZI	ZII	口唇キザミ。竹管連結押引き文。	内面指標→ナデ	石英少 量			
1020	深鉢・口縲	Y3VII面	彦崎ZI	ZII	口唇キザミ。竹管連結押引き文。	内面指標→ナデ	石英少 量			
1021	深鉢・口縲	W4IIa面	彦崎ZI	ZII	竹管文。	内外面ナデ	微石少 量			
1022	深鉢・口縲	X3VII面	彦崎ZI	ZII	口唇キザミ。	外裏ナデ、内面全 底→ナデ	石英微量			
1023	深鉢・口縲	Y3VII面	彦崎ZI	ZII	口唇キザミ。	外裏ナデ、内面指 標→ナデ	砂粒微量			
1024	深鉢・口縲	W4II下面	彦崎ZI	ZII	竹管連結押引き文。	内面ナデ	微石少 量			
1025	深鉢・口縲	X3VII面	彦崎ZI	ZII	竹管連結押引き文。直線的な竹管 縫。	外裏ナデ、内面指 標→ナデ	石英少 量		内外面保 付着	
1026	深鉢・口縲	X3VII面	彦崎ZI	ZII	竹管連結押引き文。	内面指標→ナデ	石英少 量			
1027	深鉢・口縲	X4VII面	彦崎ZI	ZII	竹管連結押引き文。	内面指標→ナデ	微石少 量			
1028	深鉢・口縲	V面	彦崎ZI	ZII	竹管文。	内面ナデ	微石少 量			
1029	深鉢・口縲	W4II下面	彦崎ZI	ZII	竹管連結押引き文。	外裏ナデ、内面指 標→ナデ	石英少 量			
1030	深鉢・口縲	V面	彦崎ZI	ZII	竹管連結押引き文。	内外面指標→ナデ	微石少 量		外裏保 付着	
1031	深鉢・口縲	旅張4唇	彦崎ZI	ZII	彦崎ZI	内面ナデ	石英少 量			
1032	深鉢・口縲	旅張12-13唇	彦崎ZI	ZII	彦管文。	内面指標→ナデ	石英少 量			
1033	深鉢・口縲	X3VII面	彦崎ZI	ZII	竹管連結押引き文。	外裏ナデ、内面指 標→ナデ	石英少 量		外裏保 付着	
1034	深鉢・口縲	X3VII面	彦崎ZI	ZII	竹管連結押引き文。	外裏ナデ、内面指 標→ナデ	石英少 量			
1035	深鉢・口縲	X3VII面	彦崎ZI	ZII	竹管連結押引き文。	内面指標→ナデ	石英少 量			
1036	深鉢・口縲	X3VII面	彦崎ZI	ZII	竹管連結押引き文。	外裏ナデ、内面指 標→ナデ	石英少 量			
1037	深鉢・口縲	弦張18唇	彦崎ZI	ZII	竹管連結押引き文。	内面指標→ナデ	微石少 量			
1038	深鉢・口縲	Y3VII面	彦崎ZI	ZII	竹管連結押引き文。	外裏ナデ、内面指 標→ナデ	石英少 量			
1039	深鉢・口縲	X3VII面	彦崎ZI	ZII	竹管連結押引き文。	外裏ナデ、内面指 標→ナデ	石英少 量			
1040	深鉢・口縲	Y3VII面	彦崎ZI	ZII	竹管連結押引き文。	外裏ナデ、内面指 標→ナデ	石英少 量			
1041	深鉢・口縲	1313	彦崎ZI	ZII	竹管連結押引き文。直線的な竹管 縫。	外裏ナデ、内面指 標→ナデ	石英少 量			
1042	深鉢・口縲	彦崎ZI	彦崎ZI	ZII	口唇凹凸、内にやや突出。竹管連結 押引き文。	内面指標→ナデ	石英微量			
1043	深鉢・口縲	X3VII面	彦崎ZI	ZII	竹管連結押引き文。	外裏ナデ、内面指 標→ナデ	石英少 量			
1044	深鉢・口縲	V面	彦崎ZI	ZII	竹管連結押引き文。	外裏ナデ、内面指 標→ナデ	石英少 量			
1045	深鉢・口縲	X4VII面	彦崎ZI	ZII	竹管連結押引き文。	内面指標→ナデ	石英多 量			
1046	深鉢・口縲	X3VII面	彦崎ZI	ZII	竹管連結押引き文。	内外面ナデ	石英微量			

遺物 番号	種類・部位 取上番号 出土位置 X4Y6面	型式 Z	分類 ZII	特徴	純文 原体	器面調査	胎土	接合	備考
1047	深鉢・口縁 Y3V1面	彦崎	Z II 4	竹管透続押引き文。口唇僅かに肥厚。	内外面ナデ	石英少量			
1048	深鉢・口縁 Y3V1面	彦崎	Z II 4	竹管透続押引き文。口唇僅かに肥厚。	外丽ナデ、内面指 痕→ナデ	石英少量			
1049	深鉢・口縁 弦張12面	彦崎	Z II 4	竹管透続押引き文。口唇僅かに肥厚。	外丽ナデ、内面指 痕→ナデ	微小黒斑			
1050	深鉢・口縁 V面	彦崎	Z II 4	竹管透続押引き文。口唇僅かに肥厚。	外丽ナデ、内面指 痕→ナデ	石英少量			
1051	深鉢・口縁 V面	彦崎	Z II 4	L縁に横筋押文。	内外面ナデ	微小黄少 量			
1052	深鉢・口縁 X3V1面	彦崎	Z II 4	口唇下に竹管透続押引き文。	内外面指痕→ナデ	石英少量			
1053	深鉢・口縁 X3V1面	彦崎	Z II 4	口唇下に竹管透続押引き文。	内外面指痕→ナデ	石英少量			
1054	深鉢・口縁 X3V1面	彦崎	Z II 4	竹管透続押引き文。	内外面指痕→ナデ	石英少量			補修孔
1055	深鉢・口縁 X3V1面	彦崎	Z II 4	竹管透続押引き文。	内外面指痕→ナデ	石英少量			
1056	深鉢・口縁 X3V1面	彦崎	Z II 4	竹管透続押引き文。	内外面指痕→ナデ	石英少量			
1057	深鉢・口縁 X3V1面	彦崎	Z II 4	竹管透続押引き文。	内外面指痕→ナデ	微小黄少 量			
1058	深鉢・胴部 弦張14面	彦崎	Z II 4	竹管透続押引き文。曲線的な竹管 文。頭部周囲。	内外面指痕→ナデ	石英少量			
1059	深鉢・胴部 V面	彦崎	Z II 4	竹管透続押引き文。曲線的な竹管 文。	内面指痕→ナデ	石英多量			
1060	深鉢・胴部 Y3V1面	彦崎	Z II 4	竹管透続押引き文。曲線的な竹管 文。	外丽ナデ、内面指 痕→ナデ	石英多量			
1061	深鉢・胴部 弦張40面	彦崎	Z II 5	竹管透続押引き文。「D」字形竹管 文。	外丽ナデ、内面指 痕→ナデ	微小石微 量			
1062	深鉢・口縁 Y4V1面	彦崎	Z II 5	竹管透続押引き文。「C」字形竹管 文。	内外面指痕→ナデ	石英少量			
1063	深鉢・胴部 X4V1面	彦崎	Z II 6	刃棒状工具刻。	内外面指痕→ナデ	石英多量			
1064	深鉢・胴部 X4V1面	彦崎	Z II 6	角棒状工具刻。	内外面指痕→ナデ	石英多量			外表面 着
1065	深鉢・口縁 V面	彦崎	Z II 7	沈焼文。	内外面指 痕→ナデ	石英少量			
1066	深鉢・口縁 弦張33面	彦崎	Z II 7	素文浮雕文。口掠彎曲。	内外面指痕→ナデ	石英多量			
1067	深鉢・胴部 X4V1面	彦崎	Z II 7	2枚の素文浮雕文。	内外面指痕→ナデ	石英多量			
1068	深鉢・胴部 Y4V1面	彦崎	Z II 7	3枚の素文浮雕文。	内外面指痕→ナデ	石英多量			
1069	深鉢・胴部 残	彦崎	Z II 7	2枚の素文浮雕文。	内外面指痕→ナデ	微小黄少 量			
1070	深鉢・胴部 X4V1面	彦崎	Z II 7	2枚の素文浮雕文。	内外面ナデ	石英少量			
1071	深鉢・胴部 V面	彦崎	Z II 7	素文浮雕文。	外丽ナデ、内面指 痕→ナデ	石英多量			
1072	深鉢・胴部 残	彦崎	Z II 7	素文浮雕文。模様と「ハ」字状の浮 縞。	内外面指痕→ナデ	微小石少 量			
1073	深鉢・胴部 X3V1面	彦崎	Z II 7	素文浮雕文。模様と「ハ」字状の浮 縞。	内外面指痕→ナデ	微小黒斑			
1074	深鉢・口縁 X5V1面	彦崎	Z II 7	口掠肥厚。LI形素文浮雕文貼付+太 口縁。	内外面指痕→ナデ	石英多量			
1075	深鉢・口縁 盛十	彦崎	Z II 7	口掠肥厚。LI形素文浮雕文貼付+太 口縁。	内外面指痕→ナデ	石英多量			
1076	深鉢・口縁 X5V1面	彦崎	Z II 7	口掠肥厚。LI形素文浮雕文貼付+太 口縁。	内外面指痕→ナデ	石英少量			
1077	深鉢・口縁 残	彦崎	Z II 7	口掠肥厚純文。素文浮雕文。	RL	内面指痕→ナデ	石英少量		
1078	深鉢・口縁 X4V1面	彦崎	Z II 7	口掠内面指り込し、純文。口唇キザ ミ。	RL	内面指痕→ナデ	石英少量		
1079	深鉢・口縁 X3V1面	彦崎	Z II 7	口掠内面指り込し、純文。口唇キザ ミ。	RL?	外丽ナデ、内面指 痕→ナデ	石英多量		外表面 着
1080	深鉢・胴部 1332	彦崎	Z II 7	口掠内面指り込し、純文。頭部周囲 を彫る。	RL	内面指痕→ナデ	石英少量		
1081	深鉢・胴部 残	彦崎	Z II 7	素文浮雕文。模様。	LR?	内面指痕→ナデ	石英多量		
1082	深鉢・胴部 X4V1面	彦崎	Z II 7	素文浮雕文。模様。唇上部に凹 えある。	RL	内面指痕→ナデ	石英少量		
1083	深鉢・胴部 残	彦崎	Z II 7	素文浮雕文。模様。	I	内面ナデ	石英少量		
1084	深鉢・胴部 X3V1面	彦崎	Z II 7	素文浮雕文。模様。	RL	内面指痕→ナデ	石英多量		
1085	深鉢・胴部 V面	彦崎	Z II 7	素文浮雕文。模様。	不明	内面指痕→ナデ	微小黄少 量		
1086	深鉢・胴部 Y3V1面	彦崎	Z II 7	素文浮雕文。	RL?	内外面指痕→ナデ	石英多量		
1087	深鉢・口縁 Y3V1面	田井	Z V	口掠内面指り込し、純文。口唇キザ ミ。太く彫文地。	RL	内面指痕→ナデ	石英多量		外表面 着
1088	深鉢・口縁 X4V1面	田井	Z V	口掠内面指り込し、純文。口唇キザ ミ。太く彫文地。	LR	内面ナデ	石英少量	1089回 削削 個体	
1089	深鉢・口縁 V面	田井	Z V	口掠内面指り込し、純文。口唇キザ ミ。太く彫文地。	LR	内面ナデ	石英少量	1088回 削削 個体	
1090	深鉢・口縁 V面	田井	Z V	口掠内面指り込し、純文。口唇キザ ミ。太く彫文地。	LR	内面ナデ	微小石微 量		
1091	深鉢・口縁 Y3V1面	田井	Z V	口掠内面指り込し、純文。口唇キザ ミ。太く彫文地。	LR	内面指痕→ナデ	石英少量		
1092	深鉢・口縁 X4V1面	田井	Z V	口掠内面指り込し、純文。外丽太い 彫文。	LR	内面ナデ	石英少量		
1093	深鉢・口縁 弦張23面	田井	Z V	太い桃彫文。	LR	内面ナデ	石英少量		
1094	深鉢・口縁 M面	田井	Z V	太い桃彫文。LI縁内面指り込し、桃 彫文。	LR	内面ナデ	石英微量		

遺物番号	器種・部位	取上番号・出土位置	層式	分類	特徴	鶴文原体	器面調整	胎土	接合	備考
1095	深鉢・L1縁	W4Ⅵ面	田井	ZV	太い縦文。口縁内面折り返し、縦文。口上端縦文。	RLR	内面ナデ	石英微量	外油膜付 着	
1096	深鉢・L1縁		田井	ZV	太い縦文。口縁内面折り返し、内外両面文。	LR	内面ナデ	石英多量	外油膜付 着	
1097	深鉢・L1縁	X4Ⅴs面	田井	ZV	太い縦文。口縁内面折り返し。	LR	外曲板面、内面削 痕ナデ	微石英多 量		
1098	深鉢・削部	W4Ⅵ面	田井	ZV	削れた跡線に縦文。鶴文詰向方向変 える。	RL	内面削痕	石英微量		
1099	深鉢・削部	Y3Ⅸ面	田井	ZV	削れた跡線に縦文。	LR	内面削痕→ナデ	石英少量		
1100	深鉢・口縁	底張2層	大歳山	ZV	結節浮出文。口縁内面折り返し。縦 文。底張浮出文。口縁内面折り返し。	LR	—	石英少量		
1101	深鉢・口縁	V1縁	大歳山	ZV	結節浮出文。口縁内面折り返し。縦 文。底張浮出文。口縁内面折り返し。	LR	—	微石英少 量		
1102	深鉢・口縁	底張2層	大歳山	ZV	結節浮出文。口縁内面折り返し。縦 文。底張浮出文。口縁内面折り返し。	LR	—	石英多量		
1103	深鉢・口縁		大歳山	ZV	結節浮出文。口縁内面折り返し。縦 文。底張浮出文。口縁内面折り返し。	LR	内面ナデ	石英微量		
1104	深鉢・口縁	W3Ⅹ面	墨木I?	ZV	結節浮出文。口縁内面折り返し。縦 文。底張浮出文。口縁内面折り返し。	LR	内面ナデ	石英多量		
1105	深鉢・L1縁	底張6層	墨木I?	ZV	結節浮出文。口縁内面折り返し。縦 文。底張浮出文。口縁内面折り返し。	RL?	内面ナデ	微石英少 量		
1106	深鉢・口縁	X4Ⅴ面	大歳山	ZV	結節浮出文。口縁内面折り返し。縦 文。底張浮出文。口縁内面折り返し。	LR	内面ナデ	微石英少 量		
1107	深鉢・口縁	底張6層	墨木I?	ZV	結節浮出文。口縁内面折り返し。縦 文。底張浮出文。口縁内面折り返し。	RL?	内面ナデ	微石英少 量		
1108	深鉢・口縁	X3Ⅷb面	墨木I?	ZV	結節浮出文。手下する結節浮出文。	LR	内面削痕→ナデ	石英微量		
1109	深鉢・削部	V1縁	墨木I?	ZV	結節浮出文。手下する結節浮出文。	LR	内面削痕→ナデ	石英少量		
1110	深鉢・削部	X3Ⅷ面	墨木I?	ZV	結節浮出文。手下する結節浮出文。	RL	内面ナデ	石英少量		
1111	深鉢・削部	W4面	墨木I?	ZV	結節浮出文。縫文地。	LR	内面ナデ	石英微量		
1112	深鉢・削部	W3Ⅹ面	墨木I?	ZV	結節浮出文。縫文地。	LR	内面削痕→ナデ	石英少量		
1113	深鉢・削部	X4Ⅴ面	墨木I?	ZV	結節浮出文。縫文地。	RL	内面ナデ	微石英少 量		
1114	深鉢・削部	X4Ⅴ面	墨木I?	ZV	結節浮出文。縫文地。	RL?	内面孔形、ナデ	石英微量		
1115	深鉢・削部	V1縁	墨木I?	ZV	結節浮出文。縫文地。	RL	内面ナデ	砂利微量		
1116	深鉢・削部	X3Ⅸ面	墨木I?	ZV	結節浮出文。縫文地。	LR	内面ナデ	石英微量		
1117	深鉢・削部	X3Ⅸ面	墨木I?	ZV	結節浮出文が数条。下半に縫文。	RL	内面削痕→ナデ	石英多量		
1118	深鉢・削部	X4Ⅴ面	墨木I?	ZV	不規則な結節浮出文。加熱する。	RL?	内面孔形、ナデ、内面削 痕→ナデ、内面削 痕→ナデ	微石英微 量		
1119	深鉢・削部	底張5層	墨木I?	ZV	浮縫文。浮縫上キサギ。縫文地。	RR	内面ナデ	石英微量		
1120	深鉢・削部	X5E面	墨木I?	ZV	浮縫文。浮縫上キサギ。縫文地。	I	内面削痕→ナデ	微石英少 量		
1121	深鉢・削部	X3Ⅷb面	墨木I?	ZV	浮縫文。縫文地。	RL	内面削痕→ナデ	石英微量		
1122	深鉢・削部	底張5層	前階後半	Z	縫文。	RL	内面削痕→ナデ	微石英少 量		
1123	深鉢・削部	X4Ⅴb面	前階後半	Z	縫文。	RL	内面削痕→ナデ	石英多量		
1124	深鉢・削部	底張5層	前階後半	Z	太い縦文	RL	内面削痕→ナデ	石英少量		
1125	深鉢・削部	W4Ⅵ面	前階後半	Z	縫文。	RL	内面削痕→ナデ	微石英少 量		
1126	深鉢・削部	X4Ⅴ面	前階後半	Z	太い縦文。	RL	内面削痕→ナデ	石英少量		
1127	深鉢・削部	質面	前階後半	Z	太い縦文。	RL	内面削痕→ナデ	微石英少 量		
1128	深鉢・削部	X3Ⅸ面	前階後半	Z	太い縦文。	RL	内面削痕→ナデ	石英少量		
1129	深鉢・削部	底張5層	前階後半	Z	縫文。	RL	内面ナデ	石英少量		
1130	深鉢・削部	W4Ⅵ面	前階後半	Z	縫文。	RLR	内面削痕→ナデ	石英少量		外油膜付 着
1131	深鉢・削部	X4Ⅴ面	前階後半	Z	太い縦文。	RL	内面削痕→ナデ	微石英少 量		
1132	深鉢・削部	X3Ⅸ面	前階後半	Z	縫文。	RL	外曲指痕→ナデ	鷺丘		外起爆 付着
1133	深鉢・削部	Y3Ⅷ面	前階後半	Z	縫文。	RL	内面削痕→ナデ	石英多量		外曲指 付着
1134	深鉢・削部	底張2層	前階後半	Z	縫文。浮縫文?	RL	内面削痕→ナデ	石英微量		内部爆 付着
1135	深鉢・削部	W3Ⅹ面	前階後半	Z	縫文。	LR	内面削痕→ナデ	石英、砂 利微量		
1136	深鉢・削部	X3Ⅸ面	前階後半	Z	縫文。	LR	内面ナデ	石英少量		
1137	深鉢・削部	質面	前階後半	Z	縫文。	LR	内面削痕→ナデ	微石英少 量		
1138	深鉢・削部	X4Ⅴ面	前階後半	Z	太い縦文。	LR	内面ナデ	微石英少 量		
1139	深鉢・削部	X4Ⅴ面	前階後半	Z	縫文。	LR	内面ナデ	微石英少 量		
1140	深鉢・削部	W4面	前階後半	Z	縫文。	LR	内面削痕→ナデ	微石英少 量		
1141	深鉢・削部	X4Ⅴb面	前階後半	Z	縫文。	LR	内面削痕→ナデ	微石英少 量		
1142	深鉢・削部	X3Ⅸ面	前階後半	Z	縫文。	LR	内面ナデ	石英微量		
1143	深鉢・削部	X4Ⅴ面	前階後半	Z	縫文。	LR	内面ナデ	石英少量		
1144	深鉢・削部	Y4Ⅸ面	前階後半	Z	羽状縫文。	LR	内面削痕→ナデ	石英少量		
1145	深鉢・削部	W4Ⅵ面	前階後半	Z	羽状縫文。	RL	内面削痕→ナデ	石英微量		外油膜付 着

遺物 番号	器種・部位 出土位置	期式	分類	特徴	標文 風体	器面開割	粘土	被合	備考
1146	深鉢・頭部 X3V面	前期後半	Z	羽状網文。	LR・ RL	内面指揮→ナデ	石英少量		内面薄付 量
1147	深鉢・頭部 延張35層	前期後半	Z	繩文。	RL	内面ナデ	石英少量	1148. 1149同 一個体	
1148	深鉢・頭部 X面	前期後半	Z	繩文。	RL	内面ナデ	微石英多 量	1147. 1150同 一個体	
1149	深鉢・頭部 X面	前期後半	Z	繩文。	RL	内面指揮→ナデ	微石英多 量	1147. 1148同 一個体	
1150	深鉢・底部 W4V面	基壇Z E	Z	多角形底部。体盤下半浮貼貼付。繩 文。	RL	内面ナデ	微石英微 量		
1151	深鉢・底部 W4V面	前期後半	Z	多角形底部。繩文。 ?	LR	内外面ナデ	砂粒微量		
1152	深鉢・底部 2016	前期後半	Z	平底。器内薄い。繩文。	LR	内面指揮、ナデ	石英少量		
1153	深鉢・底部 延張4層	前期後半	Z	平底。	RL	内面ナデ	石英少量		
2001	深鉢・口縁 X3V面	船元 I	C	口縁内外面繩文。口唇キザミ。	r		石英多量		
2002	深鉢・口縁 X3V面	里木 II	C	頭部に円形削り突きジグザグに刻突。 頭部を斜めに削り落す。	内外面ナデ		石英多量		
2003	深鉢・口縁 X5V面	里木 II	C	頭部に円形削り突きジグザグに刻突。 波状沈落。堆紋条線。	内外面ナデ		微石英少 量		
2004	深鉢・頭部 X3W面	里木 II	C	波状沈落。	内面ナデ		石英・砂 粒多量		
2005	深鉢・口縁 X3V面・WII	里木 III	C	口唇キザミ。頭部沈進。縁部の太 い唇部に指痕。		外面ナデ、内面 条 縦→ナデ	石英微量		
2006	深鉢・口縁 Y3W面	里木 III	C	波状口縁。やや外反。頭部沈進沈進 文。	内外面ナデ		石英多量		色调黄色
2007	深鉢・頭部 X面	船元 I	C	具眼正直。	内面ナデ		石英少量		
2008	深鉢・頭部 X5V面	船元	C	繩文。	r	内面ナデ	石英・砂 粒多量		
2009	深鉢・頭部 W3W面	船元	C	繩文。	r	内面ナデ	石英少量		
2010	深鉢・頭部 X3W面	船元	C	繩文。	r	外面部指 壓→ナデ	石英少量		
2011	深鉢・頭部 X4V面	船元	C	繩文。	I	内面ナデ	石英多量		

4 後期土器群（第33～92図3001～3775）

本遺跡の中心となる土器群である。特に高知県宿毛市宿毛貝塚を標準とする宿毛式、また本遺跡を中心とする松ノ木式が生じた土器群である。それ以外に今回の調査では松ノ木式と若干時期の相違が考えられる土器群が出土している。それらについては、香川県観音寺市なつめの木貝塚出土の「なつめの木式」(篠川1993、渡辺1994)が新たに設定されており、それに該当するものはKV群土器として報告している。

宿毛式から松ノ木式は漸移的に変化を遂げるために、移行期段階のものについてはどちらの型式に比定すべきか困難なものも存在している。また粗製・無文深鉢についてはどちらに分類されるのかは極めて困難で、指標として、口唇部のキザミの斜行、長さによりある程度区別は可能なものの、ここでは宿毛式、松ノ木式を特に区別せず一括で報告してある。更に深鉢・浅鉢の底部破片についても、どちらも同様の形態を探るため、峻別は困難でひとまとめで報告してある。

先に深鉢の分類を行った後に他の器種をひとまとめで分類を行う。

深 鉢

深鉢K I群（第33図3001、3002）

後期初頭の瀬戸内縄年の中津式と考えられるものが2点出土している。3001は磨消繩文で貝殻擬繩文である。3002は胴部破片で円形刺突を施すので、中津式の範疇で捉えられる可能性のものである。また中期に含めた2006も可能性のあるものである。後期初頭に含まれるものは土器捨て場からの出土は今回が初めてである。3次調査の中位段丘面で沈線文の中津式に相当しているものが、4点程出土している程度で後期初頭に含まれるものは極めて少ない。

深鉢K II群（第33～36図3003～3078）

後期前半の宿毛式に含まれる一群である。宿毛式については岡本健児（岡本1966）により型式名が設定されて以来、福田K II式との終みで取り上げられてきた。その後、前田光雄の論巧等（前田1994）で取り上げられてきて、最近ではやや注目される型式名となっている。宿毛式を2型式に分類する試みもあったものの（木村1983）、具体像ははっきりとせず型式内細分程度で納まる可能性が強い。

宿毛式の特徴は2本沈線による磨消繩文を主体とし、口唇部を余り肥厚させないものである。器形はパケツ形のものが多く、若干頸部のくびれるものも存在するものの頸部文様帯を有するものであり、口唇部下端の文様が頸部、胴部と一体化し、区画文、曲線文を構成する。口唇部は肥厚させず繩文、やや短めのキザミを施す。また繩文以外に貝殻擬繩文も認められる。磨消繩文は丁寧で、特に浅鉢は赤彩を施し、光沢を持つほどにミガキが施されるものが多く認められている。

K II群1類

3003から3013は口唇部を肥厚させず、また繩文、キザミを持たない類で、胴部は繩文帯の幅の広い磨消繩文である。

3004は口縁部沈線は円形刺突を施した部分で口唇に両端がはね上がるもので、3003と共に貝殻擬繩文である。3005から3008は横位の繩文帯で3007、3008は緩やかな波状口縁になる可能性がある。3009、3010は口唇下に沈線を巡らせ、胴部には磨消繩文、沈線文を垂下させる。3012は横位の幅の広い繩文

帯を有するものである。3013はやや無文の口唇部を肥厚させる。

K II群2類

3014から3028は入山形、山形、波状口縁となるもので、波頂部に円形刺突、キザミを施したものが多い。山形口縁で口縁に縄文のみまたは無文の一一群も本類に含めた。

3014から3017、3019は入山形口縁、または山形口縁のもので、波頂部の両脇にキザミを加えたもので、波頂部に円形刺突を加えるものが多く、波頂部間を縄文帯により連結させる。3014はその下の胴部に逆「L」字文？を加える。3018は波頂部のみに円形刺突とキザミを施したもので、胴部文様は不明である。3020の波頂部はブリッジ状に貼付を行ったもので、胴部には縄文のみが認められる。3022は波頂部に円形刺突を数度繰り返し、3021は更に大振りのもので円盤状の突起となり、口縁部も肥厚させ、キザミと沈線を巡らせる。時期的には若干新しくなる可能性がある。

3023から3027入山形口縁で口唇にキザミ、沈線を持たないものである。3023から3025は磨消縄文で、3023は波頂部外面に渦巻き文、3024は帶縄文を口唇外に巡らせる。3025は波頂部に円形刺突を施し、外面には曲線文を口縁部から胴部に連繋させる。3026、3027は沈線文で3026は多重の沈線山形文を施す。3027は1条の沈線を口唇外面に巡らせ、波頂部から下に垂下沈線を施す。

K II群3類

3029から3045は口唇をやや肥厚させ、主に沈線、縄文を施した一群である。器形は緩やかな波状、または平縁のものである。胴部は磨消縄文で、区画文となるものが多い。

3028は口唇に沈線2条、縄文を施し、口唇下に入り組み文を垂下させる。3029、3030は口唇に渦巻き文を施したもの、3031は半円の沈線で小突起を囲み、縄文を施す。口唇も縄文のみの施文である。

3032から3041は口唇に沈線と縄文を施したもので、区画文となる。3035は口唇をやや肥厚させ丸味を持たせる。3036は口唇に縄文のみの施文で、胴部は区画文となる。3037は内面が屈曲する。3040は口唇の沈線が1条のみである。3041から3043は口唇が平坦で内面にやや口唇が突出する。

3044は口唇が肥厚せず、沈線1条を巡らしたもので、3045は口唇が丸味を持ち貝殻擬縄文を施す。口唇内面のくびれ部に沈線1条を巡らせている。胴部も同様で貝殻擬縄文による磨消縄文である。

K II群4類

3046から3067は口唇部をやや肥厚させ、キザミを加えるものである。また縄文を加えるものが多い。大形破片については口縁は波状となるものが多く、小破片については、平縁となっているものの器形は判然としない。胴部文様は磨消縄文である。

3046から3052は口唇部に小振りの円文を主文様とし、口唇にキザミ、縄文を施すものである。上面施文か外画施文となり、内面施文のものは認められない。器形は3047、3051はバケツ状で頸部がくびれない。口唇部の主文様から胴頸部には垂下沈線または3049のように波頭状の文様を持つものが見られる。3050は頸部に文様を持たないものと考えられる。胴部は磨消縄文で、原体はR Lである。3046のように貝殻擬縄文のものも僅かながら存在する。3046は波頂部から垂下沈線の横位区画文、または横位の鈎状文を充填する。3048の胴部主文様は「O」字文の可能性があり、その間を横位の帶縄文で埋める。

3053から3067は口唇の主文様が不明なものである。口唇にキザミを加える点は先のものと同様である。3053は口唇に間隔の開いたキザミを施し、頸部は区画文になる。帶縄文部分にもキザミを施す。

内面は屈曲する。3054と3056は同一個体で、磨消繩文部分が幅広のものである。口唇は内面に突出気味である。3057から3060は頭部上端に横位に帶繩文を巡らせる。3060は口唇部に繩文を持たないものである。

3063と3064は同一個体で口縁内文様を有するものである。口唇はキザミのみである。3065と3066は同一個体の可能性のあるもので、口唇は肥厚せず、沈線を持たずキザミと繩文を施文したものである。胸部は粗い3本沈線による磨消繩文が緩やかな曲線を描いて垂下する。

3067は口唇は貝殻による押圧でキザミの効果を出したものである。波状口縁となり、頭部には区画文となるものと考えられる。

KII群5類

3068は入山形のブリッジを有する口縁部破片である。ブリッジ部分は円孔となり、ブリッジ部分のみに短沈線を施す。口唇下端に沈線を1条巡らせる。胴頸部の境に沈線を巡らせる。胸部文様については不明である。

KII群6類

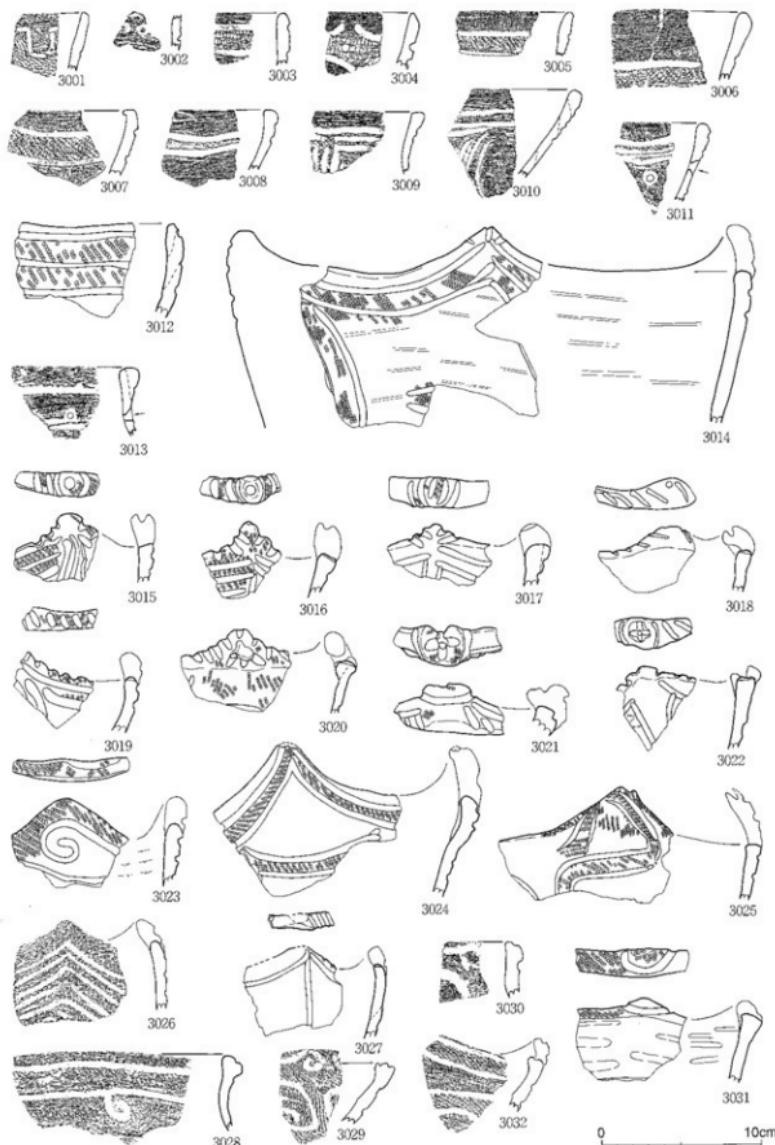
3069、3070は波状口縁で主文様部分の口唇に列点状のキザミを加飾するものである。磨消繩文と共に繩文原体はLRである。3069は口頭部に入組の円文を配し、その下の胸部にも入組円文を配する。胸部文様は横位の曲線的な入組文である。器形はバケツ状に外傾気味に立ち上がり、さらに頭部で緩やかに外傾する。頭部の内面は屈曲部を有する。3070は主文様部の口唇を内面に突き出るように肥厚させ、上面に円文を配する。口唇の沈線は円文に連結せず、屈曲させる。主文様の外面は平城I式に見られるような列点を2段に亘り加飾する。頭部と副部の文様は磨消繩文で連結する。器形は緩やかに外反し、内面に屈曲部を有する。3069、3070共に胎土に白色化した石英を多量に含み、内面のナデがきつく施される。

KII群7類

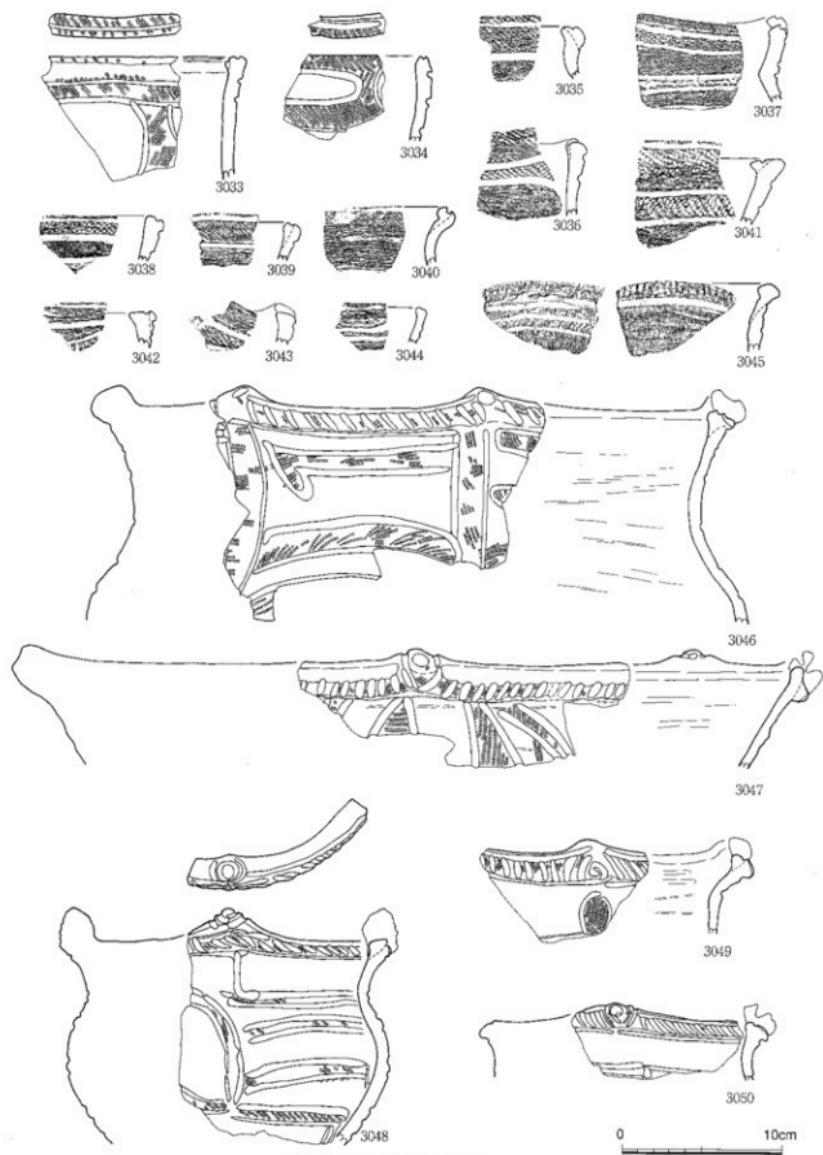
3071、3072は横位の文様モチーフで、モチーフ内にキザミ、円形刺突を連続的に施すものを一括した。本来、宿毛式には一般的に認められるものの、本遺跡では少量である。器形はほぼ直線的に立ち上がり、3071は緩やかな波状口縁となる。3072は平縁である。3071は口唇にキザミを加え、沈線を1条巡らせる。胸部上端には同様に横位の文様帯を巡らせ、キザミを付加する。下には横位の沈線文による入組文が施されている。3072は口縁は素口縁で多段の窓枠状の区画文で充填される。区画文となっているものの、横位の描線を描いた後、縦位に沈線を加え区画文としており、本来は横位の文様モチーフをベースとしたものである。上部2段については円形筒状工具か貝殻による回転刺突を加える。下の横位の区画文には平城I式に見られるような波頭状入組文が認められる。

KII群胴部破片

3073から3078は胴部破片で、特に分類に当てはめることなく、一括して記述する。3073は沈線文の区画文を多段に施すもので、幅広い3本沈線により、横位の文様帯を描いた後に上下の文様帯を縦位の沈線文で繋ぐことにより、窓枠状の区画文を描く。3074は胴部下半の大型破片で、帯状の磨消繩文帯が施される。器形は開く。3075は幅広の3本沈線による磨消繩文である。3076は曲線的な磨消繩文で入組文を形成する。3077はKII群7類の3072と同様に円形刺突を付加したものである。3078は微隆起帯上にやや幅の狭いキザミを連続的に施したものである。



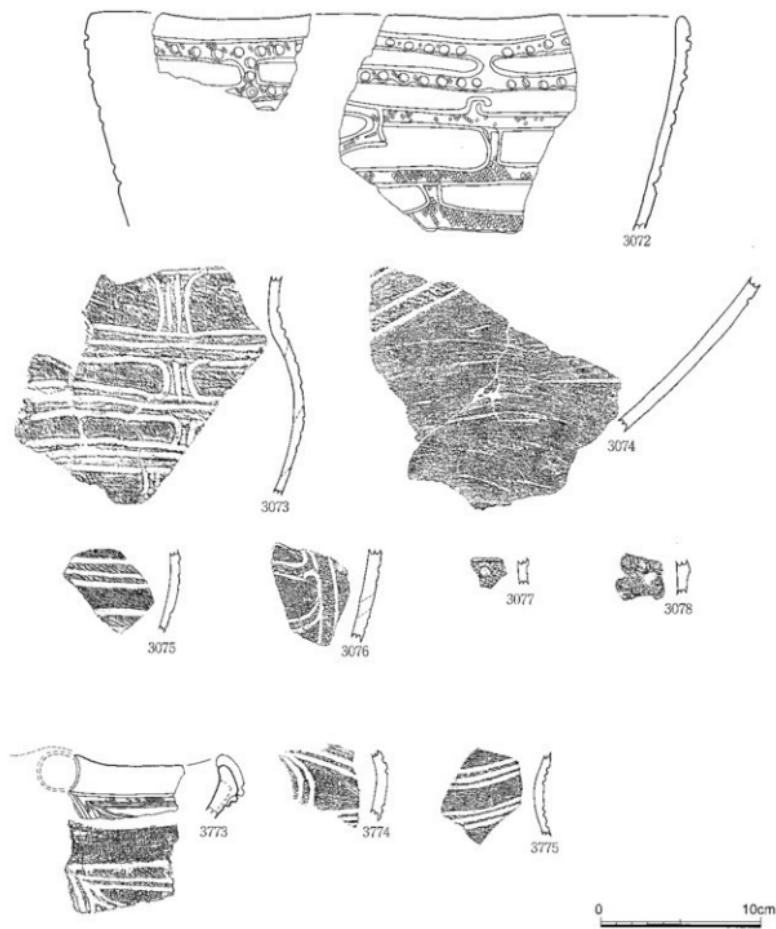
第33図 繩文後期土器深鉢(1) K I群3001・3002、K II群3003~3032



第34図 桶文後期土器深鉢(2) K II群



第35図 繩文後期土器深鉢(3) KⅡ群



第36図 繩文後期土器深鉢(4) K II群3072~3078、K III群3773~3775

深鉢 K III群(第36図3773～3775)

3773から3775は福田K II式と考えられる一群を本群に含めた。3773は緩やかな波状口縁で口縁部を拡張し、屈曲させる。主文様に円文を配し、頸部は連繋した3本沈線による磨消繩文である。3774、3775は脣部破片で、やはり3本沈線による磨消繩文である。3774は曲線的なもので、3775は横位のものである。

深鉢 K IV群(第37～55図3079～3226)

後期前半の松ノ木式に相当する一群である。宿毛式の次に編年される。本遺跡の調査に伴い新たに型式名が設定されたもので、以前から僅かであるが西日本でも出土例が知られていたものの、特に型式設定にまでは至っていなかった。松ノ木式の特徴は口縁部の拡張、頸部無文帯の発達(頸部文様帯の衰退)、前段階からの伝統である磨消繩文にある。口縁部は拡張・肥厚と共に加飾の増大を特徴として上げることができる。宿毛式には殆ど口縁部に突起を持たないものの、松ノ木式では大振りの突起を有し、突起にもキザミ等の加飾を施す。宿毛式ではバケツ状の器形だったものが、松ノ木式の段階に至り、頸部がぐびれることにより、口縁、頸部、脣部の文様帯が分帶する傾向にある。文様帯の分帶と共に、頸部は無文化が進展する。中には橋状把手を施すもの、または垂下沈線、梯子状文様を施すものとが新たに出現する。しかし、これらは宿毛式の頸部文様モチーフの一部が残存したものと考えられるものである。

松ノ木式はバラエティーに富んでおり、分類化を進める上で分類基準となるものが、多岐に亘り、煩雑となる。口縁の形態一つでも肥厚の度合い・キザミの有無・繩文施文の有無・沈線の本数等の相違、頸部については文様帯の有無・橋状把手の有無等、脣部文様については磨消繩文・沈線文・逆「L」字状文・「入組文」・「重弧文」等々の複雑な組み合せとなって、松ノ木式の「頸つき」を形成している。しかし、これらはほぼ同時期の所産と考えられ、特に時期的に前後関係にあるものではなく、一時期に多様な属性・モチーフを前段階から引き継ぎ、発展させた結果と考えられる。一見、統一感・同一性は薄いように見えるものの、しかしながら、それらは松ノ木式の型式規範内での多様性と捉えることが可能である。

ここでは極力煩雑とならないよう属性等を抽出し、分類化を行った。しかしながら、他の型式と同様に「類」だけでは分類が逆に大まかすぎて松ノ木式の多様性に対応しきれない恐れがあるため、「類」の後に更にアルファベットの小文字により小分類を設けた。

K IV群1類

1類は口縁部を拡張し、波状口縁の波頂部に突起を有するものである。拡張した口縁部は主に内面施文となり、沈線を1条、または2条巡らせた外側に斜行の短沈線キザミを連続的に施し、また繩文も施すものが多い。頸部は幅広となり頸部無文帯を形成するものが多い。脣部文様は磨消繩文、沈線文の2種類が認められる。今回調査の松ノ木式の中で主体を占める類である。

K IV群1類a

3079から3089は瘤状突起上に関東の堀之内1式に見られるような「8」字状の円形刺突を施す特徴的なものである。口縁部は大きく拡張し、沈線を巡らせ、その外側に斜行の短沈線キザミを連続的に施し、また繩文を施すものである。

3079から3083は口縁に沈線を1条だけ巡らせたもので、3079から3081の3点は極めて大形のもので口径が50cm前後を測るものである。3079は9単位の波状口縁で、波頂部に瘤状突起を付す。3080は6単位のものである。3081は明確な瘤状突起とならず「8」字状円形刺突を施す。沈線文である。3083は口縁部沈線が2条のもの、3084は短沈線キザミ及び繩文も持たないもの、3085は沈線のみのもの、3086は円形刺突が3連で沈線2条に繩文を施したもので短沈線キザミは持たない。3087、3088は「8」字状円形刺突が横になったもので、繩文も共に施さないものである。

頸部文様については基本的に持たないものの、3082のように1点だけが垂下沈線間に繩文を施したものである。

胴部文様は磨消繩文と沈線文である。磨消繩文は3089のように入組文となり、横「J」字文の崩れたモチーフ間に逆「L」字状文を充填する。これらの文様構成は宿毛式の系譜上にあるものであり、また平城I式とも共通する文様構成である。また「8」字状円形刺突は平城貝塚出土のものにも認められ、瘤状突起も平城I式と極めて近い関係にあるものと考えられる。

K IV群1類b

3090から3095は瘤状突起上に「8」字状円形刺突を持たないものである。口縁は肥厚させ波状口縁となり波頂部に瘤状突起を設ける。肥厚した口縁には沈線を1条巡らせ、その外側に斜行の短沈線キザミを連続的に施す。頸部はくびれ無文帯となる。

3090は6単位の小振りの瘤状突起で、突起上に円形刺突を1つ施す。頸部はくびれ無文帯となり、頸部と胴部の境に沈線を一条巡らせる。胴部は斜めの横円区画文を連続的に配置し、文様区画外に方向を違えた繩文を施す。胴部下半はすぼまり、文様を施さない。3091の胴部文様は逆「L」字状の磨消繩文か。3092の突起は高いもので、胴部文様は貝殻擬繩文である。3095はやや耳状の突起を呈するものである。

K IV群1類c

3096から3100は口縁部に橋状把手状の突起、または円環状の突起となるものである。

3096は橋状把手状の突起を口縁部に付し、頸部はくびれ、梯子状の文様を持つ。胴部は入組文で、区画外に貝殻擬繩文を施す。3097は大振りの橋状の把手を口縁部に付す。頸部は垂下沈線内に繩文を施す。3098は入山形の口縁部で波頂部に円孔を施す。頸部は緩やかにくびれ無文帯となる。胴部は余り張らず入組文である。文様区画外に繩文を施す。3099も入山形口縁で、粘土帶接合部により円孔を作出する。口縁文様帯は外面施文となる。頸部は短くくびれ無文帯となり、胴部は磨消繩文か。3100も入山形口縁の突起となり、横位に円孔が開く。頸部は無文帯で、頸部と胴部の境に沈線を1条巡らせる。胴部は沈線による重弧文で重弧文間を梯子状文様で充填する。

K IV群1類d

3101から3110は口縁部を肥厚させた口縁部破片である。部分片のため突起を有するかどうかは不明である。肥厚させた口縁部に沈線1条を巡らせ、外側に斜行の短沈線キザミを連続的に施すものである。

3101から3103は磨消繩文のもので、3101は大きく延びた頸部に垂下沈線を施す。3102の胴部文様は長横円区画文間に逆「L」字状文の小振りの変形したもの充填する。文様区画外に繩文を施す。3104から3107は胴部に沈線による区画文を有するものである。3108から3110は胴部文様の不明なものである。

のである。口縁を大きく拡張し、沈線1条と斜行の短沈線キザミを連続的に施したものである。3110は頸部が大きく延び、無文深鉢の可能性がある。

K IV群2類

K IV群2類は波状口縁になるもの、K IV群1類のように波頂部に明確な瘤状突起を有しない類である。また口縁の拡張もやや弱いものである。

3111は山形口縁で波頂部がやや瘤状突起となり、突起上に円形刺突を1個施す。口縁には1条沈線を巡らせるものの、短沈線キザミは施さない。頸部は無文帯でややすほまる器形である。胴部文様は重弧文で重弧文の間を複数の逆「L」字状文または「鉤」状文で充填する。3112は緩やかな波状口縁で波頂部に円形刺突を1個施す。口縁は僅かに肥厚させ、沈線を1条巡らせ、短沈線キザミを連続的に施す。頸部は波頂部の下に垂下沈線を施し、更に纏文も施す。3113は磨消繩文で、波状口縁の波頂部は小突起状となり上端に浅い円形刺突を施す。口縁部文様は外面施文となり、口縁下には宿毛式に見られるような沈線1条の痕跡が認められる。頸部と胴部の境に沈線を1条巡らせ、胴部は磨消繩文となる。3114は緩やかな波状口縁で波頂部に円形刺突を1個施す。頸部は無文帯となり、胴部は逆「L」字状文または捺円区画文となる。3115、3116は緩やかな波状口縁で波頂部に深い円形刺突を施した周囲に舟車状のキザミを附加するものである。こうした文様は前段階の宿毛式の3021、3022に認められる。3115の胴部文様は逆「L」字状文または捺円区画文となる。3116は頸部に垂下沈線を有する。3117は小さな山形口縁を呈し、波頂部に間隔の開いた「8」字状円形刺突を施す。口縁は僅かに肥厚させ、外面施文となる。口縁には沈線を1条巡らせるものの、短沈線キザミにより押し潰され、痕跡状になる。頸部は垂下沈線を施し、頸部と胴部の境には沈線を1条巡らせる。3118は口縁を余り肥厚せず、口縁上面に橋状把手状の突起を付すものの破損して、不明である。やや形態的には違うものの本類に含めた。胴部は磨消繩文である。

K IV群3類

入山形の大きく波状口縁となるもので、口縁部は余り肥厚せず、内面施文となる類である。

K IV群3類a

3119は入山形口縁で頸部が発達しないもので、口縁は内面施文で、波頂部内面には大きく深い円文を施す。沈線を1条巡らせ斜行の短沈線キザミを連続的に施す。胴部は磨消繩文で「O」状文様となり、条痕が残る。

K IV群3類b

K IV群3類bは頸部の発達した一群である。3120は入山形口縁で波頂部には浅い円形刺突を施す。口縁は内面施文となり、沈線2条を巡らせ、貝殻擬繩文を施す。頸部は無文帯が大きく発達し、外傾する。胴部の境には沈線1条を巡らせ、胴部文様は磨消繩文で逆「L」字状文になるものと考えられ、原体は貝殻擬繩文である。3121は口縁部の大部分が破損しているものの、入山形口縁になるものと考えられる。口縁はやや上面施文に近いもので、沈線1条を巡らせる。頸部は無文帯となり、外反し、胴部との境に沈線1条を巡らせる。胴部文様は磨消繩文で、逆「L」字状文または「O」字状文なるものと考えられ、文様区画外に繩文を施す。3122も同様のもので、器形はバケツ状になる。

K IV群4類

口縁は繩文施文で斜行の短沈線キザミを施さず、胴部文様は渦巻き文または同心円文・重弧文とな

る一群である。

3123は耳状突起と縄文を施した突起の違った2つの突起を有するものである。口縁は肥厚し上面施文である。沈線1条を巡らせ、縄文を施す。頸部が強く括れ無文帶となる。頸部と胴部の境に沈線2条を巡らせる。胴部上半は肩部のように張る。胴部文様は渦巻き文を5單位展開させる。縄文を施す所もある。胴部下半はすぼまる。3124は口縁を肥厚させ、上面施文となり、沈線は溝状の幅の広いもので、外側に縄文を施す。頸部は無文帶となり、頸部と頸部の境には沈線を1条巡らせる。胴部文様は同心円文を数単位で配する。3125は口縁の沈線は2条である。頸部は無文帶で胴部との境に沈線1条を巡らせる。胴部文様は重弧文である。

3126、3127はこの類に含まれる胴部破片と考えられる。3126は肩部破片で橋状把手が付く可能性がある。胴部文様は重弧文となっている。3127は同心円文または重弧文の胴部破片である。

K IV群5類

口縁を拡張させ上面施文となり、幅の広い溝状の沈線を巡らせる。波状口縁となり波状部口縁外面に円孔等の文様を有する一群である。

3128は主文様部分の内面には「8」字状刺突の瘤状突起を有し、外面上には浅い凹み状の円文を有する。頸部は無文帶となり、短く外傾気味に立ち上がる。胴部との境に沈線を1条巡らせ、胴部文様は沈線文で円文を主文様として、円文間を変形逆「L」字状文で充填する。3129は波状部分にブリッジ状の突起を付し、口縁内には「C」字状の貼付文となり、端部に円形刺突を施す。頸部は緩やかに外反し、無文帶となる。胴部は磨消縄文帯となる。3130は口縁部にブリッジ状の突起を有するものの、破損したものである。頸部は無文帶となり、胴部との境に沈線を1条巡らせる。胴部文様は沈線文で、逆「L」字状文となる。

K IV群5類の口縁部の特徴は関東編年の称名寺Ⅱ式終末から掘之内1式初頭に見られるものであり、関東編年との編年交差の基準となるものと考えられ、松ノ木式の編年的位置付けの指標となる。

K IV群6類

口縁部をやや肥厚させるもので、上面、内面施文の口縁には斜行の短沈線キザミを施さないもので、波頂部に突起を有するものである。

K IV群6類a

3131は円環状の突起を貼付したもので、突起上に円文を描く。口縁は肥厚させ、上面施文となり沈線を1条巡らせ、その外側に縄文を施し、突起部分にも施文する。頸部は無文帶で短く外反する。頸部と胴部の境には沈線が1条見られる。3132は細い橋状の突起を口縁部上面に貼付する。内面施文となり、突起部分の両脇に弧線文と巻き貝による円形刺突を施す。沈線を1条巡らせ外側に縄文を施文する。3133は口縁部に丸味を持って肥厚させ、突起を貼付する。突起は破損しており、耳状突起になる可能性がある。沈線を1条巡らせた後に口縁全体に縄文を施す。口縁外下は窓でなぞり沈線状となる。

K IV群6類b

3134は大振りの耳状の突起を口縁部に貼付したものである。耳状突起には円孔が2ヶ所開く。口縁は肥厚し上面施文となり、沈線を1条巡らせその外側に縄文を施文する。また耳状突起の端部にも縄文を施文する。頸部は緩やかに外傾し、垂下沈線内に縄文を施文する。

K IV群6類c

3135は波状部分に瘤状突起を有するもので、口縁はやや肥厚させ、沈線を1条巡らせ、部分的にキザミか円文を持つ可能性がある。頸部はやや強く外反する。胴部文様については不明で、無文土器の可能性もある。

K IV群7類

口縁を肥厚させ、内面または上面施文となり、沈線を2条巡らせるもので、短沈線キザミを施さないものである。

3136は口縁を肥厚させ、上面施文で沈線2条を弧状に巡らせ、外側に縄文を施文する。頸部は無文帶となるものと考えられ、頸部と胴部の境に僅かに沈線と縄文が残る。3137は外面に粘土帯を貼付して口縁部肥厚帯を作り出す。波状口縁となり、上面施文となる。沈線を2条巡らせ、その内1条は深く幅広のものである。沈線の外側には縄文を施す。また口縁外下には沈線が1条巡る。頸部は直線的に立ち上がり、バケツ状の器形になるものと思われる。時期的には宿毛式に含まれる可能性もある。3138は内面施文の口縁部で沈線を2条巡らせただけのものである。頸部は緩やかに外反する。内面は宿毛式で見られた段状になる。

K IV群8類

3139は大振りの突起を有するもので、突起部分に梯子状文様を施し、また貝殻擬縄文を付加する。口縁は直立気味で外面施文となり2本沈線を巡らせ、上端部に貝殻擬縄文を施す。頸部は強く屈曲し、無文帶となる。胴部文様は摩滅しており、細部は不明なもの、枠状区画文、逆「L」字状文、入組文になるものと考えられる。文様区画内に貝殻擬縄文を充填する。胴部は丸味を持ち、胴部下半は無文となる。

K IV群9類

外面施文で大振りの山形口縁となり、バケツ状の器形の類である。

K IV群9類a

3140と3141は同一個体と考えられる。山形の大きな突起を付し、突起の中央部分は円孔となる。半円状の沈線を施し、縄文を施文する。口縁は沈線を2条巡らせ、沈線端部を屈曲させる。縄文は上端部以外に施文する。頸部はくびれず、胴部と文様帯は連結し、曲線的な磨消縄文である。

K IV群9類b

3142は外面施文の口縁部に斜行の短沈線キザミを連續に施し、その上に大振りの突起を付す。突起部分には沈線による円文と半円文を描く。頸部はくびれずバケツ状の器形である。頸胴部には文様は持たず、条痕地となっている。また内面にも条痕整形のみである。

K IV群10類

口縁部は丸味を持ち、上面施文となり、大振りの突起を持たず、緩やかな波状口縁の類である。3143は口縁部を余り肥厚させず、波頂部に主文様として渦巻き文を施す。沈線を1条巡らせ、外側に縄文を施文する。頸部は強く外反し無文帶となり、ミガキを施す。胴部は磨消縄文になるものと考えられる。3144は口縁を肥厚させず、また波状口縁とはならず、主文様に2重の円文を施す。口縁は上面施文となり、沈線2条を巡らせ、縄文を施す。頸部は緩やかに外反し、無文帶になるものと考えられる。頸部と胴部の境には沈線1条が僅かに残存している。胴部文様については不明である。3145は口縁を内面にやや突出させるように肥厚させる。主文様については不明である。上面施文で、沈線1条を巡らせ、

斜行短沈線キザミを連続的に施し、縄文も施文する。頭部は無文帯となり、胴部文様は沈線2本が残存しているものの不明である。

K IV群11類

口縁が肥厚しないで口唇部文様帶のものである。口唇部には明確な主文様を持たず、キザミのみを施す一群である。

K IV群11類a

本類はK IV群11類bよりも口縁が僅かに肥厚するものを本類に含めた。3146は口唇部に斜行の短沈線キザミ、縄文を施す。頭部は無文帯となり胴部との境に沈線を1条巡らせる。胴部文様は沈線文で、枠状文または逆「L」字状文になるものと考えられる。3147はやや斜行するキザミを連続的に施す。頭部は無文になるものと考えられ、胴部との境に沈線を巡らせ、胴部文様は磨消縄文である。3148は小さな突起を有するもので、余り斜行しないキザミを施す。頭部は無文帯となり、胴部文様は沈線による「O」字状文か。3149は口唇に余り斜行しないキザミと縄文を施す。頭部は無文帯か。胴部文様は不明である。

K IV群11類b

3150は口唇にキザミを施し、頭部は無文帯となる。胴部は磨消縄文で枠状の区画文を3段に亘り展開する。区画外に縄文を施す。胴部下半は無文となる。器内が薄い。3151は口唇部にキザミを施し、頭部には垂下沈線を描き、胴部との境には沈線を1条巡らせる。胴部文様は貝殻擬縄文による磨消縄文である。縦位の文様構成で、逆「L」字状文、入組文の変形の廉手状文を展開する。3152は口唇にキザミを施し、胴部文様は磨消縄文か。

K IV群12類

3153は大きくなうねりのある波状口縁となる。口唇を肥厚させず、縄文、直交するキザミを連続的に施す。頭部はくびれず、肩部もなだらかで頭部と胴部の文様は連繋する。上半部の文様構成は横位の枠状の区画文で、下半は逆「L」字状文となる。区画外に縄文を施文する。

K IV群13類

口縁部に連続的に円形刺突を施すものを本類とした。口縁部は余り肥厚させず外面施文、上面施文共に認められる。

3154は口縁をやや肥厚させ、波状口縁となり、波頂部は円孔となる。更にその周りに円文を施すものと考えられる。沈線を1条巡らせたその下に小円形刺突を連続的に施し、更に縄文を施文する。頭部は無文帯になるものと考えられ、矧く外反する。3155は口縁部にブリッジ状と考えられる突起を貼付する。口縁部は余り肥厚せず、円形刺突を連続的に施し、更に貝殻擬縄文を施文する。頭部は波頭状文か。3156は余り肥厚しない上面施文の口縁部に沈線を2条巡らせ、更に円形刺突を連続的に施す。

円形刺突については前段階の宿毛式の帯縄文部分に円形刺突で加飾するものが見られ、その流れを引き継いだものと考えられる。

K IV群14類

口縁部は肥厚せず口唇部文様帶で、またキザミ等を加えないものを本類とし更に3細分を行った。

K IV群14類a

3157の口唇部は肥厚せず、何も施さないものである。頭部には3本の垂下沈線を施し、頭部と胴部

の境には3本または4本の沈線を施す。胴部はやや丸味を持ち、無節Iの縄文地である。3158は口唇部文様帶で、頸部は外傾気味で無文帶になるものと思われる。胴部は磨消貝殻擬縄文で、幅の広い縄文帶か区画文になるものと考えられる。

K IV群14類b

3159も口唇部文様帶で、口唇部に沈線を1条巡らせる。波状口縁となり、頸胴部はくびれず、バケツ状の器形となり、上半部分に沈線による山形文を4条施す。

K IV群14類c

3160は口唇部文様帶で、口唇部には何も施さないものである。口頸部上半に横位の沈線が2条認められる。

K IV群15類

3161から3163は同一個体で、口縁部は肥厚させず屈曲させ、沈線2条間に縄文を施文する。外傾した頸部には橋状把手を貼付し、把手には沈線を3条垂下させ、縄文を施す。胴部は細かい縄文地に多重の区画文か、変形の逆「L」字状文を施す。肩部にやや丸味を持ち、胴部下半はすぼまる。

K IV群16類

3164は小形の深鉢で口唇部は僅かに肥厚させ、口唇沈線2条を巡らせる。頸部は短く、波頭状文様である。縄文施文については摩耗のため不明である。

K IV群17類

口縁を僅かに肥厚させ、頸部無文帶が発達しないものである。3165は口縁に沈線2条を巡らせ、更に縄文を施す。頸胴部は磨消縄文である。3166は口縁を僅かに肥厚させ、沈線を1条巡らせ、縄文を口縁外面にも施文する。頸胴部文様は木葉状の文様か。区画外に縄文を施す。

K IV群胴部破片

K IV群の松ノ木式の胴部破片は磨消縄文と、また同様の文様構成で沈線文のものとで大半が占められている。宿毛式からの系譜を引く枠状の区画文は少なく、縦位の逆「L」字状文、「鉤手」状文が多く占める。しかし松ノ木式の縱位文様モチーフはそれぞれの文様単位が連結することなく主文様間を従文様で充填し、文様単位が分離する傾向にある。これは文様モチーフが違っているものの、宿毛式の枠状区画文と共に通する文様構成である。また宿毛式には曲線的な文様モチーフを有する一群が存在し、特に浅鉢に見られる曲線的な入組文の文様モチーフの系譜上にあるものとして、松ノ木式の横位の入組文で「J」字文の変形したものがある一定量存在している。これらについても横位の変形「J」字文を主文様としてその間を従文様である枠状区画文または曲線的な文様で充填、連結させるものが存在している。

宿毛式と松ノ木式の胴部破片についての識別は、文様モチーフにも若干の相違点が認められること、また個々の文様の描き方、縄文原体の大きさ、器面調整の違い、沈線の処理の仕方の相違等から宿毛式と松ノ木式の「顔つき」は違っており、識別は容易ではないものの比定可能である。

松ノ木式は宿毛式に比べ、相対的にダイナミックな文様構成を取り、沈線、縄文原体にもその傾向を読み取ることができる。縄文帯が幅広になること、沈線を描く際の前描線の省略、沈線を一度のタッチで仕上げ後処理をせず、沈線からはみ出た粘土の除去を行わないこと、磨消縄文は充填縄文があ

る一定量出現すること、赤彩を施さないこと、縄文原体は大きなものとなり撚りも緩やかであること、器面調整は丁寧に仕上げず、また条痕を残すものが認められることなど、松ノ木式が宿毛式の系譜上に存在しているものの、土器作りに関する技法の変化を読み取ることが可能である。

先に口縁部形態を主として分類を行ったものの、胴部破片はどの分類に当てはまるか不明である。口縁部形態は豊富であるものの、その胴部については同様の文様構成を取るものが多く、胴部破片だけではどの分類に該当するかは比定困難であるため、胴部破片だけの分類基準を設けた。分類基準は磨消縄文と沈線文は分離せず、文様モチーフを基本とした。

胴部1類

3167から3170は入組文を有するもので、横位の変形「J」字状文である。「J」字状文を形成する部分で入組文となるもので、3169は沈線文、他のものは磨消縄文である。

胴部2類

3171から3193は縦位文様モチーフにした一群である。縦位の逆「L」字状文、「鉤手」状文、「蕨手」状文の胴部破片である。3171、3172は同一個体で「鉤手」状文、「蕨手」状文の組み合せの磨消縄文である。3175は多重の梢円区画文を数単位施すものである。3186から3190は胴部下半の破片である。

胴部3類

3194から3200は曲線的な文様モチーフのものである。3196は貝殻擬縄文である。

胴部4類

3201から3208は曲線的なモチーフのものである。胴部3類に較べ、縄文帯の幅の狭いものである。

胴部5類

3209から3212は枠状区画文である。3210は逆「L」字状文になる可能性もある。

胴部6類

3213、3214は縦位に区画するものまたは垂下沈線を施すものである。3213は貝殻擬縄文で縦位の垂下沈線により大きく区画文を設けるもので、3214は沈線を3本垂下させ、縄文地か、3213と同様に大きく区画文を設けるものである。

胴部7類

3215から3218は横位の縄文帯、沈線文のものである。胴部5類に含まれる可能性もある。3218は粗い条痕文を斜方向に施したものである。

胴部8類

3219から3223は器面全体に短沈線、斜格子を施したものである。3219から3221は縄文地に短沈線を施したもの、3222は更に長い短沈線のもの、3223は斜格子のものである。

胴部9類

3224、3225は細い多条の沈線、3226は細く浅い沈線による磨消縄文のものである。これらについて明確にKⅣ群に伴うかどうかは今のところ不明であるが、可能性が高いためKⅣ群胴部の分類に当てはめた。

深鉢K V群(第55~57図3227~3250)

K IV群松ノ木式に後続する一群と考えられるものである。松ノ木式に後続する型式としては、瀬戸内では彦崎K I式、津雲A式、なつめの木式(笠川1993、渡辺1994)、西南四国では平城II式、近畿では芥川(橋本1995)、仏並(岩崎1988)等が知られている。これらの型式は未だ編年的に研究者間で見解の一致を見ないものである。特に彦崎K I式と津雲A式の前後関係、またなつめの木式が津雲A式に並行関係にあるのか、また同様に平城II式と津雲A式等の関係が問題となろう。西日本の後期前半から中葉の編年交差の中枢となっている彦崎K I式と津雲A式の具体像が判然としていないところから、前段階の系譜上の流れは現段階での把握は困難な状況である。

また、この一群が直接的にK IV群に後続するかどうかの大きな問題も孕んでいる。宿毛式、松ノ木式は比較的系譜上進えるものの、K IV群松ノ木式からK V群への口縁部形態は直接繋がらないものが多く、松ノ木式では口縁部の拡張は行われるもの、内面施文か上面施文が多く、また短沈線キザミを連続的に施すものが多いところから、K V群の外面施文で主文様に円文を配する一群には系譜上繋がらない要素が多い。また松ノ木式では口縁部に捻れた突起を有するものが多く、K V群には突起を持つものは少なく、緩やかな波状口縁となるものが多い。こうしたところから、松ノ木式とK V群は系譜上の違いか、時期的に更に間隙があることが考えられる。

K V群1類

3227から3231は口縁部の主文様に円文、渦巻き文を有する類である。

3227は完形品である。2つの破片となって2m程離れた地点で出土し、接合して完形土器となっている。緩やかな2単位の波状口縁で外面施文で肥厚し、波頂部に深く抉った暗孔と円文を主文様とするもので、沈線2条を巡らせ、縄文を施文する。口唇部上端には縄文は施文しない。頸部はややくびれ無文帯となり、胴部はやや張り、棹状区画文を3段展開する。区画文内にR Lの縄文を充填する。棹状区画文は宿毛式から松ノ木式に見られる伝統的な文様モチーフである。胴部下半は無文となる。底部はやや高台状である。口径20.8cm、器高21.5cm、胴径24.4cm、底径8cmのやや小形品である。内面には焦げが付着する。

3228から3231も同様の円文を主文様とする口縁部破片である。3228は口縁部は肥厚せず、僅かに波状となり、文様帶の幅が広いもので、主文様に2重の円文と弧線文を施す。沈線2条を巡らせ、また口唇部上端以外に縄文を施す。器形はバケツ状で、頸部には文様を持たない。胴部文様は不明で、文様を持たない可能性もある。3229も緩やかな波状口縁でやや肥厚させ外施文となる。主文様に深く抉った暗孔と弧線文2条を施す。主文様の上端には円形刺突を1個施す。沈線を1条巡らせ下に縄文を施文する。頸部は直線的で垂下沈線を3条を施すが1条は中途で終わっており、2条の垂下沈線間に縄文を施す。3230は山形口縁で口縁をやや肥厚させ、外施文である。主文様に2重の円文を施す。沈線2条を巡らせ、口唇部上端以外に縄文を施す。頸部は無文帯である。3231は緩やかな波状口縁で外施文となるものである。主文様に渦巻き文と弧線文を施す。沈線を一条巡らせ、表面が落剥して判然としないものの、縄文は施さないものと考えられる。また頸部も破損しており、不明であるが無文帯の可能性がある。

K V群2類

3232から3236は波状口縁で主文様が円文とならない類である。口縁部は外施文で文様帶を拡張し

たものである。3232は緩やかな波状口縁で外面施文で、主文様が明確なモチーフを描かないものである。沈線2条を巡らせ、沈線間に無文で上下に縄文を施文する。頭部はくびれ無文帯となり、胴部は入組文の磨消縄文となる。3233と3234は同一個体の可能性が高く、山形口縁に主文様のスペード状の暗孔を有するものである。3233は主文様部分のスペード状文の上に円形刺突を施す。3234は2つの円形刺突を施したものである。共に口縁の文様施文域を拡幅し、沈線2条を巡らせる。沈線間に縄文を施さず、上下に施文する。頭部は無文帯か。3235は僅かに波状となり、暗孔だけを施したものである。3236は山形口縁で主文様部分に円文等を持たないもので波頂部上方から小円形刺突と内面に暗孔を持つ。外面には斜行の短沈線キザミと縄文を施す。頭部には4本の垂下沈線と部分的に縄文を施文する。

K V群3類

外面施文で山形口縁部の主文様に円孔、円文をモチーフとし、頭部が伸び無文帯となるか、橋状把手を付すもの、また縄文地に沈線で文様を描くものを基本とする。

3237は口縁部主文様を大きく拡幅し、円孔を設け、回りに更に加飾を施すものである。主文様以外は沈線を2条巡らせ、沈線間に縄文を施文する。沈線端部は屈曲させる。頭部は無文帯になるものと考えられ、頭胴部の境に沈線を巡らせ、胴部は磨消縄文か。器肉がやや薄くなる。3238は口縁部を段状に肥厚させ、山形口縁部の主文様は暗孔か円孔になるものと考えられる。主文様以外には沈線を1条巡らせ、その下に縄文を施文する。頭部は無文帯となり、胴部も文様を持たないものと考えられる。3239も波状口縁となり、崩れた渦巻き文を主文様とする。K V群2類3232の主文様にやや似る。口縁に沈線2条が巡り、その内左下の沈線は端部を屈曲させ、離れて円形刺突を施す。縄文は沈線間に施さず、上下に施文する。頭部は長く伸び無文帯を形成する。胴部は縄文地に沈線文か。器肉はやや薄く、内面には焦げが付着する。3240は特徴的な橋状把手を付したものである。口縁は山形口縁で、主文様に太い渦巻き文を施し、その下に捻れた橋状把手を付している。主文様の渦巻き文には縄文は施文しないものの、回りには施文する。口縁は段状に肥厚させ、沈線を1条巡らせる。左側沈線は端部を屈曲させる。縄文は沈線より下に施す。頭部は外反気味で沈線状の条痕を縱方向に全面に施す。頭胴部の境に沈線を1条巡らせ、肩部がやや張る。橋状把手部分の根元には暗孔の凹みを設け、胴部には縄文地に重弧文となる。3241は大きく突起上に突き出た口縁部で主文様部分は円孔となっている。その周りは凹み状の円文で円孔を囲む。口縁部はやや頸状に肥厚させ、從文様は右側部分が開放された枠状区画文となっている。開放された部分の沈線は端部が不明瞭な円形刺突で屈曲させる。縄文はやや落測しており明瞭ではないものの、枠状区画内に施されるものと思われる。頭部は無文帯で直線的に長く立ち上がり、無文帯を形成している。胴部上半は張り、縄文地である。

K V群4類

極めて大振りな口縁部文様帯を設けるものをこの類とした。3242は大きく口縁部文様帯を拡幅し、磨消縄文を施す。モチーフは2本沈線により描出される。從文様は枠状の区画文となる。頭部には口縁から一段下がった部位に橋状把手が貼付される。3243は大きな滑車状の突起が付され、外面部分に縄文が施される。口縁も大きく上面に拡幅され、突起部分から連続して縄文が施される。頭部は無文帯となり、胴部に僅かに縄文が観察できる。K V群4類について明確に類例と系譜を求めることができないものの、該期に含まれるものと考えられる。

K V群5類

3244から3250は主文様部分を欠損した口縁部破片である。特にKV群のどの類に該当するか不明なもの、口縁部の拡張、外面施文、頸部無文帯等の諸特徴を有することから、KV群の主要文様部分を欠損した口縁部と考えられることから、別に類を設けて一括した。

3244は小さな円文の残したもので、口縁部は顎状に拡張させ、外面に文様帯を設ける。從文様と考えられる円文の中心部は刺突を行い、周りに沈線で円文を描く。口縁部を巡る沈線は3条認められ、内2条は円文で止まるものの、下の1条は円文の下を通り抜け全周する。繩文は口唇部上端のみ磨り消す。頸部は無文帯になるものと思われ、やや外反気味である。頸脇部の境には沈線が僅かに残存している。3245もやや顎状に肥厚した口縁部である。沈線のみ2条巡らせる。頸部はやや直立気味である。3246は口縁部を肥厚させた外面施文の口縁部破片である。右側部分の沈線端がやや上方に上がることから主文様に近い部分と考えられる。繩文は沈線間に施す。頸部は無文帯か。3247は口縁部をやや肥厚させ、外面施文である。沈線を1条巡らせ、全面に繩文を施す。3248は口縁の文様帯幅を拡張し、沈線を2条巡らせる。3249は口縁部外面を段状に肥厚させ、文様帯を外面に設けるものである。沈線を2条横走させ、沈線端部を屈曲させる。貝殻擬繩文を沈線下に施し、また平坦な口唇部上端にも施す。頸部は無文帯になるものと考えられ、バケツ状の器形になるものと考えられる。3250は口縁部を段状に肥厚させ外面施文である。沈線を2条巡らせるものの、下の沈線は途切れる。繩文は下の方に施文される。

深鉢KV群の編年的位置付け

KV群の各類の周辺域との編年的位置付けを見てみたい。KV群は松ノ木式に後続するものと考えられるものの、先に述べたように直接的に繋がるものではないと考えられる。系譜上違ったものか、時期に間隙があることが予想される。

KV群1類の特徴は津雲A式、平城II式に見られた円文を主文様とするものであり、暗孔となるもの、渦巻き文となるものが存在する。また円文の両脇には弧線文を付加するものもあり、比較的津雲A式、平城II式に似た様相を呈している。また口縁部文様帶の類似点が認められると共に、逆に相違点も幾つかあげができる。

まず平城II式との相違点は、平城II式は口縁部は波状となるものが少なく、口唇部上端が面取りしたように平坦である。口縁全体に繩文を施すものが多く、またかつ口縁部内面文様帯を有するものが多い。口縁を巡る沈線端部は円形刺突で始まるか、屈曲させるものが多い。頸部文様帯は垂下沈線内に多重重弧文の変形したものが多く、逆「U」字状を付加するものが多い。そうしたものは本KV群1類には認められない様相である。津雲A式との相違点は、口縁部は平線に近く、外面施文で顎が突き出たように肥厚させるもの、肥厚させず文様帯幅を拡張するものとが認められる。主文様の円文の両脇に弧線文は2、3対付加したものが多く、從文様は棒状の区画文となり、繩文は全面であったり、区画内だけに施すものとやや多様である。頸部に多条沈線、条線を施すものが認められ、無文帯のものも認められる。胴部については不明な点が多い。

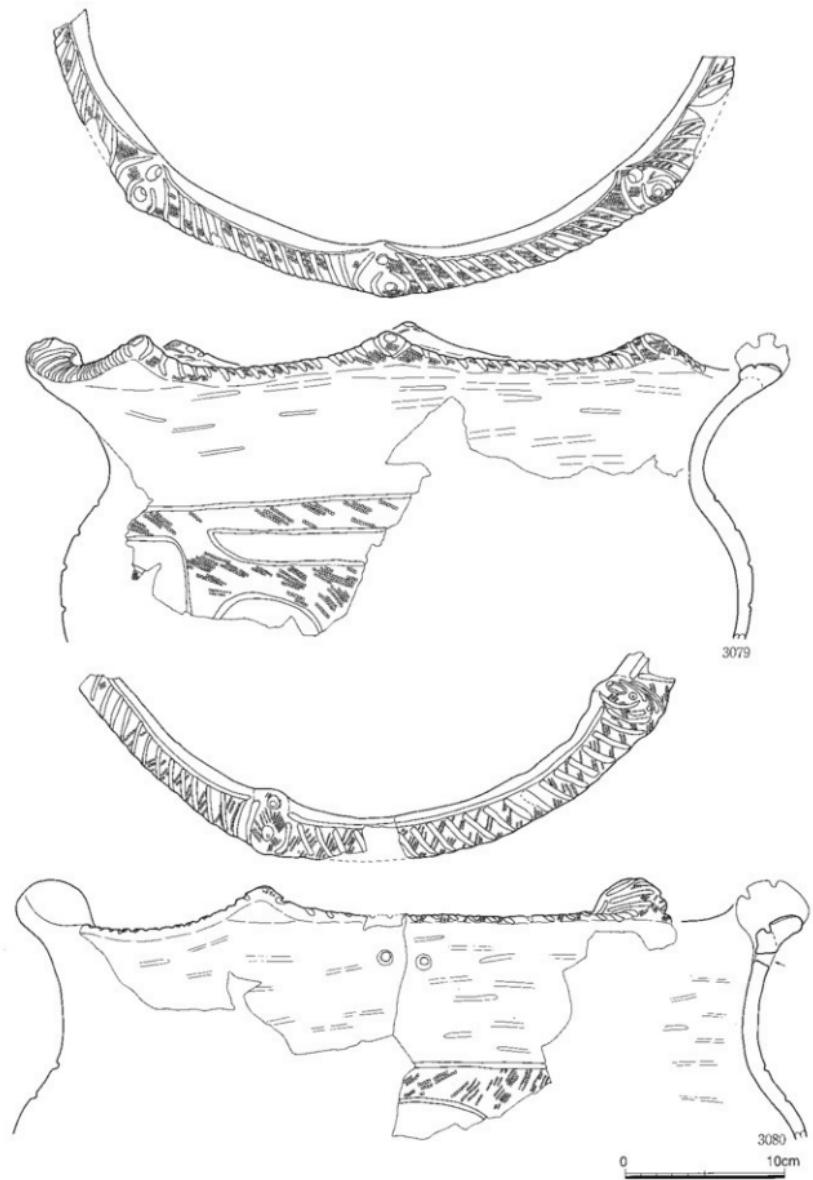
こうした相違点は地域差であるのか、時期的な差であるのか今のところ判然としないが、諸特徴からKV群1類がやや古い様相を残している可能性が高い。南四国中央部において今のところKV群1類に統くものが未検出であるため、系譜上どのように変遷するか具体像が把握できていないのが実情

である。しかしながら、津雲A式、平城II式に伴うと考えられる全縄文地の鉢が極めて少ないと、波状口縁の残存、頸部の多条沈線・条線が認められないことからして、KV群1類は津雲A式、平城II式に先行する可能性が高いものと思われる。3229、3230については、更に一段階古くなる可能性がある。

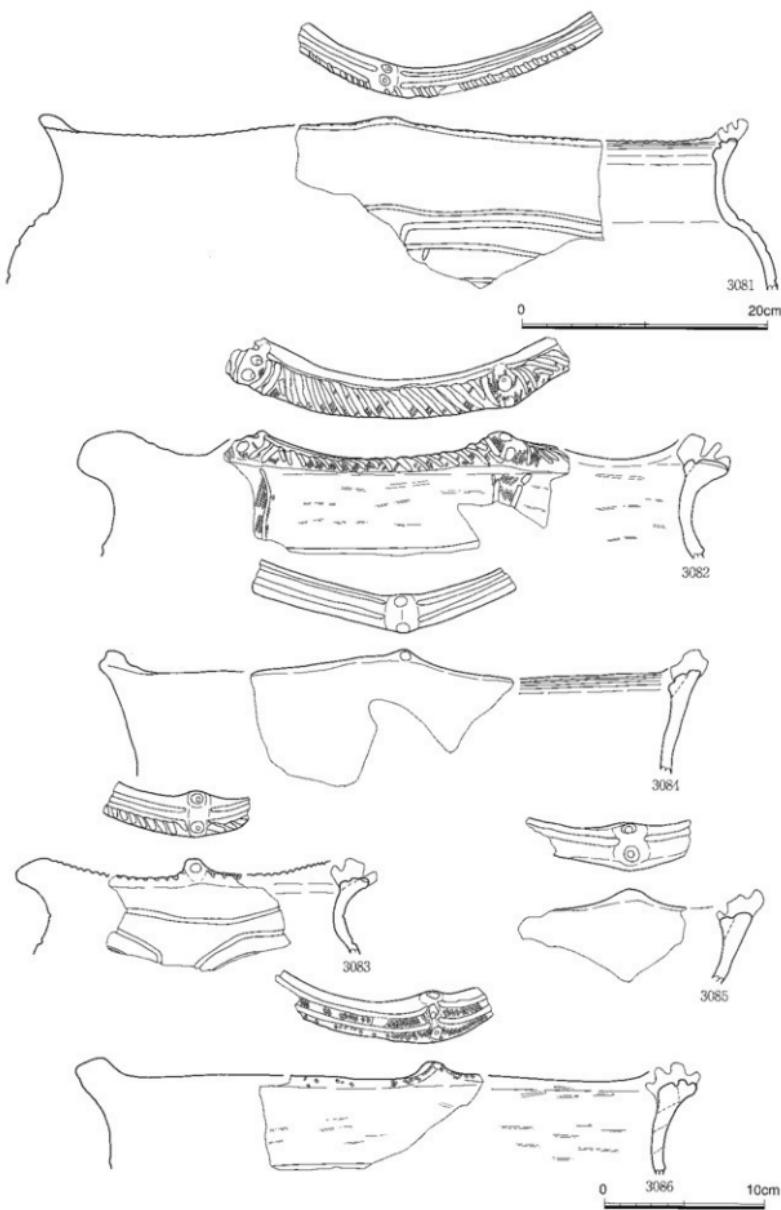
KV群2類は香川県観音寺市なつめの木貝塚のものにやや近似した内容のものである。3232の様に山形口縁に主文様として凹みを持つものが存在している。胴部文様については入組文であるものの、縄文地に入組文モチーフを施したもののが存在するなど若干の相違は認められるものの、ほぼ同時期の所産と考えられる。なつめの木式には内面施文が少なく、外面施文で口縁部に円形刺突を3連施したもの、KV群1類と同様の円文のものが認められている。

KV群3類は鳥取県栗谷遺跡に類例を求めることができる。瀬戸内編年の津雲A式、彦崎K I式以前の布施式に比較的似た様相を持つ上器群である。3240の捻れた橋状把手は埼玉県神明遺跡の堀之内1式相当のものに細部の相違は認められるものの類例を求めることができる。

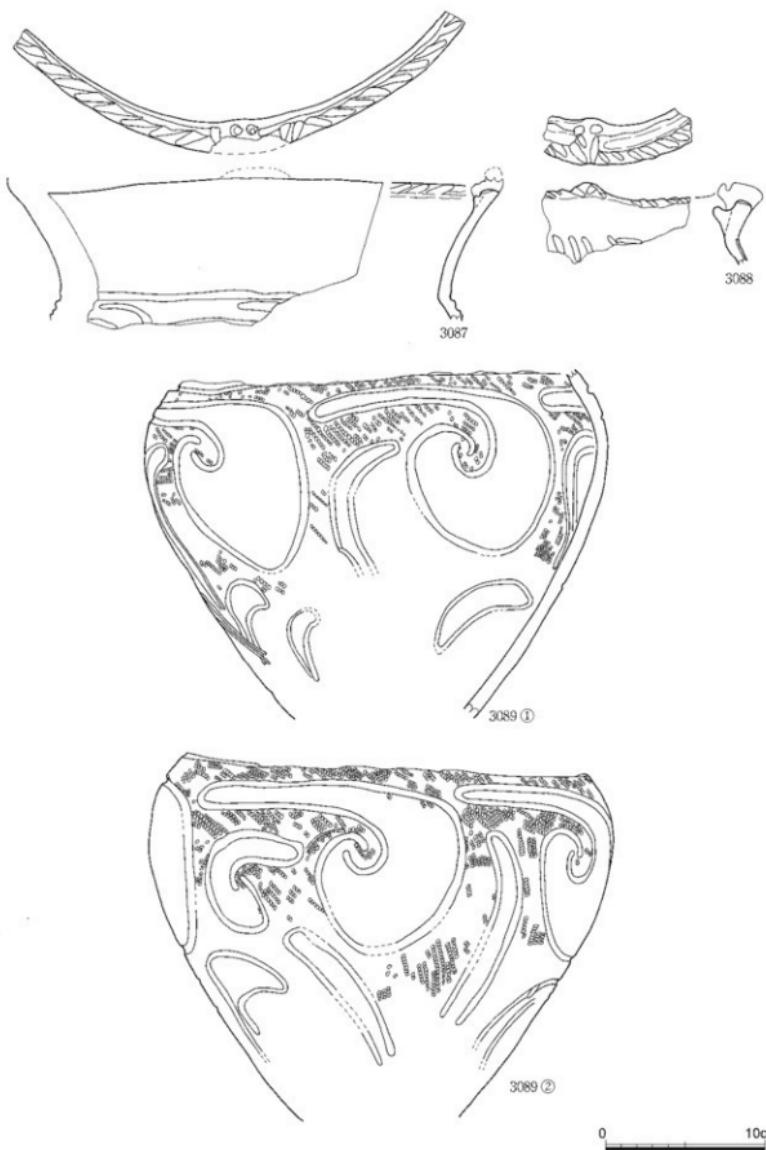
KV群は松ノ木式に後続するものと考えられるものの、先に述べたように松ノ木式の大部分は内面、上面施文でKV群の様に外面施文で主文様に円文等を持つものは比較的少ない。しかしながらそうしたKV群に繋がる文様系統は若干ではあるが存在している。例えばKV群1類cの3098、3099の円孔を有するもの、KV群9類3140、3141の円孔を有するもので口縁部の沈線端部を屈曲させるもの、KV群10類3143、3144の様に小振りの円文を持つもののが存在しており、松ノ木式では少數だった一群から他の影響を受けて、KV群が成立した可能性が考えられる。しかしながら、松ノ木式に影響を与えた他地域の津雲A式、彦崎K I式、平城II式の前段階の様相が中国、四国では判然としておらず、松ノ木式からKV群への変遷は今のところ不明と言わざるを得ない。



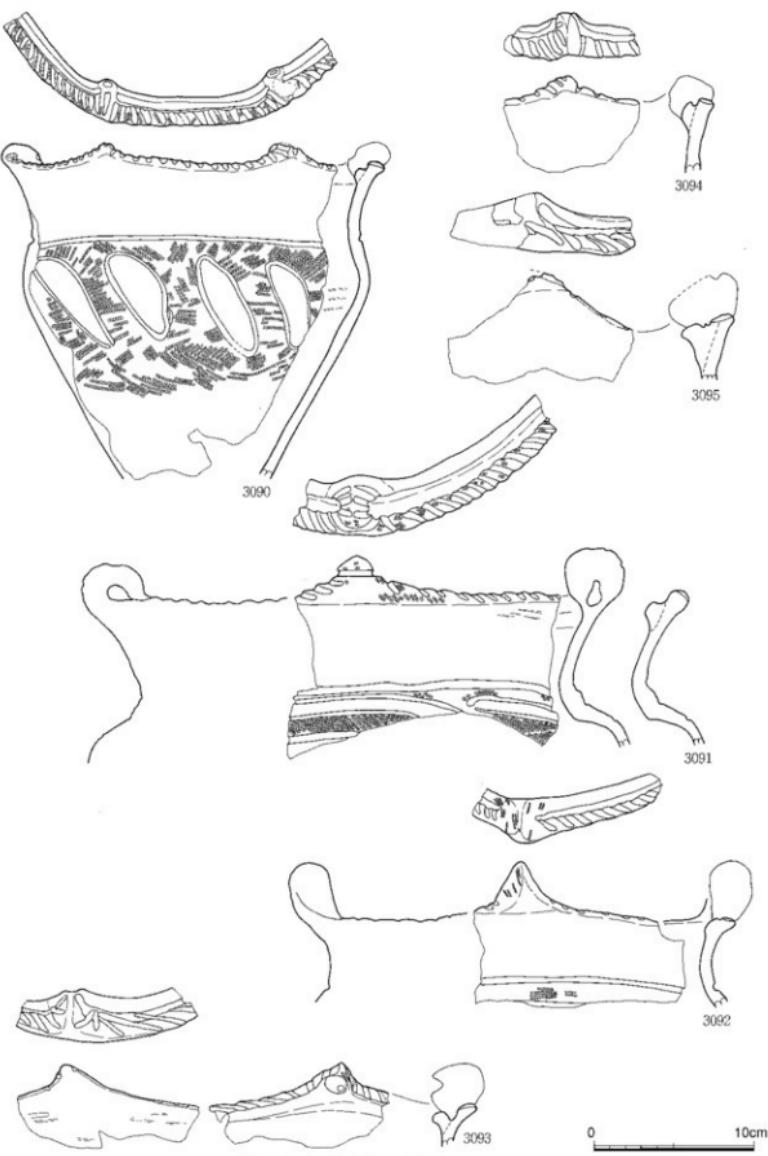
第37図 繩文後期土器深鉢(5) KIV群1類



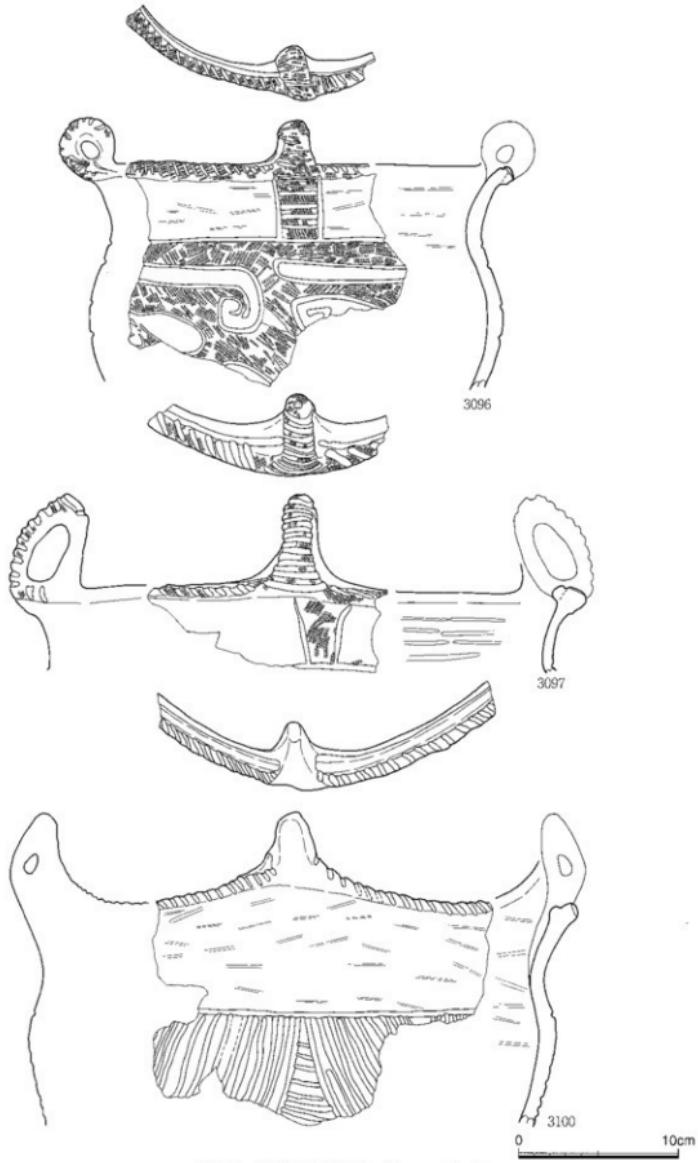
第36図 繪文後期土器深鉢(6) KIV群1類



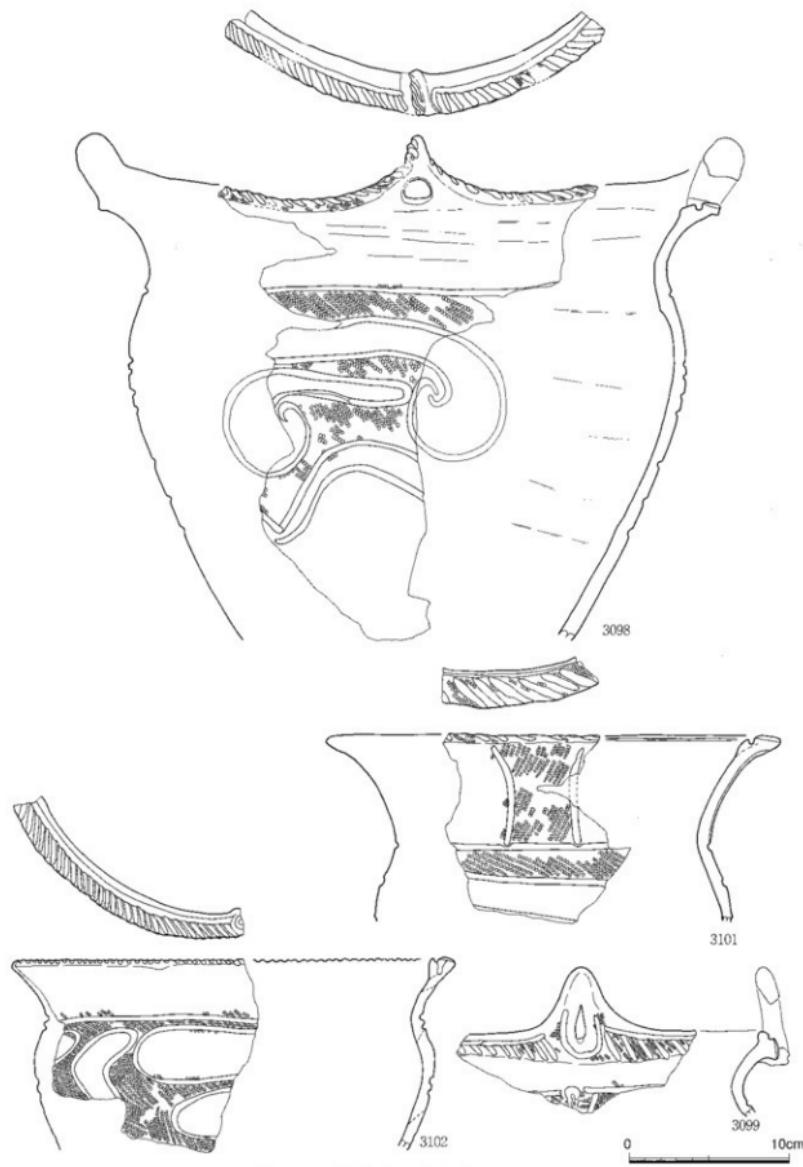
第39図 繩文後期土器深鉢(7) K.IV群1類



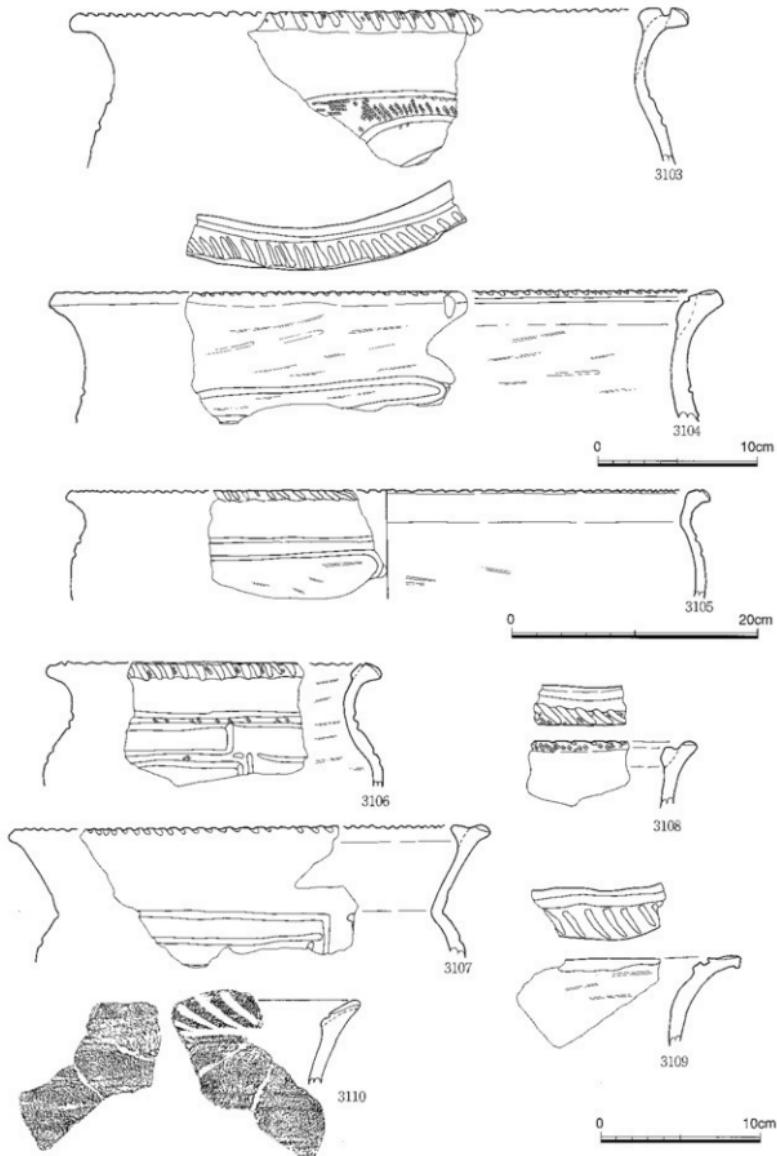
第40図 繩文後期土器深鉢(8) K IV群1類



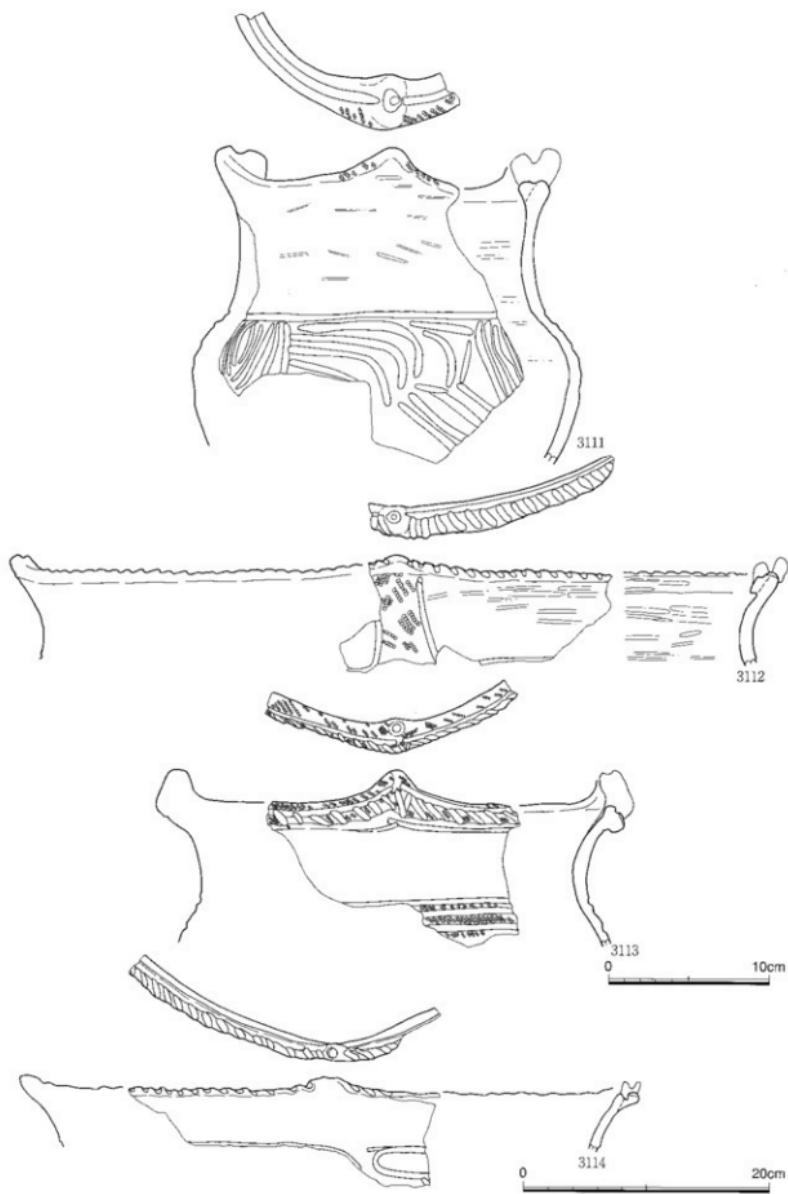
第41図 繩文後期土器深鉢(9) KIV群1類



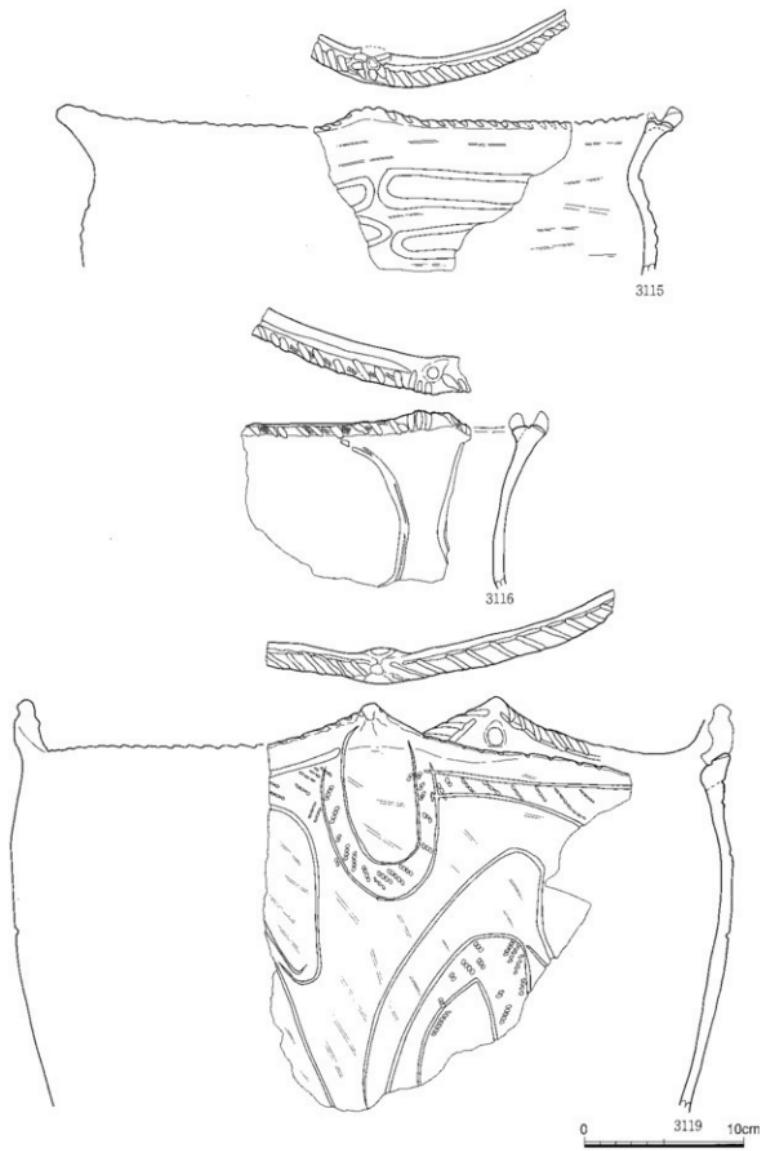
第42図 繩文後期土器深鉢(10) K.IV群1類



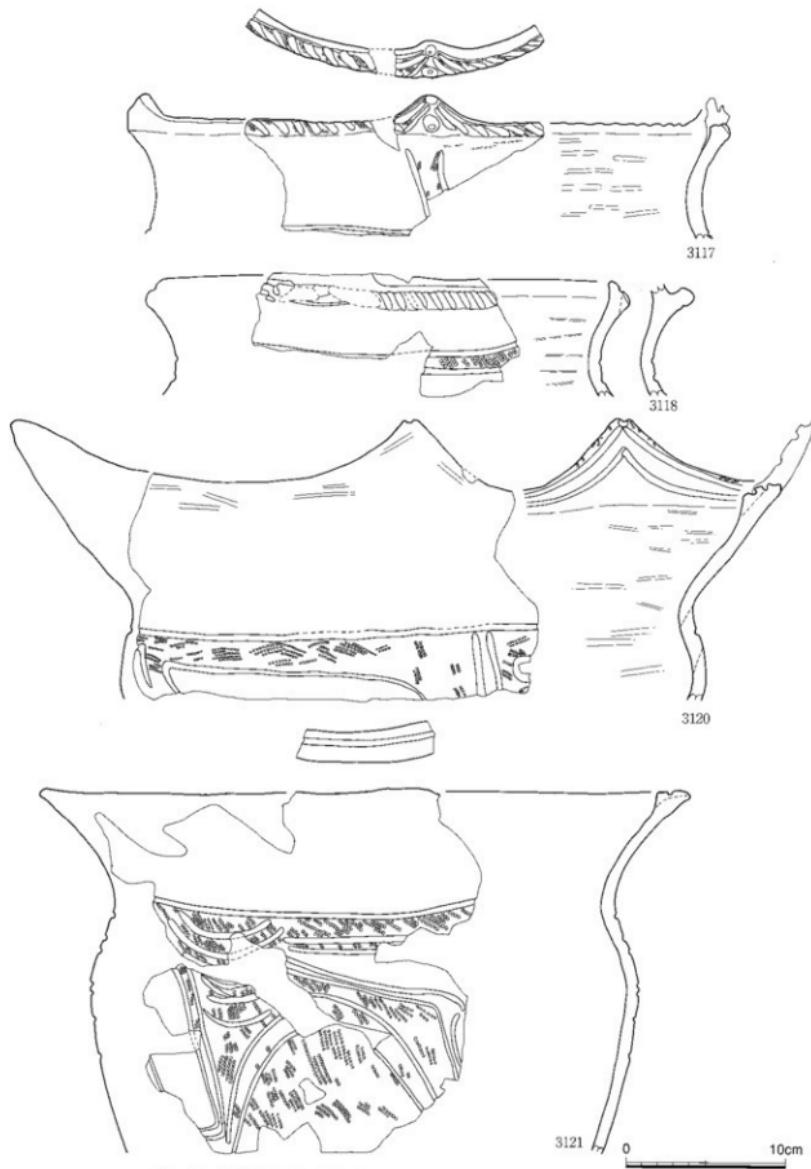
第43図 繩文後期土器深鉢(11) KIV群1類



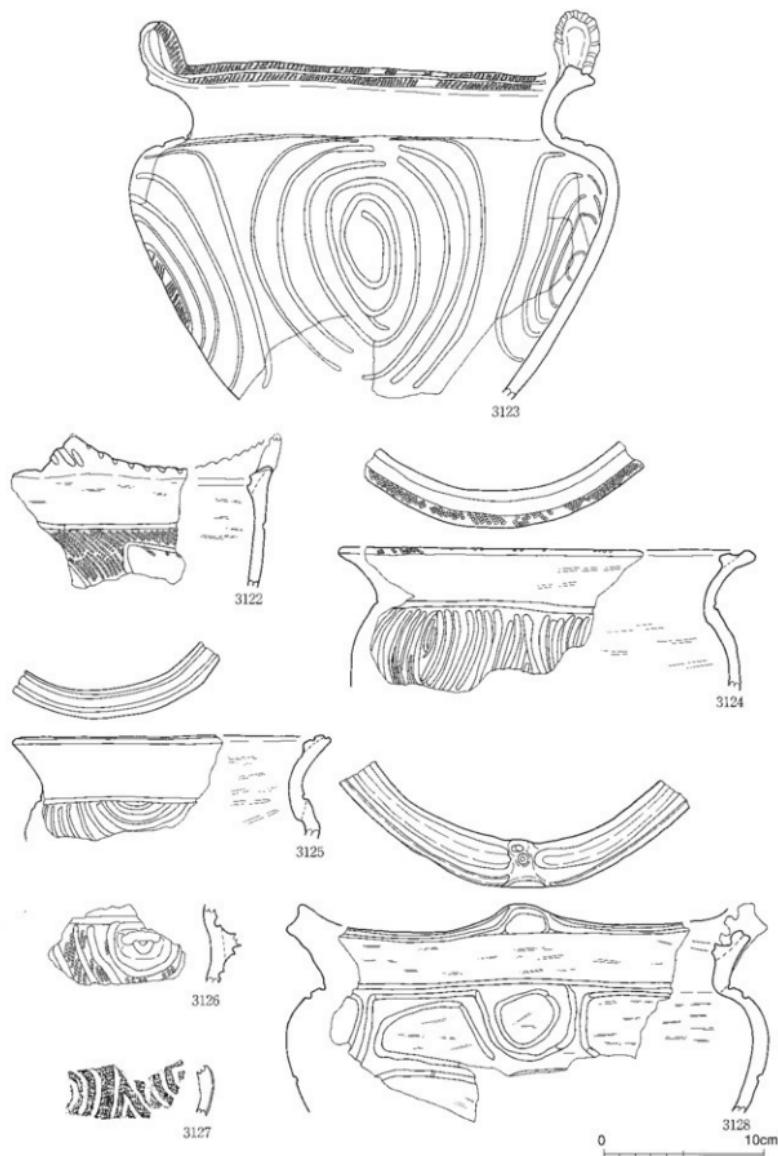
第44図 桶文後期土器深鉢 (12) KIV群2類



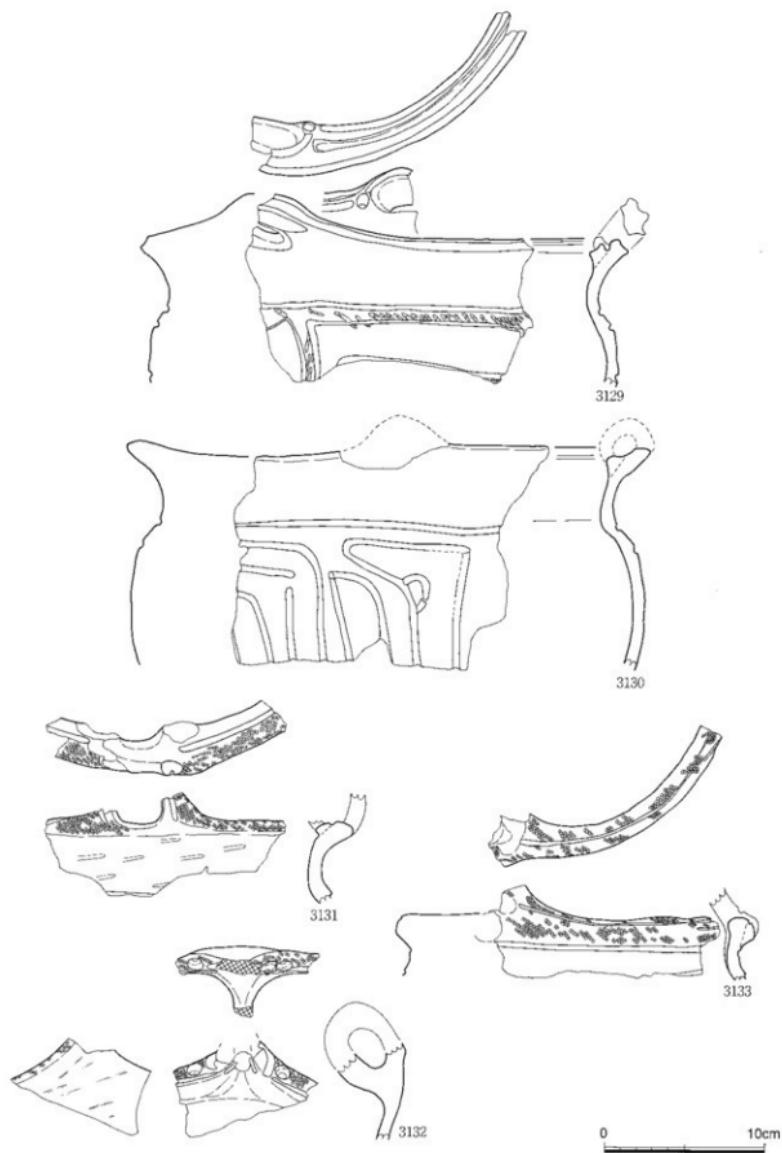
第45図 挽文後期土器深鉢 (13) KIV群2類3115・3116、KIV群3類3119



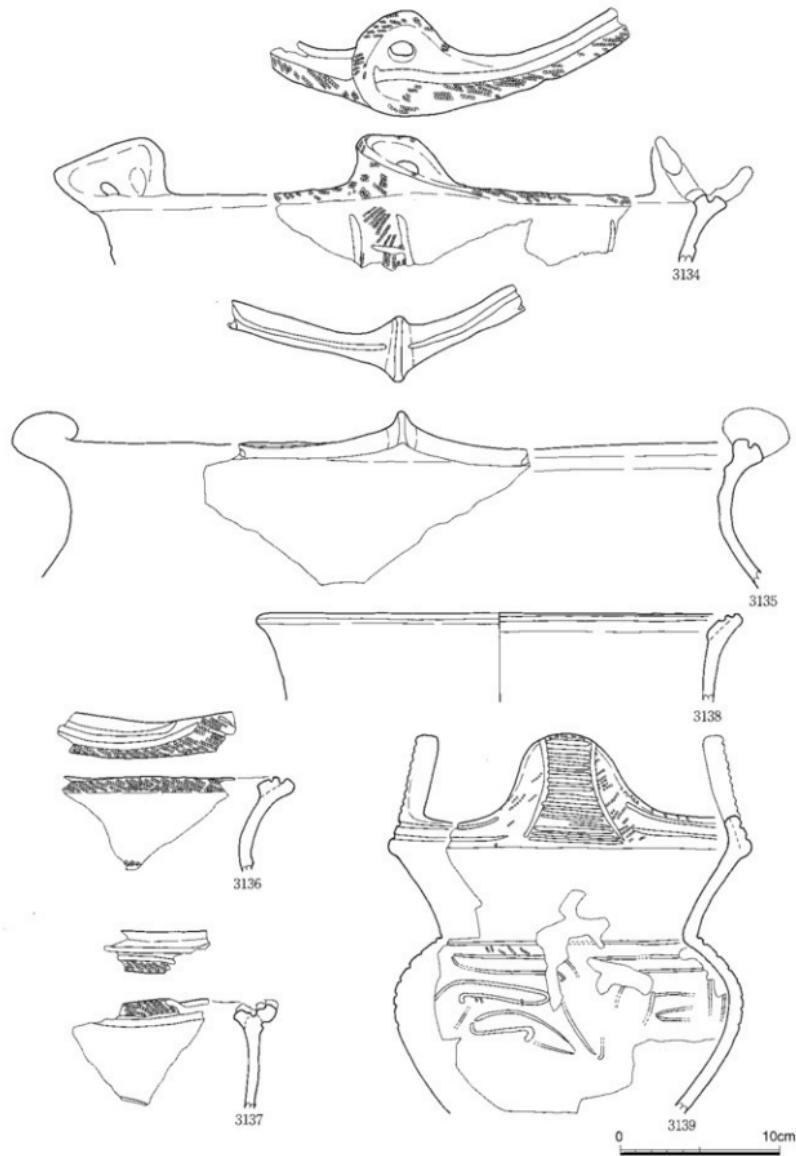
第46図 繩文後期土器深鉢(14) KIV群2類3117・3118、KIV群3類3120・3121



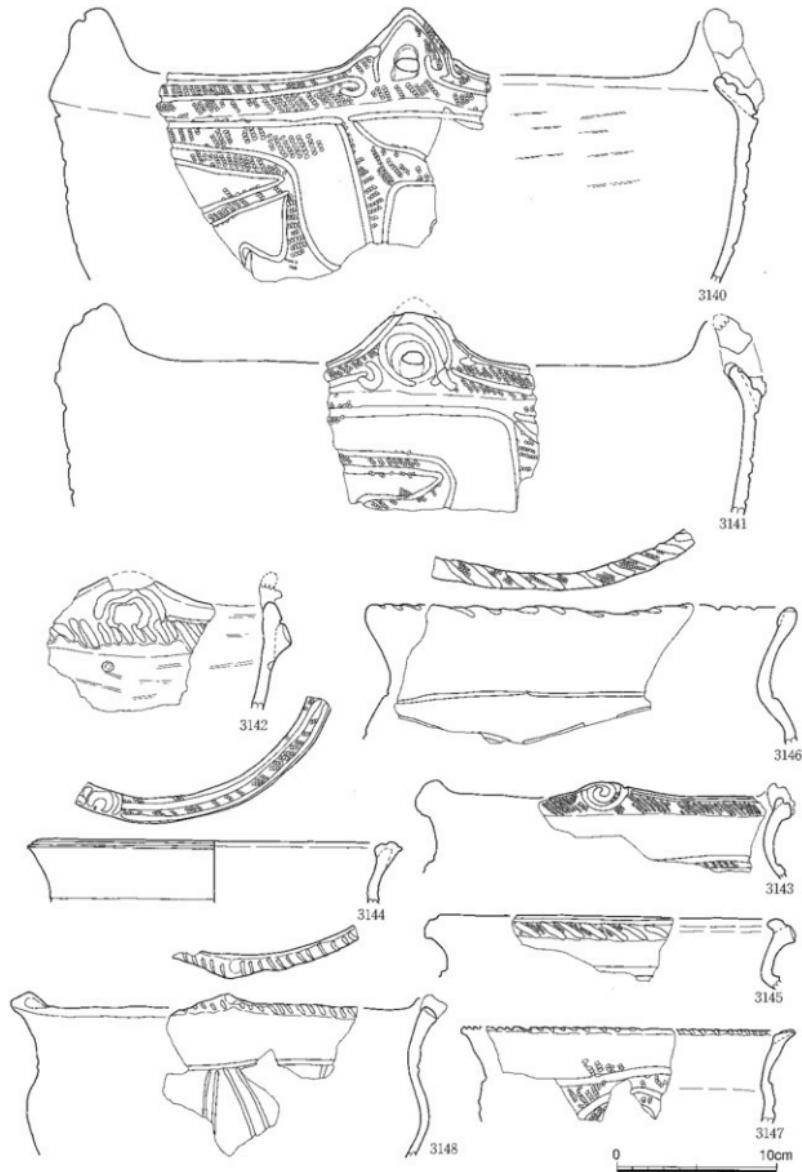
第47図 繩文後期土器深鉢(15) K IV群4類3123~3127、K IV群5類3128



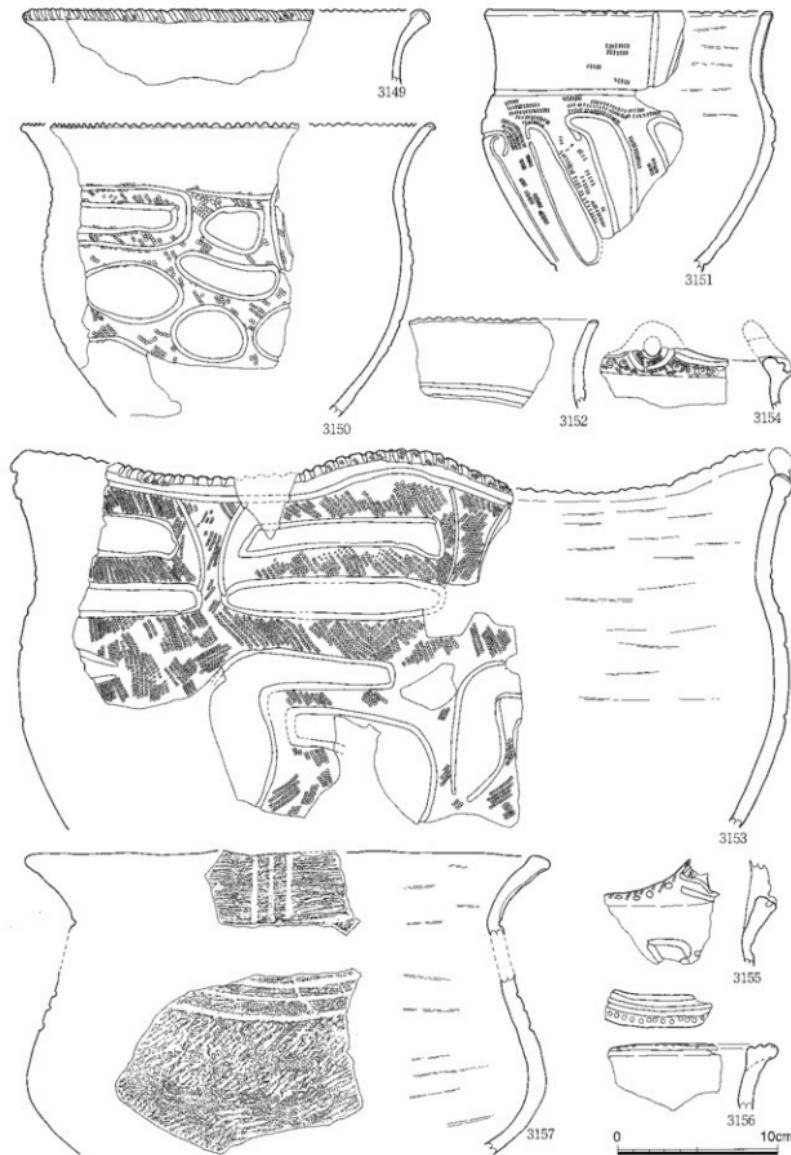
第48図 繪文後期土器深鉢(16) KIV群5類3129・3130、KIV群6類3131～3133



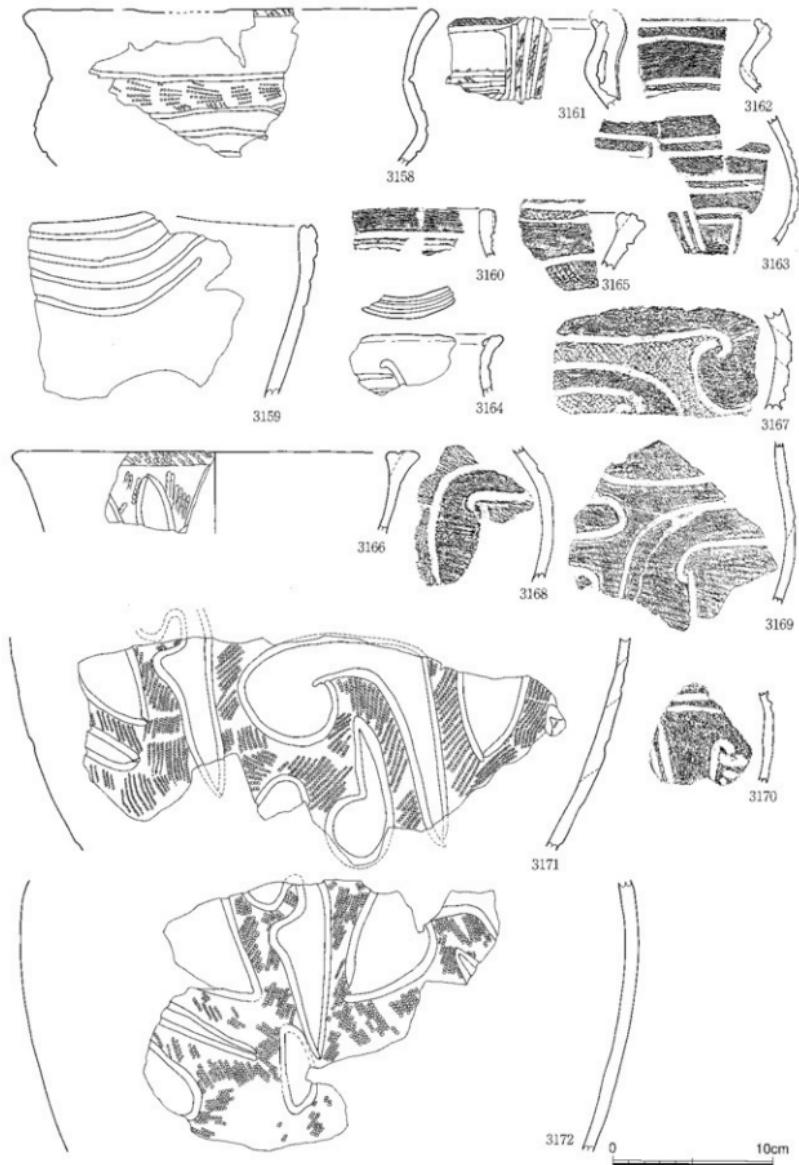
第49図 繩文後期土器深鉢(17) KIV群6類3134・3135、KIV群7類3136～3138、KIV群8類3139



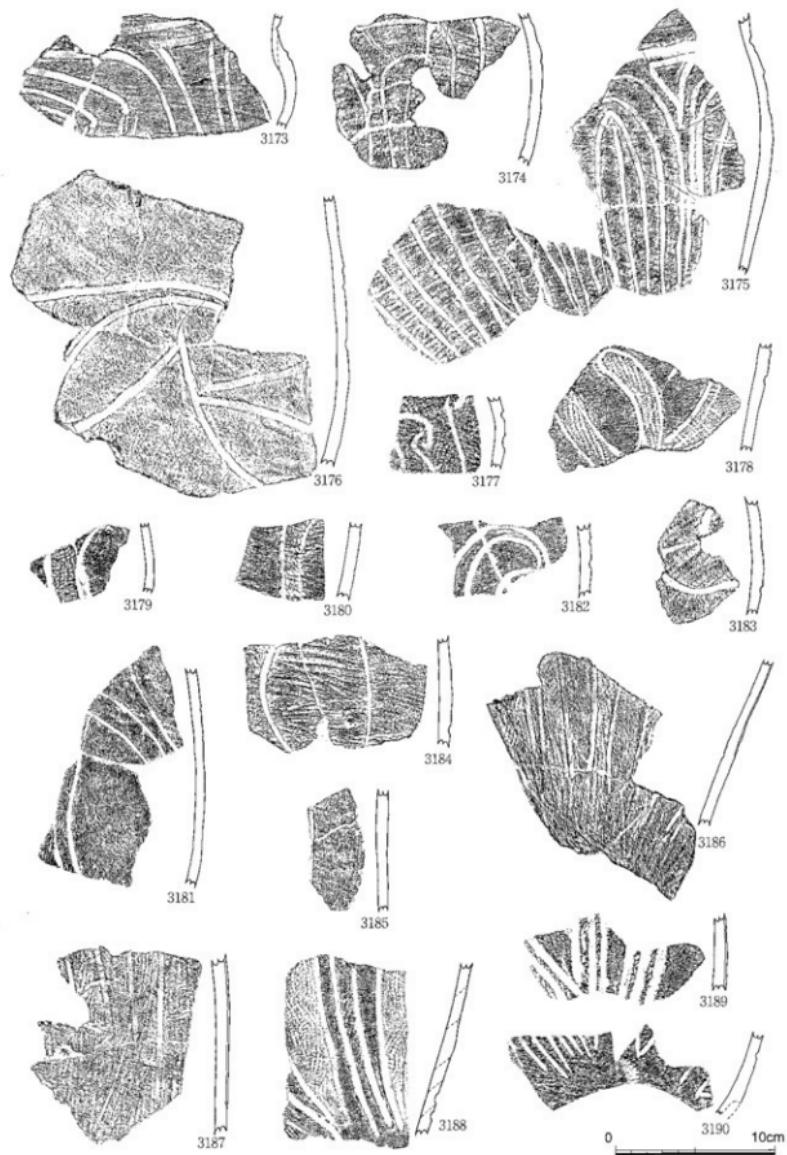
第50図 繩文後期土器深鉢 (18) KIV群9類3140~3142、KIV群10類3143~3145、KIV群11類3146~3148



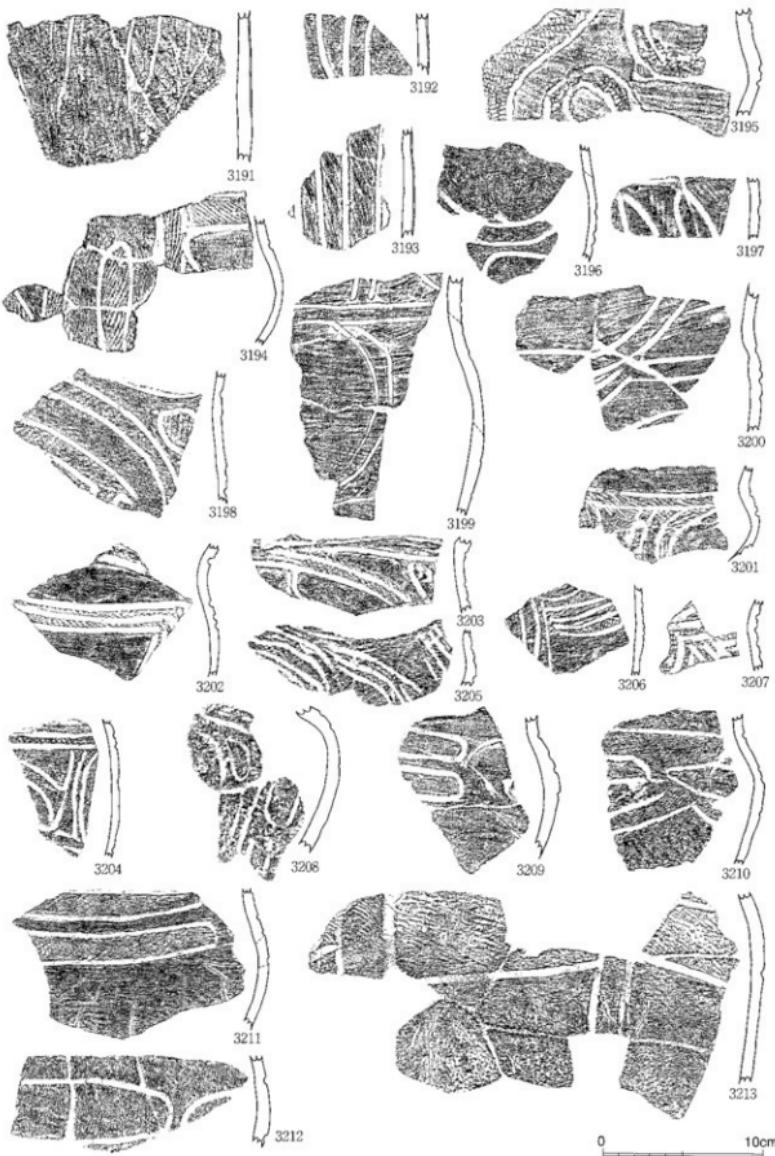
第51図 楠文後期土器深鉢 (19) KIV群11類3149~3152、KIV群12類3153、KIV群13類3154~3156、KIV群14類3157



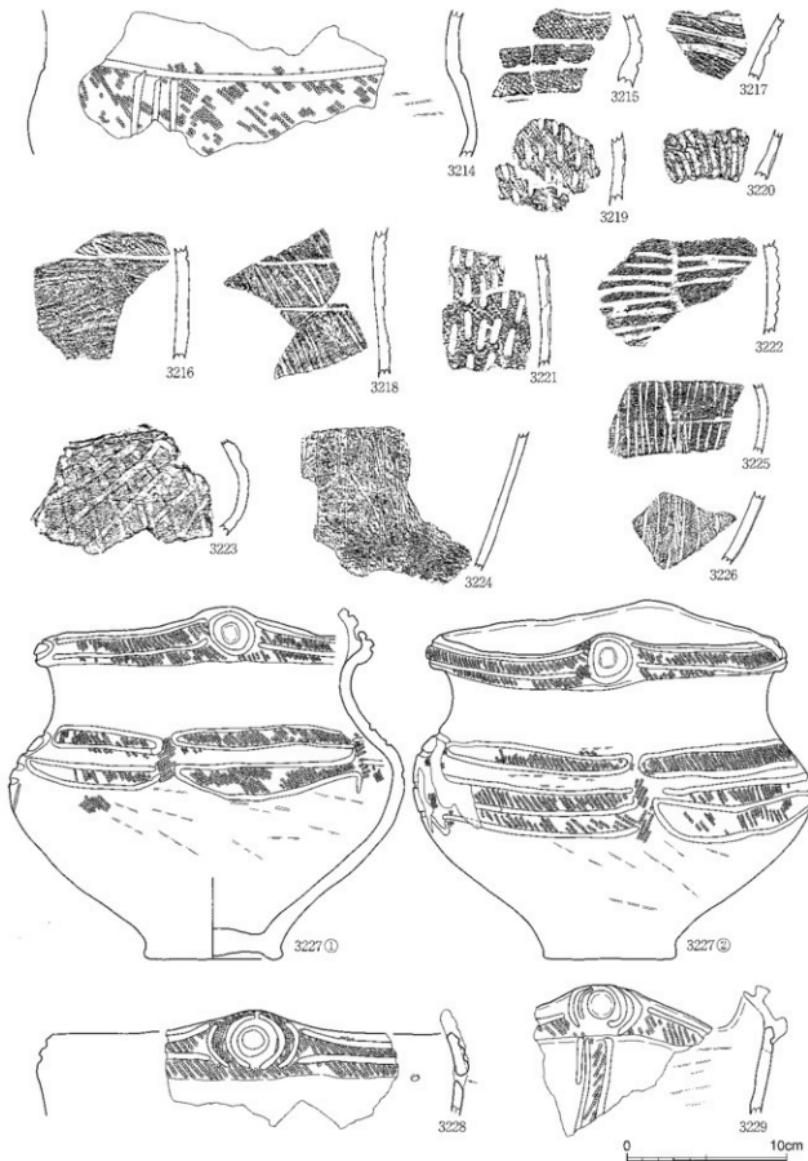
第52図 繩文後期土器深鉢(20) KIV群14類3158~3160、KIV群15類3161~3163、KIV群16類3164、KIV群腹部3165~3172



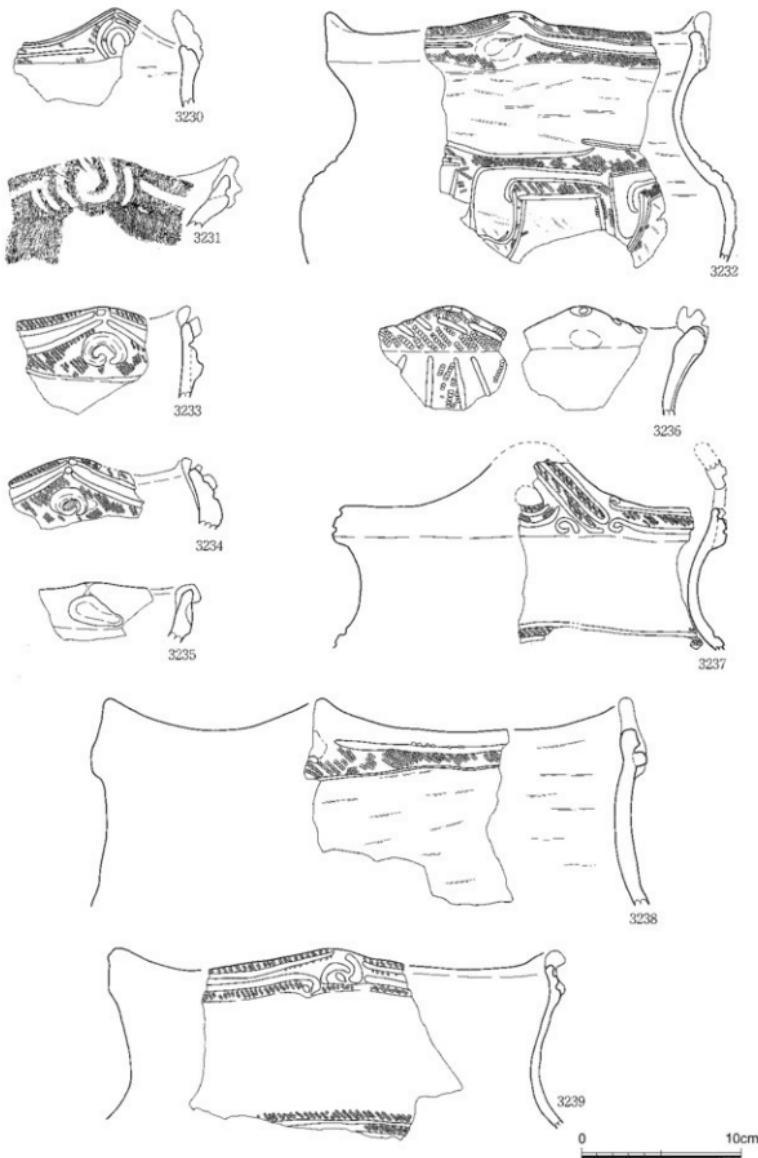
第53図 繩文後期土器深鉢(21) KIV群南部



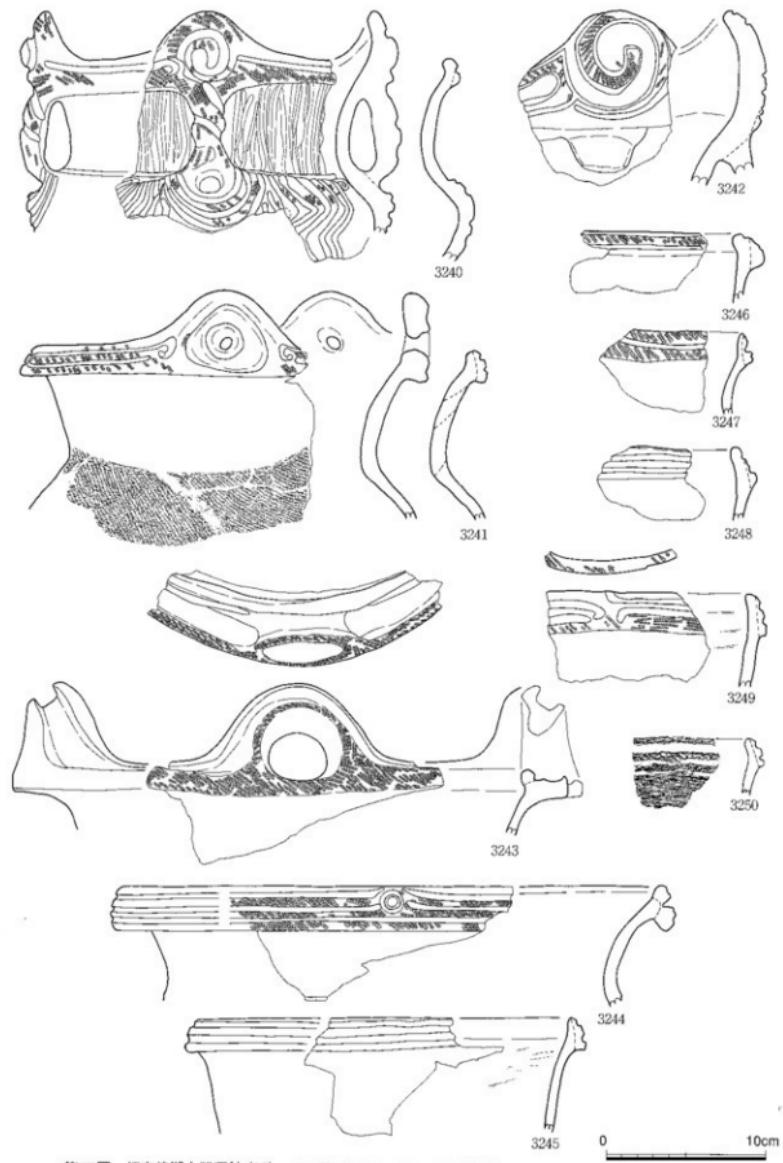
第54図 縄文後期土器深鉢(22) KIV群崩部



第55図 繩文後期土器深鉢 (23) KIV群削部3214~3226、KV群1類3227~3229



第56図 繪文後期土器深鉢(24) KV群1類3230・3231、KV群2類3232～3236、KV群3類3237～3239



第57図 繩文後期土器深鉢(25) KV群3類3240・3241、KV群4類3242・3243、KV群5類3244～3250

浅鉢

器種として浅鉢と深鉢の辨別は、器形はもちろんあるが内面の整形に相違が認められるところから判断した。宿毛式に伴う浅鉢と深鉢は共に、口唇部形態、磨消繩文は共通部分が多いものの、深鉢はバケツ状の器形を呈し、また磨消部分は共に丁寧なものの、浅鉢は研磨に近い磨消で、また内面にも丁寧なミガキを施し、また浅鉢の器形は大きく外傾して開くことから器種選別を行った。

浅鉢の所属時期は宿毛式、松ノ木式に含まれるものと考えられるが、しかし、どちらに含まれるかは判別が困難なものが含まれている。共に磨消繩文を主体とするものの、文様構成等に若干の相違点が認められる。器形自体にも相違が顕在化し、宿毛式では大きく体部が開くものから、松ノ木式に含まれる一群はボール状を呈する器形ものが新たに加わるようである。

松ノ木遺跡の第1次調査で松ノ木式の浅鉢が顕著な形で出土しており、また宿毛式については今までの研究の蓄積により浅鉢の特徴は把握されており、それにより経験則上、松ノ木式と宿毛式の浅鉢は区別され、型式としての器種辨別は可能である。しかしながら注意を要するのは、その型式の存続期間についてである。深鉢の項で述べた通り後期前半は宿毛式、松ノ木式、なつめの木・布施式並行期のものが含まれており、大きく3時期に分かれ、それに伴い浅鉢も3時期に分かれるものと考えられる。宿毛式の深鉢の出土量は、浅鉢の量に較べて極端に少なく、逆に松ノ木式は深鉢の量に較べて浅鉢が少ない状況にある。宿毛式、松ノ木式のそれぞれの段階においての器種組成比率の相違、または宿毛式の浅鉢が次の松ノ木式の段階まで残存する可能性の二通りが考えられる。後者の宿毛式の浅鉢が後まで残るかどうかの検証は、今回の事例からは結論を導き出すまでには至らなかった。他の遺跡での事例に待たざるを得ない。また松ノ木式となつめの木・布施式並行期の浅鉢の明確な区分は困難であった。そのため、浅鉢については分類を行った後にどの深鉢と共伴関係にあるかを検討したい。

浅鉢 I群(第58~63図3251~3353)

I群1類

3251から3266は磨消繩文で主文様に円文を配し、主文様間に2、3段の枠状区画文で充填するものである。主文様の円文の中心には円孔を有するものと考えられる。繩文、沈線部分に赤彩を施すものも存在する。体部は大きく開く。3251は波状口縁で入組文状の円文を主文様とし、従文様に帶繩文を配する。胴部下半は無文となる。体部は大きく開き、内面には段を2段有する。3252は平縁で主文様は円文で中心部に円孔を有し、主文様間に枠状区画文の従文様で充填する。文様帯は上半部に施され、体部下半は無文である。体部は大きく開き、内面に段を2段有する。3253は平縁で3条の沈線により主文様及び従文様を描く。主文様は円文で更に中心に円孔を有する。3254と3255は同一個体と考えられ、体部上半が僅かに内湾気味で、口縁は平縁である。口唇部に連續のキザミを施す。主文様は円文で、欠損しているため円孔を有するかどうかは不明である。内面に段を1段有する。3257と3258は同一個体と考えられ、口唇部に小さな崩れた渦巻き文を持つ。3262と3263は同一個体と考えられる。口唇部は無文帯となるものである。3265は口縁内に屈曲するように突出する。主文様に円文を配し、従文様は枠状区画文となる。下段の帶繩文は微隆起帶のようにやや盛り上がる。

I群2類

3267から3273は横位の文様構成で入組文を多用するもの一群である。3267は体部が大きく開き、口縁は平縁である。主文様は円文、入組文でその間を屈曲させた帶縄文で充填する。内面には段を2段有する。3268は入組文を横位に2段展開する。内面には段を持たない。3269と3270は同一個体と考えられる。主文様に円文と円孔を有し、横位の多段の枠状区画文及び入組文で連繋する。内面は上半部を肥厚させ突帯状とはならず段を形成する。内面は黒色化する程に丁寧なミガキが施される。3269は縄文部分は赤彩を施す。3270も赤彩を施していたものの、落刷したものと考えられ、僅かに赤彩が縄文部分に残存する。3271も入組文をモチーフにしたもので、文様構成が小振りなものである。3272は明確な入組文は形成しないものの、やや曲線的な帶縄文で沈線端部は開放する。口唇部は無文帶となっている。内面には段を有しない。縄文原体は単節L Rである。3273は入組文とはならないものの、沈線端部が鉤状に屈曲するものである。

I群3類

3274から3280は頸部がややくびれ外反し、肩部相当の部分が張り、体部下半は丸味を持ってすばまる。口唇部に半円の主文様を有する。3274は頸部がくびれ口縁は外反する。口唇は内面にやや肥厚させ、半円のモチーフを主文様とし、半円内に小円孔2つを貫通させる。また頸部に焼成前の円孔を有する。体部下半の境にはキザミと縄文を施した微隆帯を貼付する。微隆帯以外には文様を持たない。3275は口唇部に半円文を施し、頸部には枠状区画文、胴部には横位の帶縄文を巡らせる。3276は口唇部をやや拡張し、上面施文となり、半円文を施す。頸部は外反気味で頸胴部の文様は連繋し、曲線的な入組文である。3277から3280は同一個体と考えられ、頸部が外反し、枠状区画文を多段に展開する。口唇には半円文を配する。内面は丁寧なミガキが施され、黒色化し艶を持つ。

I群4類

3281から3283は区画文をモチーフとするものである。3281は体部が大きく開き、主文様部分円孔、主文様間多重方形区画で充填する。縄文、沈線部分赤彩を施す。口唇には入組文。内面には段2つ有する。3282と3283は同一個体である。体部は大きく開く。胴部は横位の窓枠状の区画文を2段に展開する。全体が窓枠状モチーフを展開するのかどうかは不明である。内面には段を1段有する。

I群5類

3284から3313は横位の帶縄文の一群である。1類から4類に含まれる可能性もある。口唇部文様帶で口唇部内面に突帯状に肥厚帯を貼付するものが多い。また内面に段を有するものが比較的多く認められる。また帶縄文部分には赤彩を施すものも多いことが特徴である。3289は枠状の区画文になるものと考えられる。3300は口唇部に丸味を持ち、縄文とキザミを施したものである。3301は口唇内面に沈線を巡らせる。3305は波状口縁となる。3306から3310は口唇部が無文となるものである。3308は枠状区画文が見られる。3309は口唇部上面が平坦である。3311は波状口縁で口唇は素口縁である。

I群6類

3314から3316は曲線的な磨消縄文のものを一括した。3314は縦位の曲線的な磨消縄文で入組文を形成する。3315も口唇部からの連繋した縦位の磨消縄文を施す。3316は口唇及び頸胴部にまたがって多重の円形文である。

I群7類

3317から3319は内湾した波状口縁である。3317は波頂部と考えられ、胴部には円孔を有する。渦巻

き文か入組文になる可能性がある。3317、3318は摩耗しており縄文原体は不明である。

I群8類

3320から3323は口縁部を余り肥厚させないものの、外面施文で、円文等を配する。総じて小形の器形に含まれる一群である。3320は主文様に小円孔の周りに2重の円文を配する。3321は円文の沈線内に小円孔を2個有する。從文様は杵状区画文か。3322は3条の沈線文が横走し、頸部は入組文か区画文となる。3323は口唇部が平坦で沈線を1条巡らせ、頸部は杵状区画文か。

浅鉢 I群胴部破片

以下のものについてはI群の胴部破片と考えられるものである。胴部破片については深鉢と同様に胴部破片のみで分類項目を設けた。浅鉢の胴部破片は入組文、円文の中心部に円孔を有するもの、杵状区画文、横位の帶縄文等の文様モチーフに大きく分類することが可能である。これらのものは諸属性からしてI群の胴部破片に含まれるものであり、浅鉢の他の群とは区別される。

胴部1類

3324から3328は入組文を有する胴部破片である。3328は明確な渦巻き入組文とはならないものの、沈線端部が離れるものである。

胴部2類

3329から3334は円文をモチーフとする一群である。3329、3330は円孔の周りに円文を施すもので、内面には段を有する。3331は小円孔の周りに円文を施し、数条の帶縄文を横位に施す。内面には段を有する。3332は主文様が円文か入組渦巻き文となるもので、帶縄文を横位に連繋させる。3333は主文様に小円孔の周りに円文を配し、從文様に杵状区画文を施す。3334は底部が残る体部下半で円文が体部下半に見られ、底部はやや上げ底気味で、体部は大きく開く。

胴部3類

3335から3344は区画文または杵状区画文をモチーフとする胴部破片である。大部分が杵状区画文を多段に展開するもので、3336および3337は同一個体の可能性があり、数条の沈線を横走させる。3341は楕円状の区画文と入組文をモチーフとする。3343は縦位に杵状区画文を展開する。3344は胴部下半から底部破片で、体部下半に杵状区画文が見られ、底部はやや上げ底状を呈する。

胴部4類

3345から3350は横位の磨消带縄文の一群である。3345は体部にやや丸味を持つ。3347は杵状区画文になる可能性もある。3348は多条の磨消縄文である。3349、3350は器面調整、沈線のタッチが他のものと較べ丁寧でやや趣を違えており、福田K II式に通じるものである。

胴部5類

3351と3352は微隆起を有するものである。幅広の微隆起はやや曲線的である。共に縄文を施文する。注口土器等に見られる隆起よりは低く、内外面共にミガキを施すもので注口土器とは区別した。

胴部6類

3353は縄文地に曲線的な沈線を施すもので、器面全体に赤彩を施す。また内面はミガキを施す。

浅鉢 I群に伴うと考えられる胴部破片は1~6類に分類を行った。胴部1類は入組文を有するもので、

I群2類に含まれるか、円文を主体とするI群1類に含まれる可能性が高い。胴部2類は円孔の周りに円文を配するものを主体とし、I群1類の胴部破片に大部分が含まれよう。胴部3類は区画文または棒状区画文をモチーフとするもので、I群1~4類のそれぞれに從文様として棒状区画文が用いられており、特定は不可能である。胴部4類は横位の磨消帯繩文はI群5類として分類してあるものの、I群5類自体が他のI群1~4類の部分片の可能性があるため、胴部4類もI群1~4類に含まれる可能性がある。胴部5類、6類はそれぞれ特徴的な胴部破片で口縁部形態は不明なもの、他のものからは明確に分離される浅鉢である。

浅鉢II群(第63図3354~3358)

3354から3358は3本沈線磨消繩文の浅鉢である。3354から3356は口縁部は肥厚せず、無文帯で口縁下に横位の3本沈線磨消繩文帯を施すものである。3354は口縁内面が肥厚する。3357は口縁外面に円文を配するものである。3358は胴部破片で主文様として円文を配し、横位の3本沈線で連繋する。

浅鉢III群(第63~67図3359~3433)

浅鉢I、II群と較べ器形、文様構成に相違が認められる一群を一括した。器形が浅鉢I群に見られるような皿状に大きく聞くものではなく、ポール状の器形を呈するものが多い。文様構成はそれぞれの文様単位が分離独立する傾向にある。重弧文、多重の三角文を単位文様として展開するものが多い。浅鉢I群では沈線の描く際に下書きとして描線を持つものが多いものの、本群には下書きの描線はなく、直接文様の割り付けを行うのが特徴である。沈線の幅が広がり、繩文原体がやや太く、粗くなる。浅鉢I、III群共に口唇部形態は深鉢のように肥厚させることができない点は共通するものの、浅鉢I群では口唇部に繩文を施するものの、浅鉢III群では素口縁のものが目立つ。器面調整については、浅鉢I群では光沢を持つ程にミガキを施すものの、ややミガキ自体も粗くなり、器肉も厚くなる。内面に段を持つものではなく、内面のミガキもやや粗い。こうした諸属性から本群は浅鉢I、II群から分離される。

尚、浅鉢I群の胴部破片については別項目で分類を行ったものの、浅鉢III群については口縁部破片と共に一組の分類に組み込んだ。

III群1類

3359、3360の胴部文様に横円文を持つものである。3359は半完形品で体部下半に丸味を持ち、底部は明瞭ではなく、微高台状となり、頭部はややくびれ短く無文帯を形成する。口唇部は肥厚させないものの、沈線を巡らせ、更に外側に繩文を施す。口唇部の主文様は半円文で、更に口唇部を巡る沈線が主文様部分で僅かに内面に絡み付く。頭部には主文様の下に小凹孔を穿つ。胴部文様は横円形の同心円文を単位文様とし、大形の文様モチーフは更に内区に眼鏡状のモチーフを付加する。その単位文様の間を縱位の小さな棒状区画文で充填する。繩文部分には赤彩を施す。繩文は充填繩文で部分的に磨消部分からはみ出る。

3360は横円区画文の胴部破片である。他の文様と連繋をしない単位文となるものと考えられる。

III群2類

3361から3374はポール状の器形をした浅鉢の一群である。口唇部は無文帯となるものが多く、胴部

は磨消繩文で枠状区画文、入組文となる。3375から3380はそれに伴う胴部破片と考えられる。

3361と3362は同一個体で口唇部は肥厚せず、口縁部外面に主文様として半円文と両脇に円形刺突を施す。胴部は同心円文か。3363と3364も同一個体と考えられ、口唇部は無文帯で胴部の主文様は入組文で從文様の枠状区画文で充填する。3365は口唇部は無文帯で、胴部は磨消帯繩文、または枠状区画文と考えられ、最上部の沈線内には小孔2個を穿つ。3366は口縁部外面が半円文となる。3367は磨消帯繩文で口唇部は無文帯、胴部は枠状区画文になる可能性がある。3368も同様である。3369と3370は同一個体で口唇部は無文帯で、胴部は枠状区画文と円文である。内面が黒色研磨のようにミガキが丁寧に施される。3371は口唇部外面に繩文を施し、胴部は同心円文か。口縁部に補修孔が穿たれる。3372は口縁部外面に主文様の半円文、体部は枠状区画文である。3374の口縁部沈線は口唇部の上方に屈曲するところから、半円文になるものと考えられる。3375、3376は多重の三角形の文様モチーフか。3377は入組文を枠状区画文で連繋する。3378は帯繩文。3379と3380は胴部下半の破片で、胴部下半にまで文様を施さないものである。

III群3類

3381から3401はボール状の器形を呈するものが多く、胴部の文様帯が胴部上半に集約される一群である。口唇部は素口縁で胴部文様は沈線文、磨消繩文共に認められ、多重の円文、三角形、方形等の単位モチーフを交互に配するものが多い。沈線は幅広となり、沈線脇の土手を除去し、磨消部分も丁寧である。胎土には混和材は比較的少なく、焼成も堅致である。3402から3414はその胴部破片と考えられる。

3381はボール状の器形を呈しており、幅広の沈線文による渦巻き三角文、円文のモチーフを胴部上半に施す。3382も同様のモチーフを施し、上端の沈線内に円形の小孔を穿つ。3383は横長の幅広の沈線文による渦巻き長方形文を2段に亘り施し、各文様単位の右側部分は入組文となり、沈線の端部を屈曲させる。3384は沈線による多重の方形区画文で中心部には更に眼鏡状のモチーフを付加する。3385も同様のもので幅広の沈線による渦巻き文である。上端部の沈線内には2個の小孔を穿つ。3386は円文と三角文を交互に繰り返すものと思われる。3387は口縁部の内溝が強いものである。磨消繩文で菱形区画文に入組文を持つものと考えられる。3388から3395は円文または三角文を持つ口縁部破片である。3395は磨消繩文で、上端の沈線が口唇部の上方に屈曲するものである。

3396と3397は口頭部が外反するもので、3396は口縁部に繩文を施し、2段目の沈線内には円形刺突を連続的に施す。胴部は幅広の沈線による渦巻きか多重の円文、三角文を交互に繰り返す。3397は頸部文様帯を形成するもので、口唇部は上方に僅かに拡張し、沈線1条と繩文を施し、主文様に半円文を持つ。頭部には沈線を垂下させ、更に繩文を充填する。頭部と胴部の境には微隆起帯を巡らせ、微隆起帯上に繩文を施す。胴部は多重の円文が部分的に残る。

3398から3400は口縁部の小破片で幅広の沈線による半円文を有するものである。3400は半円文内に更に小孔を2個穿つ。3401は口縁部外面に端部を屈曲させた沈線が見られ、胴部は磨消繩文か。

3402から3414はIII群3類の胴部破片もしくは底部破片である。幅広の沈線により円文、三角文の文様モチーフを有する。3402は胴部下半から底部にかけての大形破片である。やや出っ張った平底の底部より体部は開き、幅広の沈線文による多重三角文を施す。沈線内には赤彩を施している。3403は胴部上半が強く内湾し、胴部下半には文様を持たないものである。円文を主体とする文様モチーフと考

えられる。3404は菱形に近い三角文をモチーフとしており、胴部下半は無文である。3405は渦巻き方文で、袖修孔を一ヶ所穿つ。3406は幅広の沈線による円文の部分片である。3407は多重の方形文の中心部に眼鏡状のモチーフを付加したものの。3408と3409は同一個体と考えられ、部分的に磨消繩文を持ち、幅広の沈線による渦巻き三角文である。胴部上半で強く内湾し、胴部下半は無文となる。ほぼ全面に赤彩を施す。3410は胴部下半の破片で、下半は無文となる。胴部上半は磨消繩文で、三角文か。3411は幅広の沈線で磨消繩文のものである。3412は胴部下半の破片で僅かに沈線文が見られる。3413は微隆起帶上に繩文を施し、また幅広の沈線で多重の三角文か。3414は3397のように頭部が外反する頸胸部の破片である。胴部に多重の三角文、円文のモチーフを幅広の沈線で描く。

III群4類

3415から3424は沈線文の一群である。III群3類に較べ沈線の幅が狭く、また多条の沈線文である。3415から3419は口縁部破片で横位の多条の沈線文で、口唇部は素口縁でボール状の器形を呈するものと考えられる。

3420から3424は胴部破片で、縱位の多条沈線文をモチーフとする。3420、3421は多重の方形文となる可能性がある。3423は曲線的な多条の沈線文である。3424は幾何学的な多条のものである。3424についてはIII群3類に含まれる可能性もある。

III群5類

3425、および3426の2点は微隆起帶を有し繩文を施すものである。口頭部が直立気味に立ち上がり、無文帯となっているものである。3425は口頭部は無文帯で直立する。肩部や張る。胴部文様は微隆起帶上に繩文を施す。3426は波状口縁で、口頭部は無文帯で直立する。肩部には微隆帶を横位に巡らせ、微隆起帶上に繩文を施す。

III群6類

3427、3428は太い無文の隆帯を有するものである。3427はボール状の器形を呈し、口頭部に無文の太い曲線的な隆帯を有し、区画内に繩文を施す。3428は同様の胴部破片である。太い隆帯により棒状の区画文となる可能性がある。

III群7類

3429、3430は体部が大きく開き、口縁部が段状となり、外反するものである。3429は肩部に入組文を施し、更に連続キザミを施す。3430は口唇部および肩部に沈線を巡らせる。

III群8類

3431は口縁部が開き内面に肥厚帯を設け、内面に沈線を3条巡らせ、更に繩文を施す。繩文は燃糸か。外面は全繩文である。

III群9類

3432はボール状の器形を呈し、頭部との境に沈線を巡らせ、胴部は繩文地に多条の沈線を垂下させる。3433は頭部との境に沈線を巡らせ、胴部には縱方向の短沈線を全面に施すものである。

浅鉢の編年的位置付け

浅鉢はI群からIII群まで大きく分類を行った。浅鉢I群は更に1~8類まで、胴部破片を胴部1~6類まで細分を行った。顯著な磨消繩文で、体部が大きく開くものが多いのが特徴である。口唇部は沈線2

条を巡らせ、その間に縄文を施し、中には縄文以外にキザミを施すものも若干存在している。また、逆に口唇部が無文帯も存在しているものの、大きく見て口唇部を拡張することなく、口唇部文様帯を形成するもので占められているようである。胴部文様については、頸部文様帯を独自に形成するものではなく、胴頸部から胴部にかけて文様帯が連繋するのが特徴である。文様モチーフは横位の文様構成を主とし、入組文、円文、枠状区画文で構成される。主文様に円孔を持つか、ただ単に円文を配し主文様として、枠状区画文を從文様とし空隙を充填するものが多い。各文様単位は分離独立することなく、磨消帶縄文により連繋される。胴部下半は無文帯となり、文様を施すものは極めて稀である。器面調整は丁寧で、磨消部分はミガキが施され、内面も丁寧なミガキまたはナデが施される。縄文部分には赤彩を施すものが比較的多い。こうした諸特徴を有するものは高知県宿毛市宿毛貝塚を標式とする宿毛式に比定される（岡本1966、前田1994）。深鉢との関係は本遺跡のKII群とセット関係にあるものと考えられるものの、先に述べた通り、本遺跡では深鉢の量に比して、浅鉢の数量が多いという傾向があり、本来的には深鉢とセットとなるものの、浅鉢が後々まで残るかは今後の検討課題である。

浅鉢II群は福田KII式の範疇に含まれる可能性のものである。しかしながら、福田KII式自体の浅鉢は明瞭でなく（泉1989）、本遺跡の浅鉢II群土器は福田貝塚には見出せない。しかしながら、浅鉢I群土器とは磨消縄文帯は違っており、沈線の本数が3本であり、また沈線のタッチが相違する。沈線が浅く断面形態が丸味を持たず、四角形を呈し、また沈線擂出後の整形も沈線脇の土手を丁寧に除去し、縄文原体自体も細く堅縄であるなどの細部が相違する。こうした特徴から浅鉢II群の宿毛式からは除外し、福田KII式に含めることには大過ないものと考えられる。

浅鉢III群は1類から9類まで細分を行った。しかしながら浅鉢III群の主だった特徴を顧しているのは1から4類である。他のものについては類例が少ない。1、2類は磨消縄文のもので、1類は口唇部、頸部、胴部文様体が分離し、胴部文様は円文、椭円文をモチーフとし、各文様単位が連繋しないものである。2類の器形はボール状を呈し、入組文、枠状区画文を多用するもので、浅鉢I群土器の系譜上にあるものの、沈線が幅広であり、純文部分も幅広になり縄文原体も粗くなるなどの細部の違いが認められる。また特に浅鉢I群土器では口唇部文様帯を沈線と縄文で形成するものの、本類は口唇部が素口縁となることが特徴である。こうした相違から浅鉢III群2類として、浅鉢I群とは分離した。3類土器は幅広の沈線文を主体とするもので、器形、沈線のタッチ、文様構成は他に見られない要素である。器形はボール状を呈し、胴部文様は上半部に施文され、多重かまたは渦巻きの円文、三角文となる。各文様単位は分離独立する傾向が強く、浅鉢I群とは違った様相である。浅鉢I群にも円文は認められるものの、多重となるものは少なく、また三角文は本類になって初めて出現する文様モチーフである。この文様モチーフについては今のところ系譜を辿れるものはない。関東の堀之内2式の古い段階に認められるものの、時期的に松ノ木式が堀之内2式まで下る可能性は考え難く、堀之内2式の影響よりも松ノ木式に内在する新しい要素の出現と捉えた方が理に叶っていると考えられる。口唇部は基本的には素口縁であるものの、若干ではあるが、上端部の沈線が口唇部に巻き込むようなものが認められる。こうしたものは浅鉢I群の口唇部の半円文に由来するものと考えられ、また時期的に近い平城I式の瘤状突起に沈線が絡み付くものとモチーフ的には近似するものと考えられる。3363の入組文を形成するもの、3387の菱形区画文に円文か入組文を配するものも同様のものと考えられよう。

編年的には浅鉢III群は浅鉢I群に後続するものであり、深鉢KIV群とセット関係にあるものと考え

られ、松ノ木式の範疇に含まれる。但し、浅鉢Ⅲ群7類3429、3430は明確に松ノ木式に含まれるかどうかは判然としない。また浅鉢Ⅲ群9類3432については、縄文地に多条沈線を施すところから若干後出的な要素である。なつめの木貝塚(笠川1993、渡辺1994)で比較的近似したものが出土しており、深鉢K V群に伴う可能性も考えられる。

鉢

器種としての鉢は基本的にはバケツ形、植木鉢形を呈したもので、浅鉢の様に体部が大きく開かないもので、深鉢と浅鉢の中間形式である。大きさの点で深鉢に較べ、小形の器種である。また被熱を受けた痕跡の認められないと考えられるものである。機能としては単純に深鉢が煮炊き用、浅鉢が盛りつけ用とした場合、鉢は浅鉢に近く、盛りつけ、調理用と考えられる器種である。しかし、それはあくまで現在の器種による機能の類推に過ぎず、若干ではあるが鉢の中にも被熱痕の認められる鉢も存在しており、明確に考古学的に鉢の機能を把握することは困難である。しかしながら、慣用的に深鉢、浅鉢と呼ばれているものから鉢は分離されるものであり、器種分類を行った。I群からVI群まで分類を行ったものの、点数が少ないこともあり、類の細分は設けなかった。

鉢 I 群(第68図3434～3436)

3434から3436の3点がI群に含まれる。3434は僅かに丸味を持って立ち上がるもので、口唇部は無文帯で部分的に主文様が設けられる。胴頸部の文様帶は連繋し、入組文を棒状区画文で繋ぐ。文様は下書きの横位の2本沈線により描線を描いた後に棒状区画文が設けられ、縄文を施す。3435は僅かに胴部上半で屈曲し、口頸部はやや内傾気味に立ち上がる。棒状区画文が2段になって施される。3436は口頸部破片で、口縁部は内傾する。口頸部には横位の幅の広い縄文帯が施され、縄文原体は付加条件か。

鉢 II 群(第68図3437～3440)

3437から3440は縦位の文様モチーフとした3本沈線の磨消縄文の一群である。3437はバケツ状の器形を呈し、口唇部が内側に突出するもので、沈線を2条巡らせ縄文を施す。また小円孔を2個穿つ。胴頸部の文様帶は連繋し、3本沈線による磨消縄文で入組文を形成する。内面には段を有する。3438はカーブを描く縦位の3本沈線による磨消縄文である。器形はバケツ状を呈するものと思われる。縄文部分に赤彩を施す。3439も3本沈線による縦位のややカーブを描く文様モチーフである。外面が摩耗しているために縄文施又是不明である。3440は胴部下半の破片で、バケツ状に器形を呈する。文様は3本沈線による縦位の磨消縄文で、僅かに入組文が右端に残存する。

鉢 III 群(第68図3441、3442)

3441、3442は小形のバケツ状に開いた器形で、文様モチーフは縦位で胴部下半にまで文様が施されるものである。3441はバケツ状の器形で、肥厚しない口唇部には斜行のキザミと縄文を施し、胴部は深鉢と同様の藤手状の縦位の文様モチーフを施す。磨消縄文で、藤手状文様モチーフ内は磨消す。底

部は高台状となる。3442も同様の器形で、沈線文の鉢である。口唇部は肥厚せず、キザミのみを施す。小突起の波頭部を有する。口頸部は無文帶となり、胴部は逆「L」字状の縦位の文様モチーフである。底部は僅かに上げ底状となる。内面には口縁部近くに煮こぼれ状の痕跡が残る。

鉢IV群(第68図3443)

3443は頸部がくびれ、胴部は丸味を持ってすぼまる。口唇部は肥厚せず、直交するキザミを施し、頸部は無文帶となる。胴部は縄文地に逆「L」字状文を施す。縄文の回転方向は一定ではなく、方向を変える。

鉢V群(第68図3444)

3444直線的に立ち上がる器形で、口唇部は肥厚させず、沈線1条と縄文を施す。胴部は部分的な磨消縄文で蛇行沈線モチーフである。内外面共にミガキを施す。

鉢VI群(第68図3445～3447)

3445から3447は縄文地の鉢である。器形は頸部がくびれ、口縁はやや開き気味である。胴部はやや丸味を持つ。3445と3446は同一個体の可能性があり、口唇部は面取りしたようにやや角張り、頸部は無文帶を形成する。胴部は全縄文である。3447は口唇部に斜行のキザミを施し、頸部、胴部にも縄文を施す。縄文原体はR Lで粗い。

鉢の編年的位置付け

鉢は器形的に確たる形式を呈するものではなく、深鉢、浅鉢に含まれない一群で、形態的にややばらつきが認められる。鉢I群のように体部がやや浅鉢III群に似るもの、文様構成は明らかに違っており、文様モチーフ的には浅鉢I群2類と同様に入組文をモチーフとするものであり、浅鉢I群と同様に編年的には鉢I群は宿毛式に含まれるものと考えられる。

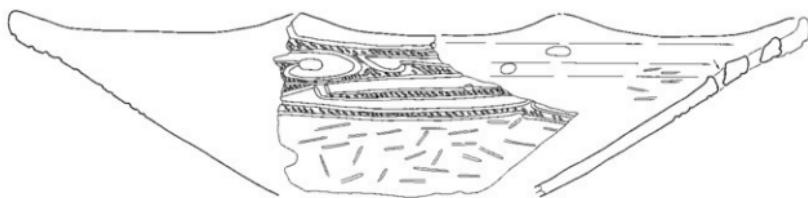
鉢II群土器は鉢III群土器と同様のバケツ状または植木鉢状の器形を呈するものの、鉢III群土器に較べ、器肉は薄く整形が丁寧である。縦位の文様モチーフを主とするものの、入組文を形成するものも見られ、3本沈線による帯縄文で文様を描くものである。宿毛式の浅鉢には胴部下半に文様を持たないものの、この一群は胴部下半にまで縄文帯を持つものである。沈線および縄文原体、整形等は宿毛式とは違っており、福田K II式の範疇で捉えられるものである。福田K II式には比較的このタイプの器形を持つものが多く、浅鉢と報告された一群に器形は似る(泉1989)。しかしながら福田貝塚出土の浅鉢としたものは、口縁部が内側に突出するよう拡張が行われており、文様帯の幅が広い傾向にある。本遺跡の鉢II群は口縁部形態が分かるものは1点しか出土しておらず、比較検討は難しいものの、3437は口縁部の拡張は顕著ではない。

鉢III群土器はバケツ状または植木鉢状の器形を呈し、頸部文様帯を形成することなく、胴頸部が連続した文様構成を採る。縦位区画文の蕨手状、逆「L」字状文の文様モチーフは、深鉢K IV群土器に特徴的に見られ、松ノ木式に相当する。

鉢IV群土器は文様モチーフは鉢II群と同様のもので逆「L」字状文で松ノ木式に含まれ、鉢V群土器

は宿毛式にも松ノ木式にも見られない文様構成であるものの、宿毛式の様に整然とした文様モチーフを探らないことから、新しい様相と考えられ松ノ木式の範疇で捉えられる可能性が強い。

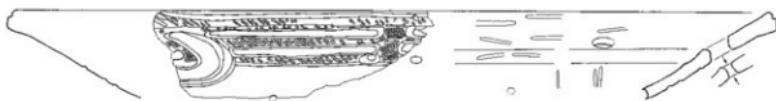
鉢VI群は全縄文地の鉢で、宿毛式には全縄文地の鉢は極めて少なく、器形も頸部がくびれるものが存在しないことから、松ノ木式かそれよりやや新しい深鉢V群土器とセットとなる可能性がある。平城II式土器には全縄文地の鉢が伴うものの、口唇部にも縄文を施すもので、また縄文施文方向も羽状を呈するものが多いところから、鉢VI群とは区別される。平城II式段階までは下らないものと考えられ、松ノ木式かなつめの木式段階のものと考えられよう。



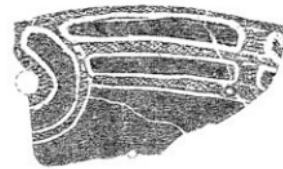
3251



3252



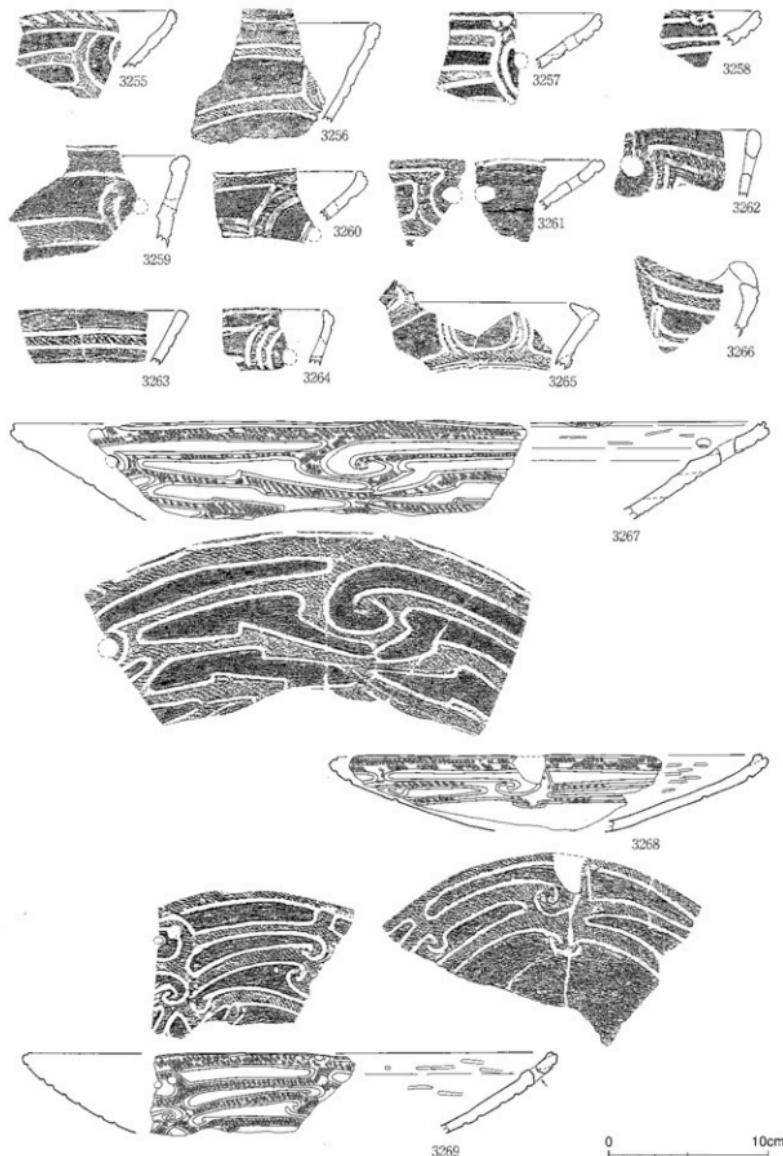
3253



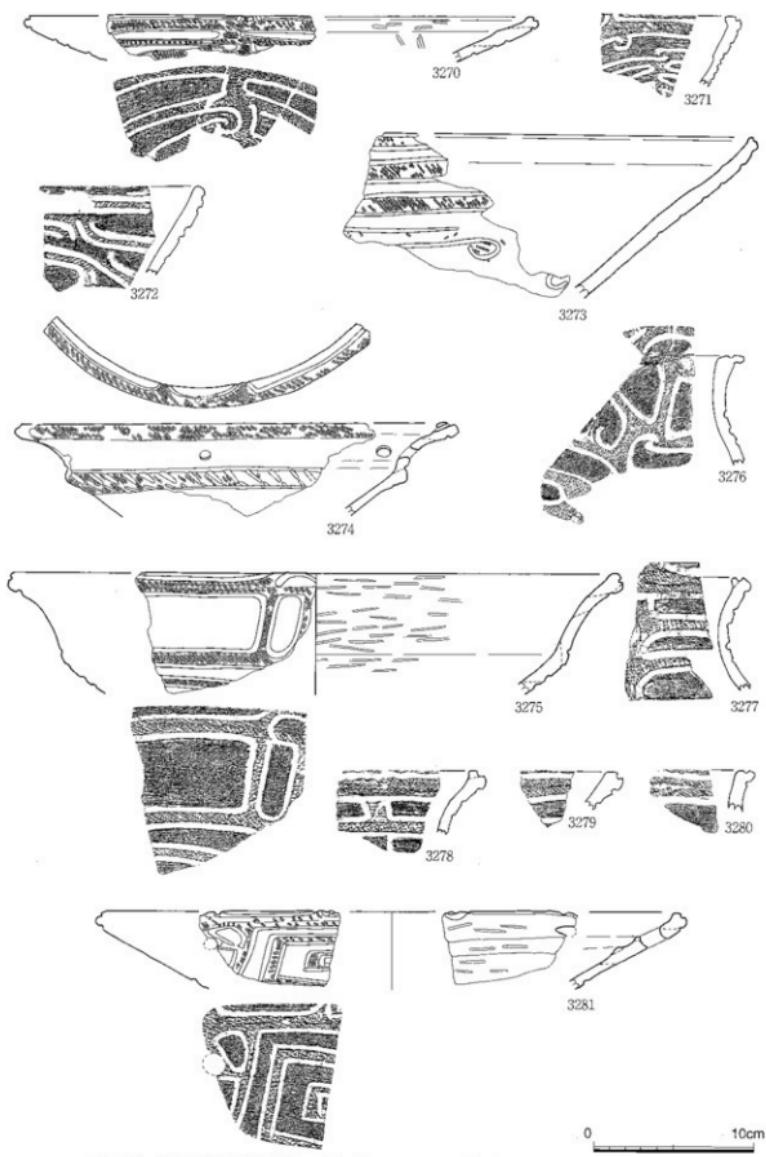
3254



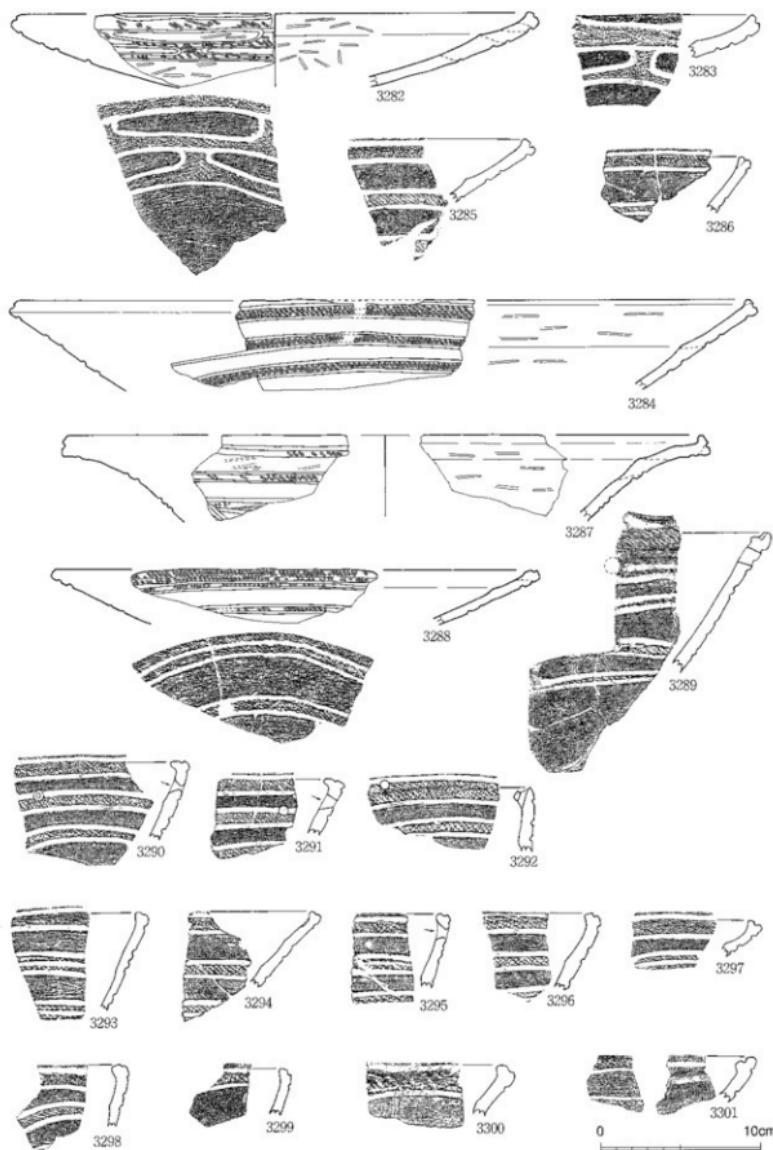
第58図 繩文後期土器浅鉢(1) I群1類



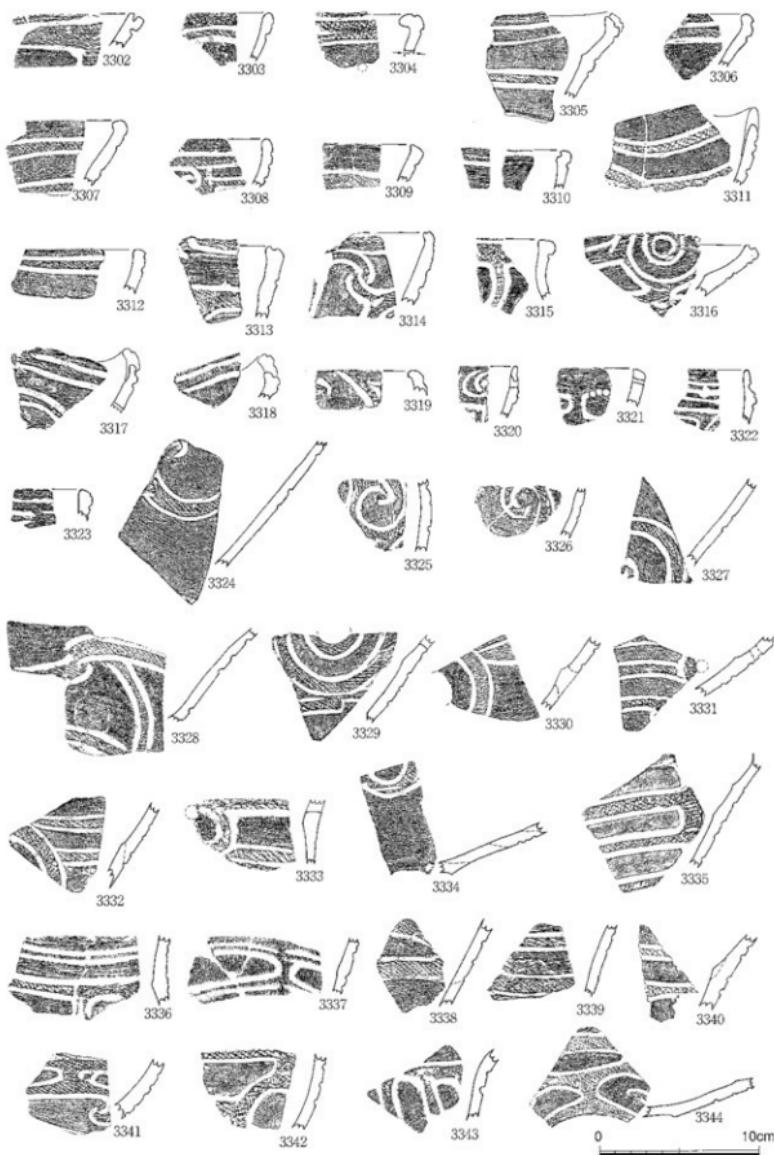
第59図 縹文後期土器浅鉢(2) I群1類3255~3266、I群2類3267~3269



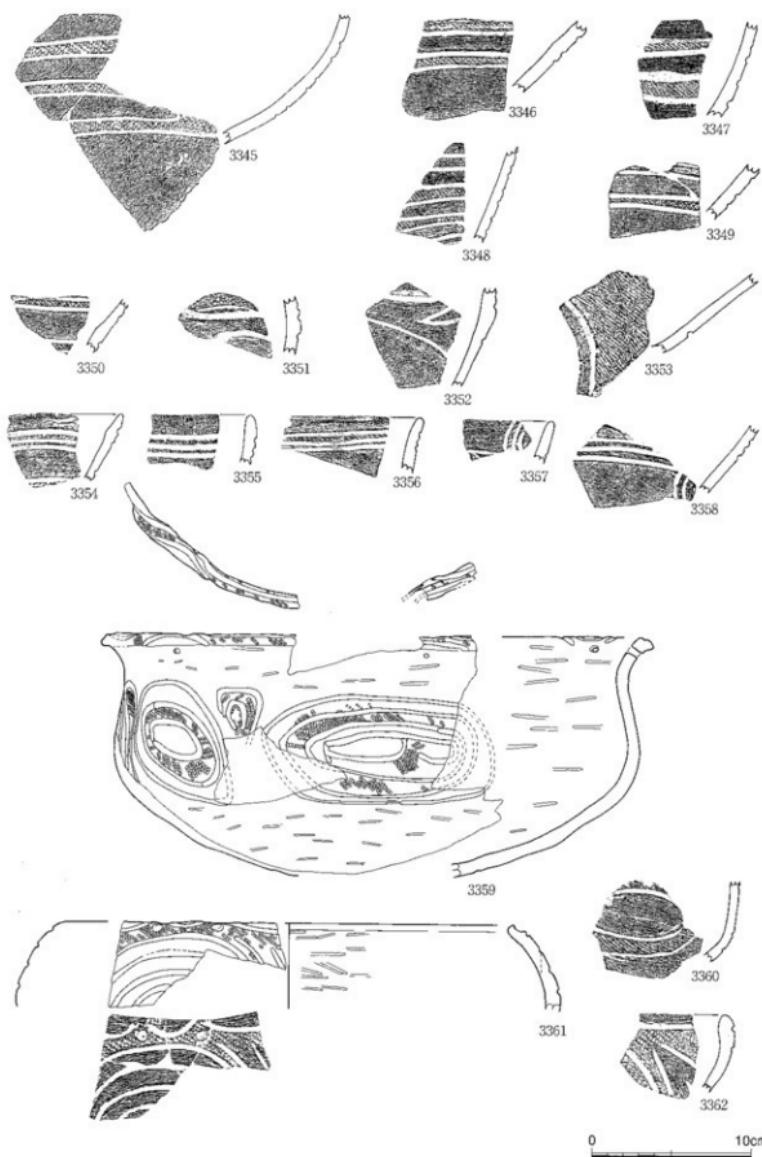
第60図 繩文後期土器浅鉢(3) I群2類3270~3273、I群3類3274~3280、I群4類3281



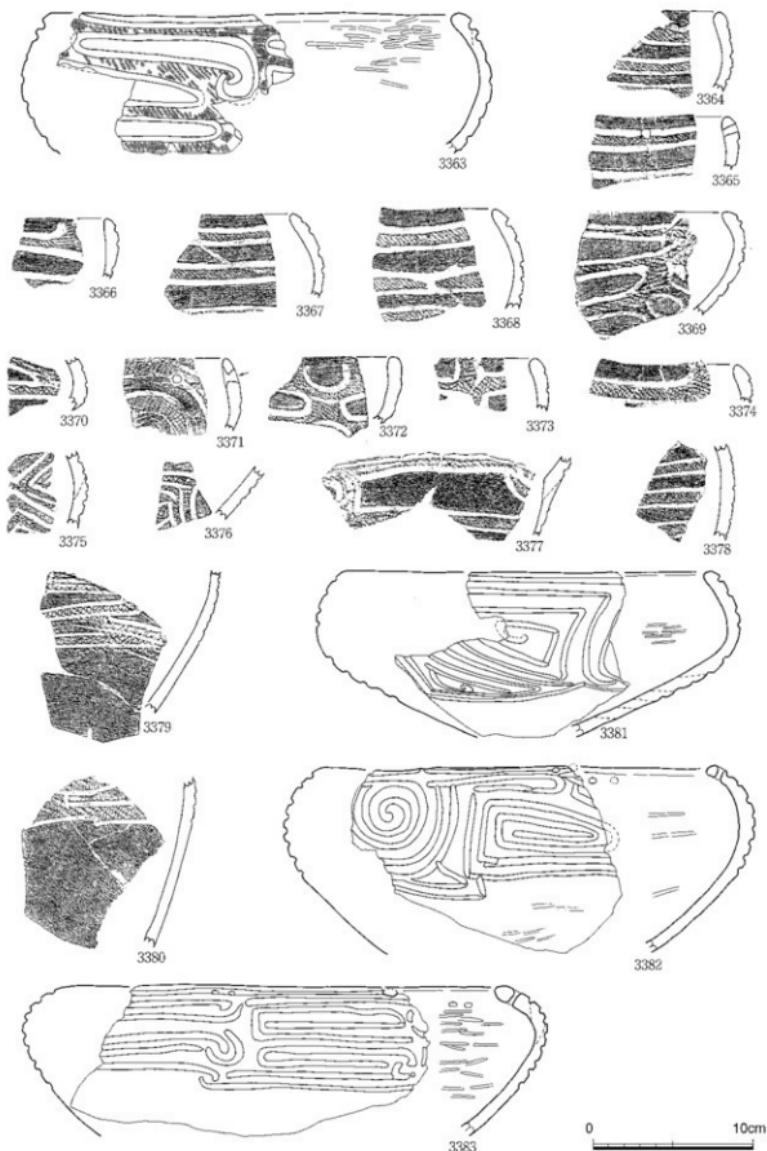
第61図 繩文後期土器浅鉢(4) I群4類3282・3283、I群5類3284～3301



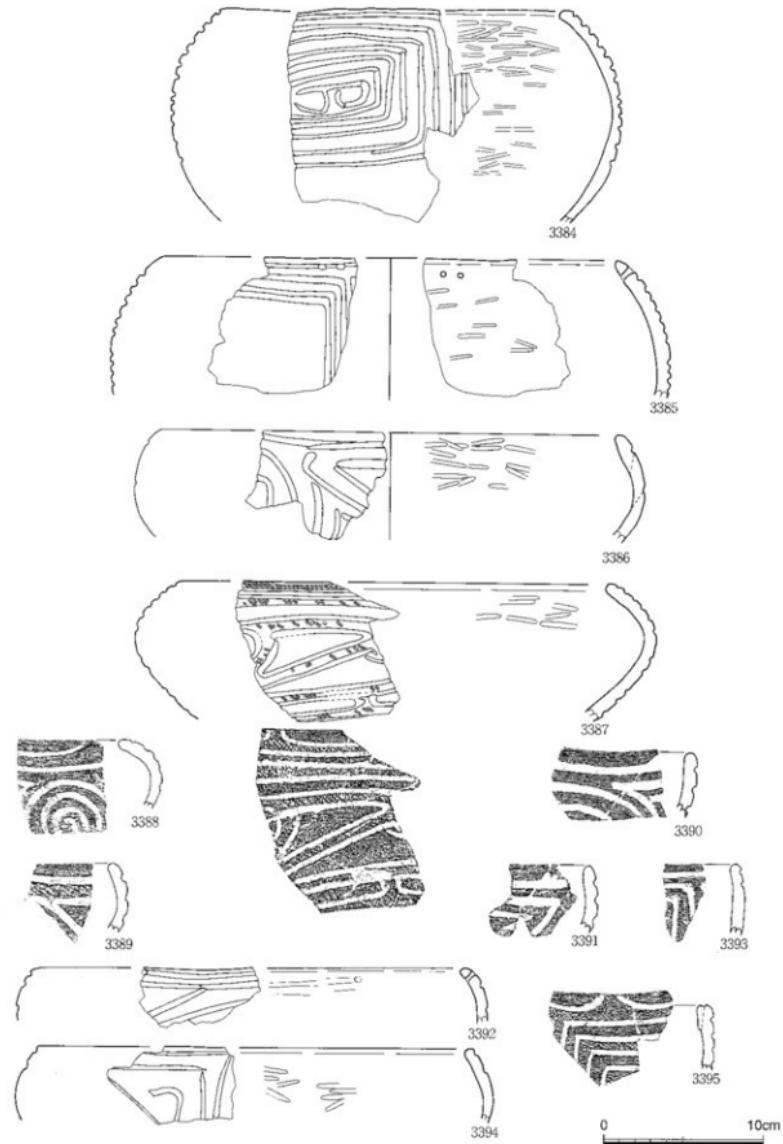
第62図 繩文後期土器浅鉢(5) I群5類3302~3313、I群6類3314~3316、I群7類3317~3319、I群8類3320~3323、I群9類3324~3344



第63図 縄文後期土器浅鉢 (6) I群胴部3345~3353、II群3354~3358、III群1類3359~3360、II群2類3361~3362



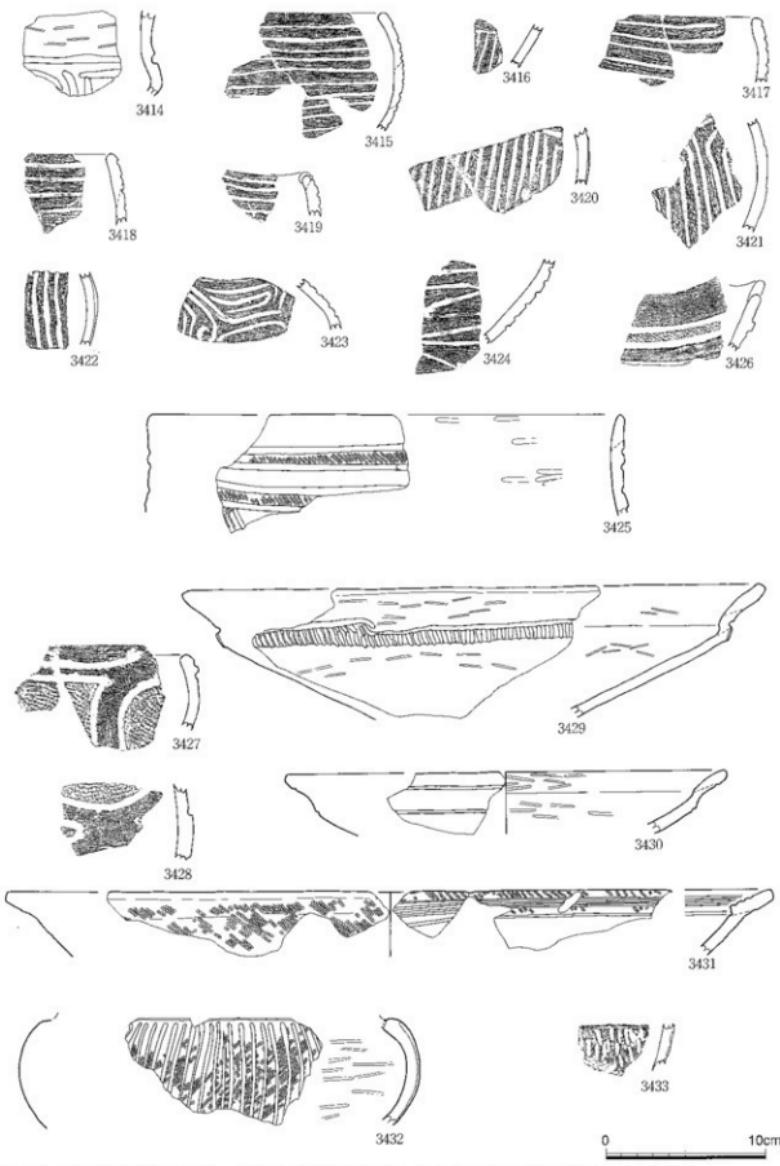
第64図 繩文後期土器浅鉢(7) Ⅲ群2類3363~3380、Ⅲ群3類3381~3383



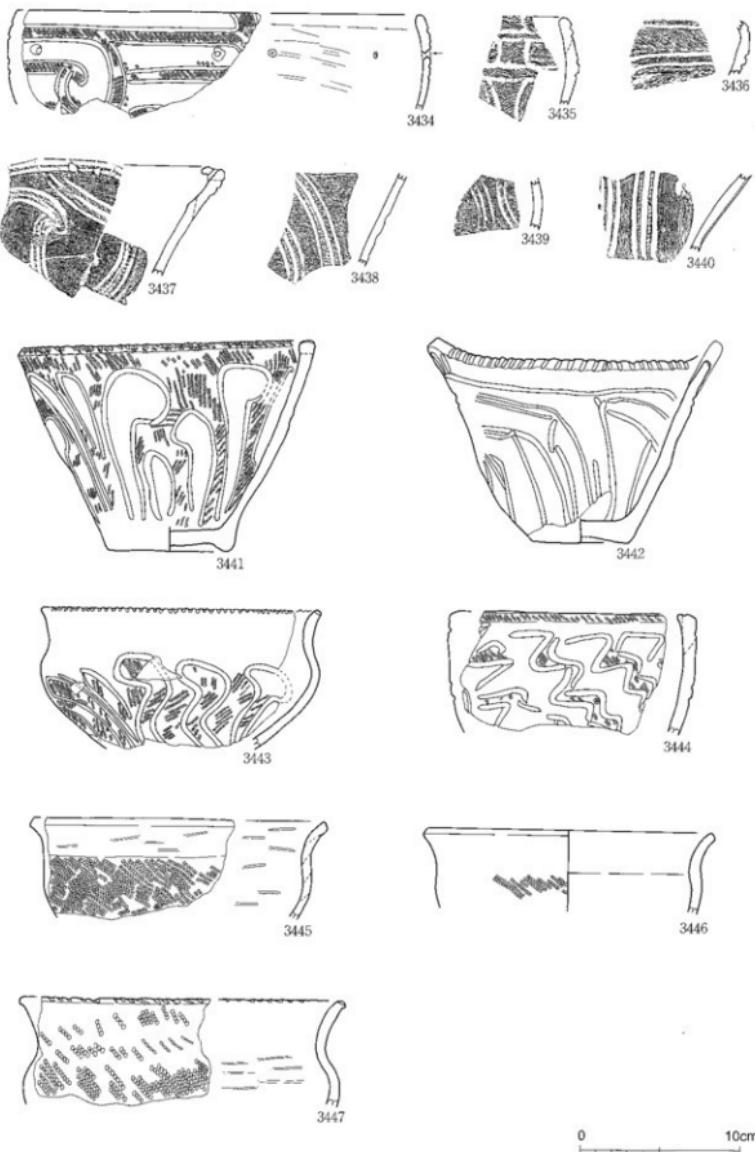
第65図 繪文後期土器浅鉢(8) Ⅲ群3類



第66図 繪文後期土器浅鉢(9) Ⅲ群3類



第67図 繪文後期土器浅鉢 (10)
Ⅰ群3類3414、Ⅲ群4類3415~3424、Ⅴ群5類3425・3426、Ⅲ群6類3427・3428、
Ⅲ群7類3429・3430、Ⅲ群8類3431、Ⅲ群9類3432・3433



第68図 繪文後期土器鉢 I群3434～3436、II群3437～3440、III群3441・3442、IV群3443、V群3444、VI群3445～3447

粗製深鉢

粗製深鉢の定義は、文字通り粗製で文様を持たない一群の土器である。粗製とは胴部に文様を持たず、条痕整形で条痕を残すもの、または若干条痕をナデ消す一群の土器である。それらの中で口唇部または口縁部にキザミ、沈線のみかまたはそれらを全く持たない素口縁とに大きく分けることができる。また口縁は大半が平線で占められるものの、若干波状口縁、突起を有するものも含まれる。口唇部または口縁部のキザミ等の装飾を持つとしても、基本的には胴部に文様を持たないものを粗製深鉢の分類に含めた。松ノ木遺跡では整形の観点から見ると、粗製深鉢、深鉢、浅鉢の順で丁寧さが増していく。浅鉢はミガキを施し、内面にまでミガキを施すものが多く、深鉢は丁寧なナデか中にはミガキを加えるものが認められ、内面はナデのものが多いようである。

粗製深鉢は条痕のままか、条痕をナデによって消し、器面調整が粗い印象を持つ。粗製深鉢は容量の面では、小形品、中形品、大形品と大きく3分類に分けることができよう。西日本の後期初頭から粗製深鉢が器種として一定量占めるようになるものの、特に松ノ木遺跡では粗製深鉢が際立って多くの傾向にある。組成の変化として粗製深鉢の増加という単なる現象ではなく、粗製深鉢の増加を生業面での変化として捉える論巧が見られる。機能の面では文様を有する深鉢と同様に煮炊用であることには変わりないものの、日常の使われ方の相違は、食糧の大容量と、日々の調理との二通り可能性が考えられている(阿部1994)。粗製と言う器種分類は、精製土器に対して手抜き土器のイメージの感が持たれるが、後期の段階から器種として一定の割合を占めるところから、ただ単に手抜きの土器ではなく、機能的な必要性から器種組成の一翼を担ったものと考えられる。機能を重要視した胴部に装飾を必要としない土器群と捉えるものである。

分類については大きく分けて口縁部にキザミを有するものをI群、キザミを持たない素口縁のものをII群として分類した。I群のキザミの有するものについてはキザミの斜行の度合い、口縁の肥厚、突起の形態、頸部のくびれ具合等により細分を設けた。II群については無文土器としての分類も可能なものの、機能的にも整形の面でも粗製深鉢I群土器と同様と考えられるところから、粗製深鉢の分類に含めた。口唇部の肥厚の度合い、頸部のくびれにより細分を行った。I群、II群に分け更に細分を行ったものの、細分は型式差を目安としてはおらず、形態により分類基準を設け、その後編年的な位置付けを試みたい。なお、口縁部小破片の中には無文の鉢の中にも同様の形態をとる可能性があるものの、明確に鉢に含まれない限りは粗製深鉢の器種分類に含めた。

粗製深鉢I群(第69~74図3448~3499)

I群1類

口唇部にキザミを有し、平縁の一群をI群1類とし、頸部が直線的に立ち上がるか、外反するものにより細分を設けた。

I群1類a

3448から3457は直線的に立ち上がり、口唇キザミがほぼ直交するように施されるものである。中形から小形のものが多く、器肉もやや薄いものである。3448は口径37cmを測る中形のものである。3449は外面に粗い条痕を残す。3450のキザミはやや斜行する。3454のキザミもやや斜行し、外面に煤が付

着する。3455、3456のキザミは棒状工具によるもので、3455は内外面に条痕を残す。口径は33cmを測る。3457は口唇部外面にキザミを施し、僅かに縄文を施す。縄文を施した粗製のものは唯一この1点のみである。

I群1類b

3458から3471は頸部がくびれ、口唇部が肥厚せず、キザミを施すものである。口径が20cm以上の中のものは3458から3461で最大のものは3458で29cmを測る。17cm以下の小形のものは3467から3471である。小形のものについては器肉が薄い傾向にある。キザミの形態は棒状工具によるものは、3858、3460、3461で他のものは箆状工具による。またキザミが直交するものは多く、斜行するものは3466、3467、3471である。3462および3463は同一個体の可能性が強い。

I群2類

2類は平縁口縁ではなく、山形口縁または波状口縁のものである。口縁の形態により細分を設けた。

I群2類a

3472から3479は山形口縁のもので2類aとした。特に山形口縁の波頂部に円形刺突を有するものを基本分類とした。3472、3473は入山形口縁で3472は小円形刺突3個を波頂部に施し、キザミは斜行する。3474から3479は山形口縁のものである。3476から3478は同一個体と考えられ、キザミは斜行する。3476の口径は35cmで中形のものではあるが、器肉は薄い。3479は渦巻き状の突起で頂部に円形刺突を施し、口唇部は僅かに肥厚し、沈線1条とキザミを施す。頸部はくびれる。腹部に文様を持つ可能性もある。

I群2類b

3480、3481は歯車状の突起を貼付した口縁部破片である。3480は歯車状で浅く窪んだ突起内に小円形刺突3個を施す。口唇部は棒状工具によるキザミを施す。頸部はくびれる。3481は歯車状の突起の端部にも棒状工具のキザミを巡らせる。口唇部も棒状工具によるキザミである。

I群2類c

3482、3483は大振りな波状口縁、ブリッジ状の突起を付したものである。3482は大振りの波状となり、口唇部にキザミを施す。頸部は直線的に立ち上がる。3483はブリッジを口縁部に渡す。キザミを施す。

I群3類

3類は突起を有するもの、または波状口縁であるものの突起を有するかどうか不明なものをまとめた。

I群3類a

3484、3485は波状口縁部の頂部に瘤状突起を有するものである。3484の口縁はやや拡張を行い沈線を1条巡らせ斜行の短沈線キザミを施す。瘤状突起には綫に沈線をキザミ状に施す。頸部は強くくびれ、腹部は丸味を持つ。体部下半は強くすぼまる。外側の整形は条痕を残す。3485は口径16cmの小形のものである。口縁部をやや拡張し、沈線1条を巡らせ、斜行のキザミを施す。波状口縁の波頂部には小振りの瘤状突起を貼付する。頸部はややくびれる。外側に煤が付着する。

I群3類b

3486は小振りな瘤状突起を有し、突起上に小円形刺突を2個施すものである。口唇部は余り拡張せ

ず、棒状工具による直交するキザミを施す。頸部はややくびれる。

I群3類c

3487と3488は同一個体と考えられ、波状口縁となるものの瘤状突起を有するものかどうか不明なものである。口唇部は僅かに肥厚し、キザミは斜行する。体部は直線的に立ち上がる。

I群4類

4類は平縁となる可能性の強い口縁部で、口縁部文様帶となるか、キザミが大振りとなり斜行の短沈線キザミとなるものである。大形のものが多く、器肉も厚いもので占められている。

I群4類a

3489から3491は口唇部を拡張しないものの、キザミが斜行するものである。3489の体部は直線的に立ち上がり、3490は頸部がやや反り気味である。3491は体部が直線的に立ち上がり、口唇部上面が平坦で斜行するキザミを施す。

I群4類b

3492から3498は口縁部を拡張し、斜行の短沈線キザミを施す一群である。3492は口唇部は平坦で斜行の短沈線キザミを施し、頸部がややくびれる。内外面に条痕を残す。3493は口縁部を大きく拡張し、棒状工具により斜行の短沈線キザミを施すものである。頸部はくびれる。口径43cmを測る大形品である。3494は頸部が直線的に立ち上がり、口縁部内面を肥厚させるものの、面取り状となり、斜行の短沈線キザミを施す。3495の口縁部は内面にやや肥厚させ、斜行の短沈線キザミと貝殻擬繩文を施す。頸部は直線的に立ち上がる。3496、3497は口縁部をやや肥厚させ斜行の短沈線キザミを施し、頸部がやや反るものである。3498は口縁部を拡張し、斜行の短沈線キザミは密に施す。

I群5類

3499は口縁部を外方向に肥厚させ、貝殻擬繩文を施すものである。口径15.7cmの小形のものである。

粗製深鉢 II群(第75~82図3500~3558)

口唇部にキザミを有しない一群をII群とした。

II群1類

1類は口唇部の肥厚が認められないもので、頸部のくびれ具合で細分を設けた。

II群1類a

3500から3514は1類aで素口縁で頸部が外反するものである。口径は30cmから40cmの大形品が多く、最大径を口縁部と脛部上半にはほぼ同じ大きさで有する。3513および3514は小形のものである。器肉は総じて厚く、整形は内外面共に条痕で部分的にナデ消す。

II群1類b

3515、3516は器形的にはII群1類aと同様ではあるが、口径が20cm強の小形のものである。口縁は肥厚せず、素口縁である。頸部が僅かにくびれる。共に外面に煤が付着する。

II群1類c

3517、3518は頸部が僅かにくびれ、短く立ち上がるものである。

II群1類d

3519は頸部が強くくびれ、外傾気味に立ち上がる。肩部がやや張り、脣部も僅かに丸味を持つ。

II群1類e

3520、3521は頸部が直線的に立ち上がり、肩部が張るものと考えられる。形態的には1類c、1類dの中間形態を呈するものか。

II群1類f

3522から3524はII群1類に含まれるもの、口縁部の破片のため細分が不明なものを一括した。口縁部は素口縁で口唇部に丸味を持つものと平坦なものに大きく分けることができる。3522、3523は直線的に立ち上がるものの、3524から3529は口頭部が僅かに外反するものである。3530は口唇部外端がはみ出るものである。3531から3534は口唇部が平坦で口頭部が僅かに外反するものである。

II群2類

2類は波状口縁、山形U縁、突起を有するものを一括し、その形態により細分を設けた。

II群2類a

3535は入山形のブリッジを貼付し、口頭部は直線的に立ち上がる。突起は2単位か。

II群2類b

3536はII群2類aに似るもの、ブリッジは3535よりなだらかな山形である。頭部はくびれ、肩部が張り胴部下半はすぼまる。突起は2単位か。

II群2類c

3537は口縁部を僅かに肥厚させ、主文様に略孔を有する。頭部は直線的に立ち上がる。

II群2類d

3538は小突起を4単位有するもので頭部は直線的に立ち上がり、バケツ状の器形である。3539も同様のものと考えられるが、小突起部分で破損する。胴部は直線的に立ち上がる。

II群2類e

3540は丸味のある波状口縁で胴部は直線的に立ち上がる。色調が赤褐色を呈し、やや他のものと違う。

II群2類f

3541は口縁部を大きく上面に拡張し、更に円形の突起を貼付する。頭部はややくびれる。整形が粗く、内外面共の条痕の後粗くナデる。

II群3類

3類は口縁部が肥厚するものを一括した。更に口縁部の肥厚が内面であるか、外面であるかにより細分を設けた。

II群3類a

3542から3545はやや口唇が肥厚するものである。頭部が外反するものが多く、3545、3546は口唇内面に巻き込むように粘土帯を貼付し、肥厚させるものである。

II群3類b

3547から3552は口縁部文様帶となるもので、口縁部を内面か上面に肥厚させるものである。3547は口縁内に沈線を1条巡らせ、沈線が離れた端部を屈曲させる。頭部は外反する。3548、3549は同一個体と考えられ、口縁内面を肥厚させ、頭部は外反する。3550から3552は口縁内面を肥厚させるものの、面取りしたように平坦である。

II群3類c

3553から3558は口縁外面を肥厚させたものである。頸部は直線的に外傾するか、直立するものである。3558の口縁部肥厚帯の幅が広く、やや下に垂れ下がるような形態である。

粗製深鉢の編年的位置付け

粗製深鉢は頸部に文様を持たず、主に口縁部の形態により分類を行った。松ノ木遺跡の今回の後期に含まれるものは前半期でも、報告書の中での分類K II・K III群、K IV群、K V群の3時期に分かれる可能性が強く、型式名で示せば宿毛式・福田K II式、松ノ木式、なつめの木式並行の3時期である。粗製深鉢もそれぞれの型式名に含まれる可能性があるものの、極めて特徴的なもの以外は所属時期の把握は困難である。主体となるのは松ノ木式であるものの、松ノ木式以外に含まれる粗製深鉢も存在しており、深鉢の口縁形態および器形の類似から、編年的位置付けを試みたい。

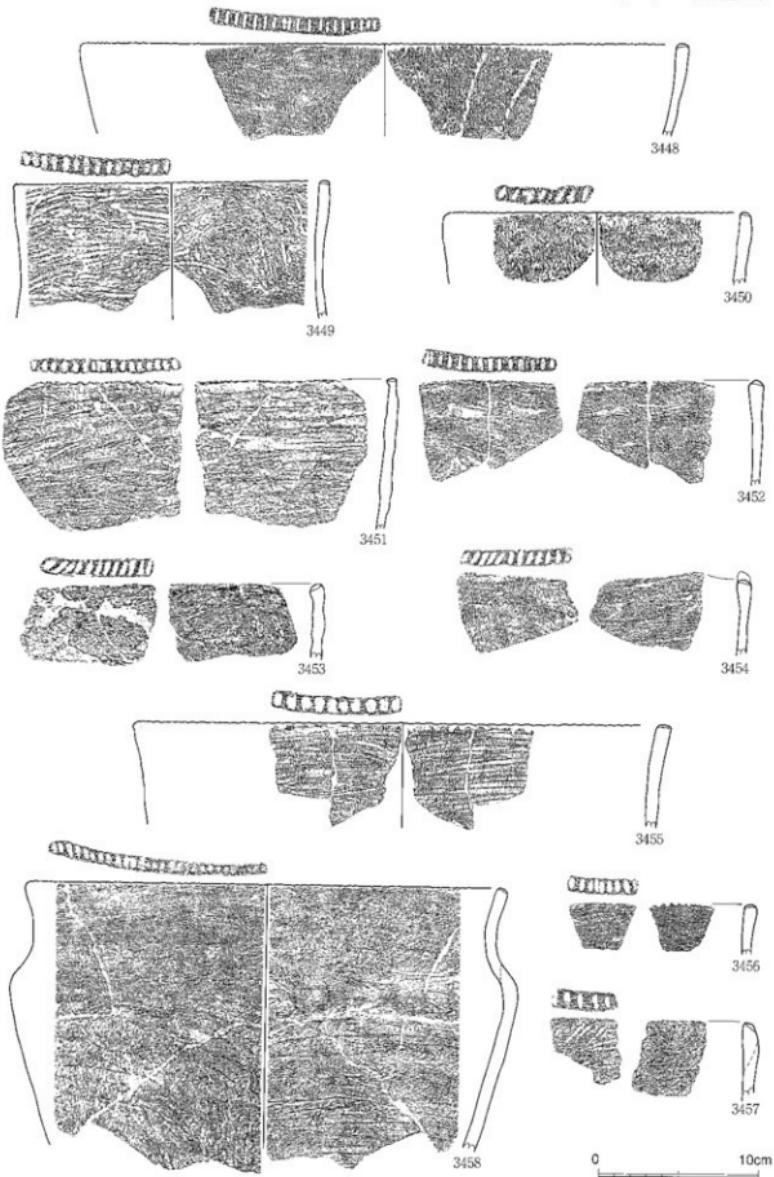
粗製深鉢I群1類aに含まれる口唇部が肥厚せず、キザミが直交して施され、頸部のくびれない3448から3457は宿毛式に含まれよう。I群1類bについては頸部がくびれるものは、宿毛式、松ノ木式共に認められどちらの型式に所属するか不明である。

I群2類aは山形口縁のもので、波頂部に円形刺突を有するもので、深鉢K II群2、4類に多く見られるもので、宿毛式に相当する。I群2類b、cについては口縁部の突起、波状口縁からして松ノ木式に含まれる可能性が高い。

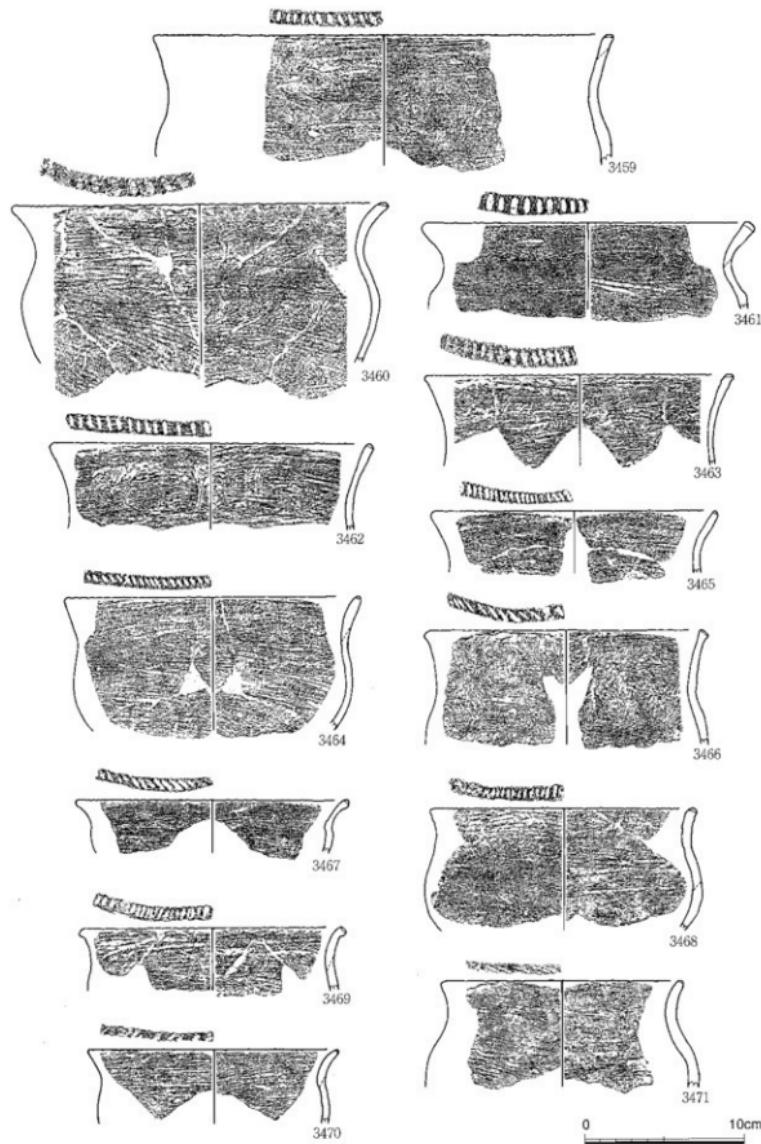
I群3類から5類は全て松ノ木式に含まれよう。口縁部の拡張、キザミの斜行、短沈線化は松ノ木式に特徴的に認められるものである。

粗製深鉢II群は口唇部にキザミを持たない一群である。II群1類は素口縁で口唇部が肥厚せず、際立った特徴を持たないものである。宿毛式の粗製無文土器は極めて少なく、その内容は把握できていないため、II群1類に宿毛式が含まれているかは不明である。II群2類は山形口縁、波状口縁となるもので、その中でII群2類aとした3535は入山形口縁に近い口縁形態をしているところから宿毛式に含まれる可能性が強い。またII群2類e3540については松ノ木式以降の可能性がある。他は松ノ木式に含まれよう。

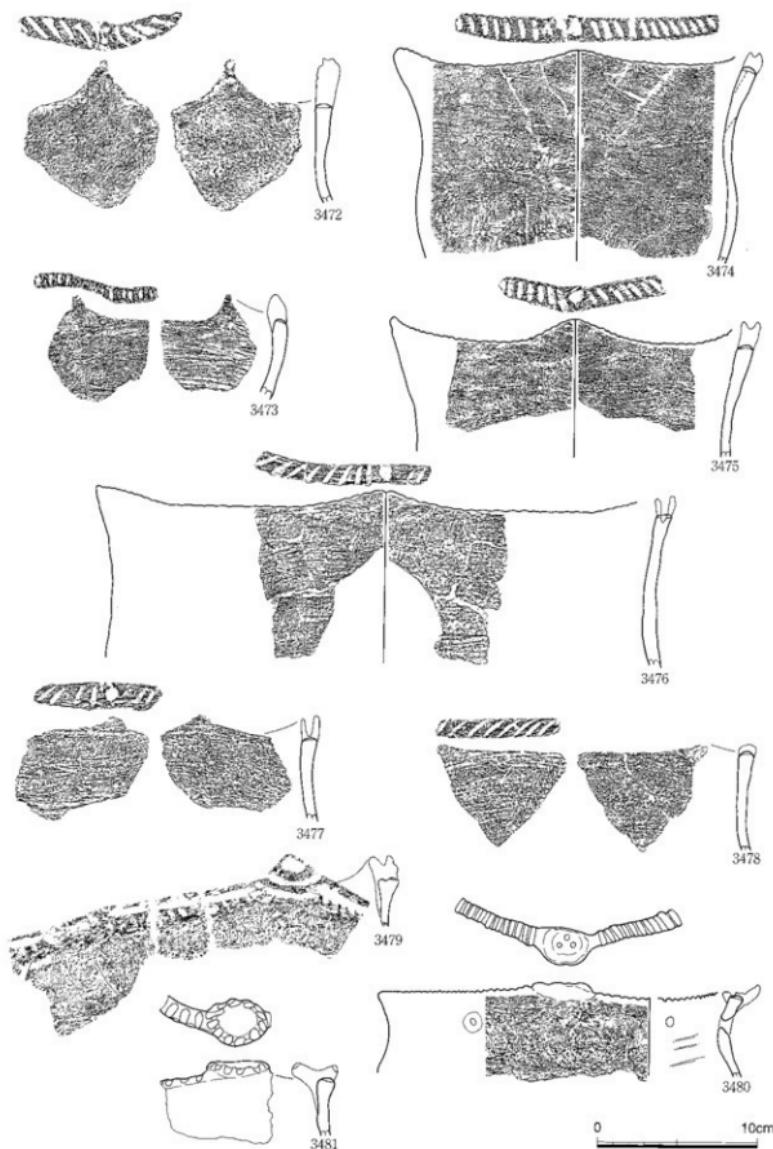
II群3類は口縁部を肥厚させたもので、内面を肥厚させるII群3類a、bは松ノ木式に含まれよう。II群3類cは口縁部外面を肥厚させたもので、3558の口縁部外面が下に垂れ下がるように拡張しており、松ノ木式より新しい要素と考えられる。他のものについては松ノ木式の範疇で捉えられるものである。



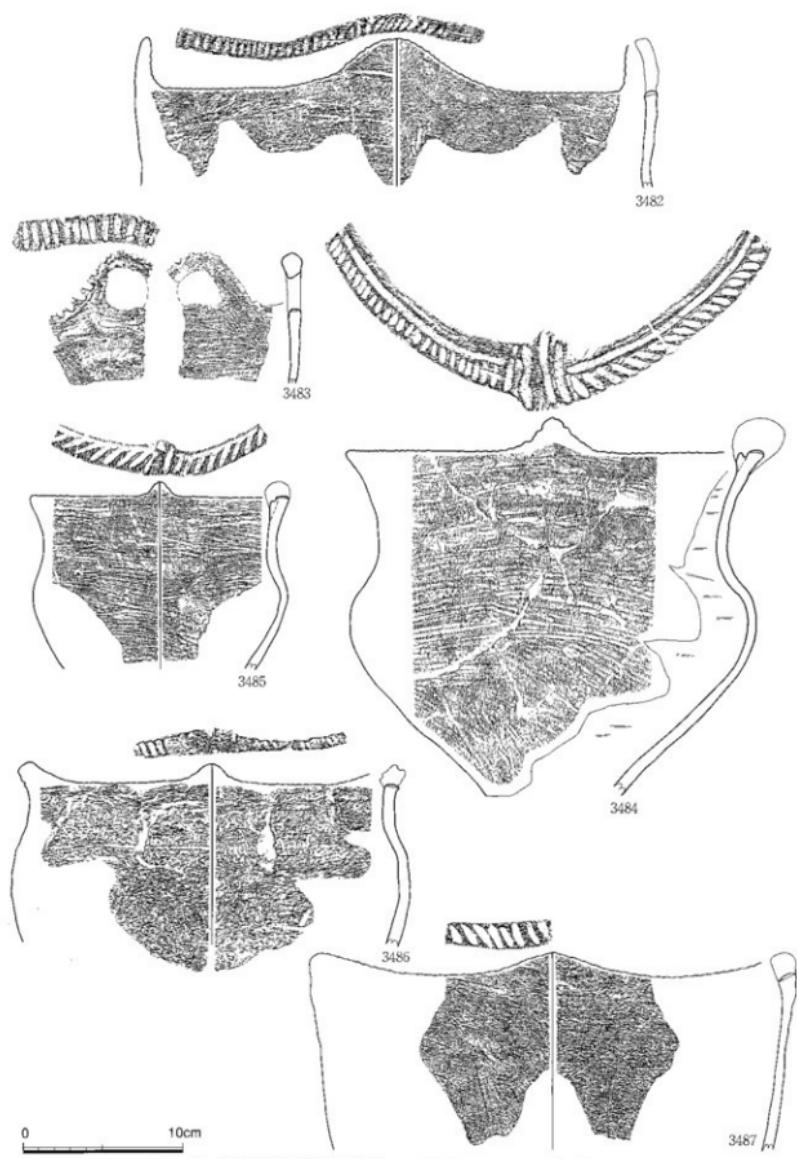
第69図 繩文後期土器粗製深鉢(1) I群1類



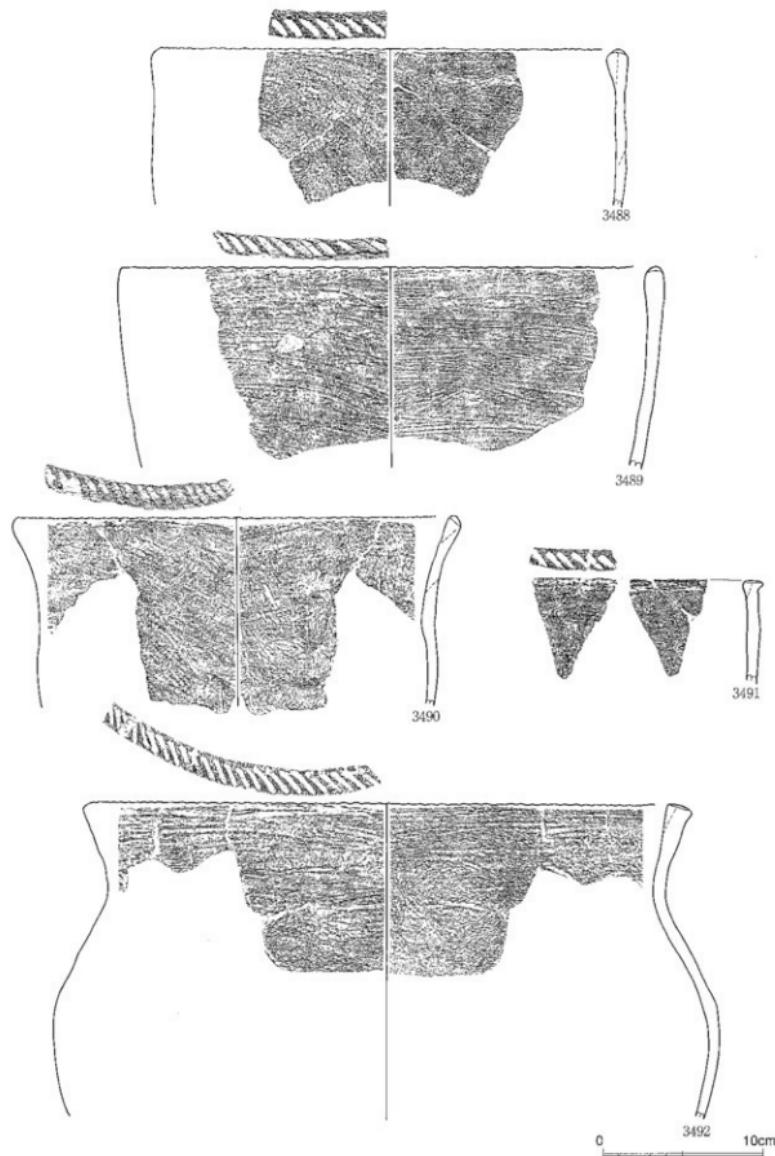
第70図 繩文後期土器粗製深鉢(2) I群1類



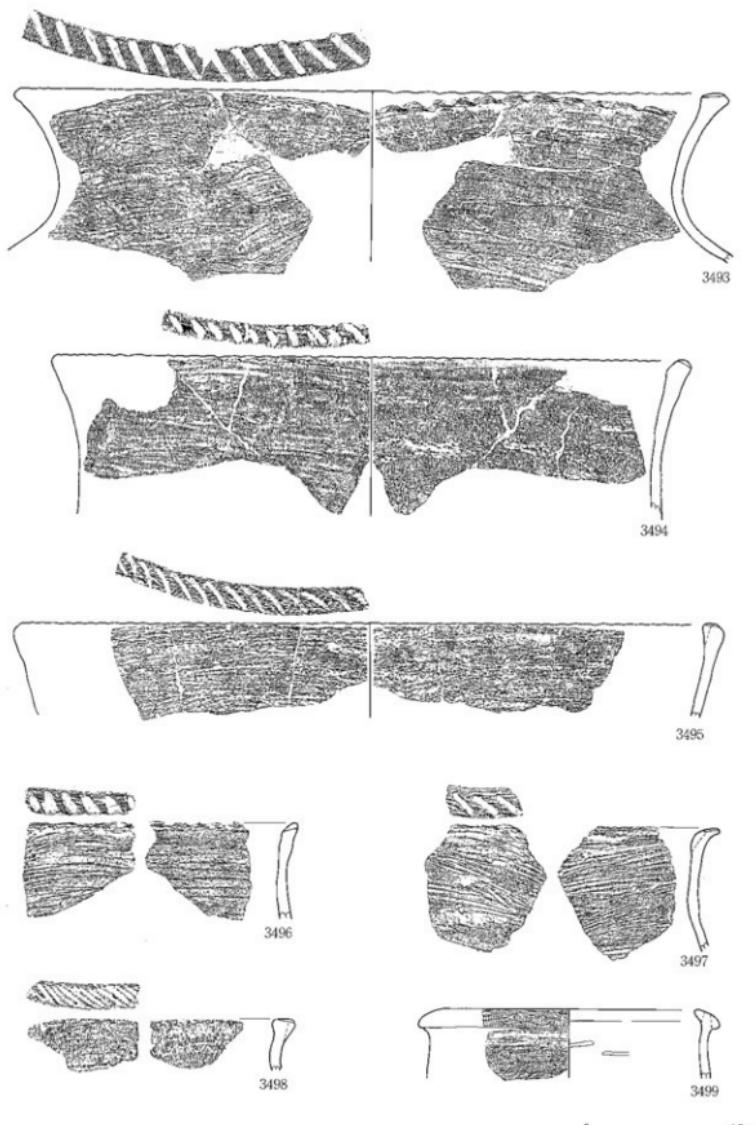
第71図 織文後期土器粗製深鉢(3) I群2類



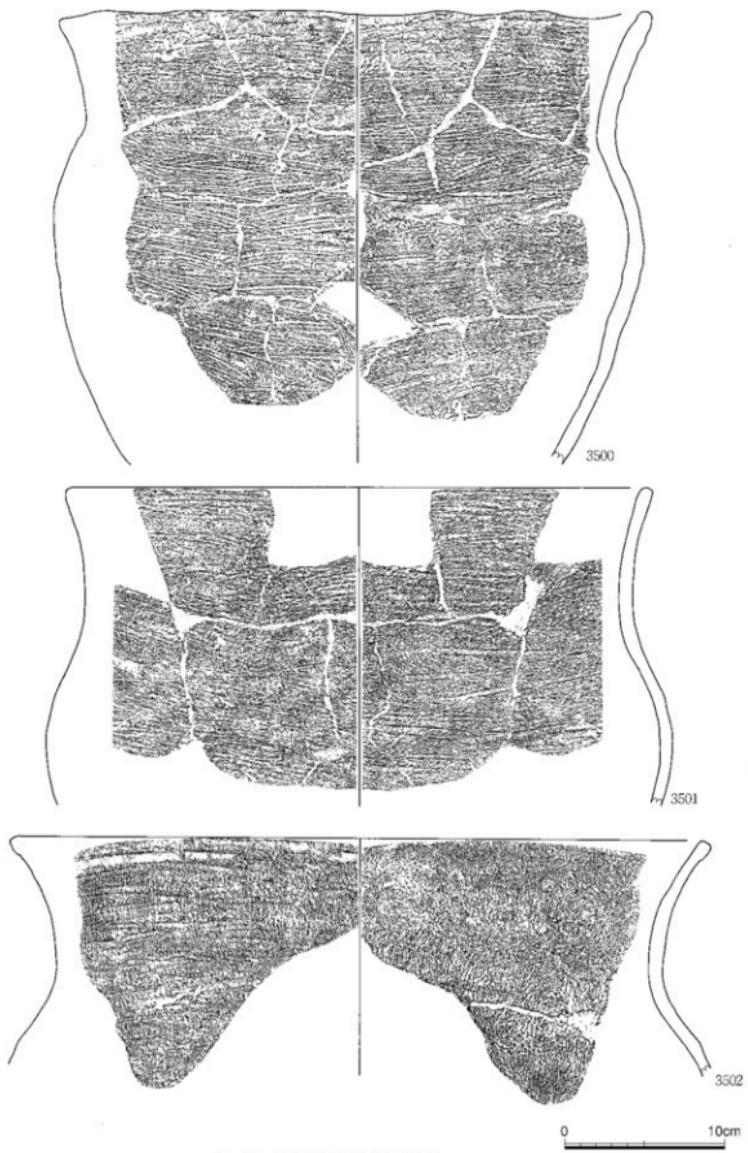
第72図 織文後期土器粗製深鉢(4) I群2類3482・3483、II群3類3484～3487



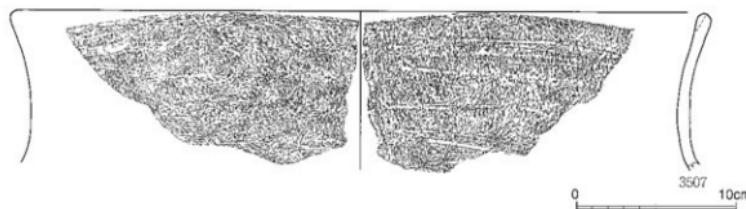
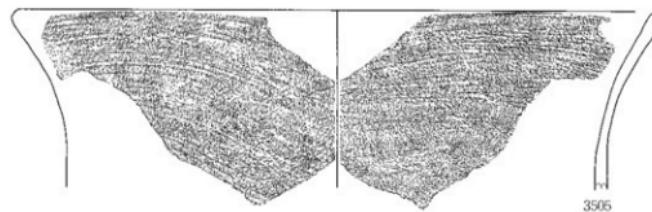
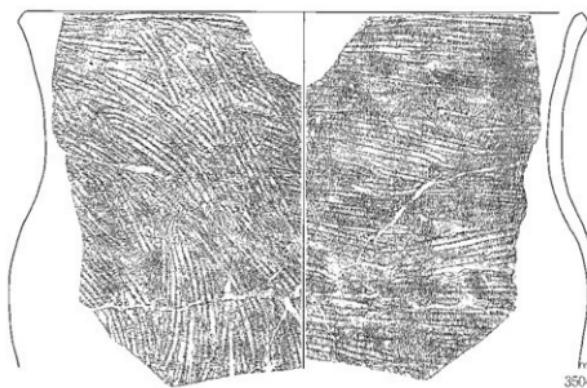
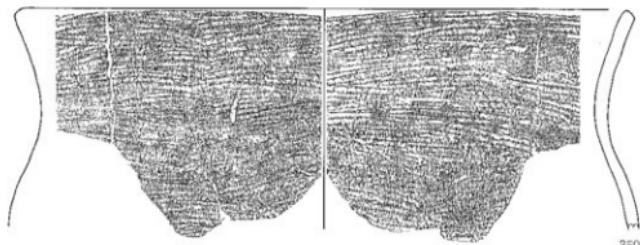
第73図 編文後期土器粗製深鉢(5) I群3類3488、I群4類3489～3492



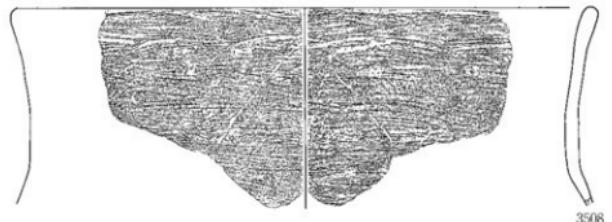
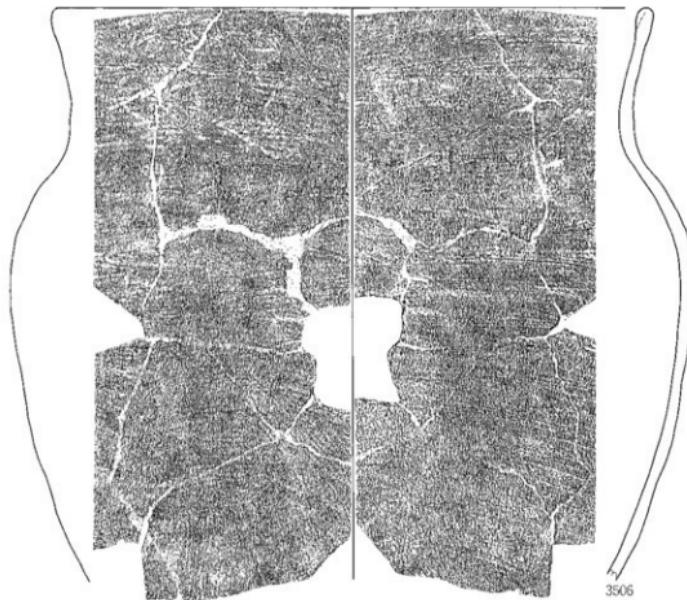
第74図 繪文後期土器粗製深鉢(6) I群4類3493~3498、I群5類3499



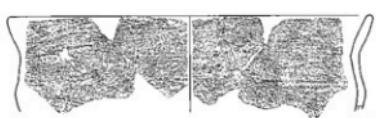
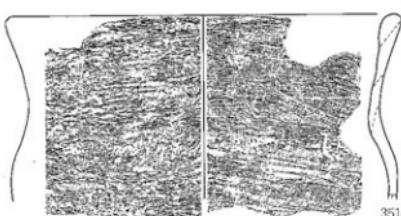
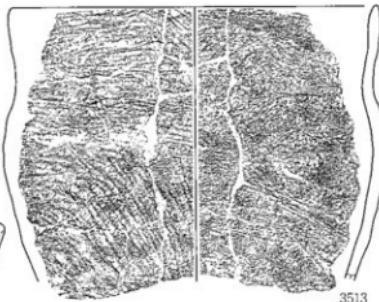
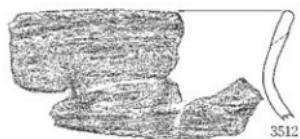
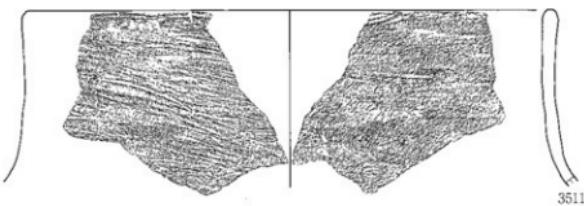
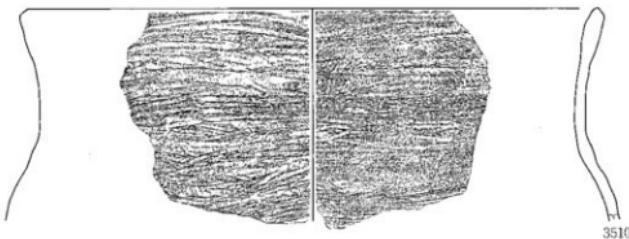
第75図 織文後期土器粗製深鉢(7) II群1類



第76図 繪文後期土器粗製深鉢(8) II群1類

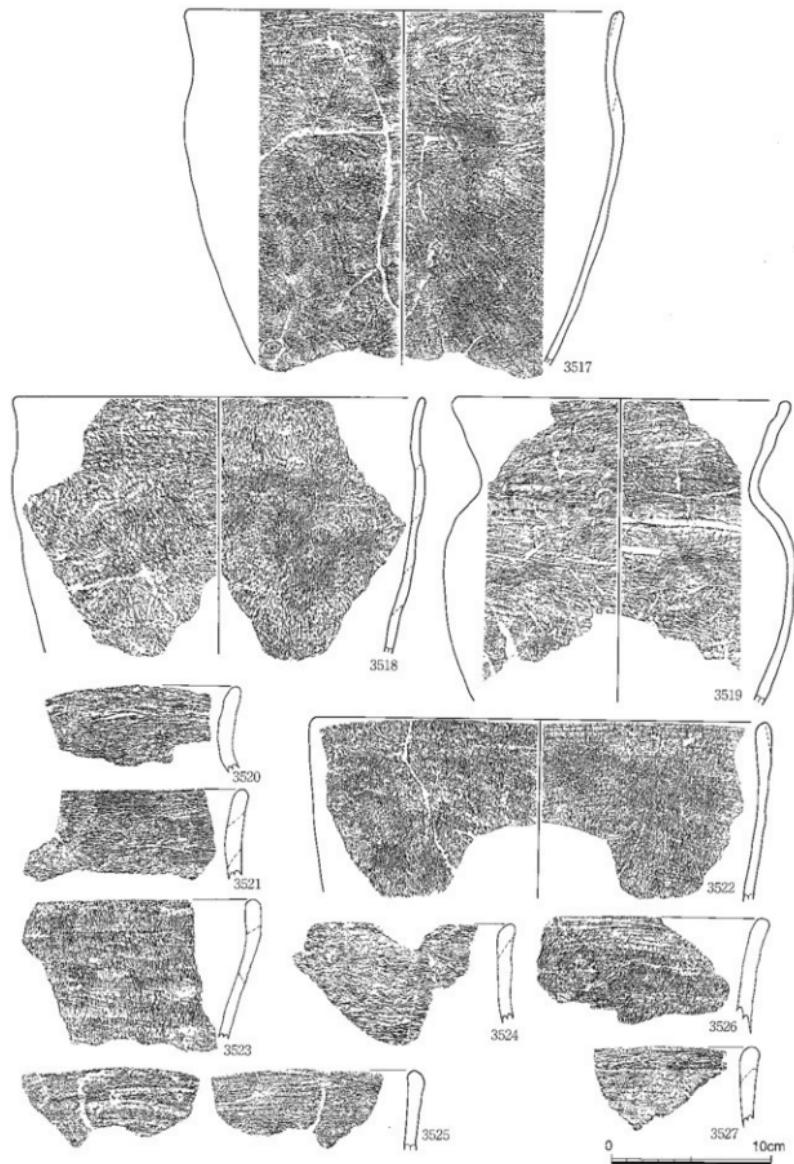


第77図 繩文後期土器粗製深鉢(9) II群1類

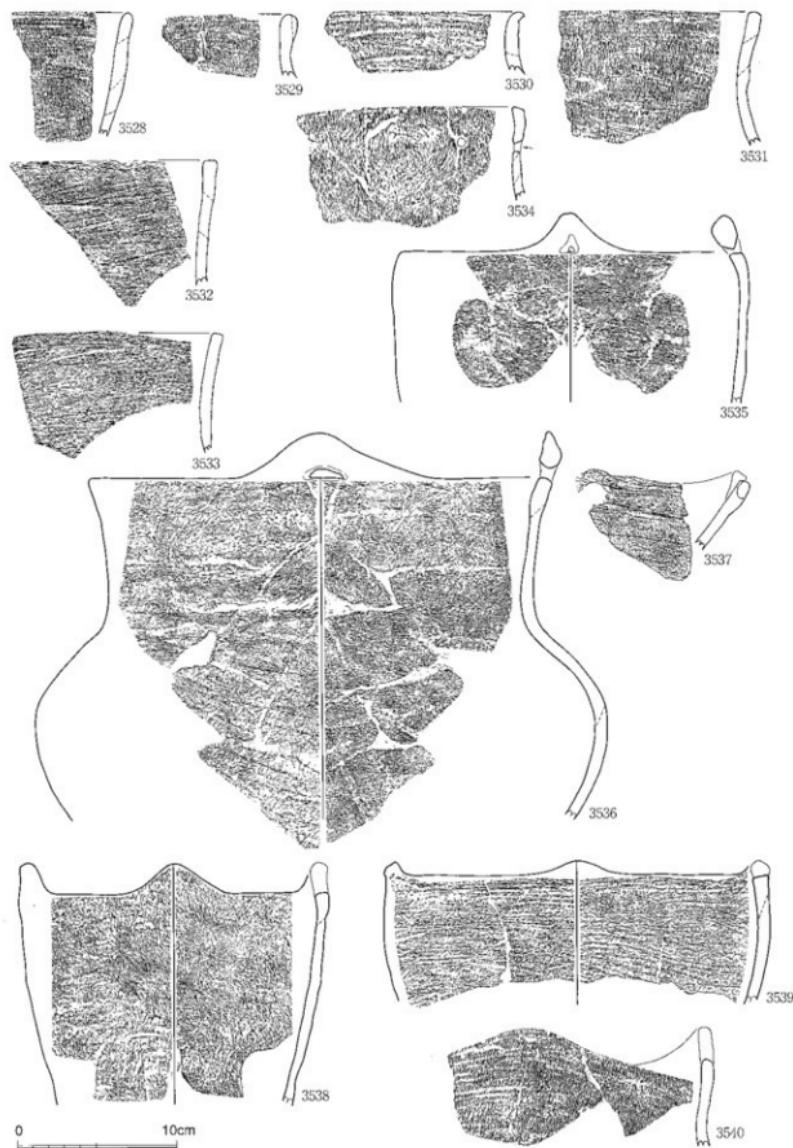


0 10cm

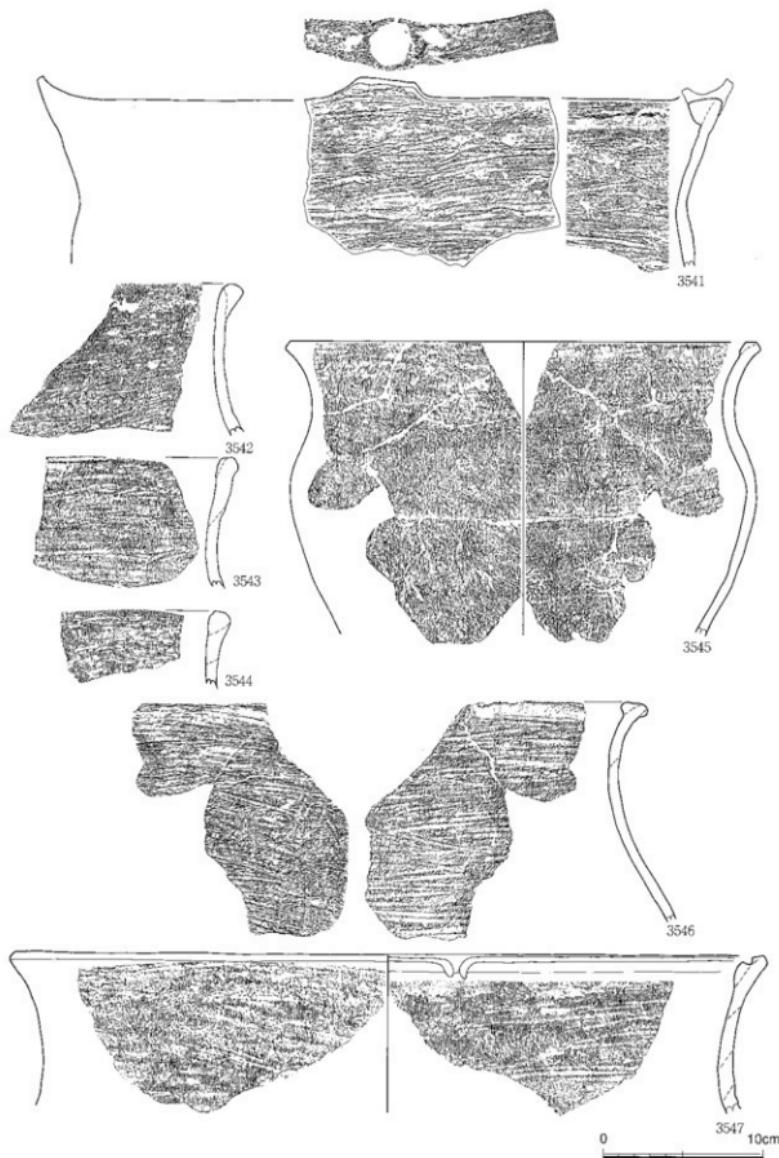
第78図 純文後期土器粗製深鉢(10) II群2類



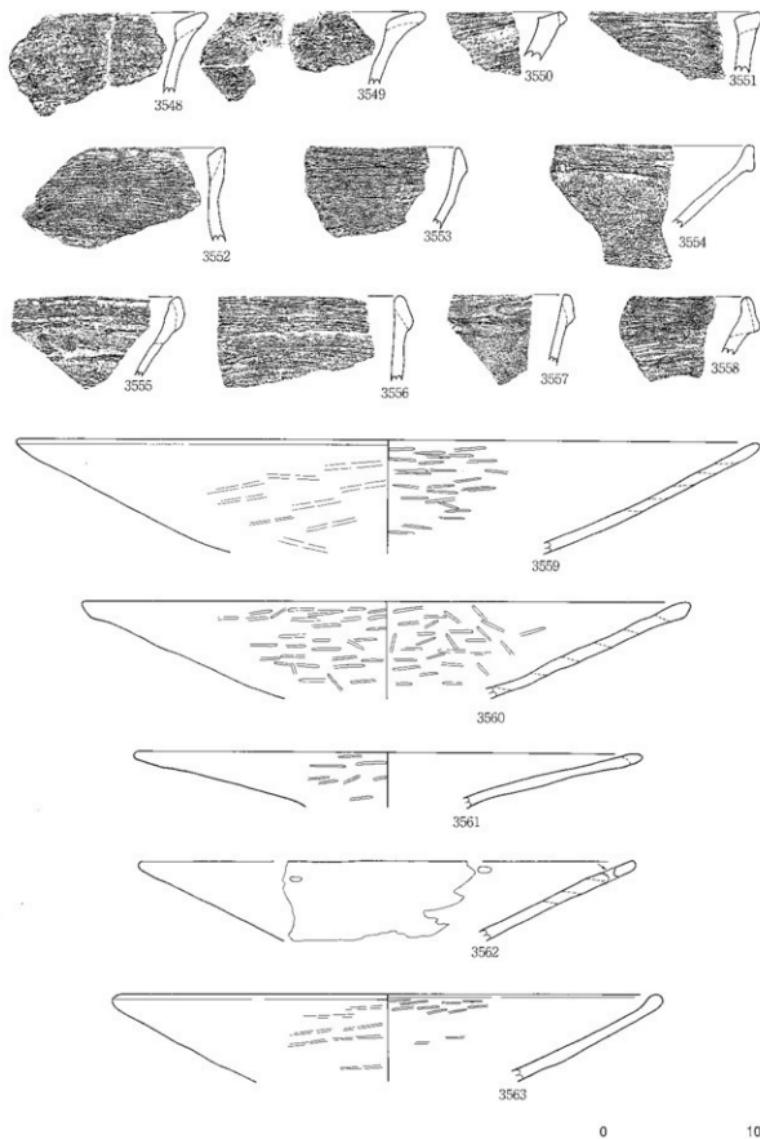
第79図 縄文後期土器粗製深鉢(11) II群2類



第80図 縄文後期土器粗製深鉢 (12) II群2類



第81図 繩文後期土器粗製深鉢（13） Ⅰ群2類3541、Ⅱ群3類3542～3547



第82図 縄文後期土器粗製深鉢(14) II群4類3548~3558、無文浅鉢(1) I群1類3559~3563

無文浅鉢

無文浅鉢は文字通り文様を有しない浅鉢である。器形的には皿のように大きく開くもの、皿状に大きく開き口縁部内面に肥厚帯を設けるもの、やや内湾気味に立ち上がるものの、ボール状に強く内湾するもの等に大きく分けることができる。器面調整は内外面共にミガキを施すものが多数を占める。こうした特徴は胴部文様を有する浅鉢と同様のものであり、文様を持たない点以外は際立った相違は認められない。機能的にはおそらく文様を有する浅鉢と同様と想定される。時期的には宿毛式、松ノ木式の2時期に含まれるものが大半であり、粗製深鉢と同様にこの時期に飛躍的に器種組成の一つとして増加する。分類はI群からV群まで分けたものの、型式差を目安とはしておらず、形態により分類基準を設け、その後編年的な位置付けを試みたい。

無文浅鉢 I 群 (第82、83図3559～3583)

素口縁で体部が皿状に大きく開くもの、体部は余り開かないものの口唇部を肥厚させず素口縁のものをI群とした。

I群1類

3559から3568は体部が大きく開くものである。最大のもので3559の45.4cmで、30cm台のものが大半を占め、最小のもので3566の22.8cmである。口唇部はやや丸味を持つものが多く、3563、3565は僅かに丸味を持ち肥厚する。3567は体部が大きく開く、口唇部内面を面取り状に尖らせる。整形は内外面共に丁寧なナデか、ミガキである。

I群2類

3569から3583は素口縁の口縁部破片である。体部がI群1類程大きく開かない可能性のものである。口縁端部が内湾気味となるもの、やや直立気味のものも存在する。口唇部は丸味を持つものが多く、3581、3583は口縁全体を僅かに肥厚させる。3574、3576、3579、3582は器肉が3mmから4mm程で他のものより1、2mm薄い。整形は内外面共に丁寧なナデかミガキであるが、3571は条痕の後、丁寧なナデを施している。

無文浅鉢 II 群 (第83、84図3584～3590)

口縁部を屈曲させるもので、口縁部上端のみを短く屈曲させるもの、また口縁部が幅広で強く屈曲させるもので、口唇部を肥厚させず、素口縁のものをII群とした。

II群1類

3584、3585は口縁上端のみが短く、内湾し体部は浅いものである。共に補修孔を有する。

II群2類

3586から3590はII群1類よりも口縁部が幅広で強く屈曲し、体部は丸味を持つものである。3586、3587は焼成前的小孔を口縁部上端に穿ったものである。整形は丁寧なミガキで、3588は黒色化し、3589は黒色の研磨となっている。

無文浅鉢 III 群 (第84図3591～3602)

口唇部をやや肥厚させ、玉縁状となるもの、口唇部内面に肥厚帯を設けて突帯状となるもの、口唇部を肥厚させ口唇部上端を平坦にするものをⅢ群とした。器形はやや外傾気味のものが多い。

III群1類

3591から3593は玉縁状に口唇部を肥厚させたものである。3591は直立気味に立ち上がる。3592は外反し、3593は内湾する。

III群2類

3594から3602は口唇部内面を肥厚させるもので、中には突帯状になるものも含めた。3594から3598は口唇部内面を肥厚させ、丸味を持つものである。3599は口唇部全体をやや肥厚させるものの、口唇部内面は折り返し状に肥厚させる。3600から3602は口唇部内面を肥厚させ特に突き出るものである。

III群3類

3603から3606は口唇部を肥厚させ、口唇部上端が平坦なものである。3603は体部に僅かに丸味を持つ。3606は上端ではなくやや内面気味のものである。

無文浅鉢IV群(第84、85図3607～3622)

口縁内面に肥厚帯を設け、体部は大きく開くものをIV群とした。

IV群1類

3607から3610は口縁内面に肥厚帯を設けるか、または口唇部を肥厚させるもので、体部内面に段を有するものである。3607、3608は体部が大きく開き、3607の口径は49cm、3608が48cmである。口縁内面に肥厚帯を設け、体部内面に段を設けるものである。3609は口縁内面が肥厚帯とならず、口唇部を肥厚させたもので、体部は大きく開き、体部内面に段を有する。3610は同様のもので、口唇部に沈線を2条巡らせたものである。

IV群2類

3611から3619はIV群1類と同様であるが、更に口縁内肥厚帯が幅広になり、体部内面に段を有しないものである。体部は大きく開くもので占められている。3611の口径が49cm、3612が37cmである。3612、3613、3619は内面がやや黒色化し、内外面共に黒色化するものは3615、3617、3618である。

IV群3類

3620から3622は体部が浅く大きく開くもので、口縁部内面を幅広く肥厚させ、口縁が短く外反するものである。3620の口径は40cmを測り、体部は大きく開く。口縁部には5個の焼成前円孔を有するものと考えられる。外面の整形は条痕後、ナデで内面は丁寧なナデである。3621、3622の整形は内外面共にミガキである。

無文浅鉢V群(第85図3623、3624)

V群は口縁内面のみに2条の沈線を有するもので、3623は口縁内沈線端部は上方に曲折する。3624は口縁内に肥厚帯を設け、沈線2条を巡らせるもので、沈線が深くなる。外面の整形は条痕を残し、内面は研磨し黒色化する。

無文浅鉢VI群 (第85図3625)

VI群は3625のみで、口縁部を拡張し上端は平坦で、やや外面に突出する。内外面共に赤彩を施す。2つの破片が接合しており、補修孔を2個有する。また胎土が他の浅鉢類とは違い、砂紋を多く含む。

無文浅鉢の編年的位置付け

無文浅鉢の時期を決定する方法は、文様帶の分析が不可能なため、浅鉢の器形との共通点を見出し、編年的位置付けを検討してみたい。

無文浅鉢I群は体部が大きく開き、1、2類に細分を行った。1類は皿状に大きく開き、口唇部が素口縁のものである。2類はやや体部が立ち上がり気味のもので、素口縁である。器形的には宿毛式に含まれる浅鉢I群1類に似るもの、浅鉢I群1類の体部内面には段を有することから相違する。浅鉢には他に近い形態のものが見出せないところから、また浅鉢I群1類と同様の形態を探るものは無文浅鉢IV群1類に存在するところから、無文浅鉢I群上器は浅鉢I群1類よりも新しくなり、松ノ木式に伴う可能性がある。

無文浅鉢II群は口縁部が屈曲するもので、II群1類は口縁部が短く立ち上がり、II群2類は口縁部が長く、強く屈曲する。1類については近似する器形のものは見当たらず、2類については浅鉢III群に比較的多く認められ、中でも浅鉢III群3類に同様の形態を探るものが多く、整形についても研磨に近い器面調整を施す点も同様である。口縁部が屈曲し、内湾するこうした形態のものは松ノ木式に含まれるものである。

無文浅鉢III群は口唇部を僅かに肥厚させるもので、浅鉢I群5類にやや似るものの、浅鉢I群5類の体部内面に段を有するものも含まれており、やや無文浅鉢III群とは相違する。編年的には宿毛式、松ノ木式のどちらに組み込まれるかは断定できない一群である。

無文浅鉢IV群は口縁部を肥厚させたもので、1類は体部内面に段を有するもので、宿毛式に相当する。2類は口縁部内面を肥厚させたもので、浅鉢に類例は認められないものの、松ノ木式に含まれよう。3類は口縁部が肥厚し、短く外反するものである。浅鉢III群7類に近似するもので、浅鉢III群7類についても型式名を明確にできていないが、やや宿毛式より新しい様相と考えられ、松ノ木式の範疇で捉えられる可能性が強い。

無文浅鉢V群は口縁部内面を肥厚させ、沈線を巡らせるものである。こうしたものは宿毛式の新相段階以降に認められるもので、松ノ木式に含まれる可能性が高い。

無文浅鉢VI群は赤彩土器で、赤彩は比較的宿毛式に多く認められる特徴であるものの、赤彩の浅鉢は松ノ木式の段階まで残存するものである。口縁部を拡張し、上面を平坦にするものは、宿毛式の新相段階以降に認められるものである。

宿毛式、松ノ木式は連続的に変化するために、文様帶である程度の線引きは可能なものの、無文浅鉢の編年位置付けは、器形のみからの検討のため、明確に型式名を特定することは困難である。明確に宿毛式に含まれるものは、IV群1類である。松ノ木式に含まれるものは、II群2類、IV群2、3類である。他のものについては宿毛式とも松ノ木式のどちらにも認められる形態である。しかしながら、宿毛式に含まれる可能性があるとしても、宿毛式新相段階以降のものであり、相対的に松ノ木式に含

まれる可能性が強いものと考えられる。

無文鉢

無文鉢と考えられるものは5点と極めて少ない。器形により以下の3群に分類を行った。

無文鉢Ⅰ群(第85図3626)

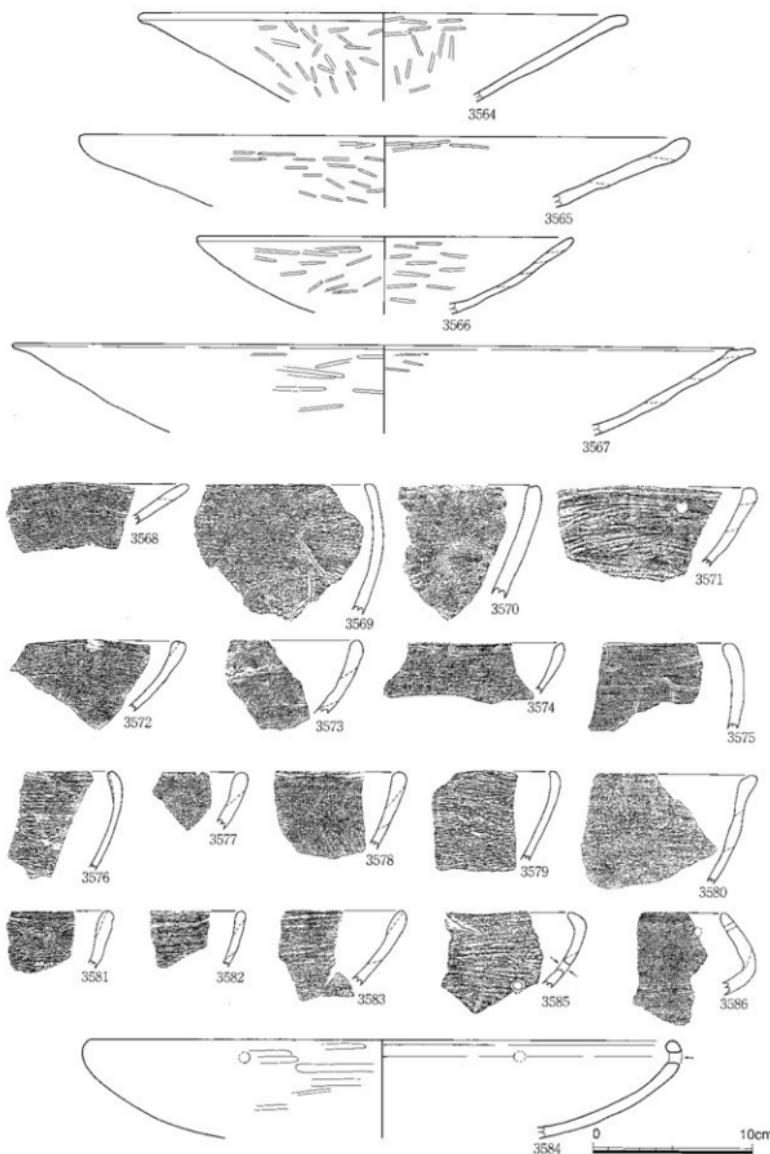
3626は小形のバケツ状の鉢で、小突起を2個有する。口縁部で僅かにくびれ、胴部は緩やかにすぼまり、平底の底部となる。底部脇が僅かに突出する。法量は口径15.4cm、器高13.5cm、底径5.7cmである。整形は粗く内外面共にナデである。外面に煤が付着する。宿毛式の範疇に含まれよう。

無文鉢Ⅱ群(第85図3627～3629)

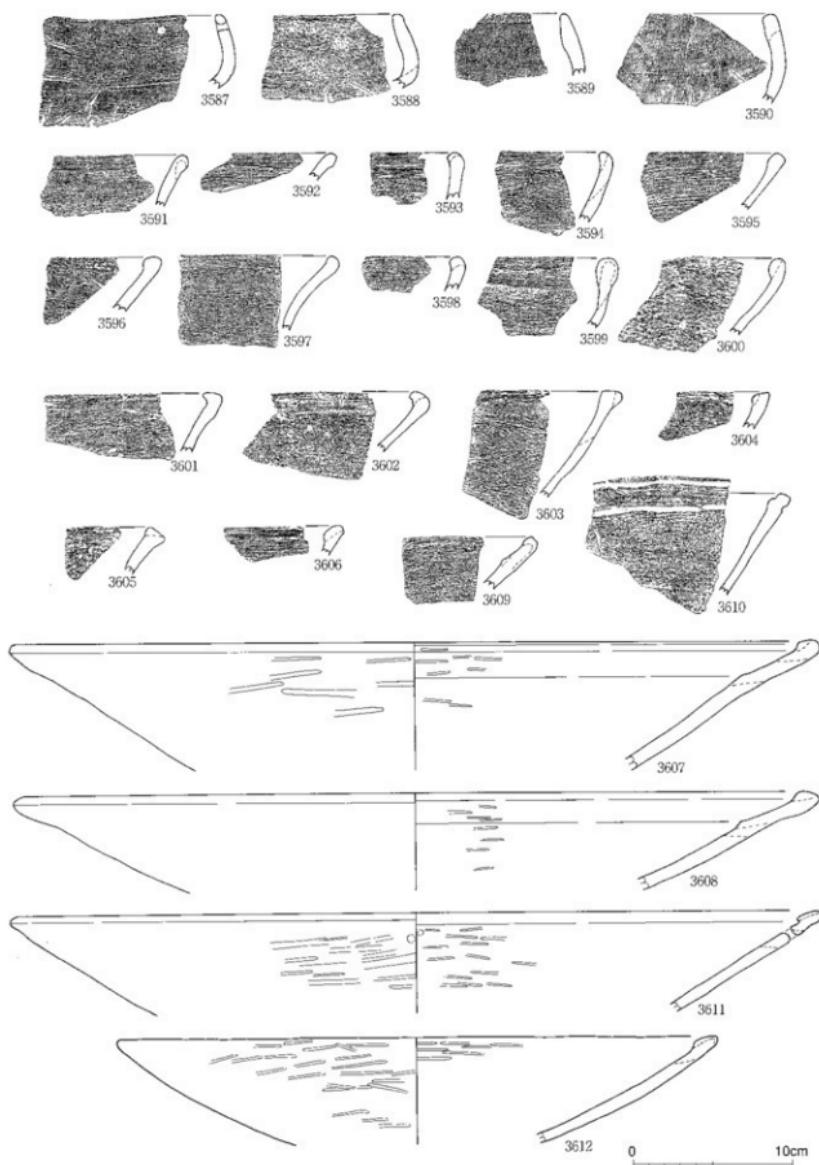
3627から3629は頭部がくびれ、口縁が外反するものである。体部は僅かに丸味を持つ。3629は口縁部を僅かに肥厚させ、外傾させる。鉢Ⅵ群と同様の形態のもので、全縄文地とならないものである。松ノ木式に含まれる。

無文鉢Ⅲ群(第85図3630)

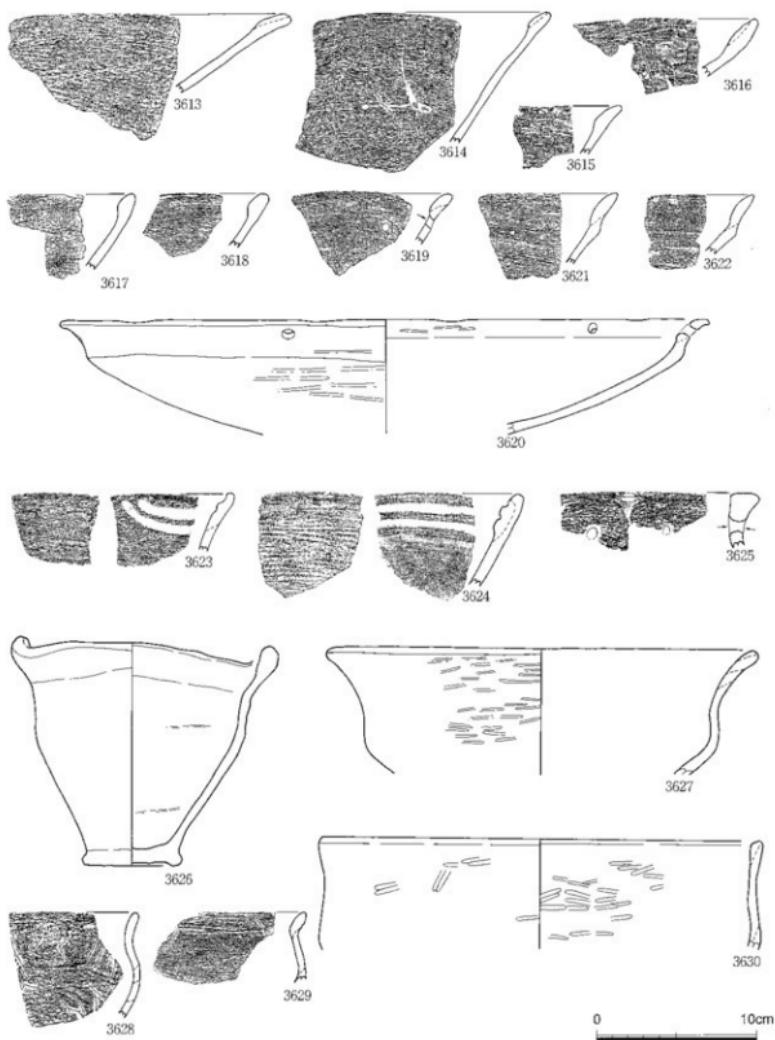
3630は口縁部が直線的に立ち上がるもので、肩部で屈曲する。口径27cmを測る。内外面共に丁寧なミガキである。松ノ木式に含まれる。



第83図 繩文後期土器無文鉢(2) I群1類3564~3568、II群2類3569~3583、II群1類3584~3585、II群2類3586



第84図 條文後期土器無文浅鉢(3) II群2類3587~3590、III群1類3591~3593、III群2類3594~3602、III群3類3603~3606、IV群1類3607~3610、IV群2類3611~3612



第85図 繪文後期土器無文鉢(4) IV群2類3613～3619、IV群3類3620～3622、V群3623・3624、VI群3625、
無文鉢 I群3626、II群3627～3629、III群3630

双耳壺(第86図3631)

3631は小形の双耳壺である。口径5.2cm、器高7cm、底径8cmを測る。1対の瘤状の耳を有し、沈線が耳部に絡みつき、横から小孔が貫通する。頸部は直線的に立ち上がり、2対の波頭状文様を施す。胴部は2段に微隆起帶で棒状区画文を横位に配置し、区画内に繩文を施文する。胴部下半は無文帯となり、底部は平底である。胎土に石英を多く含む。時期的には宿毛式に含まれる可能性が高い。

注口土器(第86図3632～3634)

3632から3634は注口土器と考えられる。3632は口径11cmを測り、頸部は直立気味で無文である。注口部は部分的に残存しているだけで上向く。体部は欠損する。3633は注口土器の注口部で注口部外径3.5cm、内径2.2cmを測る。端部が肥厚する。微石英粒を多く含む。3634は体部が繩文地の注口土器と考えられる。体部は丸味を持ち、注口部分と考えられる部分が僅かに残存する。頸部には沈線が1条巡る。時期的には後期前半期に所属するものの、型式名は特定できない。

壺(第86図3635～3640)

3635から3640は壺と考えられる口縁部破片である。頸部がくびれ、口縁が狭いもので深鉢、鉢の器種に含まれない一群を壺とした。3635は頸部が長く立ち上がり、強くくびれるものである。肩部は張る。口唇部は肥厚せず、素口縁である。整形は頸部に縱方向の細かなミガキを施し、肩部部分で方向をえらぶ、横方向となる。内面は丁寧なナデである。3636から3640は口唇部が肥厚するもので、3636から3639は口縁が6cmから8cmと狭く、小形のものである。3639は肥厚した口唇部に沈線を1条巡らせる。3640はやや口径が広くなり、器肉も厚いものである。頸部が外反し、口唇が丸味を持つ。

時期は後期前半に所属するものの、型式名を特定できるものは少ない。特に3635は類例が認められず、松ノ木式かそれ以降の可能性が考えられる。3636から3639は口唇部の形態から宿毛式に含まれる可能性があるものの、断定はできない。3640は松ノ木式に含まれよう。

壺類(第86図3641～3650)

3641から3650は胴部破片で器種が明確でないものの、深鉢・浅鉢に含まれない可能性の強いものを壺類とした。3641から3643は同一個体で3641には大振りの把手が付く。体部との接合部分に縱方向から円孔を穿つ。把手には繩文を施文する。他の3642、3643は繩文を施した隆帶で棒状区画文を形成する。隆帶の脇には沈線を施し、また隆帶上にも沈線を付加する。区画内は丁寧なミガキを施す。3644も隆帶で円文、区画文を形成し、隆帶上には繩文を施す。3645は曲線的な隆帶で隆帶上に繩文と沈線を施す。3646も曲線的な隆帶になるものと考えられ、繩文のみを施す。3647は繩文を施した微隆帶と沈線により文様構成である。沈線による入組文となる。3648は強く屈曲する胴部破片で曲線的な隆帶に繩文を施す。3649はやや幅広の微隆帶で微隆帶上に繩文を施し、脇の沈線は細く浅い。3650は沈線文系のものである。太く深い沈線により円文をモチーフとする。肩部で段状にくびれる。

所属時期は宿毛式に含まれる可能性があるものの、断定はできない。3650のみは松ノ木式に含まれよう。

壺類底部 (第86図3651、3652)

壺類の底部と考えられるものは、3651と3652である。3651は体部下間にまで沈線と集合沈線を施す。体部は丸味を持ち、底径は5cmと小さく上部となる。砂粒を多く含む。3652は貼付の丸底で体部は丸味を持ち、下半は無文である。砂粒を多量に含む。

3651は松ノ木式かそれ以前の時期が考えられる。3652は型式名は特定できないものである。

突起・把手類

突起には深鉢、壺類の装飾的な面を持つものである。宿毛式の段階では口縁部は波状口縁、山形口縁となるものは多いものの、突起類を付して大きく装飾することは比較的少なく、次の松ノ木式の段階で突起、把手を持つものが多く見られるようになる。器種別に記述を行う。

深鉢突起 (第87図3653～3665)

3653から3656は深鉢の耳状突起である。3653は左方向に開き、接合部分は透かし状の孔を2ヶ所有する。耳部の端部には口縁部から突起部分の頂部にかけてキザミを施す。3654は右方向に開き、キザミ等は施さないものである。3655は瘤状突起に近い耳状突起で、右方向に開く。突起の両脇から短沈線キザミを加える。3656は小振りの耳状突起で、口縁部には短沈線キザミを施すものの、突起部分にまでは施さないものである。頭部には垂下沈線を施す。

こうした耳状突起を有する一群は松ノ木式に特徴的に見られるものである。宿毛式の段階で若干初源的な耳状突起は出現するものの、頭部無文帯を形成することなく、胴頭部からの文様帯が口縁部の文様帯と連繋するものである。こうした大形の突起類は松ノ木式の段階に出現し、次の彦崎K I式、津雲A式の時期には再び衰退し、平縁の口縁形態を探るものが多くなる。他地域では山陰の布施式、豊後水道圏の平城I式に瘤状突起として相呼して出現するようである。九州側では平城I式の次の鐘崎式の段階に瀬戸内とは違う瘤状突起として継承されるようである。

3657から3658は口縁部にブリッジ状の突起を付したものである。3657はやや斜方向に付したもので、ブリッジ状に口縁部からの短沈線キザミを連続的に施し、また縄文も施文する。3658も短沈線キザミをブリッジ状に施したものである。3659は小振りなブリッジで短沈線キザミを施す。深鉢3096、3067、3100に同様の類例が認められる。松ノ木式に含まれるもので、他地域では頭部に橋状把手として貼付されるものが多く、宿毛式には類例は認められないものの、瀬戸内の福田K II式系統には類例が若干認められ、その後の布施式、平城I式には類例が多くなる。平城I式の後続型式の鐘崎式には連綿と橋状把手は残るもの、四国、中国地方では橋状把手類の盛行は該期に限定される。

3660から3662は山形状の突起である。3660は肥厚させた口縁部に山形状の突起を付す。突起上に縦に沈線を走らせ、両脇に部分的にキザミを施す。突起の脇の口縁部には棒状区画文を施す。3661は入山形状の突起で両脇に幅の広い沈線を施す。頭部には浅い円形刺突を施し、突起の根元部分には弧状の沈線2条を施す。3662も入山形状の突起で、渦巻状に沈線を巡らせ、頭部には円形刺突を穿つ。

3663は瘤状突起で縦に沈線を、また貝殻擬縄文を施す。深鉢3079から3090に多くの類例が認められ、松ノ木式の範疇に含まれるものである。3099等は瘤状突起上に円形刺突を2つ施し「8字状」となるものが多い。こうした瘤状突起は平城I式に多く、相呼的な影響が考えられる。「8字状」の円形刺突は

平城 I 式の橋状把手上にも施す類例が知られており、時期的な近似を示す指標となっている。

3664は山形口縁状に横位の突起を付したもので、貼付部分は孔となる。口縁部からの短沈線キザミは突起部分に連続的に施され、縄文も付加する。宿毛式の深鉢3020に類例が認められるものの、3664は口縁部のキザミが短沈線キザミとなるところから松ノ木式に含まれる可能性が強い。

3665は大きく突き出た突起で、頂部に円形刺突と渦巻き状の沈線と縄文を施す。突起の脇には円孔と円文を配する。

筒状突起(第87図3666～3668)

3666から3668は筒状突起と考えられるものである。3666は深鉢の突起と考えられ、口唇部が僅かに肥厚し、縄文を施す。3667は深鉢の小形の筒状突起と考えられる。口唇部を僅かに肥厚させ、縄文原体Iを施し、口唇下に沈線を巡らせる。筒状突起の下半には磨消縄文を施す。3668は無文深鉢の筒状突起と考えられる。口唇部を肥厚させる。

無文深鉢突起(第88図3669、3670)

3669、3670は無文深鉢の突起と考えられるものである。3669は口縁部を大きく肥厚させ、耳状突起のようにならず、低い突起である。突起上には何も装飾は付加せず、幅広の沈線を引く。3670は山形口縁で大きな円孔を有するものである。無文深鉢の3555に近似したものである。3669は肥厚の度合いからして松ノ木式に含まれる可能性が強く、3670は山形口縁で円孔を有するものは深鉢宿毛式、松ノ木式共に類例は認められる為、どちらの型式に含まれるかは不明である。

無文浅鉢突起(第88図3671)

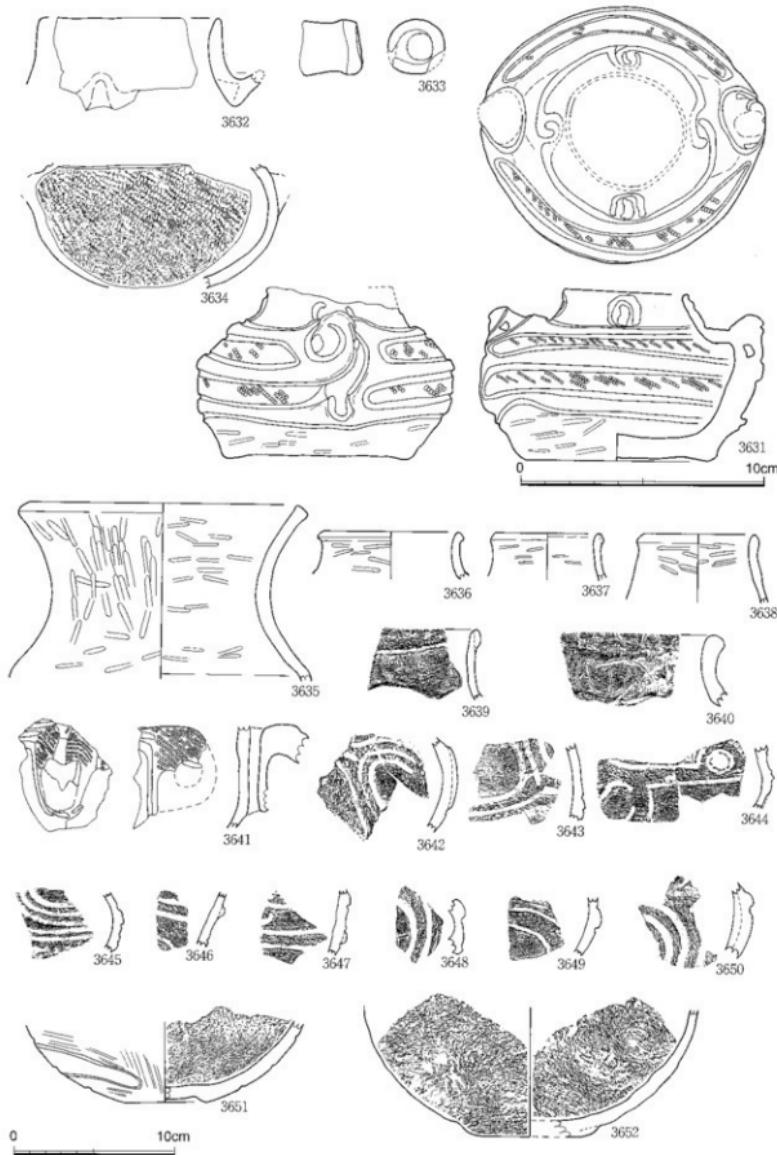
3671は山形口縁で僅かに肥厚させ、下に円孔を穿つ。

把手(第88図3672、3673)

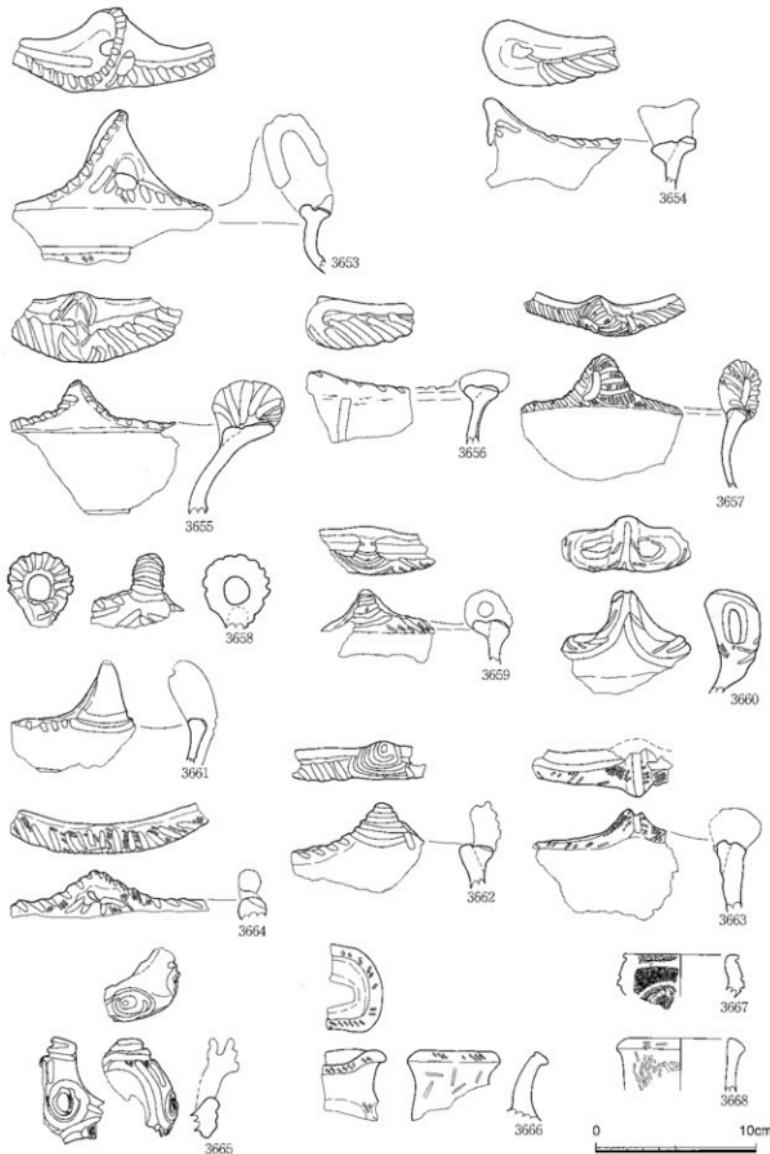
3672、3673は深鉢の把手部分である。3672は口縁部から頸部を跨いで胴部に貼付したものである。幅の広い把手の両端には沈線と縄文を施す。口縁部の接合部分には上方からの円孔を有し、胴部には接合部分下には「スペード」状文である。類例は認められないものの、宿毛式並行期と考えられる。3673深鉢の橋状把手と考えられる。細く長い棒状の把手で、下部の接合部分は磨消縄文となる。松ノ木式に伴う可能性が高い。

壺類突起(第88図3674～3678)

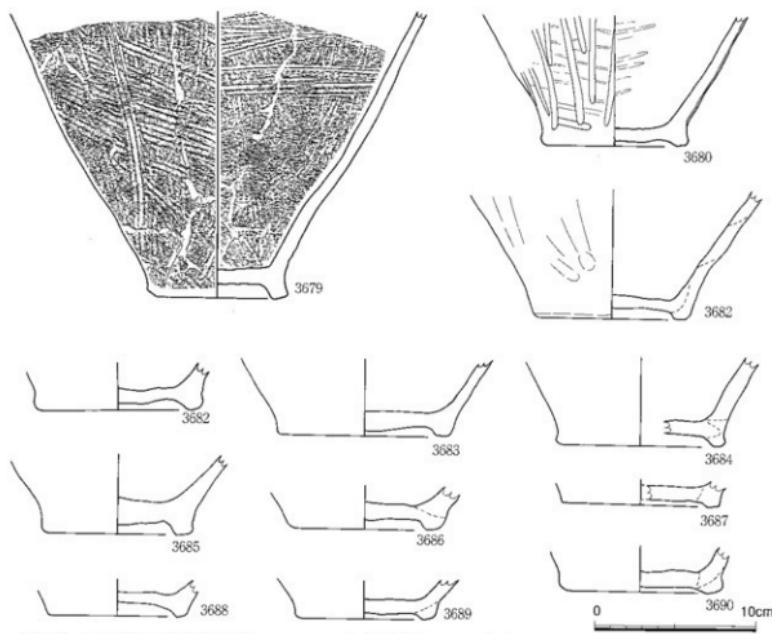
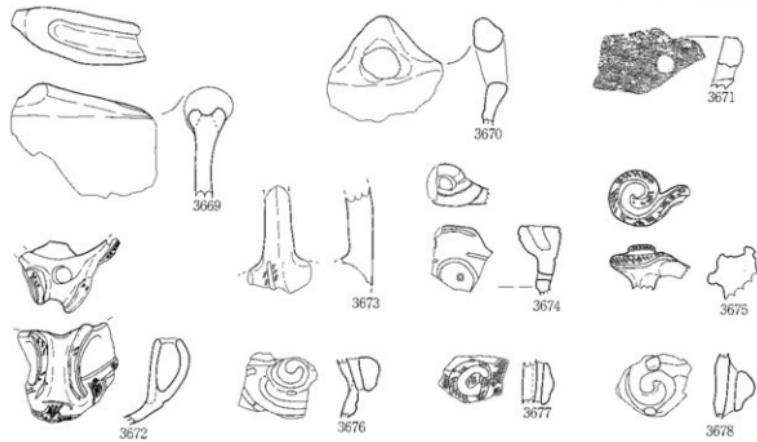
3674から3678は壺類の突起と考えられるものである。3674は小形のL字縁部に付加した突起で、捻って中を中空にしたものである。突起部分の上端には沈線を巡らせる。3675は螺旋状の突起で、渦巻き状に微隆帯を巡らせ縄文を施す。3676から3678は胴部に貼付された渦巻き状の突起である。接合部分に円孔が貫通する。3677は縄文を施す。双耳壺の突起の可能性がある。時期は松ノ木式の可能性が強い。



第86図 繩文後期土器 双耳壺 3631、注口土器 3632～3634、壺 3635～3640、壺類 3641～3650、壺類底部 3651・3652



第87図 繩文後期土器深鉢突起 3653～3665、筒状突起 3666～3668



第88図 繪文後期土器無文深鉢突起 3669・3670、無文浅鉢突起 3671、把手 3672・3673、臺類突起 3674～3678、深鉢底部(1) I群1類3679～3690

底 部

底部は大きく分けて深鉢と浅鉢の底部に分けることができる。しかし、深鉢の場合は文様を持たない粗製深鉢、浅鉢も同様に無文浅鉢を器種分離はしたものの、ここでは特に区分しなかった。また鉢の底部も他の器種と鑑別が困難なため、明確に鉢に含まれるものだけを抽出した。

深鉢底部 (第88、89図3679～3722)

深鉢の底部は大きく分けて高台状底部と平底に分けることが可能である。底径は8cmから10cmのものが最も多く、10cmを超える大きなもの、4cm前後の小形のものに分けることができる。底径による分類は設けず、形態により分類を設けた。高台状底部となるものをI群、平底のものをII群とした。

深鉢底部 I群 1類

3679から3693は高台状底部で端部が平坦で幅の広いものである。3679は粗製深鉢の底部で底径8.6cmを測る中形品である。高台を貼付したものと考えられる。3680は体部下半に沈線文を有する高台状底部である。3682から3690の底径は8cmから10cm前後を測る中形品である。3691は底部器肉が薄く、高台部がやや押し潰され巻き込んだようになる。3692は底径7cmでやや小形で、体部下半には磨消繩文を有する。3693は底径5.7cmの小形のものである。体部が開く。

深鉢底部 I群 2類

3694から3698は高台状底部で端部がI群1類のように平坦ではなく、丸味を持つものである。底径は8cmから9cmのものが多く、3698のみ10.4cmを測り、特に高台部分に丸味を持つものである。

深鉢底部 I群 3類

3699から3711は低い高台状底部である。3703は体部の欠損部分が擬口縁状になる。3708は底裏がややくぼむ。3710は体部下半に沈線文を有する。3711は低い高台状底部は幅が1.8cmと幅広である。底径は3699が11cmで最も大きく、他のものは8cmから9cmのものが多い。

深鉢底部 I群 4類

3712、3713は小形の底部で尖り気味の低い高台状底部である。3712は底部脇がやや張り、底裏は僅かにくぼむ。3713は体部は直線的に開く。

深鉢底部 I群 5類

3714、3715は僅かに高台状底部となり小形のものである。3714はやや幅の広い高台で体部は直線的に立ち上がる。3715は高台状底部となるものの、底裏は僅かにくぼみ、体部は開く。

深鉢底部 II群

3716から3722は平底である。底径は3716が9.6cmで最大である。他のものも9cm前後を測り、大形の分類に含まれるものが多い。最小のもので3721の7.2cmである。3716から3719は体部が直線的に開くもので、3720から3722は底部脇が張るものである。3721は体部が開き器肉も薄い。

浅鉢底部 (第89、90図3723～3742)

浅鉢の底部は僅かに高台状になるものと平底のものに分かれる。深鉢の底部の整形はナデ整形のみ

でやや粗く、それに対して浅鉢の底部は内外面共にミガキを加えるものが認められる。また底径が深鉢に較べ大きくなる。分類は高台状底部をⅠ群、平底をⅡ群とした。

浅鉢底部Ⅰ群

3723から3738は高台状底部となるものである。深鉢の高台状底部よりは低く、僅かに高台状を呈するものが多い。また底径は10cmを超えるものが多い。体部は大きく開き、内外面共にミガキを施すもので大部分が占められている。3723は胴部上半に沈線による重弧文または多重円文の文様を有する。3725の底裏の整形は粗く、3726の底部の器肉は薄い。3729は胴部下半に磨消繩文を有する。3731も胴部に磨消繩文を有し、繩文部分に赤彩を施す。内面は黒色化する。3737は底径6.4cmの小形のもので器肉も薄い。3738は底部が上底状のもので、内面に段を有する。胎土が精良である。

浅鉢底部Ⅱ群1類

3739から3741は平底のものである。3739は胴部下半にまで磨消繩文を持つ。底部は平底であるものの、中央部が僅かにくぼむ。3740は体部が僅かに開くもので、器肉が薄い。3741は体部が直線的に立ち上がり、体部と底部の器肉が同じ厚さである。

浅鉢底部Ⅱ群2類

3742は底径が4.8cmと他の浅鉢に較べ小形のもので、底裏はミガキに近い整形で、内面は粗くナデである。浅鉢以外の器種の可能性もある。

鉢底部(第90図3743、3744)

鉢と明確に分かれるものは3743と3744である。同一個体と考えられ、胴部下半にまで磨消繩文を施す。底部は平底で、底部脇が僅かに張る。

穿孔底部(第90図3745)

3745は粗製深鉢の底部中央に径2.9cmの穿孔したものである。内面から打ち欠きにより穿孔し、穿孔した後は研き等は加えていない。高台状底部で底径は8cmを測り、体部は開いて立ち上がる。タール状物質の付着した礫が入った状態で出土している。また礫の入っていた部分は黒く変色する。

多孔底部(第90図3746)

3746は底部に径1cm程の孔を焼成前に7から9ヶ所穿孔したものである。底部は高台状で、底径10.4cmを測る。内外面に白色物質が付着する。なお、白色物質については理化学分析を行っており、参照していただきたい(p349「第V章第5節」)。

底部の縦年の位置付け

底部は深鉢、浅鉢、鉢等に大きく器種分類を行った。ここに取り上げたものは全て繩文時代後期前半に含まれるもの、しかしながら底部破片のみでは型式認定が困難なものが多い。宿毛式、松ノ木式のどちらかに大半が含まれるもの、宿毛式、松ノ木式の底部形態は明確に分かれるものではなく、

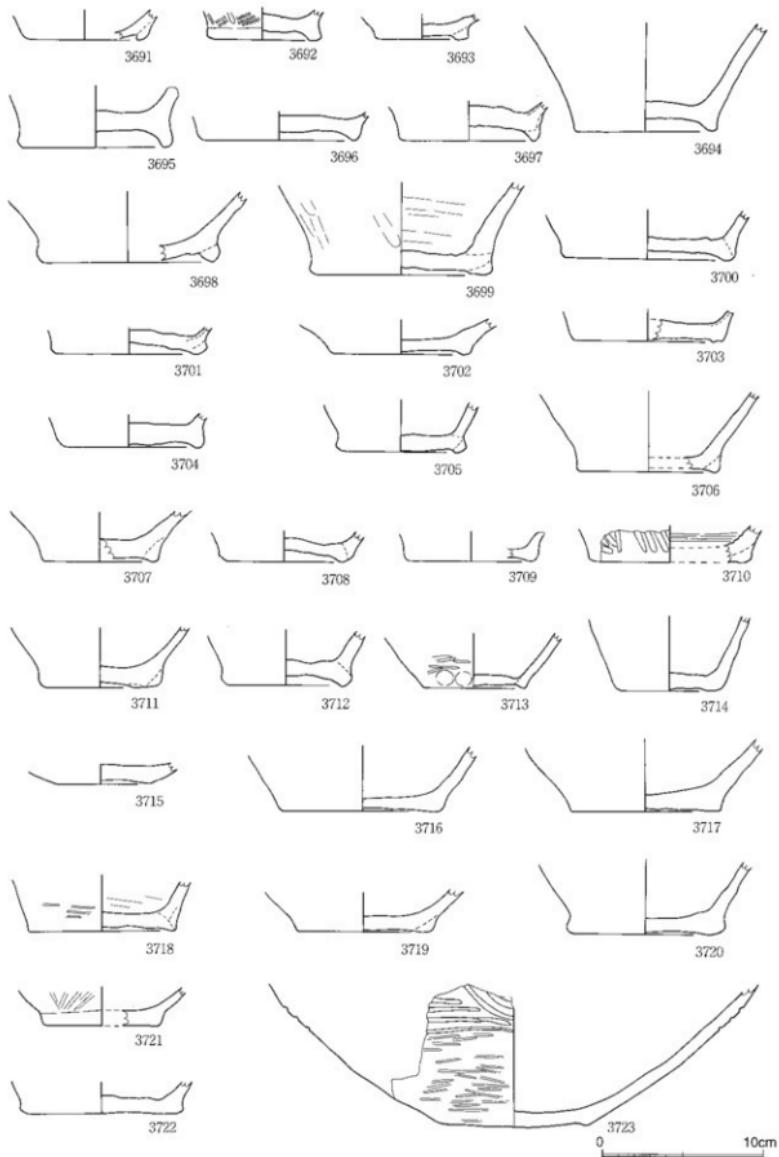
またなつめの木式でも同様の形態を探るようである。

深鉢の高台状の底部は宿毛式からなつめの木式まで見られ、深鉢は高台部分が浅鉢に較べ高い傾向を示している。また平底の占める割合が少なく、該期の特徴となっている。若干ではあるが胴部下半にまで文様を有するものがあるものの、残存部が僅かなために型式認定は困難である。土器捨て場自体の出土土器の中で最も松ノ木式が多いことから、深鉢底部の大半が松ノ木式に含まれるものと考えられる。

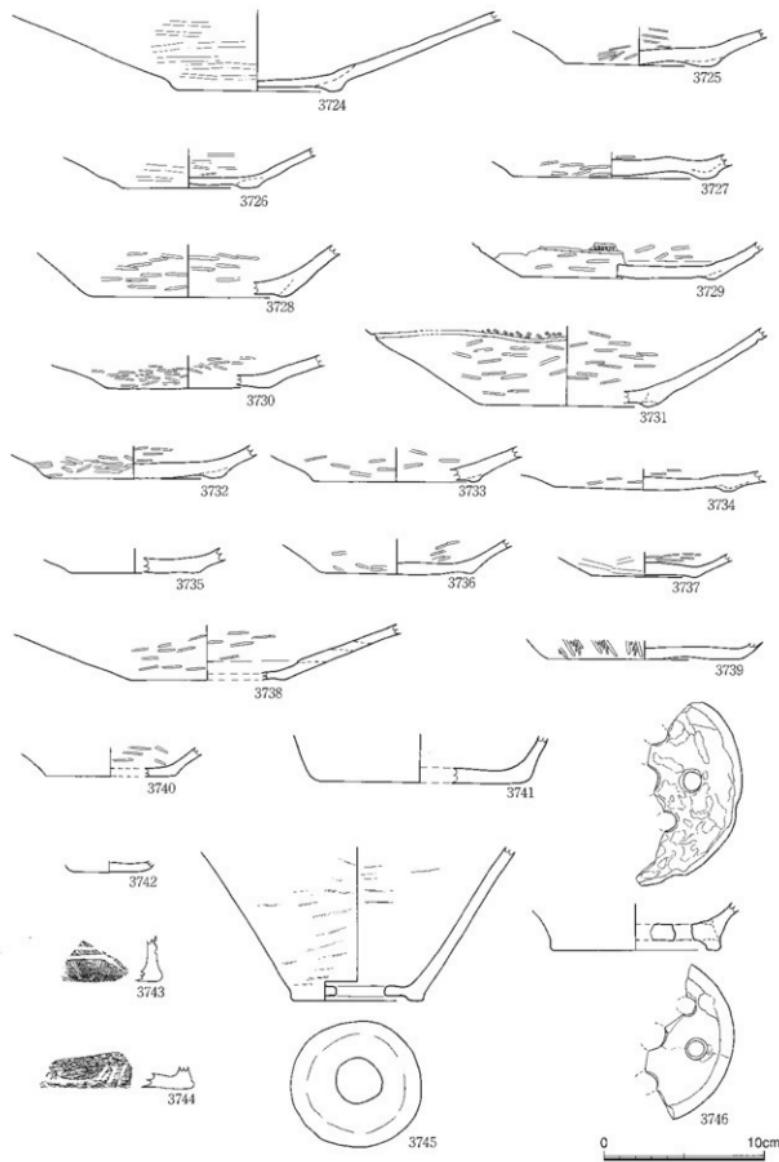
浅鉢については高台状を呈するものが多い。しかし、深鉢のように明確な高台の形態を探るものは極めて少なく、僅かに突堤状に高台を貼付したものが多い。また底裏は上げ底状となる。底径は深鉢に較べ、大きく10cmを超えるものが多く、また内外面共にミガキか丁寧なナデを施すもので占められている。明確に型式が認定できるものとしては、3723、3729、3731が松ノ木式に含まれる。明確に宿毛式に含まれるものは3738の底部内面に段を有するものである。他の底部についての型式認定は、深鉢底部の場合は大半が松ノ木式に含まれる可能性が高いものの、浅鉢については宿毛式の浅鉢が比較的多く出土しているため、一概に松ノ木式に含めることは困難であり、宿毛式との鑑別はできなかつた。

鉢については平底で底部脇がやや張り、胴部下半にまで磨消縄文を持つものは、福田K II式に含まれるものである。宿毛式の底部とは分離可能で、こうした特徴を持つものは福田貝塚出土の鉢に類例が多く認められる。

多孔底部については、1次調査でも同様のものが認められ、また岡山県福田貝塚、愛媛県鶴来が元遺跡（中野1994）から鉢の多孔底部が出土している。四国、中国の縄文時代後期前半期に特徴的に認められ、福田K II式に出現し、松ノ木式にも引き継がれるようである。



第89図 繩文後期土器深鉢底部(2) I群1類3691～3693、I群2類3694～3698、I群3類3699～3711、I群4類3712・3713、I群5類3714・3715、II群3716～3722、浅鉢底部(1) I群3723



第90図 繩文後期土器浅鉢底部 (2) I群3724～3738、II群1類3739～3741、II群2類3742、鉢底部 3743・3744、穿孔底部 3745、多孔底部 3746

補修孔 (第92図3747~3772)

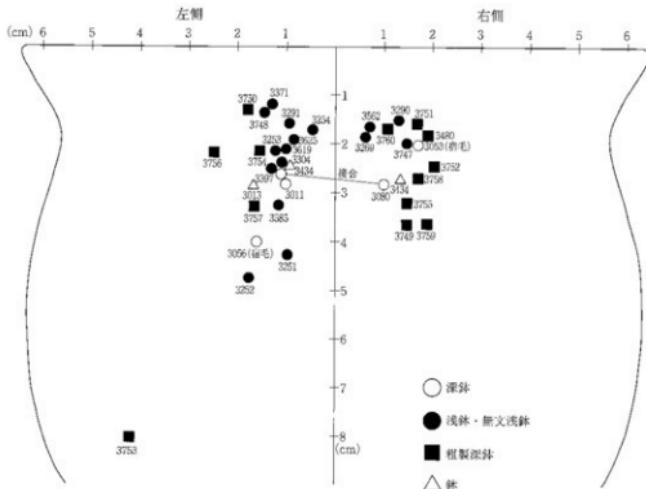
3747から3772は補修孔を有する土器片を集成した。集成した以外にも分類別に組み込んだものの中には補修孔を穿ったものは存在している。総数は50点である。器種別では粗製深鉢22点、浅鉢12点、深鉢9点、無文浅鉢6点、鉢1点となっており、意外と粗製深鉢の占める割合が多くなっている。

口縁部の残存した破片は37点、胴部破片が12点、底部は3772の1点のみを確認している。口縁部の残存したものについては口唇部からの位置と破損口からの位置を第91図に表記した。3080のみが一对の補修孔を有し、3252は一つの破片で上下に2個の補修孔を有する。他のものは1個のみのものである。補修孔の位置は口唇から1cmから5cm下に収まるものが多く、例外として3753が口唇から8cm下に穿孔されている。割れ口からの位置は0.5cmから3cm内に収まるものが多い。3753のみは例外で割れ口から4.2cmを測るところから、下部破片との補修に使われた可能性がある。3434の鉢は左右の両端が破損しており、共に1ヶ所ずつ補修孔を有する。

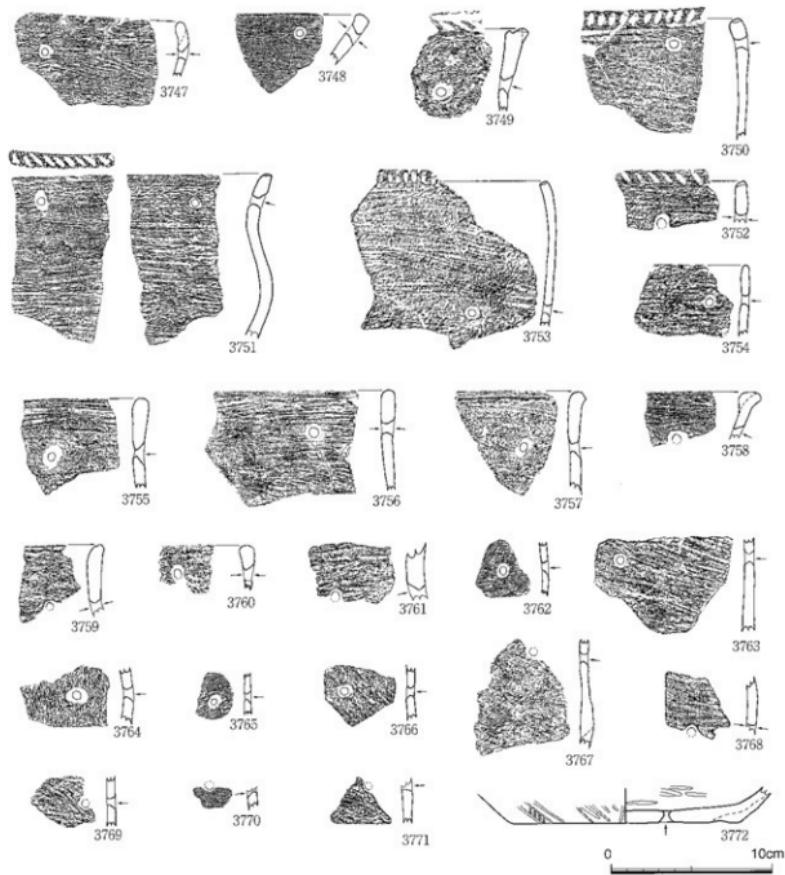
器種別に補修孔の位置は際立った特徴は見出せなかった。また時期別の位置の特徴も抽出することは困難であった。

穿孔方法は外面から錐揉みにより穿孔するものが多く、また貫通後内面からも錐揉みにより調整を行う例が多い。3761のみが主穿孔が内面からのものである。補修孔径は0.4mmのものが多く、大きなもので0.6mm程度、小さいものは3765の0.2mmである。3765については胎土、器肉の薄さからすると前期の可能性がある。他のものについては後期前半に含まれるものである。

浅鉢は補修により再利用が考えられるものの、他の深鉢、粗製深鉢については煮沸道具からの転用が考えられる。



第91図 補修孔位置集成図



第92図 漢文後期土器補修孔

表5 後期縄文土器観察表

遺物番号	器種・部位	取上番号	出土位置	測式	分類	法量 (cm)	特徴	縄文 基体	器面調整	胎土	接合	備考
3001 漆跡・口縁	口縁	714	中津 X I				貝殻磨消縞文。	縄文	内面ナデ	砂粒少量		
3002 漆跡・肩部	X 3Ⅲ面		中津 X I				円形削文。	縄文	内外面ナデ	砂粒多量		
3003 漆跡・肩部	W 5Ⅳ面		宿毛 KE I				口唇無文。貝殻磨消縞文。	縄文	外底ナデ、 内面ナデ	砂粒微量 砂粒微量→ ナデ		
3004 漆跡・口縁	弧張5層		宿毛 KE I				口唇無文。貝殻磨消縞文。円形削突。	縄文	内外面ナデ	砂粒微量		
3005 漆跡・口縁	Y 2Ⅸ面		宿毛 KE I				口唇魚文。肩部磨消縞文。	RL	内面ナデ	石英少量		
3006 漆跡・口縁	弧張5層		宿毛 KE I				口唇削文。貝殻磨消縞文。	RL	外底ナデ、 内面ナデ	石英微量		
3007 漆跡・口縁	X 4Ⅹ面		宿毛 KE I				口唇魚文。肩部磨消縞文。	RL	内外面ナデ	既右少		
3008 漆跡・口縁	X 4Ⅹ面		宿毛 KE I				口唇無文。肩部磨消縞文。	RL	内外面ミガ ナデ	粘土片岩 石英少量		
3009 漆跡・口縁	1448		宿毛 KE I				口唇無文。肩部磨消縞文。	RL	内外面ミガ ナデ	石英少量		
3010 漆跡・口縁	弧張3層		宿毛 KE I				口唇無文。肩部磨消縞文。既右浅い。	RL	内外面ナデ	砂石少		
3011 漆跡・口縁	X 4Ⅹ面		宿毛 KE I				口唇無文。肩部磨消縞文。	RL	内外面ナデ	微石英少		
3012 漆跡・口縁	836		宿毛 KE I				口唇無文。	RL	内外面ナデ	石英多量		
3013 漆跡・口縁	W 3Ⅸ面		宿毛 KE I				口唇無文。既右浅く。下段隕ちます。	RL	内外面ミガ ナデ	既右少		
3014 漆跡・口縁	2976・既右		宿毛 KE II (32)				人形山口縁。波頂部底沈窓。口唇無文。既右せす。既右成れせず。既右肥厚せす。既右成れせず。既右肥厚せす。	RL	内外面ミガ ナデ	石英多量		
3015 漆跡・口縁	9029		宿毛 KE II				山口縁。波頂部底沈窓。人形起窓の上に既右窓キズ。小窓既右上方から既右窓キズ。	RL	内外面ナデ	石英少量	3016同 個体	
3016 漆跡・口縁	弧張8層		宿毛 KE II				山口縁。小窓起窓の上に既右窓キズ。小窓既右上方から既右窓キズ。	RL	内外面ナデ	石英少量	3013同 個体	
3017 漆跡・口縁	W 4Ⅹ面		宿毛 KE II				山口縁。既右部分。既右窓キズ。波頂部底沈窓。既右成れせず。既右肥厚せす。	RL	内外面ナデ	砂粒微量		
3018 漆跡・口縁	X 4Ⅹ面		宿毛 KE II				山口縁。波頂部底沈窓。口唇無文。既右成れせず。既右肥厚せす。既右成れせず。既右肥厚せす。	RL	内外面ナデ	微石英晶 片岩多量		
3019 漆跡・口縁	弧張3層		宿毛 KE II				山口縁。既右部分。既右窓キズ。波頂部底沈窓。既右成れせず。既右肥厚せす。	RL	内外面ナデ	砂粒微量		
3020 漆跡・口縁	X 3Ⅸ面		宿毛 KE II				山口縁。波頂部底沈窓。既右成れせず。既右肥厚せす。	RL	内外面ナデ	既右美多		
3021 漆跡・口縁	2849		宿毛 KE II				小窓既右。既右外縫捺文。波頂部底沈窓。既右成れせず。	RL	内外面ナデ	砂粒微量		
3022 漆跡・口縁	弧張5層		宿毛 KE II				山口縁。波頂部底沈窓。既右成れせず。既右肥厚せす。	RL	内外面ナデ	石英多量		
3023 漆跡・口縁	1124		宿毛 KE II				山口縁。既右部分。既右窓キズ。既右成れせず。既右肥厚せす。	RL	内外面ナデ	既右美多		
3024 漆跡・口縁	弧張3層		宿毛 KE II				山口縁。既右部分。既右窓キズ。既右成れせず。既右肥厚せす。	RL	内外面ナデ	既右美多		
3025 漆跡・口縁	873		宿毛 KE II 口縁 (123)				山口縁。既右部分。既右成れせず。既右肥厚せす。	RL	内外面ナデ	石英少		
3026 漆跡・口縁	弧張5層		宿毛 KE II				既右成れせず。既右肥厚せす。	RL	内外面ナデ	既右石英少		
3027 漆跡・口縁	Y 4Ⅸ面		宿毛 KE II				既右成れせず。既右肥厚せす。	RL	内外面ナデ	小窓多量		
3028 漆跡・口縁	弧張3層		宿毛 KE III				既右成れせず。既右肥厚せす。既右成れせず。既右肥厚せす。	RL	内外面ナデ	砂粒多量		
3029 漆跡・口縁	W 3Ⅸ面		宿毛 KE III				既右成れせず。既右肥厚せす。既右成れせず。既右肥厚せす。	RL	内外面ナデ	既右石英少		
3030 漆跡・口縁	Y 4		宿毛 KE III				既右成れせず。既右肥厚せす。既右成れせず。既右肥厚せす。	RL	内外面ナデ	既右、企 石英微量		
3031 漆跡・口縁	X 4Ⅹ面		宿毛 KE III				既右成れせず。既右肥厚せす。既右成れせず。既右肥厚せす。	RL	内外面ナデ	石英少		
3032 漆跡・口縁	1548		宿毛 KE III				既右成れせず。既右肥厚せす。既右成れせず。既右肥厚せす。	RL	内外面ナデ	石英少		
3033 漆跡・口縁	1748		宿毛 KE III				既右成れせず。既右肥厚せす。既右成れせず。既右肥厚せす。	RL	内外面ナデ	既右石英多		
3034 漆跡・口縁	1460		宿毛 KE III				既右成れせず。既右肥厚せす。既右成れせず。既右肥厚せす。	RL	内外面ナデ	既右微量		
3035 漆跡・口縁	272		宿毛 KE III				既右丸味。既右成れせず。既右成れせず。	RL	内外面ナデ	石英少		
3036 漆跡・口縁	弧張23層		宿毛 KE III				既右丸味。既右成れせず。既右成れせず。	RL	内外面ナデ	既右石英少		
3037 漆跡・口縁	弧張23層		宿毛 KE III				既右丸味。既右成れせず。既右成れせず。	RL	内外面ナデ	既右石英微量		
3038 漆跡・口縁	既右		宿毛 KE III				既右丸味。既右成れせず。既右成れせず。	RL	内外面ナデ	砂粒微量		

通名	種類	部位	取上位置	型式	分類	法量 (cm)	特 質	總文 體	表面調査	胎土	接合	備考
3039 深鉢・口縁 X3Ⅳ下面	瘤毛	KII3		口唇沈縫2条、縞文。脣部稍潤滑。	RL		外側凸起 外側丁寧な 外側丁寧な 内面ナデ	石英少量 砂粒少量 内面ナデ				
3040 浅鉢・口縁 3114	瘤毛	KII3		口唇沈縫1条、縞文。口唇内面沈縫。	RL		外側丁寧な 内面ナデ	砂粒少量 内面ナデ				
3041 深鉢・口縁 X4Ⅴ前面	瘤毛	KIE3		口唇沈縫1条、縞文。口唇平坦、上唇 隆起。口唇内面に凹起。脣部稍潤滑。	RL		外側凸起 外側丁寧な 内面ナデ	石英少量 砂粒少量 内面ナデ				
3042 深鉢・口縁 X3Ⅵ前面	瘤毛	KII3		口唇沈縫2条、縞文。口唇平坦、内面 に凹起。脣部稍潤滑。	RL		外側ナデ	石英少量				
3043 深鉢・口縁 X3Ⅹ前面	瘤毛	KIE3		口唇沈縫1条、縞文。口唇平坦、内面にやや突 出。脣部稍潤滑。	RL		外側面ミガ ナデ	微石英少 量				
3044 深鉢・口縁 X4Ⅵ前面	瘤毛	KII3		口唇肥厚せず。沈縫1条。脣部稍潤滑。	RL		外側ナデ	粘品片沿 少粗、角 内面微粒				
3045 深鉢・口縁 手振33層	瘤毛	KII3		L型且柱状構造。L型側に外側沈縫。脣 部稍潤滑。	RL		内面側面倒 伏					
3046 深鉢・口縁 手振28層、手振 33層	瘤毛	KIE4 口径 (36)		口唇肥厚せず。沈縫1条。脣部稍潤滑。	RL		外側ナデ、 内面急須→ ナデ	砂粒多量 内面急須→ ナデ			外面保付 有	
3047 深鉢・口縁 2363・底面6 層、伝19層、 W3Ⅸ前面	瘤毛	KII4 口径 (47)		波状沈縫、波状凹形利差。口唇肥 厚。外側面急須→複数の沈縫1条。キ リ。縞文。瘤毛。瘤状側面連繋。	RL		外側面倒伏 ナデ	石英多量	4点接合			
3048 深鉢・口縁 283・X4枕面	瘤毛	KII4 口径 (20)		波状沈縫、波状前唇舌状小突起。黑 感が認められる。口唇やや肥厚。縞文。 沈縫1条。キリミ。縞文側面連繋。	RL		外側面倒伏 ナデ	粘品石英 多量				
3049 深鉢・口縁 476	瘤毛	KII4 口径 (29.5)		波状沈縫。波状前唇舌状小突起。黑 感が認められる。口唇やや肥厚。縞文。 沈縫1条。キリミ。縞文側面連繋。	RL		外側面倒伏 ナデ	石英少量				
3050 深鉢・口縁 手振25層	瘤毛	KII4 口径 (17.6)		波状沈縫。波状前唇舌状小突起。黑 感が認められる。口唇やや肥厚。縞文。 沈縫1条。キリミ。縞文側面連繋。	RL		外側面倒伏 ナデ	石英微量				
3051 深鉢・口縁 X3Ⅸ前面・X4 枕面	瘤毛	KII4		口唇肥厚。口唇上壁堅厚。口唇沈縫1条、 縞文。沈縫1条。キリミ。縞文。脣部 沈縫。	RL		外側面倒伏 ナデ	石英多量	○			
3052 深鉢・口縁 339	瘤毛	KII4		脣部側面連繋。口唇キリミ。縞文。RL 内面ミガキ	RL							
3053 深鉢・口縁 Y3Ⅸ前面	瘤毛	KIE4		瘤毛。口唇肥厚。口唇沈縫2条。縞文。 キリミ。縞文。内面急須。	RL		外側面ナデ	石英多量				
3054 深鉢・口縁 手振59層	瘤毛	KIE4		口唇肥厚から内に突出。口唇沈縫2条。 縞文。キリミ。縞文。脣部側面連繋。 縞文沈縫。	RL		外側面ナデ	砂粒少量				
3055 深鉢・口縁 2791	瘤毛	KII4		瘤毛。口唇肥厚。口唇沈縫2条。縞文。 キリミ。縞文。内面急須。	RL		外側面丁寧 ナデ	砂粒少量	3055同 1個体			
3056 深鉢・口縁 W3Ⅸ下面	瘤毛	KII4		瘤毛。口唇沈縫2条。縞文。キリミ。 縞文。内面急須。	RL		内面丁寧 ナデ	砂粒少量	3054同 1個体			
3057 深鉢・口縁 X4Ⅳ下面	瘤毛	KII4		瘤毛。口唇肥厚。口唇沈縫2条。縞文。 キリミ。縞文。内面急須。	RL		外側面ナデ	石英・粘 品片少 量				
3058 深鉢・口縁 X3Ⅸ前面	瘤毛	KII4		瘤毛。口唇沈縫2条。縞文。キリミ。	RL		外側面ナデ	石英少量				
3059 深鉢・口縁 X5Ⅸ前面	瘤毛	KIE4		瘤毛。口唇沈縫2条。縞文。キリミ。	RL		外側面ナデ	石英多量				
3060 深鉢・口縁 X4Ⅹ前面	瘤毛	KII4		瘤毛。口唇肥厚。口唇沈縫2条。縞文。 キリミ。縞文。内面急須。	RL		外側面ナデ	石英微量				
3061 深鉢・口縁 W4Ⅷ前面	瘤毛	KII4		瘤毛。口唇肥厚。口唇沈縫2条。縞文。 キリミ。縞文。内面急須。	RL		外側面ナデ	砂粒少量				
3062 深鉢・口縁 Y3Ⅸ下面	瘤毛	KII4		瘤毛。口唇肥厚。口唇沈縫2条。縞文。 キリミ。縞文。内面急須。	RL		外側面ナデ	砂粒多量				
3063 深鉢・口縁 913	瘤毛	KII4		瘤毛。口唇肥厚。口唇沈縫2条。縞文。 キリミ。縞文。内面急須。	RL		外側面ナデ	石英少量	3063同 1個体			
3064 深鉢・口縁 W4Ⅸ前面・V 面	瘤毛	KII4		瘤毛。口唇肥厚。口唇沈縫2条。縞文。 キリミ。縞文。内面急須。	RL		外側面ナデ	石英少量	3063同 1個体			
3065 深鉢・口縁 X3Ⅸ前面	瘤毛	KII4		瘤毛。口唇肥厚。口唇沈縫2条。縞文。 キリミ。縞文。内面急須。	RL		外側面ナデ	石英・粘 品片少 量				
3066 深鉢・口縁 北東	瘤毛	KIE4		瘤毛。口唇肥厚。口唇沈縫2条。縞文。 キリミ。縞文。内面急須。	RL		外側面ナデ	石英・粘 品片少 量	3064同 1個体			
3067 深鉢・口縁 X4Ⅸ前面	瘤毛	KIE4		口唇肥厚。口唇沈縫2条。縞文。キリミ。 縞文。内面急須。	RL		外側面ナデ、 内面丁寧な ナデ	石英少量				
3068 深鉢・口縁 手振6層	瘤毛	KES5		口唇肥厚。口唇沈縫2条。縞文。キリミ。 縞文。内面急須。	RL		外側面ナデ、 内面急須→ ナデ	粘品片少 量・金 雲母微量			内面急須 有	
3069 深鉢・口縁 2350・W3Ⅸ前 面・X3Ⅸ前面・ X4Ⅸ前面	瘤毛	KIE6 口径 (40)		波状沈縫2条。波状沈縫2条。口唇肥厚 せず。口唇2条。キリミ。縞文。脣部側面連繋 と縞文沈縫。口唇肥厚2条。沈縫2条。縞文。 縞文。内面急須。	RL		外側面急 ナデ、内面 ナデ	石英多量				
3070 深鉢・口縁 2960	瘤毛	KIE6		波状沈縫2条。波状沈縫2条。口唇肥厚 せず。口唇2条。沈縫2条。縞文。縞文。内面急 須。	RL		外側面ナデ	石英多量 粘品片石 微量				

第二章 1区調査成果

第II章 1区调查成果

遺物	器種・部位	取土番号・ 出土位置	型式	分類	法長 (cm)	特 質	縄文 原体	器面調整	勲土	接合	備考
3153 滝跡・口縁	2457・2485・前 盤33層・W3面 裏・X3背面	松ノ木	KIV12	口径	(48)	波状口縁、口唇キザミ、縄文、口唇 下沈底。頭部。頭部横縫合連繋。縄 周縫文。上部横縫区帯縄。下部縫 「L」字状文。	RL 外側ナデ、 内面柔直→ 砂粒多量 壁、肩角 石英少量	破綻結合品 ○			
3154 滝跡・口縁	X5V1面	松ノ木	KIV13			波状口縁、波状部円弧。口唇肥厚。 外面縫文、沈縫。逆縫部刃削尖。 縫文。	RL 外側ナデ	内面柔直 砂粒少量	石英微量		
3155 滝跡・口縁	X3IVIII	松ノ木	KIV13			波状口縁付。奥縫深さ比較? 口唇連 続刃削尖。頭部縫文、頭部波縫 縫文。		外側柔直 砂粒多量			
3156 滝跡・口縁	電面	松ノ木	KIV13			口唇肥厚。上面施文。沈縫。条 小円形刻突。頭部縫文。		外側ナデ	砂粒多量		
3157 滝跡・口縁	1217・2034・ 2035	松ノ木	KIV14	口径 (32)		口唇肥厚。上面施文。沈縫。条 小円形刻突。頭部縫文。	I	内面柔直 砂粒多量	赤化 →ナデ セメント 砂粒多量	○	
3158 滝跡・口縁	1014	板ノ木	KIV14	口径	(24.0)	口唇肥厚せず。口唇上端且波縫圓 弧。頭部縫文、頭部刃削尖縫文。	RL 外側ナデ	内面柔直 砂粒多量			
3159 滝跡・口縁	2506	松ノ木	KIV14b			口唇肥厚せず。沈縫1条のみ。バケツ 状の姿形。脇部山形施文。		外側柔直→ ナデ、内面 柔直	砂粒多量		
3160 滝跡・口縁	X4V1面・X4	松ノ木?	KIV14c			沈縫文。		内面柔直 砂粒多量	石英微量 2点接 合		
3161 滝跡・口縁	X3V1面	松ノ木	KIV15			頭部横縫手粘付。頭部屈曲。口唇 波縫2条。此縫直角。口唇内 縫文。頭部縫文。頭部波縫文。	RL 外側ナデ	粘晶片岩 少量	3162 3163同 一個体		
3162 滝跡・口縁	X3V1面	松ノ木	KIV15			頭部横縫手粘付。口唇部波縫2条。沈縫周 囲。口唇内縫。頭部屈曲。	RL 外側ナデ	粘晶片岩 少量	3161 3163同 一個体		
3163 滝跡・頭部	波張35層・ 60層・X3V1 面・X3背面 ・X4V1面	松ノ木	KIV15			縫文地。多重区帯文?	RL 外側ナデ	粘晶片岩 少量	3161 3162同 一個体		
3164 滝跡・口縁	X5II面	松ノ木?	KIV16			全体に壅厚。口唇沈縫2条、上面施 文。頭部屈曲状文。	?	外側ナデ	砂粒微量		
3165 滝跡・口縁	Y3V1面	松ノ木?	KIV17			齊滑縫文。口唇肥厚。頭部発達せ ず。頭部2条。此縫波縫文。口唇内 縫文。頭部縫文。頭部波縫文。	RL 外側ナデ	石英多量			
3166 滝跡・口縁	3145	松ノ木?	KIV17	口径 (15)		口唇上兩面文。沈縫及び縫文。頭部 黒文書は成れどせず。頭部縫文。頭部 縫文。頭部波縫文反転。	?	外側ナデ 砂粒少 量、肩角 石英微量			
3167 滝跡・頭部	2516	松ノ木	KIV18 #51			縫前純文。入縫文。	RL 外側ナデ	砂粒多量			
3168 滝跡・頭部	W4V1面・X5 V1面	松ノ木	KIV18 #51			縫前純文。入縫文。	RL 外側柔直→ ナデ、内面 柔直	石英多量			
3169 滝跡・頭部	2704・X3V1面	松ノ木	KIV19 #51			沈縫文。入縫文。	RL 外側柔直→ ナデ、内面 柔直	微石英多 量	2点接 合		
3170 滝跡・頭部	波張6層	松ノ木	KIV19 #51			縫前純文。入縫文。	RL 外側ナデ	粘晶片岩 微量			
3171 滝跡・頭部	2161・2404・W 5V1面・Y4V1 面	松ノ木	KIV19 #52	頭部最大径 (38)		頭部縫片、縫前純文、麻手文。	RL 外側ナデ	砂粒少量	3172 3173同 一個体		
3172 滝跡・頭部	2567・2524	松ノ木	KIV19 #52			頭部縫片、縫前純文、麻手文。	RL 外側ナデ	砂粒少量	3171 同一個 体		
3173 滝跡・頭部	西壁75層・X3 V1面	松ノ木	KIV19 #52			沈縫文。逆「L」字状文。	RL 外側ナデ	粘晶片岩 石英少量			
3174 滝跡・頭部	X3V1面・頭部 電面・Y4V1面	松ノ木	KIV19 #52			沈縫文。逆「L」字状文。	RL 外側ナデ	砂粒微量	4点接 合		
3175 滝跡・頭部	2705・X3V1 面・Y4V1面	松ノ木	KIV19 #52			沈縫文。	RL 外側柔直→ ナデ、内面 柔直	粘晶片岩 軟土	3174 3175同 一個体		
3176 滝跡・頭部	2174・W3V1 面・X3V1面	松ノ木	KIV19 #52			沈縫文。	RL 外側ナデ	粘晶片岩 少量	3176 3177同 一個体		
3177 滝跡・頭部	2022	松ノ木	KIV19 #52			縫前純文。入縫文。硬壁文様。	RL 外側ナデ	石英少 量、肩角 石英微量			
3178 滝跡・頭部	1618	松ノ木	KIV19 #52			縫前純文。	RL 外側ナデ	内面柔直 砂粒微量	3178 3179同 一個体		
3179 滝跡・頭部	880・883	松ノ木	KIV19 #52			縫前純文。	RL 外側ナデ	内面柔直→ ナデ	石英多量 ○		
3180 滝跡・頭部	X3V1面	松ノ木	KIV19 #52			充扒縫文。	RL 外側ナデ	微石英多 量			
3181 滝跡・頭部	2423・X3V1面	松ノ木	KIV19 #52			縫前純文。	RL 外側ナデ	内面ミガキ 砂粒多量	2点接 合		
3182 滝跡・頭部	1811・Y4	松ノ木	KIV19 #52			沈縫文。	RL 外側ナデ	内面柔直→ ナデ			
3183 滝跡・頭部	2946・X3V1面	松ノ木	KIV19 #52			沈縫文。	RL 外側柔直→ ナデ	砂粒多量	2点接 合		
3184 滝跡・頭部	2101・Y4V1面	松ノ木	KIV19 #52			縫前純文。	RL 外側ナデ	砂粒少 量	2点接 合		
3185 滝跡・頭部	X3V1面・Y4 V1面	松ノ木	KIV19 #52			沈縫文。	RL 外側柔直→ ナデ、内面 ナデ	石英少量	2点接 合		

第二章 1区調査成果

遺物番号	器種・部位	取上番号	出土位置	型式	分類	法量 (cm)	特徴	編文	器面調査	胎土	接合	備考
3186 漆鉢・胴部	379 - 725 -	松ノ木	KV胸 部2	磨削縦文。	縦磨縦文。	RL	外側柔軟→ ナラ、内面 ナラ	砂粒微量	○			
3187 漆鉢・胴部	2853 - X3Ⅷ面	松ノ木	KV胸 部2	沈縞文。		RLR	内外面ナラ	结晶片 →ナラ	石英少 量	2点接 合		
3188 漆鉢・胴部	1647	松ノ木	KV胸 部2	磨削縦文。	縦磨縦文。			结晶片合 ナラ	石英、 少量、角 閃石微量			
3189 漆鉢・胴部	X4Ⅸ面	松ノ木	KV胸 部2	磨削縞文。	縦磨縞文。	RL	内外面ナラ	砂粒微量				
3190 漆鉢・胴部	1341 - 抵張5層	松ノ木	KV胸 部2	沈縞文。多条沈縞。	沈縞文。多条沈縞。		内外面ナラ	石英少量	2点接 合			
3191 漆鉢・胴部	X3Ⅹ面・X4 Ⅹ面	松ノ木	KV胸 部2	沈縞文。	沈縞文。		外側柔軟→ ナラ、内面 ナラ	结晶片 →ナラ	石英、 少量	2点接 合		
3192 漆鉢・胴部	702 - 703	松ノ木	KV胸 部2	沈縞文。	沈縞文。		内外面ナラ	石英微量	○			
3193 漆鉢・胴部	285 - W4Ⅳ面	松ノ木	KV胸 部2	沈縞文。	沈縞文。		外側柔軟→ ナラ、内面 ナラ	石英少量	2点接 合			
3194 漆鉢・胴部	2634 - Y3Ⅹ面 面・Y3Ⅺ面	松ノ木	KV胸 部3	磨削縞文。	磨削縞文。	RL	外側ナラ、 内面	石英少量				
3195 漆鉢・胴部	2995 - Y3Ⅹ面	松ノ木	KV胸 部3	磨削縞文。	磨削縞文。	RL	内外面ナラ	微石英少 量	3点接 合			
3196 漆鉢・胴部	抵張31層・X3 Ⅹ面・Ⅹ面	松ノ木	KV胸 部3	磨削縞文。	磨削縞文。	只股 掘開文	内外面ナラ	砂粒多量	同一個 胎体	外側付 合		
3197 漆鉢・胴部	1391 - Y3Ⅹ面	松ノ木	KV胸 部3	磨削縞文。	磨削縞文。	RL	外側ナラ、 内面柔軟→ ナラ	石英少量	2点接 合			
3198 漆鉢・胴部	1510	松ノ木	KV胸 部3	磨削縞文。入紙文。	磨削縞文。入紙文。	LK	外側ナラ、 内面指痕→ ナラ	石英多量				
3199 漆鉢・胴部	X3Ⅹ面・X4 Ⅺ面	松ノ木	KV胸 部3	沈縞文。	沈縞文。		内外面柔軟→ ナラ	微石英多 量	2点接合			外側付 合
3200 漆鉢・胴部	2710 - 抵張60 層・X4Ⅹ面	松ノ木	KV胸 部3	沈縞文。	沈縞文。		内外面柔軟→ ナラ	石英多量	4点接 合			
3201 漆鉢・胴部	344	松ノ木	KV胸 部4	磨削縞文。財荷丸柱を持つ。	磨削縞文。財荷丸柱を持つ。	RL	外側ナラ、 内面柔軟→ ナラ	砂粒、石 英少量				
3202 漆鉢・胴部	X5Ⅸ面	松ノ木	KV胸 部4	3本沈縞磨削文。	3本沈縞磨削文。	RL	外側ナラ	砂粒微量				
3203 漆鉢・胴部	抵張33層	松ノ木	KV胸 部4	磨削縞文。頭部屈曲。	磨削縞文。頭部屈曲。	RL	外側ナラ	砂粒微量				
3204 漆鉢・胴部	抵張12層	松ノ木	KV胸 部4	磨削縞文。	磨削縞文。	RL	外側ナラ	石英微量				
3205 漆鉢・胴部	X5Ⅹ面	松ノ木	KV胸 部4	磨削縞文。頭部丸柱。	磨削縞文。頭部丸柱。	RL	外側ナラ	砂粒微量				
3206 漆鉢・胴部	W5Ⅵ面	松ノ木	KV胸 部4	磨削縞文。	磨削縞文。	RL	外側ナラ	石英少量				
3207 漆鉢・胴部	Y3Ⅹ面	松ノ木	KV胸 部4	磨削縞文。	磨削縞文。	RL	外側ナラ	石英微量				
3208 漆鉢・胴部	X3Ⅷ面・X4 Ⅹ面	松ノ木	KV胸 部4	沈縞文。	沈縞文。		内外面ナラ	砂粒多量	2点接 合			
3209 漆鉢・胴部	1308 - 2424	松ノ木	KV胸 部5	沈縞文。椎門区画文。	沈縞文。椎門区画文。		内外面ナラ	石英○ 少量				
3210 漆鉢・胴部	抵張8層	松ノ木	KV胸 部5	磨削縞文。	磨削縞文。	只股 掘開文	内外面ナラ	砂粒多量				
3211 漆鉢・胴部	2176	松ノ木	KV胸 部5	磨削縞文。横位区画文。	磨削縞文。横位区画文。		外側柔軟→ ナラ、内面 ナラ	石英多量				
3212 漆鉢・胴部	X3Ⅸ面・Y3 Ⅹ面	松ノ木	KV胸 部5	沈縞文。	沈縞文。		内外面ナラ	结晶片 →石英合 少量	3点接 合			
3213 漆鉢・胴部	1470 - 1475 - 1355 - 2061 - X 4Ⅹ面・X4Ⅸ面	松ノ木	KV胸 部6	磨削縞文。	磨削縞文。	只股 掘開文	内外面ナラ	砂粒多量	○他に 取上げ 番号 1471 - 2060同	2点接合		
3214 漆鉢・胴部	510 - Y1面	松ノ木	KV胸 部6	頭部、腹底板片。施絵紅文帯。胴棒 (27.5)	頭部、腹底板片。施絵紅文帯。胴棒 3本沈縞坐下。	RL	外側ナラ	石英多量				内側無け 付合
3215 漆鉢・胴部	2992 - X5Ⅻ面	松ノ木	KV胸 部7	磨削縞文。	磨削縞文。	RL	外側ナラ	砂粒多量	2点接合			
3216 漆鉢・胴部	1298 - X3Ⅹ面	松ノ木	KV胸 部7	磨削縞文。	磨削縞文。	RL	外側柔軟→ ナラ、内面 ナラ	石英多量	2点接合			
3217 漆鉢・胴部	X3Ⅹ面	松ノ木	KV胸 部7	沈縞文。	沈縞文。		外側柔軟→ ナラ	金雲母、 砂粒微量				
3218 漆鉢・胴部	354 - X4Ⅹ面	松ノ木	KV胸 部7	沈縞文。	沈縞文。		外側柔軟、 内面柔軟→ ナラ	長石少量	2点接合			
3219 漆鉢・胴部	抵張49層・抵張 59層	松ノ木	KV胸 部8	繩文地+施沈縞。	繩文地+施沈縞。	RL	内外面ナラ	砂粒少 量	2点接合			
3220 漆鉢・胴部	X3Ⅹ面・W3	松ノ木	KV胸 部8	迷続短沈縞+繩文	迷続短沈縞+繩文	RL	内外面ナラ	微石英多 量	2点接合			
3221 漆鉢・胴部	X3Ⅹ面・W4 Ⅹ面	松ノ木	KV胸 部8	迷続短沈縞+繩文	迷続短沈縞+繩文	RL	外側ナラ、 内面指痕→ ナラ	结晶片 →石英合 少量	2点接 合			

植物	番号	種類	基部	葉式	分類	法量 (cm)	特徴	園文 原体	蓄養調整	施肥	接合	備考
澤渕	3222	澤渕・脚部	地上部	取子番号- 葉面X-X	松ノ木	KV1 脚5	集合沈穂文。	内外面ナデ	微石英多 量	2点接合	赤羽。	
	3223	澤渕・脚部	葉面	X-X	松ノ木	KV1 脚5	斜格子状沈穂文。	内外面ナデ	砂粒多量	合		
	3224	澤渕・脚部	葉面	X-X	松ノ木?	KV1脚 葉5	多条沈穂文。	外表面ナデ- ナデ、内面ナデ	砂粒多量	2点接合		
	3225	澤渕・脚部	地表5mm、X-V	松ノ木?	KV1脚 葉5	多条沈穂文。	内外面ナデ	石英少量	2点接合			
	3226	澤渕・脚部	W5面	松ノ木?	KV1脚 葉5	多条沈穂文、重殖文? 剥削模様。	RL	外面ナデ、 内面ナデ	微粒粒微 量			
	3227	澤渕・完形品	823・850	なつめ	KV1 口徑20.8 の木並行	口徑20.8、 高さ21.5、 幅24.4- 底径8	完形土器。2段式の波打付、波打付 円筒、肩厚2mm。口縁厚2mm。底部は半 ばねり。ナデ、腰帯や台状。	RL	外面ナデ、 内面ナデ	内面ナデ	内面ナデ	内面ナデ 外壁付 若、外 上半部 等、剥 下半部 台面、 修孔
	3228	澤渕・口縁	501・530・ 819・831	なつめ	KV1 口径 の木並行	(24)	口縁2段式、波打付、口縁主文 横打文、重殖文、波洗及び残文。頂 部張り下彫刻、及び輪刻。	RL	外面ナデ、 内面ナデ- ナデ	石英微量	○、同 一個体	
	3229	澤渕・口縁	1040	なつめ	KV1 口径 の木並行	(216)	口縫外周彫刻、波打付、口縁主文 横打文、重殖文、波洗及び残文。頂 部張り下彫刻、及び輪刻。	RL	外面ナデ、 内面ナデ- ナデ	石英微量		
	3230	澤渕・口縁	抵張3面	なつめ	KV1 の木並行	表面や内側に 波打付、外壁に横打文、主縁横刻 文、残殖文。波打付、外壁横刻文、 波洗及び残文。波洗等。	RL	外面ナデ、 内面ナデ- ナデ	砂粒少量			
	3231	澤渕・口縁	3120・X5II面	なつめ	KV1 の木並行	(30)	口縫外周彫刻、上縁口縫波打、主縁横 き、波打付、外壁横刻文、波洗等。	RL	外面ナデ、 内面ナデ- ナデ	砂粒多量	2点接 合	
	3232	澤渕・L縁	1010	なつめ	KV2 の木並行	(22)	口縫外周彫刻、上縁口縫波打、主縁横 き、波打付、外壁横刻文、波洗等。	RL	外内面ナデ- ナデ	石英少量		
	3233	澤渕・口縁	591	なつめ	KV2 の木並行	(30)	口縫外周彫刻、波打付、口縫主文 横打文等。	RL	外内面ナデ	微石英粒、 3235同 一全体		
	3234	澤渕・口縁	587	なつめ	KV2 の木並行	(24.6)	口縫外周彫刻、上縁口縫波打、8字 状刻則。口縫外周彫刻、波打付、外壁横 き。	RL	外内面ナデ	石英微量	3234同 一全体	
	3235	澤渕・口縁	抵張4面	なつめ	KV2 の木並行	波打付口縫、外面施文、主縁横刻 文。	RL	外内面ナデ	石英微量			
	3236	澤渕・口縁	1196	なつめ	KV2 の木並行	波打付口縫、波打付、外壁横刻文、 波洗等。	RL	外内面ナデ	石英少量			
	3237	澤渕・口縁	2626	なつめ	KV3 の木並行	(23)	山形口縫、中央押出孔、唇済区画、 口縫肥厚、外縫肥厚、外縫施文、波 洗等。	RL	外内面ナデ	石英少量		
	3238	澤渕・口縁	3179・W5IV面	なつめ	KV3 の木並行	(34)	口縫肥厚、外縫肥厚、波打付、波洗等。 波打付、外縫肥厚、波打付、波洗等。	RL	外内面ナデ	石英少量		
	3239	澤渕・口縁	860	なつめ	KV3 の木並行	(27.2)	波打口縫、口縫肥厚、波打付、 波洗等。	RL	外内面ナデ	石英少量		
	3240	澤渕・口縁	550・X3IV面	なつめ	KV3 の木並行	(23)	山形口縫2段位か? 主縁横き、 波打付、外縫施文、波打付、波洗等。	RL	外内面ナデ	角閃石、 石英微量		
	3241	澤渕・口縁	3169・3170	なつめ	KV3 の木並行	(22)	大振りのV形内切溝2ヶ所か。突起部 分門牙孔、軸孔の跡跡等で。口縫 肥厚、外縫施文、波打付による区画 文、波打付施文、区画内及び口縫 下は波打。頭部を立し、外縫肥厚、 頭部横刻文。	RL	外内面ナデ	褐鐵石英 多量	内面焦 付着	
	3242	澤渕・口縁	621	なつめ	KV4 の木並行	波打付	大振りのV形内切溝2ヶ所か。突起部 分門牙孔、軸孔の跡跡等で。口縫 肥厚、外縫施文、波打付による区画 文、波打付施文、区画内及び口縫 下は波打。頭部を立し、外縫肥厚、 頭部横刻文。	RL	外内面ナデ	微石英多 量		
	3243	澤渕・口縁	2560	なつめの	KV4 木並行	波打付	大振りのV形内切溝2ヶ所か。口縫部大き く波打。外縫横刻文。	RL	外内面ナデ 内面ナデ	石英微 量、褐鐵 石英粉少 量、礫砾 結晶片少 量		
	3244	澤渕・口縁	1011	なつめ	KV5 の木並行	(53)	口縫肥厚、外縫施文、主縁横刻文、 波打付、外縫施文、波打付、外縫肥厚、 波打付等。	RL	外内面ナデ	微石英多 量		
	3245	澤渕・L縁	1010	なつめ	KV5 の木並行	(23)	口縫肥厚、外縫施文、波打付等。	RL	外内面ナデ 内面ナデ	砂粒少 量		
	3246	澤渕・口縁	887	なつめ	KV5 の木並行	波打付	口縫肥厚、波打付、外縫施文、 波打付等。	RL	外内面ナデ	石英少量		
	3247	澤渕・口縁	1001	なつめ	KV5 の木並行	波打付	口縫外周施文、波打文に波打1条。	RL	外内面ナデ	石英少量		
	3248	澤渕・口縁	X5II面	なつめ	KV5 の木並行	波打付	口縫肥厚、外縫施文、波打2条。	RL	外内面ナデ	破碎晶 片状多量		
	3249	澤渕・口縁	1090	なつめの	KV5 木並行	波打付	口縫外周施文、2本波打文が花芯、 波打付等。只波打機による磨削 文。口縫部上半部は、頭部無文。	RL	外内面ナデ 内面ナデ	砂粒多量		
	3250	澤渕・口縁	W5面	なつめ	KV5 の木並行	波打付	頭部無文。	RL	外内面ナデ	石英少量		
	3251	澤渕・口縁	抵張3層	なつめ	KV5 の木並行	波打付	2段位の波打と山形、主縁横孔込在入 RL	外内面ミガ	精良			

遺物番号	器種・部位	裏上晩昔文	型式	分類	法量(cm)	寺	撰文	器面調整	胎土	接合	備考
3252 浅鉢・口縁 X3Ⅵ面・底張 12層	宿毛	I1	口径(46.2)	体部大きく開く。2本沈継による胎削 純文。主文横部分円孔。口唇半円 文。主文横部分円孔。口唇半円 文。内面段2つ。	RL	内外面ミガ キ	石英微量			補修孔2 ヶ所。純 文・沈継 部分赤彩 補修孔。	
3253 浅鉢・口縁 929	宿毛	I1	口径(42)	体部大きく開く。3本沈継による胎削 純文。主文横部分円孔。多葉円文。 沈継を区隔して埋める。内面段。	RL	内外面ミガ キ	石英微量			純文孔 純文・沈 継部分赤 彩。	
3254 浅鉢・口縁 X4Ⅷ面	宿毛	I1	口径(22)	体部大きく開く。2本沈継による胎削 純文。主文横部分円孔。口唇半円 文。内面段。	RL	内外面ナデ	砂粒微量	3253同 一個体		純文・沈 継部分赤 彩。	
3255 浅鉢・口縁 X3Ⅸ面	宿毛	I1		体部大きく開く。2本沈継による胎削 純文。主文横部分円孔。口唇半円 文。内面段。	RL	内外面ミガ キ	砂粒微量	3254同 一個体		純文・沈 継部分赤 彩。	
3256 浅鉢・口縁 VI面	宿毛	I1		2本沈継による胎削純文。主文横部分 円孔。口唇半円文。内面段。	RL	内外面ミガ キ	石英微量			純文・沈 継部分赤 彩。	
3257 浅鉢・口縁 底張3層	宿毛	I1		2本沈継による胎削純文。主文横部分 円孔。口唇半円文。外側やや厚唇。内面段。	RL	内外面ミガ キ					
3258 浅鉢・口縁 柄張3層	宿毛	I1		胎削純文。外側やや厚唇。内面段。 ?		内外面ミガ キ	糖灰	3257同 一個体		純文・ 厚唇 ?	
3259 浅鉢・口縁 X3Ⅷ面	宿毛	I1		2本沈継による胎削純文。主文横部分 円孔。口唇半円文。内面段。	RL	内外面ミガ キ	石英微量			純文・ 厚唇 ?	
3260 浅鉢・口縁 X5Ⅸ面	宿毛	I1		2本沈継による胎削純文。主文横部分 円孔。口唇半円文。内面段。	RL	内外面ミガ キ	砂粒微量			純文・ 厚唇 ?	
3261 浅鉢・口縁 底張20層	宿毛	I1		2本沈継による胎削純文。主文横部分 円孔。口唇半円文。内面段。	RL	内外面ミガ キ	石英微量			純文・ 厚唇 ?	
3262 浅鉢・口縁 X3Ⅹ面	宿毛	I1		2本沈継による胎削純文。主文横部分 円孔。口唇半円文。内面段。	RL	内外面ナデ	砂粒微量	3263同 一個体		純文・ 厚唇 ?	
3263 浅鉢・口縁 X3Ⅸ面	宿毛	I1		純文部分。胎削純文。	RL	内外面ミガ キ	砂粒微量	3262同 一個体		純文・ 厚唇 ?	
3264 浅鉢・口縁 1601	宿毛	I1		3本沈継胎削純文。主文横部分、円 孔。	RL?	内外面ミガ キ	硅凝、赤 色吹物紋			内外面厚 純文部分赤 彩。	
3265 浅鉢・口縁 柄張18層	宿毛	I1		胎削純文。口縁内側に突出。主文横 部分円孔。	RL	内外面ミガ キ	砂粒微量			純文部分赤 彩。	
3266 浅鉢・口縁 柄張5層	宿毛	I1		浅狀口縁。胎削純文。主文横部分 円孔。	RL	内外面ミガ キ	砂粒微量			純文部分赤 彩。	
3267 浅鉢・口縁 1149・2487	宿毛	I2	口径(46)	体部大きく開く。口唇部主筋小内 筋刺突。2本沈継による胎削純文。入 横筋。横筋の内面段。	RL	内外面ミガ キ	石英少 量、金 青微量	○		純文・沈 継部分赤 彩。	
3268 浅鉢・口縁 2895・X3Ⅹ面	宿毛	I2	口径(26)	2本沈継による胎削純文。主文横部分 円孔。内面段。	RL	内外面ナデ	石英微量			純修孔。	
3269 浅鉢・口縁 柄張33層	宿毛	I2	口径(32.4)	体部大きく開く。胎削純文横筋の人 相縫胎削純文。	RL	内外面ミガ キ	砂粒微量	3270同 一個体		内面黑色化 純文・沈 継部分赤 彩。	
3270 浅鉢・口縁 661・X6Ⅹ面	宿毛	I2	口径(31)	体部大きく開く。2本沈継による胎削 純文。主文横部分入瓶文。口唇部内 筋刺突。2本沈継による胎削純文。口 唇部横筋及び縫合。	RL	内外面ミガ キ	石英微量	3259同 一個体		純修孔。 内面黑色化 純文・沈 継部分赤 彩。	
3271 浅鉢・口縁 柄張19層	宿毛	I2		胎削純文。口縁横筋。やや唐瓶の 等腰純文。	RL	内外面ミガ キ	石英微量			純文部分赤 彩。	
3272 浅鉢・口縁 2055	宿毛	I2		体部大きく開く。横筋の胎削純文。 泥縫陶片の痕跡。口唇部横筋の内面 段。	RL	内外面ミガ キ	糖灰、金 青微量			純文部分赤 彩。	
3273 浅鉢・口縁 柄張8層・底張 25mm・底張47層	宿毛	I2		泥縫陶片の痕跡。2本沈継による胎削 純文。口唇部横筋及び縫合。	RL	内外面ミガ キ	石英微量			純文部分赤 彩。	
3274 浅鉢・口縁 1551・2103・X 4Ⅷ面・Y3Ⅸ面	宿毛	I3	口径(26)	胎削純部部分が他の前段の孔を持つ。 既削空洞。内面黑色化。	RL	内外面ミガ キ	砂粒微量	○		純文部分赤 彩。	
3275 浅鉢・口縁 2662・2706	宿毛	I3	口径(37)	胎部下やや厚唇。体基上半は外反 気味。2本沈継による胎削純文。主文横 部分入瓶文。口唇部内面 筋刺突。	RL	外面丁寧な ナデ、内面 ミガキ	石英微量			外面全体 化。	
3276 浅鉢・口縁 X3Ⅷ面	宿毛	I3		胎削純文。口縁やや厚唇し、主文横 部分入瓶文。剥離部胎削純文。	RL	内外面ミガ キ	石英微量			純文部分赤 彩。	
3277 浅鉢・口縁 Y3Ⅷ面・X4 V面	宿毛	I3		胎削純部胎削純文。	RL	外面ミガ キ、内面黑 色胎削	石英微量	3277- 3280同 一個体		純文部分赤 彩。	
3278 浅鉢・口縁 1021	宿毛	I3		胎削純部胎削純文。	RL	外側ミガ キ	砂粒少 量	3277- 3280同 一個体		純文部分赤 彩。	
3279 浅鉢・口縁 四壁25層	宿毛	I3		胎削純文。	RL	内面黑 色研磨	石英少 量	3277- 3280同 一個体		純文部分赤 彩。	
3280 浅鉢・口縁 X3Ⅷ面	宿毛	I3		胎削純文。	RL	外側ミガ キ	石英少 量	3277- 3280同 一個体		純文部分赤 彩。	
3281 浅鉢・口縁 2163	宿毛	I4	口径(35)	体部大きく開く。2本沈継による胎削 純文。主文横部分円孔。口唇部内 筋刺突。内面黑色化。	RL	内外面ミガ キ	砂粒少 量、金 青微量			純文・北 部部分赤 彩。	
3282 浅鉢・口縁 2631	宿毛	I4	口径(31)	体部大きく開く。2本沈継による胎削 純文。胎削純部胎削純文。口唇部内 筋刺突及び縫合。	RL	内外面ミガ キ	石英少 量	3283同 一個体		純文部分赤 彩。	

遺物	器種・部位	取上番号・出土位置	型式	分類	法量 (cm)	特徴	鏡文 墨書き	背面調整	胎土	接合	備考
3283 浅鉢・口縁	1602	宿毛	I4			体部大きく聞く。2本沈底による壊消 模文。脇部窓外の区画文。口唇沈 底及び模文。内面凹。	RL 内外面ミガ キ	石英少量 半	3282同 一全体		
3284 浅鉢・口縁	3024・X5P1	宿毛	I5	口径 (44.8)		体部大きく聞く。2本沈底による壊消 模文。口唇沈底。内面凹。	RL 内外面ミガ キ	精良	3283同 一全体 か 2点接 合	模文部分 赤形	
3285 浅鉢・口縁	X5V面・X5 腹面	宿毛	I5			磨消純文。内面凹。	RL 内外面ミガ キ	精良	3284同 一全体 か 2点接 合	模文部分 赤形	
3286 浅鉢・口縁	X3V面・X3 腹面	宿毛	I5			磨消純文。口唇部にも模文。	RL 内外面ミガ キ	精良			
3287 浅鉢・口縁	2368	宿毛	I5	口径 (39)		腹部で側曲して、聞く。2本沈底によ る壊消模文口唇内窓突出。模文。全 体にやや摩耗。	RL 内外面ミガ キ	精良、金 雲母微量			
3288 浅鉢・口縁	2575・X3W面	宿毛	I5	LJIP (29.6)		体部大きく聞く。2本沈底による壊消 模文。内面凹を残す。	RL 内外面ナガ キ	石英少 量、角閃 石微量	3289同 一全体		
3289 浅鉢・口縁	1669・X3W 面・X3V腹	宿毛	I5			磨消純文。口唇部小凹孔。	RL 内外面ミガ キ	石英少量 4点接 合	291同 一全体		
3290 浅鉢・口縁	X3V面	宿毛	I5			磨消純文。口唇内に突凹。内面凹。	RL 内外面ミガ キ	精良			
3291 浅鉢・口縁	X3V面	宿毛	I5			磨消純文。口唇内に突凹。内面凹。	RL 内外面ミガ キ	精良	3280同 一全体		
3292 浅鉢・口縁	Y3W面	宿毛	I5			磨消純文。内面凹。口唇小孔。	RL 内外面ミガ キ	石英微量			
3293 浅鉢・口縁	3159	宿毛	I5			磨消純文。内面凹。	RL 内外面ミガ キ	精良、赤 色地微量 微量			
3294 浅鉢・口縁	1254・Y3V面	宿毛	I5			磨消純文。内面凹2段。	RL 内外面ミガ キ	精良	2点接 合	模文部分 赤形	
3295 浅鉢・口縁	X3V面	宿毛	I5			磨消純文。内面凹。	RL 内外面ミガ キ	砂粒微量			
3296 浅鉢・口縁	2882	宿毛	I5			磨消純文。内面凹。	RL 内外面ミガ キ	石英微量			
3297 浅鉢・口縁	X3N面?	宿毛	I5			磨消純文。口唇内に突凹。内面凹。	RL 内外面ミガ キ	石英少量			
3298 浅鉢・口縁	2946	宿毛	I5			磨消純文。内面凹。	RL 内外面ミガ キ	石英、白 品片微量			
3299 浅鉢・口縁	W4W面	宿毛	I5			磨消純文。	RL 内外面ミガ キ	精良			
3300 浅鉢・口縁	2911	宿毛	I5			磨消純文。口唇沈底、模文、キザミ。	RL 内外面ミガ キ	微石英少 量			
3301 浅鉢・口縁	W4面	宿毛	I5			磨消純文。	RL 内外面ミガ キ	外面黑色研 磨、内面ミ ガキ			
3302 浅鉢・口縁	X3V面	宿毛	I5			磨消純文。	RL 内外面ミガ キ、内面黑 色研磨。	微石英量			
3303 浅鉢・口縁	X5N面	宿毛	I5			磨消純文。	RL 内外面ミガ キ	石英、砂 粒微量			
3304 浅鉢・口縁	X5N面	宿毛	I5			磨消純文。口唇内に突凹。	RL 内外面ミガ キ	砂粒微量			
3305 浅鉢・口縁	X3N面	宿毛	I5			磨消純文。瓶状口縁。口唇内に突 凹。内面凹。	RL 内外面ミガ キ	精良			
3306 浅鉢・口縁	Y4	宿毛	I5			沈底沈底。口唇内薄気泡。	RL 内外面ミガ キ	石英微量			
3307 浅鉢・口縁	1638	宿毛	I5			磨消純文。内面凹。	RL 内外面ミガ キ	微石英多 量			
3308 浅鉢・口縁	X4V1s面	宿毛	I5			磨消純文。状状区划文。	RL 内外面ミガ キ	微石英量			
3309 浅鉢・口縁	瓶底14唇、瓶 底47唇	宿毛	I5			磨消純文。口唇平底。	RL 内外面ミガ キ	砂粒微量	2点接 合	模文部分 赤形	
3310 浅鉢・口縁	瓶底12・13唇	宿毛	I5			口唇内面沈底。口唇1.扁平底。口 唇外面闊底。	RL 内外面ミガ キ	砂粒微量			
3311 浅鉢・口縁	Y3V面	宿毛	I5			瓶状口縁。口唇平底。磨消純文。	RL 内外面ミガ キ	石英微量			
3312 浅鉢・口縁	瓶底3唇	宿毛	I5			磨消純文。口唇平底。外唇摩耗。	RL 内外面ミガ キ	精良			
3313 浅鉢・口縁	W3V面	宿毛	I5			磨消純文。内面凹。	RL 内外面ミガ キ	玻璃石类 少量			
3314 浅鉢・口縁	X3V面	宿毛	I5			瓶底の直線的な磨消純文。人絞文。	RL 内外面ミガ キ	精良			
3315 浅鉢・口縁	X3V面	宿毛	I5			瓶底の直線的な磨消純文。	RL 内外面ミガ キ	精良			
3316 浅鉢・口縁	X3V面	宿毛	I6			口唇から瓶底部に豊がる多量の円 形、磨消純文。内面凹。	RL 内外面ミガ キ	砂粒微量			
3317 浅鉢・口縁	瓶底3唇	宿毛	I7			内溝した瓶底口縁。磨消純文。円 孔。外唇摩耗。	RL 内外面ミガ キ	精良			
3318 浅鉢・口縁	紅絨45唇	宿毛	I7			内溝した瓶底口縁。外唇摩耗。2本 沈底。	RL 内外面ミガ キ	白雲母 微量			
3319 浅鉢・口縁	瓶底22唇	宿毛	I7			内溝した瓶底口縁。磨消純文?	RL 内外面ナガ キ	微砂粒微 量			
3320 浅鉢・口縁	1897	宿毛	I8			口唇部分多量沈底円文。燃成前小 凹孔。	RL 内外面ミガ キ	石英微量			
3321 浅鉢・口縁	V1面	宿毛	I8			口唇部分多量沈底円文。小凹孔2個。 口唇平底。從模形状区划文。	RL 内外面ミガ キ	石英少 量、角閃 石微量			
3322 浅鉢・口縁	X5V面	宿毛	I8			口唇部分多量沈底円文。内形削尖。瓶附 部内側沈底文?	RL 内外面ミガ キ	精良			

遺物	器種・部位	取上番号・出土地点	型式	分類	社量(cm)	特徴	縄文 形態	器面調整	胎土	焼合	備考
3323 浅鉢・口縁	X3Vb面	宿毛	I 制部	18		沈透文。口唇平坦。		外側ミガ 半、内面ナ ギ	磨石少量		
3324 浅鉢・肩部	X3VI面	宿毛	I 制部	1		唐涙模文。入窓文。	RL	内外面ミガ 半	良	縄文部分 赤彩	
3325 浅鉢・肩部	Y3Vb面	宿毛	I 制部	1		唐涙模文。入窓文。	RL	内外面ミガ 半	砂粒微量		
3326 浅鉢・肩部	X4Vb下面	宿毛	I 制部	1		唐涙模文。入窓文。	LR	内外面ミガ 半	微砂粒・ 彩色私物 砂粒少量		
3327 浅鉢・肩部	W3V面	宿毛	I 制部	1		唐涙模文。入窓文。	RL	内外面ミガ 半	良	縄文部分 赤彩	
3328 浅鉢・肩部	X5VI面	宿毛	I 制部	1		唐涙模文。入窓文。	RL	内外面ミガ 半	良	縄文部分 赤彩	
3329 浅鉢・肩部	號張1層	宿毛	I 制部	1		唐涙模文。円孔と凹文。内窓段。	RL	内外面ミガ 半	良	縄文部分 赤彩	
3330 浅鉢・肩部	X4VI下面	宿毛	I 制部	2		唐涙模文。円孔と円文。内窓段。	RL	内外面ミガ 半	良	縄文部分 赤彩	
3331 浅鉢・肩部	W3V面	宿毛	I 制部	2		唐涙模文。小円孔。内窓段。	RL	内外面ミガ 半	良	縄文部分 赤彩	
3332 浅鉢・肩部	X4VI面	宿毛	I 制部	2		唐涙模文。内窓段。	RL	内外面ミガ 半	砂粒微量		
3333 浅鉢・肩部	Y4	宿毛	I 制部	1		唐涙模文。小円孔と円文。内窓段。	RL	内外面ミガ 半	微砂晶片 石微量		
3334 浅鉢・底部	V1面	宿毛	I 制部	2		唐涙模文。円文。底部や上げ底。	RL	内外面ミガ 半	良		
3335 浅鉢・肩部	W4VI面	宿毛	I 制部	3		唐涙模文。伴状区面文。内窓段2 段。	RL	内外面ミガ 半	良	縄文部分 赤彩	
3336 浅鉢・肩部	69	宿毛	I 制部	3		唐涙模文。伴状区面文。内窓段。	RL	内外面ミガ 半	砂粒微量	3337同 一個体	
3337 浅鉢・肩部	W5VI面	宿毛	I 制部	3		唐涙模文。伴状区面文。内窓段。	RL	内外面ミガ 半	良	3336同 一個体	
3338 浅鉢・肩部	X4VI面	宿毛	I 制部	3		唐涙模文。伴状区面文。	RL	内外面ナナ 少量	砂晶片若干		
3339 浅鉢・肩部	X3VI面	宿毛	I 制部	3		唐涙模文。伴状区面文。	RL	内外面ミガ 半	良		
3340 浅鉢・肩部	X3VI面	宿毛	I 制部	3		唐涙模文。伴状区面文。内窓段。	1?	内外面ミガ 半	砂粒微量	縄文部分 赤彩	
3341 浅鉢・肩部	X3VI面	宿毛	I 制部	3		唐涙模文。伴状区面文。入窓文。	RL	内外面ミガ 半	微石英少 量	縄文部分 赤彩	
3342 浅鉢・肩部	X3VI面	宿毛	I 制部	3		唐涙模文。伴状区面文。入窓文。	RL	内外面ミガ 半	砂粒微量	縄文部分 赤彩	
3343 浅鉢・肩部	X5VI面	宿毛	I 制部	3		粟張模文。唐涙模文。底位の伴状区 面文。	r	外側ミガ 半、内面ナ ギ	良		
3344 浅鉢・底部	X4VI面	宿毛	I 制部	3		唐涙模文。伴状区面文。内窓段。底 部や上げ底。	r	内外面ミガ 半	良		
3345 浅鉢・底部	X3VI面・W4 V1面	宿毛	I 制部	4		横位唐涙模文。	r	内外面ミガ 半	砂粒少量	2点接 合	
3346 浅鉢・肩部	號張12層	宿毛	I 制部	4		横位唐涙模文。	RL	内外面ミガ 半	磨石少 量	縄文部分 赤彩	
3347 浅鉢・肩部	X4VI面・V1面	宿毛	I 制部	4		横位唐涙模文。	RL	内外面ミガ 半	砂粒少量	2点接 合	
3348 浅鉢・肩部	X3VI面	宿毛	I 制部	4		横位唐涙模文。	RL	内外面ミガ 半	石英少量	縄文部分 赤彩	
3349 浅鉢・肩部	W3VI下面	宿毛	I 制部	4		横位唐涙模文。	RL	内外面ミガ 半	砂粒微量	縄文部分 赤彩	
3350 浅鉢・肩部	X3VI面	宿毛	I 制部	4		横位唐涙模文。	RL	内外面ミガ 半	良		
3351 浅鉢・肩部	2017	宿毛	I 制部	5		唐涙模文。微隆。	RL	内外面ミガ 半	彩色私物 少量		
3352 浅鉢・肩部	X4VI面	宿毛	I 制部	5		太い沈縁による区面文。微隆。	RL?	外雨ミガ 半、内面ナ ギ	石英微量		
3353 浅鉢・肩部	X3VI面	宿毛	I 制部	6		唐涙模文。鶴文椎文部分反転	RL	外雨ナギ 半	微石英多 量	赤彩	
3354 浅鉢・口縁	Y3VI面	福岡区	II	6		3本沈縁唐涙模文。口縁内面肥 厚。	RL?	内外面ミガ 半	微石英少 量	縄文部分赤 彩	
3355 浅鉢・口縁	X5VI面	福岡区	II	7		3本沈縁唐涙模文。	RL	内外面ミガ 半	良	外輪やや 厚軸。縄 文部分赤 彩	
3356 浅鉢・口縁	號張22層	福岡区	II	7		3本沈縁唐涙模文。	RL	内外面ミガ 半	良	外輪やや 厚軸。	
3357 浅鉢・口縁	Y3VI面	福岡区	II	7		口縁内文。3本沈縁唐涙模文。	RL	内外面ミガ 半	良	縄文部分 赤彩	
3358 浅鉢・肩部	號張12層	福岡区	II	7		円文。3本沈縁唐涙模文。	RL	内外面ミガ 半	良	縄文部分 赤彩、分 析有り。	
3359 浅鉢・平光	2998・3008・ 3020	松ノ木	III	口延 (3324)		体部丸柱を特に立ち上がり、腹部から口縁は特に反気隙に立ち上がる。底 部丸底に微小な微高台が付く。口縁 部主文模印と比較して内面にぐや ぐや入り込む。頭部に丸底前小乳。副部 文模印同心円で從文部で充填する。 唐涙模文。瓶内底。	RL	内外面ミガ 半	砂粒微量	○3点 接合	
3360 浅鉢・肩部	2081	松ノ木	III	口延			RL	内外面ミガ 半	良	縄文部分 赤彩	
3361 浅鉢・口縁	X3VI面	松ノ木	III	口延 (3324)		ガール状の器形。口縁部凹円の文様 の脇間に円刻剥痕。口縁部分のみに 模文。頭部沈縁による同心円文。	RL	内外面ミガ 半	磨石英多 量	3362同 一個体	

遺物	器種・部位	取上番号・ 番号	型式	分類	法量 (cm)	特徴	瓶文 原体	器面調整	黏土	接合	備考	
3362 浅鉢・口縁	松ノ木	IV面	松ノ木	II2	口径 (25)	唐清繩文。	RL	内外面ミガ キ	微石英粒 少量	3361同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3363 浅鉢・口縁	584・594・ 597・613・X4 Ⅳ面・X4面 面・Y3底面	松ノ木	II2	口径	ボル状の浅鉢。縁やかな波状口。 (25)	縁やかな波状口。縁やかな波状口。 縁やかな波状口。縁やかな波状口。 縁やかな波状口。縁やかな波状口。	RL	内外面ミガ キ	微石英粒 少量	○3364 同一個体	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3364 浅鉢・口縁	670	松ノ木	II2			ボル状の浅鉢。口唇部無文帶。唇 縁純。	RL	内外面ミガ キ	微石英粒 少量	3365同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3365 浅鉢・口縁	X3Ⅴ面	松ノ木	II2			ボル状の浅鉢。口唇部無文帶。唇 縁純。	RL	内外面ミガ キ	微石英粒 少量	3366同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3366 浅鉢・口縁	339	松ノ木	II2			ボル状の浅鉢。口唇部無文帶。唇 縁純。	RL	内外面ミガ キ	微石英粒 少量	3367同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3367 浅鉢・口縁	1688・X3Ⅴ面	松ノ木	II2			ボル状の浅鉢。口唇部無文帶。唇 縁純。	RL	内外面ミガ キ	微石英粒 少量	3368同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3368 浅鉢・口縁	X3Ⅴ面・X4 Ⅳ面・W4Ⅴ面	松ノ木	II2			ボル状の浅鉢。口唇部無文帶。唇 縁純。	RL	内外面ミガ キ	石英少量 4点接合	3369同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3369 浅鉢・口縁	Y4Ⅴ面	松ノ木	II2			ボル状の浅鉢。口唇部無文帶。唇 縁純。	RL	外面上ガ リ	微石英粒 少量	3370同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3370 浅鉢・胸部	Y4Ⅴ面	松ノ木	II2			唐清繩文。外介区画文。	RL	内外面ミガ キ	石英少量 3369同 一鉢	3371同 一鉢	内面黒化、純 白色。外 面赤彩	
3371 浅鉢・口縁	1465	松ノ木	II2			口唇部繩文。唐清繩文。同心円文？	RL	内外面ミガ キ	石英少量	3372同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3372 浅鉢・口縁	X3Ⅴ面	松ノ木	II2			口唇部半円文。唇前繩文。柄状区画 文。	RL	外面上ガ リ、内面黑 色研磨	微石英少 量	3373同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3373 浅鉢・口縁	X3Ⅴ面・X5 Ⅳ面・Y3 Ⅳ面・Y3Ⅴ面	松ノ木	II2			口唇部半円文。口唇部無文帶。唇前 繩文。半円文？	RL	内外面ミガ キ	砂鉄粒微量 2点接合	3374同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3374 浅鉢・口縁	X4Ⅴ面・Y3 Ⅳ面・Y3Ⅴ面	松ノ木	II2			口唇部無文帶。唇前繩文。半円文？	RL	内外面ミガ キ	微石英粒 微量	3375同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3375 浅鉢・胸部	Y3Ⅴ面	松ノ木	II2			唐清繩文。多重二角形。	RL	内外面ミガ キ	石英少量	3376同 一鉢	沈泥内赤 彩。	
3376 浅鉢・胸部	Ⅸ面	松ノ木	II2			唐清繩文。多里三角形。	RL	内外面ミガ キ	砂粒微量	3377同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3377 浅鉢・胸部	1179・W4Ⅴ面	松ノ木	II2			唐清繩文。入巻文。内面段。	RL	内外面ミガ キ	石英少量 2点接合	3378同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3378 浅鉢・胸部	X4Ⅴ面	松ノ木	II2			唐清繩文。	RL	外面上ガ リ、内面黑 色研磨	石英少量 2点接合	3379同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3379 浅鉢・ 胸部下平	1516	松ノ木	II2			唇沿繩文。脣部下半無文帯。	RL	内外面ミガ キ	微石英被 蓋	3380同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3380 浅鉢・ 胸部下平	1938	松ノ木	II2			唇沿繩文。脣部下半無文帯。	RL	内外面ミガ キ	微石英少 量	3381同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3381 浅鉢・ 半完形	2392・X3Ⅴ面	松ノ木	II3	口縁 (22)		ボル状の容器。頗広の沈緑による 多里四文。多里三角形。	RL	内外面ミガ キ	外面上ガ リ、内 面二段 面二段 内面丁寧 な手	石英少量	3382同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。
3382 浅鉢・ 半完形	3221・伝承12号	松ノ木	II3	口縁 (24)		ボル状の容器。口唇部内溝。頗広の 沈緑による門型沈緑と文。方形過 度な中心部凹凸の形。	RL	内外面ミガ キ	石英少量 2点接合	3383同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3383 浅鉢・ 半完形	3048	松ノ木	II3	口縁 (27)		ボル状の容器。頗広の沈緑による 多里四文。多里三角形。	RL	内外面ナガ キ	石英少量	3384同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3384 浅鉢・口縁	2277・2281・X 3Ⅴ面	松ノ木	II3	口縁 (17)		ボル状の容器。沈緑による方型過 度な中心部凹凸の形。同一 文の単位の継ぎ返し。	RL	外面上ガ リ、内 面二段 面二段 内面丁寧 な手	石英微量 ○	3385同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3385 浅鉢・口縁	291	松ノ木	II3	口縁 (26)		ボル状の容器。口唇部近くに沈緑 内小孔。頗広の沈緑による同心四 角文。	RL	内外面ミガ キ	砂粒微量	3386同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3386 浅鉢・口縁	1919・Y3Ⅴ面	松ノ木	II3	口縁 (27.9)		ボル状の容器。頗広の沈緑による 多里四文。多里三角形。	RL	内外面ミガ キ	砂粒微量	3387同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3387 浅鉢・口縁	2889・Y3Ⅴ面	松ノ木	II3	口縁 (26.2)		ボル状の容器。頗広の沈緑による 多里四文。内包区画文。入巻文。	I	内外面ミガ キ	精良	3388同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3388 浅鉢・口縁	X4Ⅴ面	松ノ木	II3			ボル状の容器。頗広の沈緑による 多里四文。内包区画文。入巻文。	RL	内外面ミガ キ	石英少量	3389同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3389 浅鉢・口縁	1154	松ノ木	II3			ボル状の容器。頗広の沈緑によ る多里四文。多里三角形。	RL	内外面ミガ キ	砂粒微量	3390同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3390 浅鉢・口縁	X3Ⅴ面	松ノ木	II3			ボル状の容器。頗広の沈緑によ る多里四文。上唇部内溝に成前小 孔。	RL	内外面ミガ キ	石英片岩 微量	3391同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3391 浅鉢・口縁	1872	松ノ木	II3			ボル状の容器。頗広の沈緑によ る多里四文。	RL	内外面ミガ キ	石英・精 良	3392同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3392 浅鉢・口縁	X3Ⅴ面	松ノ木	II3	口縁 (26)		ボル状の容器。口唇部細か。沈緑文。口唇 近くに成前小孔。	RL	内外面ミガ キ	精良	3393同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3393 浅鉢・口縁	Y4面	松ノ木	II3			頗広の沈緑による比線文。三角文？	RL	内外面ミガ キ	砂粒微量	3394同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3394 浅鉢・口縁	X3Ⅴ面	松ノ木	II3	口縁 (26.6)		ボル状の容器。沈緑文による渋巻 き三角文。	RL	内外面ミガ キ	石英微量	3395同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3395 浅鉢・口縁	Y3Ⅴ面	松ノ木	II3			ボル状の容器。口唇部細か。沈緑文。口唇 近くに成前小孔。	RL	内外面ミガ キ	砂粒少 量	3396同 一鉢	内面黒化、純 白色。純 白色部分赤 色。	
3396 浅鉢・口縁	263・X5Ⅱ面	松ノ木	II3	口縁 (28)		ボル状の容器。口唇部細かに外気。 口唇部沈緑下に繩文。また口縁内邊破 裂孔。頗広の沈緑による同心内 文。三角形。沈緑細。	RL	内外面ミガ キ	砂粒微量			

第二章 1区調査成果

蓋物	器種・部位	双上番号・ 番号	規式	分類	法量 (cm)	等 級	織文 模様	器面調整	胎土	接合	備考
3397 浅鉢・口縁	468・688・ 1389・1438	松ノ木	II3	口伴	(31.5)	表面に近い鋸目。前部丸鉢を持ち、 底部は僅かに外反気味で立ち上がる。 口縁は直角や弧状を呈する。 口部主文様半円文、沈綾1条、範 文。頭部垂下式文、範文。頭部上部 に螺旋起巻、範文。難波の沈綾によ る多束形多束口縁。	RL 全体	内外面ミガ キ	微打痕 微量	○点接	複数孔 織文部分 織文分 側部に赤 彩焼成
3398 浅鉢・口縁	W4Ⅲ面・N面	松ノ木	II3			唐揚模文、口部半円文。小円孔。	RL 全体	内外面ミガ キ	精良	織文部分 赤彩	
3399 浅鉢・口縁	X3Ⅵ面	松ノ木	II3			輪郭の沈綾文。口部部が円文。	RL 全体	内外面ナデ キ	微石英粒 少量		
3400 浅鉢・口縁	X4Ⅵ面	松ノ木	II3			唐揚模文? 口部半円文、小孔2 個。幅広の沈綾。	?	内外面ミガ キ	精良		
3401 浅鉢・口縁	X3Ⅶ面	松ノ木	II3			唐揚模文。口部部半圓形端屈曲。幅 広の沈綾。	RL 全体	内外面ミガ キ	微石英微 量		
3402 浅鉢・ 体部下半	拭継凹唇・ 75層	松ノ木	II3	底径10.4		やわらかっぽいたぶた部の底部より体部 はなく、口部部の沈綾文による多束 直角文。沈綾内面に斜線状の模様。 頭部下平筋曲。頭部上部に文様帶集約 部。幅広の沈綾文。多束円文、三角文？	牛 牛	内外面ミガ キ	石英微量		
3403 浅鉢・ 頭部	X3Ⅷ面・W3 尾面	松ノ木	II3			唐揚模文? 頭部上部に文様帶集約 部。幅広の沈綾文。多束円文、三角文？	牛 牛	内外面ミガ キ	精良	2点接 合	
3404 浅鉢・胸部	X3Ⅸ面	松ノ木	II3			沈綾文。多束三角文。	牛 牛	外面ミガ キ、内面ナ デ	砂粒微量		
3405 浅鉢・頭部	2454	松ノ木	II3			沈綾文。渦巻き方形文。	牛 牛	内外面ミガ キ	砂粒微量	補修孔。 沈綾部分 赤彩	
3406 浅鉢・頭部	X3Ⅹ面	松ノ木	II3			幅広の沈綾文。多束円文？	牛 牛	外面ミガ キ、内面ナ デ	砂粒微量		
3407 浅鉢・頭部	X3Ⅺ面・W3 尾面	松ノ木	II3			幅広の沈綾文。多束の方形文、更に 腹形状のモチーフを付す？	牛 牛	内外面ミガ キ	砂粒少量	2点接 合	
3408 浅鉢・頭部	拭継33層・X3 尾面	松ノ木	II3			唐揚模文。体部周曲す。幅広の沈 綾による渦巻き二角文、円文。	RL 全体	内外面ミガ キ	石英少量 3409同 一整体	唐揚模文、 沈綾部分赤 彩、内面 白色化	
3409 浅鉢・胸部	2465	松ノ木	II3			唐揚模文。体部周曲す。幅広の沈 綾による渦巻き三角文、円文。	RL 全体	内外面ミガ キ	石英少量 3408同 一整体	唐揚模文赤 彩、内面 黑色化	
3410 浅鉢・頭部	X3Ⅻ面	松ノ木	II3			唐揚模文。多束三角文。頭部下平筋 文。	牛 牛	内外面ミガ キ	砂粒少量		
3411 浅鉢・頭部	X4Ⅹ面・X4 尾面	松ノ木	II3			唐揚模文。幅広の沈綾文。	RL 全体	内外面ミガ キ	精良	2点接 合	
3412 浅鉢・ 頭部下半		松ノ木	II3			幅広の沈綾文。	牛 牛	外面ミガ キ、内面ナ デ	砂粒微量		
3413 浅鉢・胸部	X5Ⅹ面	松ノ木	II3			幅広の沈綾文、多束三角文。頭部下平筋 文に横筋。	牛 牛	内外面ミガ キ	精良	赤彩、 素 沈綾赤彩	
3414 浅鉢・胸部	拭継5層	松ノ木	II3			頭部外気泡に立ち上り、頭部は 丸鉢を持つ？幅広の沈綾による多束 円文、三角文。	牛 牛	外面ミガ キ、内面ナ デ	精良		
3415 浅鉢・口縁	拭継12唇・Y3 V面・尾面	松ノ木	II4			ボール状の唇形。横位の多束沈綾 文。	牛 牛	内外面ミガ キ	微石英少 量 3416同 一整体	沈綾部分 赤彩、内面 黑色化	
3416 浅鉢・胸部	拭継5層	松ノ木	II4			多束沈綾垂下。	牛 牛	内外面ミガ キ	微石英微 量 3415同 一整体	内面黑色化	
3417 浅鉢・口縁	W3Ⅸ面・V1面	松ノ木	II4			口縁内傾。横位の多束沈綾文。	牛 牛	内外面ミガ キ	微石英微 量		
3418 浅鉢・口縁	Y3Ⅹ面	松ノ木	II4			口縁内傾。横位の多束沈綾文。	牛 牛	内外面ミガ キ	石英少量		
3419 浅鉢・口縁	V4Ⅹ面	松ノ木	II4			口縁内傾。横位の多束沈綾文。種や かな波紋口縁。	牛 牛	内外面ミガ キ	石英少 量		
3420 浅鉢・胸部	拭継10唇・X3 V面	松ノ木	II4			多束沈綾文。	牛 牛	内外面ミガ キ	精良	2点接 合	
3421 浅鉢・胸部	W3Ⅸ面	松ノ木	II4			多束沈綾文。	牛 牛	内外面ナデ キ	石英少量		
3422 浅鉢・胸部	W3Ⅹ面	松ノ木	II4			多束沈綾文。	牛 牛	内外面ミガ キ	精良	沈綾内赤 彩	
3423 浅鉢・胸部	X3Ⅹ面	松ノ木	II4			多束沈綾文。人面文。幾何文。	牛 牛	内外面ミ カキ	精良	沈綾内赤 彩、内外 面黑色化	
3424 浅鉢・胸部	X3Ⅺ面	松ノ木	II4			沈綾文。	牛 牛	内外面ミガ キ	石英少量		
3425 浅鉢・口縁	X5Ⅴ面	松ノ木	II5	口縁 (29)		口縁部無文帯、直立。口縁やや張る。RL 頭部周上横立。全体に厚底。	牛 牛	内外面ミガ キ	精良		
3426 浅鉢・口縁	W4Ⅵ面	松ノ木	II5			浅底口縁。口部周焦文帯、直立。RL 頭部周上横立。	牛 牛	内外面ミガ キ	结晶品片岩 少量		
3427 浅鉢・口縁	155・297・X4 V面	松ノ木	II6			ボール状の唇部。口縁部沈綾1条。頭 部底太い隆脊。区段内腹文。	牛 牛	内外面ミガ キ	微滑少 量	○	
3428 浅鉢・胸部	W4Ⅶ面	松ノ木	II6			大いに頭部唇部。区段内腹文。	牛 牛	内外面ミガ キ	砂粒少量	織文部分 赤彩	
3429 浅鉢・ 半彌形	824	松ノ木?	II7	口縁 (35)		体部大きく述べ。肩部に段を有し、 人頭の沈綾1条あらわし、強調キザ シ。内面も段状に有る。	牛 牛	内外面ミ カキ牛	石英少量	内外面積 分に壓付 量	
3430 浅鉢・ 口縁	X3Ⅴ面	松ノ木?	II7	口縁	(20.6)	体部上半外反。細い疣状を毫らせ る。	牛 牛	内外面ミガ キ	石英少量		
3431 浅鉢・口縁	X3Ⅵ面・面	松ノ木?	II8	口性 (47)		口縫拵張し、内面に多束に沈綾を毫 らせ。縞文、内面横縞文。	牛 牛	内面ナデ キ	石英少 量、角圓 石英微量		
3432 浅鉢・ 頭部上半	518・528	なつめの	II9			丸鉢を持つ。楕円地に多束沈綾文。	LR	内面ミガキ	石英少量 微量	○	
3433 浅鉢・胸部	X3Ⅷ面	松ノ木?	II9			刺突文。	牛 牛	外縫ナデ キ、内面ミガ キ	精良	外縫や 摩耗	

遺物	器種・部材	出土番号・ 出土位置	形式	分類	法量 (cm)	特徴	測文 系体	器面調整	施土	接合	備考
3434 鉢・口縁 底張6層・X3Ⅵ面・ X4Ⅵ面	宿毛	I 口径 (25)	僅かに斜坡を持った形。圓潤構文。 入窓文に棒状区面、立ち上がる。磨削	RL	内外面丁寧なナデ	精良	修理孔2個				
3435 鉢・口縁 底張8層・Y4面	宿毛	I	僅かに斜坡を持った形。圓潤構文。	RL	内外面ミガキ	砂粒微量	2点接合				
3436 鉢・胸部 X3Ⅵ面	宿毛	I	2本沈痕による区面文?	RL?	内面ナゲ付加金?	石英、結晶片微量					
3437 鉢・口縁 3061・X5Ⅵ面・ X5Ⅵ面	福田K E	E	3本沈痕帯消陶文。弱部継縫の入瓶文。口内に突出、2本北縁、複文、小円孔2個。内面凹	RL?	内外面ミガキ	精良	3点接合				
3438 鉢・胸部 1307	福田K E	E	底定の3本沈痕帯消陶文。	RL	内外面ミガキ	精良	陶文部分 赤彩、分析有り				
3439 鉢・胸部 底張6層	福田K E	E	3本沈痕。唇部陶文? 外面厚託の為 不明。	?	外面部毛、内面ナデ	精良					
3440 鉢・ 底張下平	631	福田K E	E	継縫の3本沈痕帯消陶文。部分的に 入窓文有る。	RL?	内外面ミガキ	精良、赤色微粒微量				
3441 鉢・完形 2605・2610・W 松ノ木	口径17.6、 高さ12.3、 底径7.4 3面面・W4面面	III	バケツ型の器形。口唇部斜行カザミ、 複文。脇部磨消済み、裏手状 成形台座。	RL	内外面ナデ	石英少量○	外面部付着				
3442 鉢・半完形 1517・X4Ⅵ面	松ノ木	III	口径 (15.2)、 高さ12.3、 底径6 3面面	バケツ型の器形。底部2ヶ所、垂 下沈痕有る。口唇部キザミ。脇部沈痕 文、底「1」字状文。底部や上蓋。	内外面各處→ナデ	小理少量	2次焼成 痕有				
3443 鉢・半完形 W4面面・W3Ⅵ面 高・X4Ⅵ面面	松ノ木	IV	口径 (17)、 高さ (8.6)	口唇キザミ。脇部無文。脇部陶文	RL	内外面ナデ	結晶片微量 少量	外面部付着			
3444 鉢・口縁 2222・X4Ⅵ面	松ノ木	V 口径 (16.2)	底部直腹の立ち上がる。口唇沈線、 複文。脇部斜行成形數多、磨削	RL	内外面ミガキ	石英少 量、金雲母微量					
3445 鉢・口縁 底張5層	なつめの 木並行?	VI 口径 (17.8)	小型の鉢。口唇肥厚せざり、やや面取 り狀。脇部や口びれ無文。脇部粗 かに丸味を持ち、複文地。	RL	内外面ナデ	微石英少 量、角閃石、 石英、雲母 微量	3446同 様、角閃石 微量、石英 微量、雲母 微量				
3446 鉢・口縁 1233	なつめの 木並行?	VI 口径 (17.4)	小型の鉢。口唇肥厚せざり、やや面取 り狀。脇部や口びれ無文。脇部粗 かに丸味を持ち、複文地。	RL	外面部毛→ ナデ、内面 ナデ	微石英少 量、角閃石、 石英、雲母 微量	3445同 様、角閃石 微量、石英 微量、雲母 微量				
3447 鉢・口縁 1600	なつめの 木並行?	VI 口径 (19.6)	小型の鉢。口唇肥厚せざり、斜行キザ ミ。脇部や口びれ無文。脇部、脇部 共にやや粗い陶文地。	RL	内面条痕→ ナデ	微石英少 量	微石英少 量				
3448 粗製深鉢・ 口縁	底張5層	宿毛	I Ia 口径 (37)	脇部で僅かにくびれる。口唇キザ ミ。	内外面ナデ	微石英多 量、金雲 母微量					
3449 粗製深鉢・ 口縁	X3Ⅵ面	宿毛	I Ia 口径 (19.2)	直線的に立ち上がる。口唇キザ ミ。	内外面条痕→ ナデ	石英多 量、結晶 片岩屑微量	内外面燒 付着				
3450 粗製深鉢・ 口縁	X3Ⅵ面	宿毛	I Ia 口径 (18)	直線的に立ち上がる。口唇キザミ。	内外面ナデ	石英多 量、角閃 石少 量					
3451 粗製深鉢・ 口縁	底張23層	宿毛	I Ia	直線的に立ち上がる。口唇キザミ。	内外面陶 泥→直 ナデ	石英微量 量、金雲 母微量					
3452 粗製深鉢・ 口縁	X4Ⅵ面・底張 24層	宿毛	I Ia	直線的に立ち上がる。口唇キザミ。	内外面ナデ	石英微量 量、角閃 石少 量					
3453 粗製深鉢・ 口縁	1269	宿毛	I Ia	直線的に立ち上がる。口唇キザミ。	外面部少 量、内面ナ デ、内面ナ デ	石英微量 量、砂粒多 量					
3454 粗製深鉢・ 口縁	底張6層	宿毛	I Ia	直線的に立ち上がる。口唇キザミ。	内外面直 ナデ	微石英多 量	外面部付 着				
3455 粗製深鉢・ 口縁	底張47層・底張 33層	宿毛	I Ia 口径 (33)	直線的に立ち上がる。棒状工具によ る口唇キザミ。	内外面直 ナデ	石英微量					
3456 粗製深鉢・ 口縁	底張2層	宿毛	I Ia	直線的に立ち上がる。棒状工具によ る口唇キザミ。	内外面ナデ	石英微量					
3457 粗製深鉢・ 口縁	1267	宿毛	I Ia	口縁端に内窓。口唇外側にキザ ミ。脇部端に陶文旋紋。	I 内外面ナ デ	石英少量					
3458 粗製深鉢・ 口縁	2628	宿毛?	I Ib 口径 (29)	脇部ぐるめる。口唇キザミ。	内外面ナデ	微砂粒多 量					
3459 粗製深鉢・ 口縁	3009	宿毛?	I Ib 口径 (28.4)	脇部ぐるめる。口唇キザミ。	内外面条痕 →ナデ	石英少量 量、金雲 母微量					
3460 粗製深鉢・ 口縁	1714・1716	宿毛?	I Ib 口径 (23)	脇部ぐるめる。脇部や丸味を持 つ。口唇キザミ。	内外面直 ナデ	石英微量 量、角閃 石少 量	○				
3461 粗製深鉢・ 口縁	3224	宿毛?	I Ib 口径 (20.4)	脇部ぐるめる。口唇キザミ。	外面部ナ デ、内面ナ デ	石英、角 閃石、金雲 母微量	外面部 に深谷有				
3462 粗製深鉢・ 口縁	X3Ⅵ F面	宿毛?	I Ib 口径 (19.6)	やや小形。脇部ぐるめる。口唇キザ ミ。	外面部ナ デ、内面ナ デ	石英少 量、金雲 母微量	3463同 様、一個体				
3463 粗製深鉢・ 口縁	2367・X3Ⅵ面	宿毛?	I Ib 口径 (18.6)	やや小形。脇部ぐるめる。口唇キザ ミ。	内外面直 ナデ	石英、金 雲母微量	外面部 に深谷有				
3464 粗製深鉢・ 口縁	底張6層・ X3Ⅵ面	宿毛?	I Ib 口径 (18)	脇部やくびれる。脇部や丸味持 つ。口唇キザミ。内面凹	内外面直 ナデ	石英少 量、金雲 母微量	一體化				
3465 粗製深鉢・ 口縁	底張48層	宿毛?	I Ib 口径 (17.2)	小形。脇部ぐるめる。口唇キザミ。	外面部ナ デ、内面ナ デ	石英、結 晶片微量 量	上半 深谷有				

第二章 1区調査成果

遺物	器種・部位	取上番号	型式	分類	法量 (cm)	特徴	本文 原体	器形調整	施土	接合	備考
香炉	粗製深鉢・ 口縁	X4V面・X3V面	宿毛?	I 1b	口徑 (16)	小形。頭部やくびれる。口唇斜行のキザミ。	外縁柔軟→ ナデ、内面 ナデ	砂粒多量			
3465	粗製深鉢・ 口縁	1785	宿毛?	I 1b	口徑 (16)	小形。頭部やくびれる。口唇斜行のキザミ。	外縁柔軟→ ナデ、内面 ナデ	砂粒多量			
3466	粗製深鉢・ 口縁	1936	宿毛?	I 1b	口徑 (16)	小形。頭部やくびれる。口唇斜行のキザミ。	外縁柔軟→ ナデ、内面 ナデ	砂粒少 量、金鑑 留め			外表面色 化
3467	粗製深鉢・ 口縁	粗製深鉢・ 口縁	宿毛?	I 1b	口徑 (16)	小形。頭部やくびれる。口唇斜行のキザミ。	外縁柔軟→ ナデ、内面 ナデ	石英少量			
3468	粗製深鉢・ 口縁	粗製深鉢・ 口縁	宿毛?	I 1b	口徑 (16)	小形。頭部やくびれる。口唇斜行のキザミ。	外縁柔軟→ ナデ、内面 ナデ	石英少量			
3469	粗製深鉢・ 口縁	粗製深鉢・ 口縁	宿毛?	I 1b	口徑 (16)	小形。口唇部外反。口唇キザミ。	外縁柔軟→ ナデ	石英少量			
3470	粗製深鉢・ 口縁	588	宿毛?	I 1b	口徑 (15)	小形。頭部やくびれる。口唇外反。口唇キザミ。	外縁柔軟→ ナデ	石英少量			
3471	粗製深鉢・ 口縁	1870	宿毛?	I 1b	口徑 (15)	小形。頭部やくびれる。口唇斜行のキザミ。	外縁柔軟→ ナデ	石英少量			
3472	粗製深鉢・ 口縁	粗製深鉢・ 口縁	宿毛?	I 2a	口徑 (15)	入山形の変形。腹部斜面に浅い小凹形斜面窓。底部やくびれて外反。口唇斜行のキザミ。	外縁柔軟→ ナデ	砂粒少 量、金鑑 留め			外表面付 着
3473	粗製深鉢・ 口縁	1726	宿毛	I 2a	口徑 (22)	入山形の口縁。口唇キザミ。	外縁柔軟→ ナデ	石英微量 砂粒、石 英多量			
3474	粗製深鉢・ 口縁	2602	宿毛	I 2a	口徑 (22)	山形口縁。頭部やくびれて外反。頂部円形斜面窓。口唇斜行のキザミ。	外縁柔軟→ ナデ	石英微量 金鑑 留め			外表面下 手に保 持する
3475	粗製深鉢・ 口縁	2811	宿毛	I 2a	口徑 (21)	山形口縁。頭部に円形斜窓。口唇キザミ。	外縁柔軟→ ナデ	石英微量			
3476	粗製深鉢・ 口縁	2080・X4V 面・VI面・W4 V面	宿毛	I 2a	口徑 (35)	山形口縁。頭部やくびれて外反。頭部に円形斜窓。口唇や平行窓のキザミ。	外縁柔軟→ ナデ	石英多量	3476～ 3478同 一體		
3477	粗製深鉢・ 口縁	X3V面	宿毛?	I 2a		山形口縁。頭部やくびれて外反。頭部に円形斜窓。口唇や斜窓のキザミ。	外縁柔軟→ ナデ	石英多量	3476～ 3478同 一體		
3478	粗製深鉢・ 口縁	粗製深鉢・ 口縁	宿毛?	I 2a		波状口縁。頭部やくびれて外反。口唇キザミ。	外縁柔軟→ ナデ	石英多量	3476～ 3478同 一體		
3479	粗製深鉢・ 口縁	波状22層・X3 面	宿毛	I 2a		波状口縁。頭部やくびれて外反。口唇斜窓とキザミ。	外縁柔軟→ ナデ	石英多量	3476～ 3478同 一體		
3480	粗製深鉢・ 口縁	477・1793	松ノ木	I 2b	口徑 (22)	波状口縁。頭部やくびれて外反。口唇斜窓とキザミ。	外縁柔軟→ ナデ	砂粒多量	3点級		特殊孔
3481	粗製深鉢・ 口縁	Y3V面	松ノ木	I 2b		キサツついた曲輪状の筋節や突起。口唇斜窓とキザミ。	外縁柔軟→ ナデ	石英少量			
3482	粗製深鉢・ 口縁	1258・1106・Y 3V面	松ノ木	I 2c	口徑 (32)	頭部やくびれて外反。口唇斜窓とキザミ。	外縁柔軟→ ナデ	石英微量	3476～ 3478同 一體		
3483	粗製深鉢・ 口縁	波状33層	松ノ木	I 2c		ブリッジ状の突起丘。頭部直前の立ち上がり。口唇斜窓とキザミ。	外縁柔軟→ ナデ	石英微量			
3484	粗製深鉢・ 口縁	1000	松ノ木	I 3a	口徑 (26)	頭部やくびれて外反。脚部丸味を持つ。口唇肥厚で口唇キザミ。	外縁柔軟→ ナデ、内面 ナデ	微石英 微量			外表面か なに保 持する
3485	粗製深鉢・ 口縁	2028	松ノ木	I 3a	口徑 (16)	小形。頭部やくびれて外反。口唇斜窓とキザミ。	外縁柔軟→ ナデ	石英微量			
3486	粗製深鉢・ 口縁	783・2362	松ノ木	I 3b	口徑 (25)	頭部やくびれて外反。口唇斜窓とキザミ。	外縫ナデ、 内面柔軟→ ナデ	砂粒多量	○		
3487	粗製深鉢・ 口縁	1915	松ノ木	I 3c	口徑 (28)	波状口縁。体部直前の立ち上がり。口唇斜窓とキザミ。	外縫ナデ、 内面柔軟→ ナデ	石英微量	3488同 一體		
3488	粗製深鉢・ 口縁	637	松ノ木	I 3c	口徑 (31)	体部直前の立ち上がり。口唇斜窓とキザミ。	外縫ナデ、 内面柔軟→ ナデ	微石英 微量			
3489	粗製深鉢・ 口縁	2272	松ノ木	I 4n	口徑 (33)	体部直前の立ち上がり。口唇斜窓とキザミ。	外縫ナデ、 内面柔軟→ ナデ	微石英 微量			
3490	粗製深鉢・ 口縁	2162・2165	松ノ木	I 4a	口徑 (27)	頭部やくびれて外反。口唇斜窓とキザミ。	外縫ナデ、 内面柔軟→ ナデ	砂粒、石 英微量	○		
3491	粗製深鉢・ 口縁	1858	松ノ木	I 4a		体部直前の立ち上がり。口唇斜窓とキザミ。	外縫ナデ、 内面柔軟→ ナデ	微石英 微量			
3492	粗製深鉢・ 口縁	243・247・ 272・336・ 482・336・ 939・1901・X4 IV面・X4V 面・V面	松ノ木	I 4b	口徑 (34)	大形。頭部やくびれて直前の立ち上がり。体部や丸味を持つ。口唇斜窓とキザミ。	外縫ナデ、 内面柔軟→ ナデ	石英微量	○		
3493	粗製深鉢・ 口縁	2435・1511・ 2711・X3V 面・V面	松ノ木	I 4b	口徑 (43)	大形。頭部やくびれて直前の立ち上がり。口唇斜窓とキザミ。	外縫ナデ、 内面柔軟→ ナデ	石英微量	○		外表面付 着
3494	粗製深鉢・ 口縁	粗製深鉢・ 口縁	粗製深鉢・ 口縁	I 4b	口徑 (30)	大形。頭部やくびれて直前の立ち上がり。口唇斜窓とキザミ。	外縫ナデ、 内面柔軟→ ナデ	石英微量			外表面付 着
3495	粗製深鉢・ 口縁	2277・X3V面	松ノ木	I 4b	口徑 (42)	大形。頭部やくびれて直前の立ち上がり。口唇斜窓とキザミ。	只縫提 文	砂粒多量			外表面付 着

遺物 番号	基種・部位	取上げ号・ 出土位置	型式	分類	法量 (cm)	特徴	本文 体系	表面調整	黏土	接合	備考
3456 粗製深鉢・ 口縁	X3Ⅷ西	松ノ木	I4b			縁やかに外反する。口内面施文、 斜行の唇状跡キザミ。	内外面条板	結晶片岩 少量	外側保付 着		
3497 粗製深鉢・ 口縁	X3Ⅸ西	松ノ木	I4b			口縁裏面。上端残文、口縁斜行の唇 状跡キザミ。	内外面条板	石英少量			
3498 粗製深鉢・ 口縁	W3Ⅹ南・X3Ⅸ 西	松ノ木	I4b			口縁や肥厚、折沈痕キザミ。縁部 と側面の底に肥厚。	内外面ナダ 背説 開闢文	内外面柔軟度 →ナダ	外側化		
3499 粗製深鉢・ 口縁	856	松ノ木	I5	口径 (15.7)		口縁裏面に肥厚、貞段痕残文。縁部 は直線に立ち上がり、無文。縁部は 不明。	背説 開闢文	砂粒少量 ナダ	砂粒少量 ナダ	外側化	
3500 粗製深鉢・ 手平形	2358・2532・ 2613・2817・ 2842・2573・ 2907・2908・ 2929・3015・ 3220・粗製14 層・長崎22層	松ノ木	II1a	口径 (36)		頭部やかにくびれる。勢均が厚 い。松ノ木縫合面に朱痕を有す。	内外面柔板	石英多量 金雲母 母少量	○19点 金雲母 母少量	外側保付 着	
3501 粗製深鉢・ 口縁	639・1132・ 1137・1139・ 1140	松ノ木	E1a	口径 (36)		頭部や外反。	内外面柔板 →ナダ	砂粒、石 丸少量	○6点		
3502 粗製深鉢・ 口縁	1454	松ノ木	II1a	口径 (42)		頭部外反する。口唇部や平面。	外面条板→ ナダ、内面 ナダ	砂粒多量			
3503 粗製深鉢・ 口縁	785・985・Y4 前	松ノ木	E1a	口径 (37)		頭部やかに外反。	内外面条板	砂粒少 量、金雲 母微量	○	外側保付 着	
3504 粗製深鉢・ 口縁	2072	松ノ木	E1a	口径 (34.4)		口縁僅かに外反。内外面直い条痕。	内外面柔板	隕石灰少 量			
3505 粗製深鉢・ 口縁	2601	松ノ木	II1a	口径 (39)		頭部やかに外反。	外面柔板→ ナダ、内面 柔板	石英少 量、金雲 母微量			
3506 粗製深鉢・ 口縁	2108	松ノ木	II1a	口径 (36)		頭部僅かに外反。口沿丸味を持つ。	内外面柔板 →ナダ	砂粒多量 母少量			
3507 粗製深鉢・ 口縁	2569	松ノ木	II1a	口径 (42)		頭部やかに外反する。	内外面柔板 →ナダ	内外面柔板 →ナダ			
3508 粗製深鉢・ 口縁	1810	松ノ木	E1a	口径 (36)		頭部やや外反する。	内外面柔板 →ナダ	石英少 量、金雲 母微量			
3509 粗製深鉢・ 口縁	831	松ノ木	E1a	口径 (36)		頭部やかに外反する。	内外面柔板 →ナダ	石英、金 雲母微量			
3510 粗製深鉢・ 口縁	1045	松ノ木	II1a	口径 (35)		頭部外反する。口唇部やや平面。	内外面柔板 →ナダ	石英多量 母少量		外側保付 着	
3511 粗製深鉢・ 口縁	2658	松ノ木	E1a	口径 (32.4)		頭部僅かに外反。	外面柔板→ ナダ、内面 柔板	石英、金 雲母微量		外側保付 着	
3512 粗製深鉢・ 口縁	X 3Ⅷ南	松ノ木	E1a			頭部僅かに外反。肩部や張る。	内外面柔板 →ナダ	石英、絆 品片多量	○	内面下 半抜け 付着	
3513 粗製深鉢・ 口縁	1238・2050	松ノ木	E1a	口径 (22.4)		頭部僅かに外反。頭部僅かに膨らみ を持つ。	内外面柔板 →ナダ	砂粒多量			
3514 粗製深鉢・ 口縁	號頂10層 上部	松ノ木	II1a	口径 (24)		小形。頭部僅かに外反。頭部僅かに 膨らみを持つ。	内外面柔板 →ナダ	内外面柔板 →ナダ			
3515 粗製深鉢・ 口縁	512	松ノ木	II1b	口径 (20.2)		小形。頭部僅かに外反する。	内外面柔板 →ナダ	石英少量		外側保 付着	
3516 粗製深鉢・ 口縁	1281・1350	松ノ木	E1b	口径 (22.4)		小形。頭部ややくびれる。	内外面柔板 →ナダ	微石英、 金雲母多 量、角閃 石微量	○	外側保 付着	
3517 粗製深鉢・ 手平形	2180	松ノ木	II1c	口徑 (26.8)		頭部僅かにくびれる。	内外面柔板 →ナダ	微石英、 金雲母多 量			
3518 粗製深鉢・ 口縁	2046	松ノ木	E1c	口径 (25.4)		頭部僅かにくびれる。	内外面柔板 →ナダ	砂粒、結 晶片岩 多量		内面下 半抜け 付着	
3519 粗製深鉢・ 口縁	2404	松ノ木	II1d	口径 (20.4)		頭部僅かにくびれる外板。肩部や張 り、体部や丸味を持つ。	外面柔板→ ナダ、内面 柔板	石英多量 母少量			
3520 粗製深鉢・ 口縁	957	松ノ木	II1e			口縁直立、肩部や張る。	内外面柔板 →ナダ	砂粒多量		内面保 化付着	
3521 粗製深鉢・ 口縁	1095	松ノ木	E1e			口縁直立。肩部張る？	内外面柔板 →ナダ	石英多量		外側保 付着	
3522 粗製深鉢・ 口縁	2815	松ノ木	E1f	口径 (28)		口縁直立的に立ち上がる。	内外面柔板 →ナダ	砂粒、石 英少量、 角閃石 微量		内面保 化付着	
3523 粗製深鉢・ 口縁	1107	松ノ木	E1f			口縁部直線的に立ち上がる。	内外面ナダ	石英多量			
3524 粗製深鉢・ 口縁	1173	松ノ木	E1f			口縁部僅かに外反。	内外面ナダ	砂粒多量			
3525 粗製深鉢・ 口縁	X 3Ⅸ南	松ノ木	E1f			口縁部僅かに外反。	内外面ナダ	微石英多 量			
3526 粗製深鉢・ 口縁	X 3Ⅸ南	松ノ木	E1f			口縁部僅かに外反。	内外面柔板 →ナダ	砂粒多量			
3527 粗製深鉢・ 口縁	X 3Ⅸ南	松ノ木	E1f			口縁部僅かに外反。	内外面柔板 →ナダ	砂粒多量			
3528 粗製深鉢・ 口縁	Y 3Ⅸ南	松ノ木	E1f			口縁部僅かに外反。	内外面柔板 →ナダ	砂粒少量			
3529 粗製深鉢・ 口縁	X 5Ⅸ南	松ノ木	E1f			口縁部僅かに外反。	内外面柔板 →ナダ	砂粒少量			

第Ⅱ章 1区調査成果

遺物	器種・部位	取上番号	型式	分類	法量 (cm)	特徴	構文 系体	器面施設	胎土	接合	備考
香号											
3330 粗製深鉢	Y3Ⅷ面	松ノ木	II1f			口頭部僅かに外反。		内外面施痕	石英少量		
口縁							→ナデ				
3331 粗製深鉢	2312	松ノ木	II1f			口頭部僅かに外反。口得平底。		内外面ナデ	石英少量	外腹側付名	
口縁							→ナデ				
3332 粗製深鉢	X3Ⅷ面	松ノ木	II1f			口頭部直線的に立ち上がる。口唇厚底。		内外面施痕	石英少量		
口縁							→ナデ				
3333 粗製深鉢	X3Ⅸ面	松ノ木	II1f			口頭部僅かに外反。口得平底。		内外面ナデ	石英少量		
口縁							→ナデ				
3334 粗製深鉢	2111	松ノ木	II1f			口頭部僅かに外反。口唇厚底。		内外面指頭	砂粒多量	補修孔、 外腹側付着	
口縁							→ナデ				
3335 粗製深鉢	2730・弦張47層	宿毛	II2a	口径 (20.8)		口輪山形の小突起を有す。口頭部直線的に立ち上がる。		内外面ナデ	砂粒多量	2730 ・弦張 47層は 同一鉢 体。	
口縁							→ナデ				
3336 粗製深鉢	3163・3164・ 口縁 3165・3166・ W3Ⅶ面	松ノ木	II2b	口径 (28.4)		口輪山形の貼付。頭部くびれる。削頭くびれる。頭部直線的に立ち上がる。		外腹側いナ デ、内腹ナ デ	石英多量	○	
3337 粗製深鉢	574	松ノ木	II3c			口輪やや肥厚。土文椎跡孔。		内外面ナデ	右石 英少量、 外腹 側微量	外腹側 化付着 外腹側 付着	
口縁							→ナデ				
3338 粗製深鉢	2388・X3Ⅷ 口縁	松ノ木	II2d	口径 (19)		4單位の口輪突起。底盤直線的に立ち上がる。		内外面施痕	右石 英少量、 外腹 側微量	○	
3339 粗製深鉢	3150・3151 口縁	松ノ木	II2d	口径 (23.6)		山形突起?。口頭部直線的に立ち上がる。		→ナデ	砂粒少 量、外腹 側微量		
3340 粗製深鉢	889	なつめの 口縁	II2e	口径 木歩行?		丸形のある波状口縁。口輪部直線的に立ち上がる。		外唇施痕→ 右石 英少量、 外腹 側微量	左石 英多量、 外腹 側微量	外腹側 化付着 外腹側 付着	
3341 粗製深鉢	2059 口縁	松ノ木	II2f	口径 (41.4)		頭部僅かにくびれる。口縁上面に拵張。円形の施痕と直線始付。		外腹側 内腹施痕→ ナデ	右石 英多量	内腹黒 色化	
3342 粗製深鉢	W 4Ⅷ面 口縁	松ノ木	II3a			口輪僅かに肥厚。頭部や外反。		内外面施痕	右石 英少量		
3343 粗製深鉢	Y3Ⅷ面 口縁	松ノ木	II3a			口輪僅かに肥厚。頭部僅かに外反。		内外面施痕	右石 英少量	外腹側 化付着 外腹側 付着	
3344 粗製深鉢	X 4Ⅷ面 口縁	松ノ木	II3a			口輪僅かに肥厚。		内外面ナデ	右石 英少量	外腹側 化付着 外腹側 付着	
3345 粗製深鉢	1880 口縁	松ノ木	II3a	口径 (28.8)		頭部くびれる。口輪内面肥厚。		内外面施痕	砂粒多量	○	
3346 粗製深鉢	X 4Ⅷ面 口縁	松ノ木	II3a			頭部外反する。口縁やや肥厚。		内外面施痕→ ナデ、内腹 側微量	右石 英多量	外腹側 化付着 外腹側 付着	
3347 粗製深鉢	1561 口縁	松ノ木	II3b	口径 (46)		口輪肥厚。内曲施文、彫刻1条、鉤形に直曲。頭部外反。		内外面施痕	右石 英少量	内腹黒 色化	
3348 粗製深鉢	X 3Ⅷ面 口縁	松ノ木	II3b			口輪内面肥厚。頭部や外反。		内外面施痕	右石 英少量		
3349 粗製深鉢	213・X 4Ⅷ面 口縁	松ノ木	II3b			口輪内面肥厚。頭部や外反。		内外面ナデ	砂粒多量	○	
3350 粗製深鉢	W 3Ⅷ面 口縁	松ノ木	II3b			口輪肥厚。		内外面施痕	砂粒少 量		
3351 粗製深鉢	X 3Ⅷ面 口縁	松ノ木	II3b			口輪僅かに肥厚。平底。		内外面ナデ	右石 英少量	外腹側 化付着	
3352 粗製深鉢	3137 口縁	松ノ木	II3b			無文。口縁直立。口輪僅かに肥厚、平底。		外腹指頭→ 右石 英少量	右石 英少量		
3353 粗製深鉢	837 口縁	松ノ木	II3c			口縁外面肥厚。外相。		内外面ナデ	右石 英少量	○	
3354 粗製深鉢	599 口縁	松ノ木	II3c			口縁外面肥厚。外相。		内外面ナデ	右石 英少量		
3355 粗製深鉢	1263 口縁	松ノ木	II3c			口縁外面肥厚。外相。		内外面ナデ	右石 英少量		
3356 粗製深鉢	X 5Ⅲ面 口縁	松ノ木	II3c			口縁外面肥厚。口頭部直立。		内外面施痕	右石 英多量		
3357 粗製深鉢	858 口縁	松ノ木	II3c			口縁外面肥厚。口輪部直立。		内外面ナデ	右石 英少量		
3358 粗製深鉢	1377 口縁	松ノ木	II3c	なつめの 木歩行?		口縁外面肥厚。外相。		内外面施痕	右石 英少量		
3359 無文浅鉢	2993 口縁	松ノ木	II1	口径 (45.4)		体部大きく述べ。口輪部丸味を持つ。内曲黑色化。		内外面施痕	右石 英少量		
3360 無文浅鉢	684・713・ 半定形 2698・X 3Ⅷ面	松ノ木	II1	口径 (37.2)		体部大きく述べ。		内外面施痕	右石 英少量	○	
3361 無文浅鉢	1564 口縁	松ノ木	II1	口縁 (36.6)		体部大きく述べ。		内外面ナデ	右石 英少量		
3362 無文浅鉢	2206 口縁	松ノ木	II1	口縁 (30)		体部大きく述べ。		内外面ナデ	右石 英少量	補修孔	
3363 無文浅鉢	2099 口縁	松ノ木	II1	口縁 (33)		体部大きく述べ。口輪丸味を持つ。		内外面ナデ 内腹ミオキ	右石 英少量		

遺物	器種・部位	双上番号・ 番号	型式	分類	法數 (cm)	特 徴	構文 系体	器面調整	胎土	接合	備考
3564	無文浅鉢・ 口縁	W3Ⅷ面・W4Ⅸ 面	松ノ木	I I	口径 (30)	体部大きく開く。	内外面ナダ →ガキ	砂粒少量			
3565	無文浅鉢・ 口縁	X4Ⅹ面	松ノ木	I I	口径 (37)	体部大きく開く。	内外面ミガキ	右美多量			
3566	無文浅鉢・ 口縁	2771	松ノ木	I I	口径 (22.8)	小形。碗状に開く。	内外面ナダ →ガキ	右美、砂 粒少量			
3567	無文浅鉢・ 口縁	W3Ⅷ面	松ノ木	I I	口径 (45.4)	体部大きく開く。口唇内面そぎ落と し状に尖る。	内外面ナダ →ミガキ	右美少量			
3568	無文浅鉢・ 口縁	抵張19層	松ノ木	I I		体部大きく開く。	内外面ナダ →ガキ	砂粒少量			
3569	無文浅鉢・ 口縁	488	松ノ木	I I		器底かに丸珠を持って立ち上が る。	内外面ナダ →ガキ	右美多量			
3570	無文浅鉢・ 口縁	1018	松ノ木	I I		やや底部膨く。	内外面ナダ →ガキ	右美多量			
3571	無文浅鉢・ 口縁	抵張46層	松ノ木	I I		口縁直線的に立ち上がる。口唇丸 味。	内外面ナダ →ナダ	結晶片岩 右美			
3572	無文浅鉢・ 口縁	X4Ⅸ面下	松ノ木	I I		口縁やや開く。口得やや肥厚し平追 気味。	内外面ミガ キ?	右美微量			
3573	無文浅鉢・ 口縁	W3Ⅸ面	松ノ木	I I		口縁やや内溝気味。口唇丸味。	内外面ミガ キ?	右美微量			
3574	無文浅鉢・ 口縁	1371	松ノ木	I I		口縁やや内溝気味。口唇丸味。器肉 薄い。	内外面ミガ キ?	右美微量			
3575	無文浅鉢・ 口縁	2148	松ノ木	I I		口縁やや内溝気味。口唇丸味。	内外面ミガ キ?	右美微量			
3576	無文浅鉢・ 口縁	X3Ⅹ面	松ノ木	I I		口縁やや内溝気味。口唇丸味。器肉 薄い。	内外面ナダ →ガキ	結晶片岩 右美微量			
3577	無文浅鉢・ 口縁	抵張10層	松ノ木	I I		口縁やや内溝気味。口唇やや丸味。	内外面ナダ →ガキ	結晶片岩 右美微量			
3578	無文浅鉢・ 口縁	抵張8層	松ノ木	I I		口縁やや内溝気味。口唇やや丸味。	内外面ナダ →ガキ	結晶片岩 右美微量			
3579	無文浅鉢・ 口縁	X4Ⅸ面	松ノ木	I I		口縁やや内溝気味。口唇丸味。器肉 薄い。	内外面ナダ →ガキ	結晶片岩 右美微量			
3580	無文浅鉢・ 口縁	W3Ⅸ面	松ノ木	I I		口縁外反気味。口唇丸味。	内外面ナダ →ガキ	右美微量			
3581	無文浅鉢・ 口縁	W4Ⅸ面	松ノ木	I I		口縁直線的に立ち上がる。口唇丸 味。	内外面ナダ →ガキ	右美微量			
3582	無文浅鉢・ 口縁	W3Ⅹ面	松ノ木	I I		口縁やや内溝気味。口唇丸味。器肉 薄い。	内外面ナダ →ガキ	右美微量			
3583	無文浅鉢・ 口縁	W4Ⅸ面	松ノ木	I I		口縁やや内溝気味。口唇内面僅かに 肥厚。口唇丸味。	内外面ミガ キ?	右美微量			
3584	無文浅鉢・ 口縁	3110	松ノ木	I I	口徑 (36)	ボール状の器形。口縁内凹する。	内外面ナダ →ガキ	右美微量			修理孔
3585	無文浅鉢・ 口縁	抵張23層	松ノ木	I I		ボール状の器形。口縁内凹する。	外面歪度→ ミガキ。内 面ナダ	右美微量			修理孔
3586	無文浅鉢・ 口縁	X3Ⅸ下面	松ノ木	I I		口縁直角。	内外面ナダ →ガキ	長石微量			
3587	無文浅鉢・ 口縁	X3Ⅹ面	松ノ木	I I		口縁直角。小円孔2個。	内外面黑色 ナダ	微石英多 量			
3588	無文浅鉢・ 口縁	W3Ⅸ面	松ノ木	I I		口縁直角。	内外面ナダ →ガキ	右美微量			
3589	無文浅鉢・ 口縁	X4Ⅸ面	松ノ木	I I		口縁直角?。	内外面黑色 研磨	右美微量			
3590	無文浅鉢・ 口縁	抵張5層	松ノ木	I I		口縁内凹。	内外面ナダ →ガキ	砂粒少量			
3591	無文浅鉢・ 口縁	W5Ⅸ面	松ノ木	I I		口唇丸味。口唇外表面僅かに肥厚。	内外面ミガ キ?	長石、右 美微量			
3592	無文浅鉢・ 口縁	W3Ⅸ面	松ノ木	I I		口唇丸味。僅や外反。	内外面ナダ →ガキ	右美微量			
3593	無文浅鉢・ 口縁	Y4Ⅸ面	松ノ木	I I		口唇丸味。やや内側氣味。	内外面ナダ →ガキ	結晶片岩 少量			
3594	無文浅鉢・ 口縁	W3Ⅹ面	松ノ木	I I		口縁内凹氣味に立つ。口唇内面肥 厚。	内外面ナダ →ガキ	右美、長 石少量			
3595	無文浅鉢・ 口縁	X4Ⅸ面	松ノ木	I I		口唇肥厚。	内外面外反。 内外面ナダ →ガキ	微石英少 量			
3596	無文浅鉢・ 口縁	X4Ⅹ面	松ノ木	I I		口唇肥厚。	内外面外反。 内外面ナダ →ガキ	右美微量			外表面付 着
3597	無文浅鉢・ 口縁	X5p1	松ノ木	I I		口唇肥厚。口唇内面肥厚。	内外面外反。 内外面ナダ →ガキ	砂粒少量			
3598	無文浅鉢・ 口縁	W3Ⅸ面	松ノ木	I I		口唇丸味。外反。	内外面ナダ →ガキ	微石英少 量			
3599	無文浅鉢・ 口縁	1542	松ノ木	I I		口唇内面肥厚。	内外面ミガ キ?	右美微量			
3600	無文浅鉢・ 口縁	W5Ⅸ面	松ノ木	I I		波状口縁。口唇内面を突審状に肥 厚。	内外面ナダ →ガキ	右因石少 量			
3601	無文浅鉢・ 口縁	X4Ⅸ面	松ノ木	I I		口唇内面を突審状に肥厚。	内外面ミガ キ?	微石英晶 片少量			
3602	無文浅鉢・ 口縁	Y3Ⅸ面	松ノ木	I I		口唇内面を突審状に肥厚。	内外面ナダ →ガキ	微粉粒少 量			
3603	無文浅鉢・ 口縁	W5Ⅸ面	松ノ木	I I		口唇肥厚平坦。外側にやや突出。	内外面ミガ キ?	微粉粒微 量			
3604	無文浅鉢・ 口縁	抵張13層	松ノ木	I I		口唇肥厚平坦。	内外面ミガ キ?	微石英多 量			
3605	無文浅鉢・ 口縁	抵張2層	松ノ木	I I		外底削削。口唇平坦、内に僅かに突 出。	内外面ミガ キ?	右美微量			
3606	無文浅鉢・ 口縁	1230	松ノ木	I I		口唇内面に肥厚。	内外面ミガ キ?	右美微量			

種物	番種	部位	取上番号・ 樹木位置	型式	分類	計量 (cm)	特 雜	種文 底体	器面調整	胎土	接合	備考
3607 美文浅鉢・ 口縁	2611	宿毛	N1	口徑	体部大きく聞く。口縫内面肥厚部。 内面上半部に段。	(49)		内外面ナガ →ミガキ 内外面ナガ	砾石英多 量			
3608 美文浅鉢・ 口縁	2115-X3Ⅷ面	宿毛	N1	口縁	体部大きく聞く。口縫内面肥厚部、 丸味を持つ。内面段を見る。	(48)		内外面ミガ キ	石英多量			
3609 美文浅鉢・ 口縁	扯張5層	宿毛	N1	口縁	口縫上端を取り、内面肥厚。内面段。 口縫横幅3条。口沿肥厚。内面段。			内外面片替 半	砾品片替 少量			
3610 美文浅鉢・ 口縁	12	宿毛	N1	口縁	体部大きく聞く。口縫内面肥厚部。施 成前円孔。			内外面ミガ キ	石英多量			
3611 美文浅鉢・ 口縁	3177	松ノ木	N2	口徑	体部大きく聞く。口縫内面肥厚部。施 成前円孔。	(49.2)		内外面ミガ キ	微破碎石 ○ 年	英多量		
3612 美文浅鉢・ 口縁	909-1789- 1790-X4Ⅷ面 W5Ⅸ面	松ノ木	N2	口縁	体部大きく聞く。口縫内面肥厚部。 内面や黒化。	(37)		内外面ナガ	石英多量			
3613 美文浅鉢・ 口縁	X4Ⅷ面	松ノ木	N2	口縁	体部大きく聞く。口縫内面肥厚部。			内面ナガ 外彫ミガキ	砾品片岩 少量			
3614 美文浅鉢・ 口縁	X4Ⅷ面	松ノ木	N2	口縁	体部大きく聞く。口縫内面肥厚部。			内外面ミガ キ	石英多量		外彫爆付 垂	
3615 美文浅鉢・ 口縁	1262	松ノ木	N2	口縁	体部大きく聞く。口縫内面肥厚部。			内外面ナガ	砾品微量			
3616 美文浅鉢・ 口縁	Y3Ⅷ面	松ノ木	N2	口縁	体部大きく聞く。口縫内面肥厚部。			内外面ミガ キ	石英少量			
3617 美文浅鉢・ 口縁	1809	松ノ木	N2	口縁	体部大きく聞く。口縫内面肥厚部。			内外面ミガ キ	砾石英少 量			
3618 美文浅鉢・ 口縁	1807	松ノ木	N2	口縁	体部大きく聞く。口縫内面肥厚部。			内外面ミガ キ	砾石英多 量			
3619 美文浅鉢・ 口縁	扯張33層	松ノ木	N2	口縁	体部大きく聞く。口縫内面肥厚部。			内外面ミガ キ	石英少量		補修孔	
3620 美文浅鉢・ 口縁	2140	松ノ木	N3	口縫	口縫の内面肥厚。口縫部ぐいで外 (40) 反する。施成前円孔5個?			外彫底部 内面	石英少 量→ナガ 外彫口縫 片襯微量			
3621 美文浅鉢・ 口縁	X4Ⅷ面	松ノ木	N3	口縫	口縫内面肥厚。口縫部ぐいで外反 する。			内外面ミガ キ	石英、英 少量			
3622 美文浅鉢・ 口縁	扯張6層	松ノ木	N3	口縫	口縫内面肥厚。口縫部ぐいで外反 する。			内外面ミガ キ	砾品微量			
3623 美文浅鉢・ 口縁	X5Ⅸ面	松ノ木	V	口縫	口縫内文様。沈底文。			内外面ナガ	石英少量			
3624 美文浅鉢・ 口縁	X3Ⅷ面	松ノ木	V	口縫	口縫内文様。沈底文。			外彫条脈、 内面ミガキ	砾石英多 量			
3625 美文浅鉢・ 口縁	Y3Ⅷ面・Y4 口縫	松ノ木	V1	口縫	口縫肥厚、上面平粗。			内外面ナガ	砾品微量		全面赤 剥 孔2個 外彫側か に爆付有	
3626 美文鉢・ 半兜形	1074	宿毛	I	口縫	集文。小突起を2個?。口縫肥厚せ ず。頭部からぐびれる。底盤盛や く突出。底盤平底。	154. 高13.5 重5.7		内外面ナガ	砂粒少量			
3627 美文鉢・ 口縫	256-268- 270-276	松ノ木	II	口縫	集文。頭部をぐびれる。頭部は僅 かに丸味を持ち下平せずまつる。	(25.8)		外面ナガ →ミガキ、内 面ナガ	砂粒多量 ○			
3628 美文鉢・ 口縫	X3Ⅷ面	松ノ木	II	口縫	集文。頭部やぐびれる。頭部丸 味。頭部立地。			内外面ナガ	砂粒少量			
3629 美文鉢・ 口縫	扯張45層	松ノ木	II	口縫	集文。頭部やぐびれる。頭部丸 味。頭部立地。器内厚。			内外面ミガ キ	石英微量		外彫側か に爆付有	
3630 美文鉢・ 口縫	扯張10層	松ノ木	III	口縫	集文。頭部立地。肩部でやや屈曲。 口縫平粗。	(27)		内外面ナガ →ミガキ、外 面ナガ	砾良、企 石英微量			
3631 双耳壺・ 完形	3222	宿毛?	口縫	口縫5.2、 径7.5、 厚8	小振りの肩耳、孔を有する。腹部に 波淡文状。頭部唇面筋文、柄部口面筋 文。双耳の下は入組文。頭部下半部 丸味。			内外面ナガ ミガキ、内 面ナガ	石英多量			
3632 注口土器・ 口縫	X5Ⅷ面	松ノ木?	口縫	全体に丸味を持つ。上部に沈底1条。RL (15)	頭部は2個の丸味。注口部は2個。			内外面ナガ	砂粒微量			
3633 注口土器・ 注口部	951	松ノ木?	口縫	口縫(11) 注口部外 径3.5、内 径2.2	頭部は2個の丸味。注口部は2個。			内外面ナガ	砂粒少量			
3634 注口土器・ 体部	989	松ノ木?	口縫	口縫(15)	頭部は2個の丸味。注口部は2個。			内外面ナガ	石英多量			
3635 壺・口縫	2187	松ノ木?	口縫	口縫(16.4)	頭部は2個の丸味。注口部は2個。			内外面ナガ	砂粒少量			
3636 壺・口縫	扯張10層	宿毛?	口縫	口縫(8.3)	頭部は2個の丸味。注口部は2個。			内外面ミガ キ	石英少量			
3637 壺・口縫	X4抗Ⅷ面	宿毛?	口縫	口縫(6.4)	頭部は2個の丸味。注口部は2個。			内外面ミガ キ	砾石英粒 微量			
3638 壺・口縫	扯張6層	宿毛?	口縫	口縫(7.0)	頭部内縫気味に立ち上がる。口縫僅 かに凹む。			内外面ミガ キ	石英少量			
3639 壺・口縫	扯張6層	宿毛?	口縫	口縫(7.0)	頭部内縫気味に凹む。			内外面ナガ 内外面ミガ キ	砾良 石英、半 色底物粒 微量			
3640 壺・口縫	X3Ⅷ面	松ノ木	口縫	口縫(6.0)	頭部内縫気味に凹む。			内外面ミガ キ	砾石英少 量			
3641 蓋類・把手	扯張1層	宿毛?	口縫	口縫	ブリッジ状の大振りの把手。注口上 部の把手と把手と接合部に内凹が上か ら下へ貫通する。把手部分彫繩。			ナガ	砾石英少 量	3641～ 3643同 一類似		
3642 蓋類・崩邦	扯張19層・ 31層	宿毛?	口縫	口縫	3本の螺旋透彌輪。構文部分彫繩。			外彫ミガ キ、内面ナ ガ	砾良	3641～ 3613同 一類似		
3643 蓋類・崩邦	X4Ⅷ面	宿毛?	口縫	口縫	円文。構文上縫文。			内外面ミガ キ	砾石英少 量	3641～ 3643同 一類似		

遺物 番号	器種・部位	取上番号・ 出土位置	様式	分類	法量 (cm)	特 徴	縄文 原体	器面調整	黏土	接合	備考
3644 席鉢・頭部 背面		祇園19層・X3	羽毛?			席上縄文。	RL	外面部ミガ キ、内面ナ ダ	石英微量		
3645 席鉢・頭部 X3Vb面			羽毛?			頭縁帶上縄文。	RL	外面部ミガ キ、内面ナ ダ	石英少量		
3646 席鉢・頭部 祇園5層			羽毛?			席縁縄文。縄文部分陥落。	RL	外面部ミガ キ、内面ナ ダ	石英多量		
3647 席鉢・頭部 祇園5層			羽毛?			唐消縄文。縄文部分陥落状。人顎 文。	RL	外面部ミガ キ、内面ナ ダ	石英少量		
3648 席鉢・頭部 X4VI西			羽毛?			座尊上縄文。	RL?	外面部ミガ キ、内面ナ ダ	石英少量		
3649 席鉢・頭部 2276			羽毛?			やや細広の椎羅帯上縄文。	RL	外面部ミガ キ、内面ナ ダ	石英・長 石多量		
3650 席鉢・頭部 1437			松ノ木			頭頂太い比縄文。円文か。頭部底に なり、立ち上がる。		外面部ミガ キ、内面ナ ダ	砂粒多量		
3651 席鉢・底部 1094			松ノ木?	底径 (5)		波部上光。体部丸丸を持つ。沈縄文 に集合化態。		外面部ナダ	砂粒多量		
3652 席鉢・底部 2226			後期前半			丸丸付丸。体部丸丸を持つ。		外面部ナダ	砂粒多量 テ、内面ナ ダ	砂粒多量 テ、内面ナ ダ	
3653 淀鉢・突起 2588			松ノ木	口径 (42)		耳状突起。口縁肥厚。上面施文。沈 縄と斑沈縄キザミ。頭部無文帯。頭 部無縫縄文。	RL	外面部ナダ	石英、砂 粒少量		
3654 淀鉢・突起 W4V面			松ノ木			耳状突起。口縁肥厚。上面施文。沈 縄1条。斑沈縄キザミ。		外面部ナダ	石英少量		
3655 淀鉢・突起 1334			松ノ木			耳状突起。キザミ。口縁肥厚。内面 施文。頭部の頂に(頭)の椎羅存 在状況。口縁肥厚。上部施文。代 冠1条。斑沈縄キザミ。頭部下沈縄 2条。		外面部ナダ	石英多量		
3656 淀鉢・突起 3094			松ノ木			頭状突起。口縁部や口肥厚。短北縁 キザミ。残。	RL	外面部ナダ	石英多量		
3657 淀鉢・突起 2558			松ノ木	口径 (242)		頭状突起。短沈縄キザミを加える。 口縁肥厚。上部施文。沈縄1条。斑沈 縄キザミ。残。		外面部ナダ	砂粒多量		
3658 淀鉢・突起 2659			松ノ木			頭状突起。短沈縄キザミを加える。 口縁肥厚。上部施文。沈縄1条。斑沈 縄キザミ。残。		外面部ナダ	砂粒微量		
3659 淀鉢・突起 1768			松ノ木			頭状突起。短沈縄キザミを加える。口 縁肥厚。上部施文。沈縄1条。斑沈 縄キザミ。残。	RL	外面部ナダ	石英少量		
3660 淀鉢・突起 560			松ノ木			山形の肥厚した突起。頂部に(頭) 沈縄1条。斑沈縄キザミを加え。頭部 に沈縄による椎羅円筒文。		外面部ナダ	砂粒少量		
3661 淀鉢・突起 3040			松ノ木			入山形口縁。後頂部が口肥厚。波頂 下沈縄。上部肥厚せず。キザミ。		外面部ナダ	砂粒微量		
3662 淀鉢・突起 X3VI面			松ノ木			山形口縁。突起部分弱き状の近縁。 弱群に円形突起。口縁肥厚。上部施 文。沈縄1条。斑沈縄キザミ。		外面部ナダ	結晶片岩 多量		
3663 淀鉢・突起 2929			松ノ木			頭状突起。頭部が沈縄。頭部 や内面、沈縄1条。其餘無縄文。		外面部ナダ	砂粒少量		
3664 淀鉢・突起 2657			松ノ木	口径 (26)		山縁部のみ残存。アリッジ状の山形 口縁。短沈縄キザミと(頭)。	RL	外面部ナダ	石英・長 石少量 テ、内面ナ ダ		
3665 淀鉢・突起 祇園20層			松ノ木?			頭部は残存せず。側面 に円文。弧形の施文。	RL	ナダ	砂粒少量		
3666 突起 祇園4層 Y3VI下面			松ノ木?			頭状の突起。口唇部に(頭)。下に 沈縄。	RL?	ナダ	石英少量 テ		
3667 突起 祇園4層 Y3VI下面			松ノ木?			盛積不明。口唇や脇部。		外面部ミガ キ、内面ナ ダ	石英多量		
3668 突起 X3VI下面			松ノ木?					外面部ナダ	砂粒少量		
3669 席鉢・突起 2204			松ノ木			口縁部突起。頭部は無文か。		外面部ナダ	石英少量		
3670 無文淀鉢・ 突起		X4V面	松ノ木			入山形口縁。波頂部大形の凹孔。無 文土器?		外面部ナダ	結晶片岩 多量		
3671 無文淀鉢・ 突起		Y 6 直面	松ノ木			無文?或縁部下に凹孔。		外面部ナダ	結晶片岩 少量		
3672 淀鉢・把手 祇園14層			羽毛?			把手部分。素滑縄文。スペード文。 椭状把手。または注口十器の把手。	RL	外面部ナダ	砂粒少 量 テ		
3673 淀鉢・把手 祇園14層			松ノ木			下部に沈縄及び縄文が残存。下部は 接合部で崩れ。	RL	ナダ	角四石、 微砂粒微 量		
3674 席・突起 Y3VI面・直面			松ノ木			無文の突起。或いは(頭)の小形の突起。沈縄 通巻き状の突起。縄文施文。		ナダ	石英少量		
3675 席・突起 祇園53層 X3VI直面			松ノ木			通巻き状の突起。頭部が通巻き文。貼 付部分に小孔が貫通する。	RL	ナダ 外面部ナダ	砂粒微量 テ、内面ナ ダ		
3676 席・突起 直面			松ノ木			縄状の突起。突起部が通巻き文。貼 付部分に小孔が貫通する。	RL	外面部ナダ	石英少 量、内面 ナダ		
3677 席・突起 X3VI面			松ノ木			縄状の突起。突起部が通巻き文。貼 付部分に小孔が貫通する。	RL	外面部ナダ	微石英微量		
3678 席・突起 直面			松ノ木			縄状の突起。突起部が通巻き文。貼 付部分に小孔が貫通する。		外面部ナダ	石英少 量、内面 ナダ		
3679 植製淀鉢・ 底部			松ノ木	I I	底径8.6	高台状底部。体部直錐的に開く。		外面部ナダ	石英少 量		

遺物番号	器種・部位	出土番号	型式	分類	法量 (cm)	特徴	構文 系体	器部調整	胎土	接合	備考
3659 漆鉢・底部	X4枕V面・拭	松ノ木	I1	底径	8.5	高台状底部。底部下平沈線文。	内外面柔軟 →ナデ	石英、硬 鉱結晶片 少量	石英、硬 鉱結晶片 少量	糊合	
3681 漆鉢・底部	3000	松ノ木	I1	底径10.2		高台状底部。	内外面柔軟 →ナデ	石英、角閃 石少量	石英、角閃 石少量	糊合	底裏白色化
3682 漆鉢・底部	2574・X4枕VI面	松ノ木	I1	底径9		高台状底部。体部外板気味に立ち上がる。	内外面ナデ	石英多量 少量	石英多量 少量	糊合下平 糊化物材 量	
3683 漆鉢・底部	2058	松ノ木	I1	底径10.4		高台状底部。	内外面柔軟 →ナデ	石英多量	石英多量	糊合	
3684 漆鉢・底部	2989	松ノ木	I1	底径	10.4	高台状底部。	内外面ナデ	磨石英多量	磨石英多量	糊合	外面糊付 量
3685 漆鉢・底部	2636・X3枕V面	松ノ木	I1	底径9		高台状底部。	内外面ナデ	砂紋多量	砂紋多量	糊合	
3686 漆鉢・底部	352・736・W VI面	松ノ木	I1	底径8.3		高台状底部。	内外面ナデ	金雲母 少量	金雲母 少量	糊合	
3687 漆鉢・底部	X4枕V面	松ノ木	I1	底径	9.6	高台状底部。	外道ナデ、 内面柔軟 →ナデ	石英少 量、金雲 母微量	石英少 量、金雲 母微量	糊合	
3688 漆鉢・底部	板根22層	松ノ木	I1	底径8.4		高台状底部。	内外面ナデ	砂紋多量	砂紋多量	糊合	白色化 底裏白色化
3689 漆鉢・底部	2928	松ノ木	I1	底径	8.5	高台状底部。	内外面ナデ	結晶片 岩、石英 少量	結晶片 岩、石英 少量	糊合	
3690 漆鉢・底部	X4枕V面	松ノ木	I1	底径9		高台状底部。	内外面ナデ	砂紋多量 少量	砂紋多量 少量	糊合	底裏白色化
3691 漆鉢・底部	X3枕V面	松ノ木	I1	底径	7.5	高台状底部。底部器内薄い。	内外面ナデ	砂紋少量	砂紋少量	糊合	
3692 漆鉢・底部	2271	松ノ木	I1	底径7		やや小形の高台状底部。体部下半にRL磨消文。	内外面ナデ	砂紋多量	砂紋多量	糊合	
3693 漆鉢・底部	X3枕V面	松ノ木	I1	底径5.7		小形の高台状底部。	内外面ナデ	砂紋多量	砂紋多量	糊合	
3694 漆鉢・底部	2409	松ノ木	I2	底径8		高台状底部。	内外面ナデ	石英、金 雲母、角 閃石少量	石英、金 雲母、角 閃石少量	糊合	糊付 量
3695 漆鉢・底部	3209・西壁75層	松ノ木	I2	底径9.2		高台状底部。	内外面ナデ	砂紋多量	砂紋多量	糊合	
3696 漆鉢・底部	2170	松ノ木	I2	底径9.4		高台状底部。	内外面ナデ	石英少 量	石英少 量	糊合	
3697 漆鉢・底部	15	松ノ木	I2	底径	8.4	高台状底部。	内外面ナデ	磨石英多 量	磨石英多 量	糊合	
3698 漆鉢・底部	1061	松ノ木	I2	底径	10.4	高台状底部。	内外面ナデ	砂紋多量	砂紋多量	糊合	糊付 量
3699 漆鉢・底部	3053	松ノ木	I3	底径	11.1	低い高台状底部。底部脇くびれる。	外道粗いナ デ、内面ナ デ	砂紋粗 多量	砂紋粗 多量	糊合	
3700 漆鉢・底部	1696・2218	松ノ木	I3	底径10.2		低い高台状底部。底部脇内薄い。	内外面ナデ	砂紋粗 多量、石 英、角閃 石少量	砂紋粗 多量、石 英、角閃 石少量	糊合	
3701 漆鉢・底部	1664・X3枕V面	松ノ木	I3	底径9.6		高台状底部。	内外面ナデ	石英多量	石英多量	糊合	
3702 漆鉢・底部	X4枕VI面・W 4V面	松ノ木	I3	底径8.6		低い高台状底部。体部薄く。	内外面ナデ	砂紋丁寧な ナデ	砂紋少 量、角閃 石微量	糊合	
3703 漆鉢・底部	X5枕V面	松ノ木	I3	底径	9	低い高台状底部。接合部擬口縫状に なる。	内外面ナデ	石英少量	石英少量	糊合	
3704 漆鉢・底部	X3枕V面	松ノ木	I3	底径8.6		低い高台状底部。	外道ナデ、 内面柔軟 →ナデ	石英、結 晶片少 量	石英、結 晶片少 量	糊合	
3705 漆鉢・底部	2983・2984	松ノ木	I3	底径7.8		低い高台状底部。脇僅かに張る。脇 部器肉厚。	内外面ナデ	結晶片岩 少量	結晶片岩 少量	糊合	
3706 漆鉢・底部	抜塗31層	松ノ木	I3	底径	9.0	低い高台状底部。脇反り気味。	内外面ナデ	砂紋多量 少量	砂紋多量 少量	糊合	
3707 漆鉢・底部	1366	松ノ木	I3	底径	7.2	低い高台状底部。	内外面ナデ	美濃白 陶器、石 英少 量、角 閃石、 金雲母 少量	美濃白 陶器、石 英少 量、角 閃石、 金雲母 少量	糊合	
3708 漆鉢・底部	1881・X3V面	松ノ木	I3	底径7		低い高台状底部。底裏僅かにくぼむ。	底部内面粗 いナデ、外 面ナデ	結晶片岩 少 量、外 面粗 少 量	結晶片岩 少 量、外 面粗 少 量	糊合	内面焦げ 付着
3709 漆鉢・底部	259	松ノ木	I3	底径	8	低い高台状底部。	内外面ナデ	砂紋多量	砂紋多量	糊合	
3710 漆鉢・底部	1937・W4V 面	松ノ木	I3	底径	9.2	僅かに高台状底部となる。外面部下 沈線文。	内面柔軟 →ナデ	石英少 量	石英少 量	糊合	
3711 漆鉢・底部	1376	松ノ木	I3	底径	7.4	低い高台状底部。底部脇くびれる。	外道粗いナ デ、内面ナ デ	砂紋多量 少量	砂紋多量 少量	糊合	
3712 漆鉢・底部	拭塗10層・Y V面	松ノ木	I4	底径7.2		尖り氣味の高台状底部。	内外面ナデ	石英少 量、金 雲母少 量	石英少 量、金 雲母少 量	糊合	
3713 漆鉢・底部	W4V面	松ノ木	I4	底径6.4		尖り氣味の高台状底部。底裏厚む。 器内厚い。	内外面ナデ	砂紋多量 少量	砂紋多量 少量	糊合	外面糊付 量
3714 漆鉢・底部	X3V面	松ノ木	I5	底径5.2		僅かに高台状となる。体部藍緑的に 立ち上がる。	内外面ナデ	結晶片岩 微量	結晶片岩 微量	糊合	

遺物番号・種類・部位	取上番号・ 出土位置	型式	分類	法量 (cm)	特徴	純文 原体	器面側表	埴土	接合	備考
3715 深鉢・底部	2828	松ノ木?	I5 底径62		傷かに高台状となる。		内外面ナダ 内外面粗い ナダ	砂粒多量 砂粒、石 英多量		
3716 深鉢・底部	1065	松ノ木?	II1 底径66		平底。					
3717 深鉢・底部	1804	松ノ木?	II1 底径 (9)		平底。底部堅厚かにくびれる。					
3718 深鉢・底部	851	松ノ木?	II1 底径 (9)		平底。		内外面粗い ナダ	砂粒、右 英多量		
3719 深鉢・底部	板塗2層・W3 直径	松ノ木?	II1 底径83		平底。		内外面ナダ	砂粒多量		
3720 深鉢・底部	1319	松ノ木?	II1 底径92		平底。底端くびれる。		内外面粗い ナダ	砂粒、石 英多量		
3721 深鉢・底部	Y4枕直面	松ノ木?	II1 底径 (7.2)		平底。底部肉薄い。		外面部粗い ナダ 外面部弧→ ナダ、内面 ナダ	砂粒、石 英少量		
3722 深鉢・底部	1127・1128	松ノ木?	II1 底径 (9.2)		平底。		内外面ナダ	砂粒多量		内面白色化
3723 深鉢・底部	Y4V面	松ノ木?	I 底径 (9.2)		傷かに高台状の底部から体部や丸 輪を持ち、回く。觸口に半波旋文。 壹弦文? 列子多波旋文で連繋。		外面部ナダ→ ミガキ、内 面ナダ	石英少量		外系ター ル状の煤 付着
3724 深鉢・底部	1344・1345	松ノ木?	I 底径10.4		高台状底部。体部大きく回く。		内外面ナダ	砂粒、石 英少量、 金葉母微 量		
3725 深鉢・底部	Y4直面	松ノ木?	I 底径9		底部低い高台状。体部大きく述く。 底裏粗い。		内外面ナダ ナガリ	石英多量		
3726 深鉢・底部	X3直面	松ノ木?	I 底径 (8.4)		底部低い高台状。体部大きく述く。 底部肉薄い。		外面部ナダ→ 内面部弧→ ナダ	石英少 量、角肉 石微量		
3727 深鉢・底部	X3面	松ノ木?	I 底径 (12)		底部低い高台状。体部大きく述く。		内外面ミガ キ	石英多量		内面白色化
3728 深鉢・底部	Y4直面	松ノ木?	I 底径 (12)		底部低い高台状。体部大きく述く。		内外面ミガ キ	石英少量		
3729 深鉢・底部	板塗8層	松ノ木?	I 底径 (11.8)		底部低い高台状。体部大きく述く。 本波旋文による磨擦磨文。内底底部突 出状の状況。		内外面ミガ キ	精良		
3730 深鉢・底部	X3直面	松ノ木?	I 底径 (10)		底部低い高台状。体部大きく述く。 底部膨らむ高台状。体部大きく述く。		内外面ミガ キ	石英粒多 量		
3731 深鉢・底部	2276・Y3直 面・Y3直面	松ノ木?	I 底径 (10.6)		底部低い高台状。体部大きく述く。 削面新規化。揚文部が赤茶色。外面部 部分前に黒斑。内面褐色。		内外面ミガ キ	石英少量		内面黑色化。 純文部分 有り。
3732 深鉢・底部	1086	松ノ木?	I 底径 (10.6)		底部低い高台状。体部大きく述く。 底裏粗い。		内外面ミガ キ	石英多量		
3733 深鉢・底部	X3直面	松ノ木?	I 底径 (10)		底部低い高台状。体部大きく述く。		内外面ミガ キ	石英少量		
3734 深鉢・底部	X4直面	松ノ木?	I 底径 (11)		底部低い高台状。体部大きく述く。		外面部弧→ ナダ、内面 ミガキ	石英多量		
3735 深鉢・底部	1336	松ノ木?	I 正徑 (7.8)		底部低い高台状。体部大きく述く。		内外面丁字 なナダ	微石英少 量		
3736 深鉢・底部	Y3直面・W4 直面	松ノ木?	I 正徑 (9.2)		底部僅かに高台状。体部大きく述く。 小形の底部。体部 大きく述く。		内外面ミガ キ	石英微量		
3737 深鉢・底部	Y3直面	松ノ木?	I 正徑6.4		底部僅かに高台状。小形の底部。体部 大きく述く。底部内面薄い。		内面部ナダ ミガキ	石英、砂 程少量		
3738 深鉢・底部	板塗3層	宿毛	I 底径 (9.6)		底部僅かに高台状。体部大きく述く。 底部底部。底裏僅かにくぼむ。体 部回旋。		内外面ミガ キ	精良		
3739 深鉢・底部	2113	松ノ木?	II1 底径 (12)		底回旋。体部下に半波渦旋文が残 る。器肉薄い。	RL	内外面ナダ	精良		
3740 深鉢・底部	1406	松ノ木?	II1 底径 (8)		平底。体部僅かに回す。器肉薄い。		外面部ナダ、 内面部ミガ キ	角閃石、 金葉母微 量		
3741 深鉢・底部	X5直面	松ノ木?	II1 底径 (13.2)		平底。体部直線的に立ち上がる。		内外面ナダ	砂粒微量		
3742 深鉢・底部	X3直面	松ノ木?	II2 底径 (4.6)		小形の平底。底部最内縁で薄い。		外面部な ナダ、内面 ナダ	石英少量		
3743 鉢・底部	W3V面	福田K II			平底。底部堅やや薄る。剥落下半3	RL	内外面ミガ キ	精良、赤 色斑点	3744回 一體化?	開文部分 有り?
3744 鉢・底部	Y3M下面	福田K II			本波旋文消滅?。 底部は高台状。		内外面ミガ キ	精良、赤 色斑点	3745回 一體化?	開文部分 有り?
3745 粗製深鉢・ 摩打底鉢	2150・2158・ 2169	松ノ木?	底径8		粗製深鉢? 摩打底鉢。上底。底部底成 後洋2.9cmの穿孔。		内外面条痕 →ナダ	砂粒、石 英少量	○	タール状 物質が付 着した機 が入った 状態で出 土。白色物質 付着、分 析あり
3746 多孔底鉢	1079・1197	松ノ木?	底径 (10.4)		多孔底鉢。径1cm程度の孔が7~9 ヶ所。底部は高台状。内外面に白色 物質付着。		内外面ナダ	石英、粘 土品片岩多 量	○	
3747 無文浅鉢・ 口縁	X3V面	後期前手	補修孔 補修孔径 0.4		無文。口縁外側。口縁丸味。		内外面ナダ	石英多量		
3748 無文浅鉢・ 口縁	X4V面	後期前手	補修孔 補修孔径 0.3		無文。口縫外縁。口縫背面に内に突 出。		内外面ミガ キ	砂粒微量		
3749 罐製深鉢・ 口縁	直面	松ノ木	補修孔 補修孔径 0.4		無文。口縫や抵張、沈縫1条と斜行 ナガリ。		内外面ナダ	砂粒多量		
3750 罐製深鉢・ 摩打底鉢	LJ縫 2873・2881	後期前手	補修孔 補修孔径 0.4		罐製深鉢? 摩打底鉢。口縫状工具ナガリ。		内外面ナダ	石英少量	○2直接 合	内面白色 物質付着

第Ⅱ章 1区調査成果

遺物番号	器種	部数	取上面番号・出土位置	模式	分類	注量 (cm)	特徴	縦文 原体	器面調整	胎土	接合	備考
3751 粗製深鉢・ 口縁	2274	後期前半	補修孔	補修孔径	口唇徑に外反。 0.4			内外面柔痕 →ナダ	石英、金 云母少量	外泥上半 保付		
3752 粗製深鉢・ 口縁	直面	後期前半	補修孔	補修孔径	無文。口唇キザミ。 (0.6)			内外面ナダ	石英微量			
3753 粗製深鉢・ 口縁	X3Ⅷ面	後期前半	補修孔	補修孔径	無文。口唇キザミ。 (0.6)			内外面柔痕 →ナダ	結晶片岩 少量	内外面白 色物質付 着		
3754 粗製深鉢・ 口縁	W3Ⅹ面	後期前半	補修孔	補修孔径	無文。口唇平坦。 0.4			外周柔痕、 内面柔痕→ ナダ	砂粒多量	外周保付 着		
3755 粗製深鉢・ 口縁	Y3Ⅸ面	後期前半	補修孔	補修孔径	無文。口唇やや平坦。 0.4			内外面ナダ	鐵石英多 量			
3756 粗製深鉢・ 口縁	X5Ⅵ面	後期前半	補修孔	補修孔径	無文。口唇丸味。 0.6			内外面柔痕 →ナダ	石英少量			
3757 粗製深鉢・ 口縁	3228	後期前半	補修孔	補修孔径	無文。口唇丸味。 (0.6)			内外面ナダ	石英多量			
3758 粗製深鉢・ 口縁	X5Ⅷ面	後期前半	補修孔	補修孔径	無文。口唇内厚壁。 (0.6)			内外面ナダ	石英少量			
3759 粗製深鉢・ 口縁	X4Ⅺ下	後期前半	補修孔	補修孔径	無文。 (0.4)			内外面ナダ	結晶片岩 少量			
3760 粗製深鉢・ 頭部	X4Ⅻ面	後期前半	補修孔	補修孔径	無文。口唇丸味。 (0.6)			内外面ナダ	結晶片岩 少量			
3761 粗製深鉢・ 頭部	X3Ⅴ面	後期前半	補修孔	補修孔径	頭部破片。無文。 (0.6)			内外面柔痕 →ナダ	石英多量			
3762 粗製深鉢・ 頭部	X3Ⅹ面	後期前半	補修孔	補修孔径	無文。 0.4			内外面ナダ	石英微量			
3763 深鉢・頭部	2277	後期前半	補修孔	補修孔径	無文。 0.4			外周柔痕→ ナダ、内面 ナダ	結晶片岩 少量			
3764 粗製深鉢・ 頭部	X3Ⅹ面	後期前半	補修孔	補修孔径	無文。 0.5			内外面ナダ	砂粒少量			
3765 陶製深鉢・ 頭部	X4ⅩⅤ面	前段？	補修孔	補修孔径	無文。背唇薄い。 0.2			内外面柔痕 →ナダ	石英微量			
3766 深鉢・頭部	315	後期前半	補修孔	補修孔径	無文。 (0.5)			内外面ナダ	鐵石英少 量			
3767 粗製深鉢・ 頭部	Y3Ⅹ面	後期前半	補修孔	補修孔径	無文。 (0.6)			内外面ナダ	石英多量			
3768 粗製深鉢・ 頭部	X3Ⅺ下	後期前半	補修孔	補修孔径	無文。 (0.4)			外周柔痕→ ナダ、内面 ナダ	砂粒少量			
3769 粗製深鉢・ 頭部	X3	後期前半	補修孔	補修孔径	無文。 (0.5)			内外面ナダ	石英微量			
3770 粗製深鉢・ 頭部	X5Ⅹ面	後期前半	補修孔	補修孔径	無文。 (0.3)			内外面ナダ	石英微量			
3771 深鉢・頭部	X3Ⅹ面	後期前半	補修孔	補修孔径	無文。 (0.4)		RL?	内面ナダ	砂粒微量			
3772 浅鉢・底部	3233層・X4 W面	涓毛	補修孔	補修孔径	浅い窓台状の底部から尖部剥く。開 0.4、底径 (14)			内外面ナダ →窓いミガ キ	砂粒微量			
3773 深鉢・口縁	930	福岡KⅢ KⅢ						底やかな窓状口縁。口縁肥厚、外周 無文、主文様円文。腹部縦文帯形成 せず、口縁からの通蓋文様。3-4沈 縫による磨削文様。	内外面ナダ	石英少量		
3774 深鉢・頭部	2592	福岡KⅢ KⅢ						曲線的な本沈縫による磨削文様。	RL	内外面ミガ キ	砂粒微量	
3775 深鉢・頭部	V1面	福岡KⅢ KⅢ						3本沈縫による横位の磨削文様。	RL	外周ミガ キ、内面ナ ダ	楕圓	

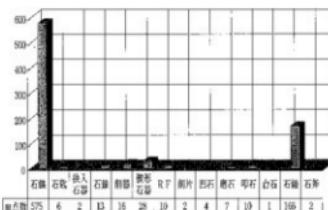
第3節 石 器

今回の調査で出土した石器は、剥片類を除いて843点である。内訳は石錐575点で68%、次いで石錐が166点で約20%である。凹石・磨石等が22点で2.6%、その他の剥片石器類が約9%である。

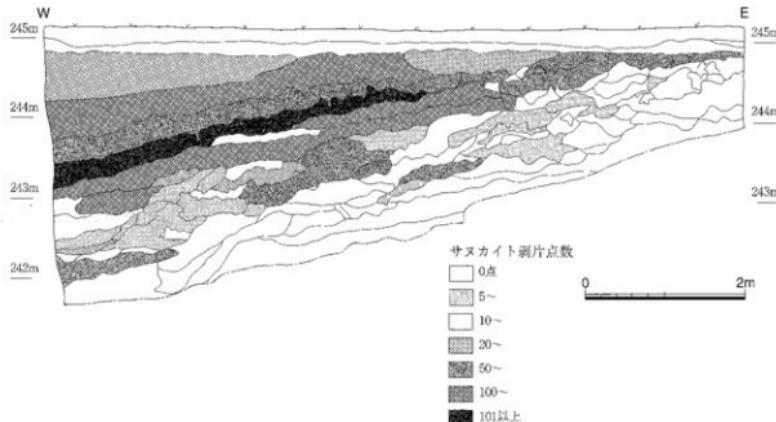
1 石器出土状況

石器は総数843点でその中で番号を付して取り上げたものは14.5%の122点である。器種別では石錐575点(取り上げ番号付点数以下同、58点)、石匙6点(4点)、抉入石器2点(1点)、石錐13点(0点)、削器16点(4点)、楔形石器28点(2点)、R F 10点(2点)、凹石4点(3点)、磨石7点(2点)、叩石10点(7点)、台石1点(1点)、石錐166点(23点)、磨製石斧2点(1点)である。定形的なものは取り上げ番号を付したもののが比較的多いものの、不定形、小形の剥片石器類は現場作業では見落とされ、整理作業段階で抽出されたものが多い。特に石錐、削器、楔形石器、R Fは注意を払っていない。石錐については自然裸が多量に出土しているため、層位一括で取り上げた後に洗いの段階で抽出を行ったために少ない結果となった。こうしたことから器種別分布図を作成したものの、本来の姿を十分復元できていない可能性がある。

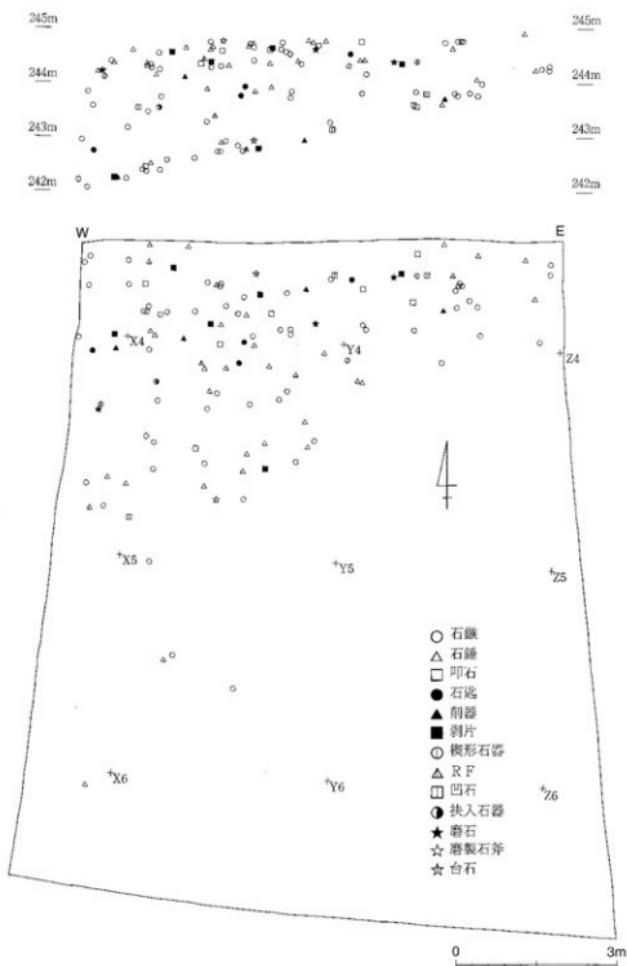
1区の調査区全体で見てみると中央部分は後世に削平されている可能性が高く、またX~Z・5~6グリッドの中央から南側部分は殆ど遺物は認められない。土器捨て場本体に遺物が集中し、平面的分布はX3・4グリッドを中心として各器種が混在するような形で出土している。グリッド別出土量はX4グリッド77点が最も多く、次いでX3グリッド76点、Y3グリッド47点である。他のグリッド



グラフ3 石器器種別点数



第93図 拡張区層位別サヌカイト剥片点数



第94図 石器器種別出土状況図

表6 サヌカイト拡張区層位別重量

拡張区層位	石器	石器	嵌入石器	石器	橢形石器	R.F.	角器	石核	剥片	チップ
1	22								85	5
2	0.7					1.3			13	3.8
3	3.1			0.3					71	16
4	2.3								34	13.7
5	8.7								122	24.8
6	3.4					0.8			61	6
7	1.4						2.3		92	6.6
8	6.4								52	17.4
9										48
10	3.1								47	15.6
11									12	7.7
12	2								5.5	5
12.13	5.5								53	18.4
13									6.7	1.1
14										26
15										1.5
17	0.8								87	48
18										1.4
19	1.1		16.2						36	10.1
21	0.4								4.9	1.2
22	0.2								13	1.1
23	0.3								10	1.3
24	0.2								4.2	1.6
25									0.7	0.3
26									1.9	
27	0.3								2.6	
28	0.7								12	3.4
30									15	2
33	2.6								53	32
35	2.3			1.3					26	1
38	1.6								17	35
40						16				
44										0.7
46										7.2
47										2.5
50										0.7
55	0.9									
56										1.6
59	1.3								27	2.6
60	0.6				3.7				19	2
62									1.9	
75	0.3									
合計	52.3		16.2	0.3	5	4.4	16		804	179.2

単位はgである。

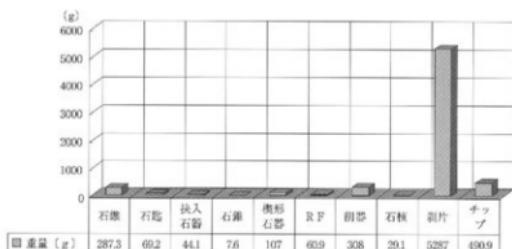
で拡張を行い、層位別に遺物の取り上げを行った(表3参照)。その結果、拡張5層が21点で最も多くの石器が出土している。次いで拡張8層19点、拡張6層18点となっている。拡張12・13層は分層は行ったものの遺物取り上げの際、混在してしまい一まとめで17点となっている。他に拡張33層で12点出土した以外は10点以下の層である。石器は拡張5層が20点、拡張8層17点、拡張12・13層が同じく17点、拡張6層14点、拡張33層9点、拡張3層8点となっている。拡張5、8層は層位面VI面には相当し、量的に最も多い。逆に出土量の少ない層位は東側部分の下層部分であった。

サヌカイト剥片は4200点余り出土しており、層位面ではVI面2013点、VII面1055点で全体の73%を占め、石器製品と殆ど同じ出土傾向を示している。拡張層位では拡張5層150点、拡張3層93点、拡張6層67点、拡張12・13層63点、拡張8層52点の順になっており(第93図)、石器(第95図)及び他の石器との出土量の相關関係はほぼ一致している。サヌカイト剥片の少ない層位は石器出土量の少ない東側部分下層と同じ部分に少ない傾向にある。

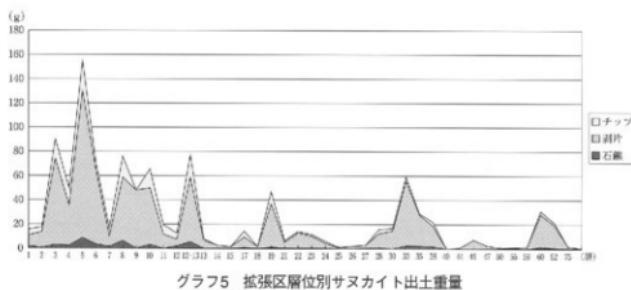
は20点以下であった。土器捨て場は西北部方向に急激に落ち込んでいるために、石器群も傾斜に沿うように量が多くなる。平面分布では器種別に集中が認められるような状況は看取できない。垂直分布では西側部分の深い所で大まかに上中下層と分かれそうである。東側部分は浅く、垂直分布にはレベル差は余り認められていない。

取り上げ番号を付さなかったものについてでは、平面的に掘り下げていく段階で大まかな層位区分を行い、上からI面、II面と言う具合に層位面別に取り上げた。しかしながら、土器捨て場は急傾斜を示しており層位面的に必ずしも正確に取り上げられたわけではない。最も石器出土量の多い層位面はVI面340点、次いでVII面229点、IV面31点、II面16点、I面13点、III面11点、VIII面11点の順番になっている。石器はVI面で250点、VII面で163点が出土しており、約72%がVI・VII面からの出土である。石錐もVI面54点、VII面41点で57%がVI・VII面からの出土である。

また北壁を土層分層後に50cmの幅



グラフ4 サヌカイト製石器器種別重量



グラフ5 拡張区層位別サヌカイト出土重量

2 各石器

石鏃 (第98~106図1~340)

石鏃の総数は575点である。その中で図示したのは340点である。第1次調査では石鏃の点数は8点と極めて少なかったものの、今回の調査では土壌の篩かけを行った結果、多量の石鏃を採取した。

石鏃の分類

分類は通常の三角形状のものは基本的には重量を基準とし、0.1~0.2 gの重さの小形のもの、0.2 g以上2.0 g以下の中形のもの、2.0 g以上の大形のものと大きく分類を行った。その後、各部位の形態により小分類を設けた。他に尖頭器状の形態のもの、未成品・未製品に分けた。

分類基準

I群—0.2 g以下のもの。それとも長さまたは幅が1 cm未満のもの。48点(8.4%)。1~44。

II群—0.2から2.0 g以下のもの。456点(79.3%)。45~297。

III群—2 g以上のもの。または長さ、幅が2 cm以上のもの。27点(4.7%)。298~313。

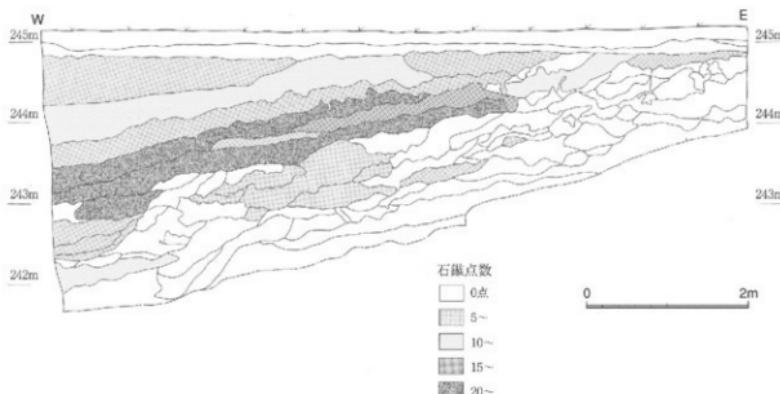
IV群—尖頭器状のもの。更にA~Dまで大きさ、重さを基準に細分類を設けた。20点(3.5%)。314~331。

V群—未製品、未成品。24点(4.2%)。332~340。

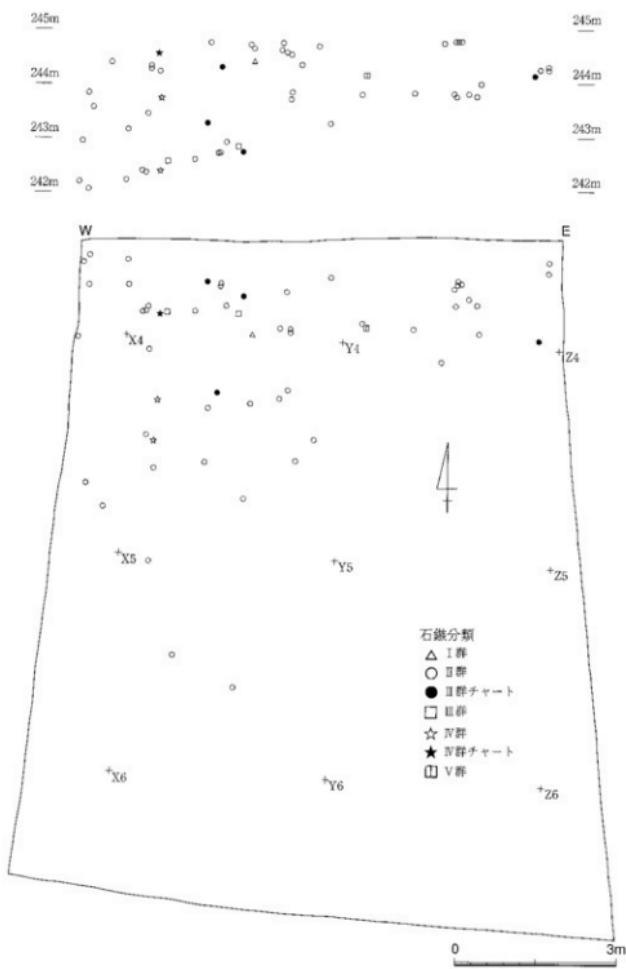
形態属性の分類 (第97図)

I・II・III群については基本的には重量による分類を行ったものの、重量だけの分類項目では多様性を把握できないため、各部位の形態属性の分類を行い、観察表に属性分類の記入を行った。石鏃の各部位は以下の点に注目した。

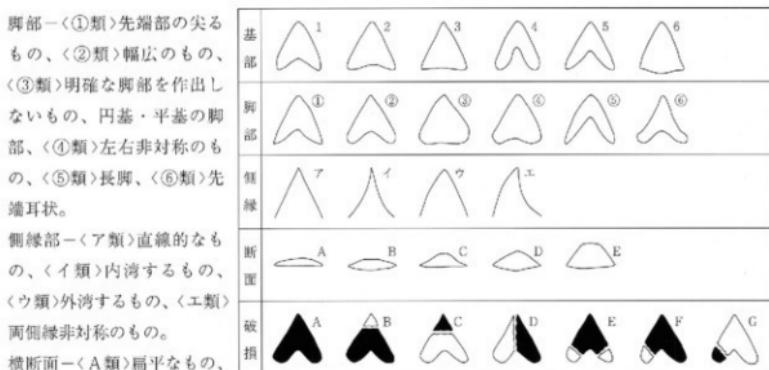
基部—<1類>凹基、<2類>浅い凹基、<3類>平基、<4類>逆U字状基、<5類>長脚の基部、<6類>円基。



第95図 拡張区層位別石鏃点数



第96図 石鎚分類別出土状況図



第97図 石鎚形態模式図

石鎧の石質

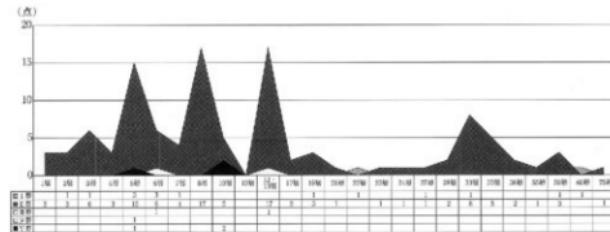
松ノ木遺跡5次調査での出土石器の石質は、サヌカイト、チャート、石英の3種類のみである。サヌカイト531点(92.4%)、チャート42点(7.3%)、石英2点(0.3%)である。分類別ではサヌカイト製石器は特に偏りは認められないものの、チャート製石器はI・IV群のものは僅か1点ずつで偏りが認められる。石英製石器はII群のみである。

サヌカイト製石墨の产地同定は行っていないものの、剥片の产地同定からして同じ香川県金山産の可能性が極めて高い（p327「第V章第3節」参照）。

石鎚の破損状況（第97図）

I・II・III群の中の508点中(I類の新しい破損は除く)、139点(27%)が完形品で他の350点(73%)が何らかの破損を被っている。一番多い破損形態は一脚部のみの欠損のF類が多く151点(30%)、次いでB類の先端部分欠損の85点(17%)である。半折品のD類は25点で5%程度であり、先端部・脚部の欠損に比べ、半折の破損はしづらいものと考えられる。分類別で完形品の占める割合を見てみるとI群67%、II群24%、III群20%でI群の小形石獣には完形品が多く残る傾向にある。

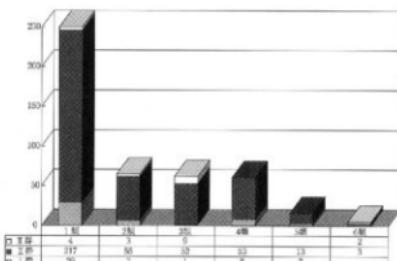
松ノ木遺跡出土の石鏃の特性



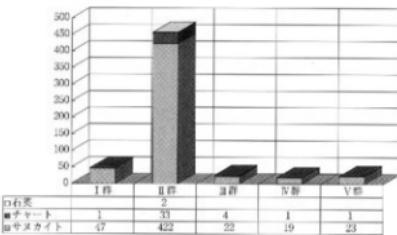
グラフ6 拡張区石錐層位・分類別点数

南四国の縄文時代石器研究は殆ど進展していないような状況である。ましてや石鎚は石器としては一般的過ぎ、注目されず、研究もされていないのが実情である。木村剛朗(1987、1995)の西南四国諸遺跡の報告と森田尚宏(1983)の報告及び前田光雄(1998)の石材論が最近発表されている程度である。

南四国の石鎚の様相の概略は、在地産石材のチャート、珪質頁岩、頁岩、及び搬入石材のサヌカイト、姫島産黒曜石で占められ、早期の段階に多量の石鎚が出土する傾向が強い。西南四国では姫島産黒曜石を主体とする海岸部の遺跡と珪質頁岩を主体とする内陸河川部の遺跡に大きく分類することができ、中央部では早期の段階からサヌカイトを主体とする遺跡が見受けられる。それ以外の遺跡ではチャートに依存する遺跡が多い。しかしながら後期以降になると南四国全域がサヌカイトへの志向が強くなる傾向が顕著になる。また量的には早期が最も多く、次いで後期の時期に石鎚は多く出土する傾向にある。松ノ木遺跡と比較検討を行う南四国の石鎚を多量に出土する遺跡は、土佐山田町飼古屋岩陰遺跡(森田1983)、幡多郡大正町木屋ヶ内遺跡(前田1995)、幡多郡十和田市十川駄場崎遺跡(森田1991、前田1996b)、上佐清水市唐人駄場遺跡(木村1995)、宿毛市宿毛貝塚(木村1995)等である。宿毛貝塚を除く他の遺跡は早期を主体とする遺跡である。飼古屋岩陰遺跡は高知県中央部の山間部に位置し、十川



グラフ7 石鎚基部形態・分類別点数



グラフ8 石鎚石質・分類別点数

